茂芳目遺跡・布志名遺跡
大堤Ⅱ遺跡・大堤Ⅰ遺跡
樅ノ木古墳群・真野谷遺跡
杉谷遺跡・室山遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書5

2001年3月

道路公団中国支社
県教育委員会

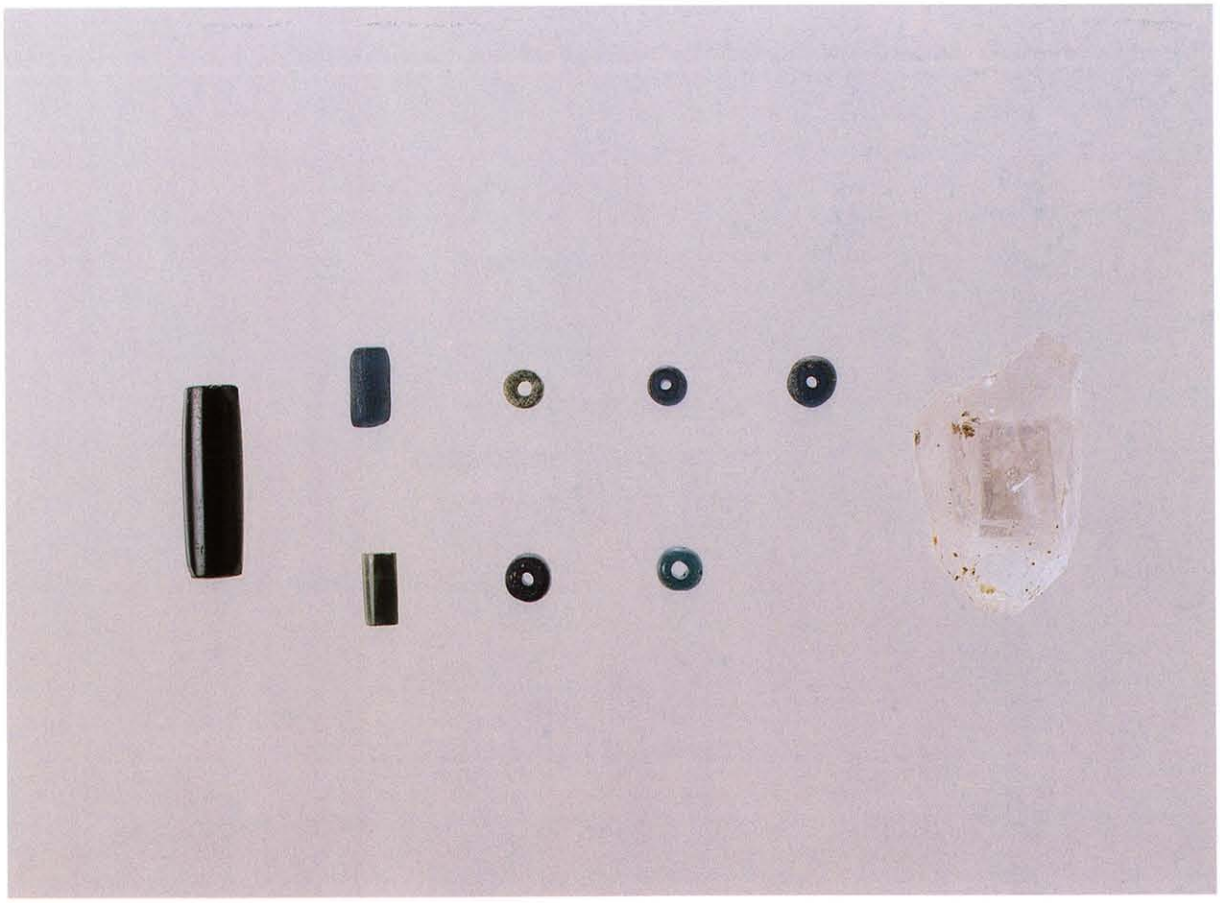
茂芳目遺跡・布志名遺跡
大堤Ⅱ遺跡・大堤Ⅰ遺跡
樅ノ木古墳群・真野谷遺跡
杉谷遺跡・室山遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書5

2001年3月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

杉谷遺跡　出土削片（湧別技法）



大堤Ⅱ遺跡　7号墳石棺内出土玉類

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の発展に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成９年３月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査をすすめてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である玉湯町における大堤Ⅱ遺跡や、杉谷遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この調査記録が、はるかな過去に生きた祖先の生活や文化様式を時代を越えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位のご尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成13年３月

日本道路公団中国支社松江工事事務所
所　長　　村　田　一　廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成８年度より中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内で埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は、平成９年度から平成10年度に調査した八束郡玉湯町にある８か所の遺跡の調査成果をまとめたものです。

玉湯町はかつて勾玉、管玉などの玉作りが盛んに行われた地であり、これまでの調査で玉類生産に関係する遺跡が数多く見つかっています。

今回の調査では、主体部に石棺を持つ多くの古墳、弥生から平安時代にかけての竪穴建物跡や掘立柱建物跡などを確認できました。

本報告書が地域の歴史を解明する一助となるばかりでなく、埋蔵文化財への関心を高めることができれば幸いです。

なお、発掘調査及び本書の刊行にご協力いただきました地元の皆様をはじめ日本道路公団中国支社、玉湯町教育委員会ならびに関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会

教育長　　山　﨑　悠　雄

例　　言

1　本書は、日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成９年度から平成10年度にかけて実施した中国横断自動車道尾道松江線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2　本書に掲載した遺跡の所在地及び調査年度は次のとおりである。

室山遺跡	（八束郡玉湯町林村2056-8	外）	（平成９年度）
茂芳目遺跡	（八束郡玉湯町布志名55-3	外）	（平成10年度）
布志名遺跡	（八束郡玉湯町布志名502-1	外）	（平成10年度）
大堤Ⅱ遺跡	（八束郡玉湯町布志名969-7	外）	（平成10年度）
大堤Ⅰ遺跡	（八束郡玉湯町布志名958	外）	（平成10年度）
樅ノ木古墳群	（八束郡玉湯町布志名607	外）	（平成10年度）
真野谷遺跡	（八束郡玉湯町布志名943	外）	（平成10年度）
杉谷遺跡	（八束郡玉湯町湯町1303	外）	（平成10年度）

3　調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

○平成９年度　　現地調査

〔事務局〕勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
島地徳郎（課長補佐）、古崎蔵治（課長補佐）、澁谷昌宏（主事）

〔調査員〕川原和人（埋蔵文化財調査センター主幹）、亀井彰子（同講師兼主事）
沙魚川聡子（同臨時職員）

○平成10年度　　現地調査

〔事務局〕勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
島地徳郎（課長補佐）、秋山　実（課長補佐）、松本岩雄（課長補佐）
川崎　崇（主事）

〔調査員〕川原和人（埋蔵文化財調査センター主幹）、錦田剛志（同主事）
久保田一郎（同主事）、田原淳史（同主事）、安達和隆（同教諭兼文化財保護主事）
橘　弘章（同教諭兼文化財保護主事）、名越顕秀（同教諭兼主事）
池田哲也（同教諭兼主事）、古藤浩夫（同教諭兼主事）、大西憲和（同臨時職員）
沙魚川聡子（同臨時職員）、坂本豊治（同臨時職員）

○平成12年度　　報告書作成

〔事務局〕宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）、内田　融（総務課長）
松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）、渡邊紀子（主任）
川崎　崇（主事）

〔調査員〕川原和人（埋蔵文化財調査センター主幹）、錦田剛志（島根県立博物館学芸課学芸員）
久保田一郎（埋蔵文化財調査センター主事）、田原淳史（同主事）
和田康宏（同教諭兼文化財保護主事）、柳野祐子（同教諭兼文化財保護主事）

奥村昌子（同教諭兼文化財保護主事）、名越顕秀（同教諭兼主事）、
沙魚川聡子（同臨時職員）、松崎恵美子（同臨時職員）

〔整理作業員〕

野中洋子、羽島ひとみ、吉田典子、土江美鈴、佐々木孝子、西　郁子

4　発掘作業（発掘作業員雇用、重機借上げ、発掘用具調達、測量発注）については、島根県教育委員会から社団法人中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

〔現場担当〕布村幹夫（現場事務所長）、松近秀夫（技術員）、藤原　恒（技術員）
簾　俊治（技術員）、大野紀昭（技術員）

〔事務担当〕深田明子、篠原律子

5　発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言をいただいた。記して謝意を表したい。（敬称略）

田中義昭（島根大学法文学部教授）　渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）
蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）　稲田孝司（岡山大学文学部）
藤野次史（広島大学文学部）　鈴木忠司（京都文化博物館）
竹広文明（島根大学汽水域研究センター）　多田　仁（愛媛県埋文センター）
光石鳴巳（橿原考古学研究所）

6　本報告書に掲載した遺物の実測は主として調査員が行い、以下の者の協力を得た。

池淵　茂、西　郁子、丹羽野　裕、柳浦俊一

7　本書の執筆・編集は、調査員が協議分担して行った。文責は目次に明示した。

8　本書に掲載した写真の撮影は、調査員が行った。

9　報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

10　挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位を指す。
従って磁北より7°39′59″、真北より0°29′59″ 東の方向を指す。

11　挿図の縮尺は図中に明示した。

12　出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

本文目次

第１章　調査に至る経緯 ……（川原）…１
第２章　遺跡の位置と環境 ……（和田・名越）…３
第３章　茂芳目遺跡 ……（錦田）…13
　第１節　遺跡の位置と調査の概要 ……13
　第２節　調査の結果 ……13
　第３節　小結 ……18
第４章　布志名遺跡 ……（川原）…19
　第１節　位置と調査の概要 ……19
　第２節　検出した遺構 ……21
　第３節　出土遺物 ……21
　第４節　まとめ ……25
第５章　大堤Ⅱ遺跡 ……（田原）…27
　第１節　遺跡の位置 ……27
　第２節　調査の経過と概要 ……27
　第３節　調査の結果 ……29
　第４節　まとめ ……84
第６章　大堤Ⅰ遺跡 ……（久保田）…87
　第１節　大堤Ⅰ遺跡の位置 ……87
　第２節　調査前の状況 ……87
　第３節　古墳 ……87
　第４節　石棺墓 ……92
　第５節　出土遺物 ……94
　第６節　小結 ……96
第７章　樅の木古墳群 ……（錦田）…97
　第１節　遺跡の位置と調査の概要 ……97
　第２節　調査の結果 ……99
　第３節　小結 ……136
第８章　真野谷遺跡 ……（田原・坂本）…139
　第１節　調査の経過と概要 ……139
　第２節　調査の結果 ……140
　第３節　まとめ ……141
第９章　杉谷遺跡 ……（錦田）…143
　第１節　遺跡の位置と調査の概要 ……143
　第２節　調査の結果 ……145
　第３節　小結 ……207

第１０章　室山遺跡 ……（川原）‥211
第１節　位置と調査の概要 ……211
第２節　検出した遺構 ……212
第３節　出土遺物 ……213
第４節　まとめ ……213

挿図目次

第１図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡（Ｓ＝1/150,000）……2
第２図　玉湯町の位置 ……7
第３図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/35,000）……8

茂芳目遺跡

第４図　茂芳目遺跡調査前地形測量図・調査区配置図（Ｓ＝1/750）……14
第５図　調査区及び遺構配置図・土層堆積状況図（Ｓ＝1/80）……15
第６図　Ｉ区杭列状遺構実側図（Ｓ＝1/40）……16
第７図　出土遺物実側図（Ｓ＝1/3）……17

布志名遺跡

第８図　布志名遺跡調査前地形測量図 ……19
第９図　布志名遺跡遺構配置図 ……20
第10図　掘立柱建物跡実測図 ……22
第11図　柵列跡実測図 ……23
第12図　出土遺物実測図 ……24

大堤Ⅱ遺跡

第13図　布志名遺跡　大堤Ⅱ遺跡位置図（Ｓ＝1/3,000）……28
第14図　1区地形測量図（調査後）遺構配置図（Ｓ＝1/300）……29
第15図　1区地形測量図（調査前）（Ｓ＝1/300）……30
第16図　SI01実測図（１）（Ｓ＝1/60）……31
第17図　SI01実測図（２）（Ｓ＝1/60）……32
第18図　SI01出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……33
第19図　SI01周辺ピット群実測図（Ｓ＝1/120）……33
第20図　SI06実測図（１）遺物出土状況図（Ｓ＝1/60）……34
第21図　SI06実測図（２）（Ｓ＝1/60）……35
第22図　SI06実測図（３）（Ｓ＝1/60）……36
第23図　SI06中央ピット実測図（Ｓ＝1/30）……37
第24図　SI06出土遺物実測図（Ｓ＝1/3、4はＳ＝1/1）……38
第25図　SD02出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……38
第26図　SI02実測図（Ｓ＝1/60）……39
第27図　SI02出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……39
第28図　SI03実測図（Ｓ＝1/60）……39
第29図　SI03出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……39
第30図　SI04・SI05実測図（Ｓ＝1/60）……40
第31図　SI04出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……41
第32図　SI05出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……41

第33図　加工段１、SD01実測図（Ｓ＝1/60）……43
第34図　加工段１出土遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3）……44
第35図　加工段１出土遺物実測図（２）（Ｓ＝1/3）……45
第36図　SK01実測図（Ｓ＝1/40）……45
第37図　SK01　出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……45
第38図　遺構に伴わない遺物実測図（１）（Ｓ＝1/3）……48
第39図　遺構に伴わない遺物実測図（２）（Ｓ＝1/3）……49
第40図　遺構に伴わない遺物実測図（３）（Ｓ＝1/3）……50
第41図　遺構に伴わない遺物実測図（４）（Ｓ＝1/4）……51
第42図　遺構に伴わない遺物実測図（５）（Ｓ＝1/3）……52
第43図　遺構に伴わない遺物実測図（６）（Ｓ＝1/2）……54
第44図　遺構に伴わない遺物実測図（７）（Ｓ＝1/3、59はＳ＝1/1）……55
第45図　２区遺構配置図・地形測量図（調査後）（Ｓ＝1/600）……56
第46図　２区地形測量図（調査前）（Ｓ＝1/600）……57
第47図　２区SI01・２号墳周辺地形測量図（調査後）（Ｓ＝1/200）……58
第48図　２区SI01実測図（１）（Ｓ＝1/60）……59
第49図　２区SI01実測図（２）遺物出土状況（Ｓ＝1/60）……60
第50図　２区SI01出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……60
第51図　１号墳地形測量図（表土除去後）（Ｓ＝1/200）……62
第52図　１号墳SX01実測図（Ｓ＝1/30）……63
第53図　１号墳出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）……63
第54図　２号墳地形測量図（表土除去後）（Ｓ＝1/200）……64
第55図　２区　１号墳・２号墳土層実測図（Ｓ＝1/80）……65
第56図　３・４号墳周辺地形測量図（調査後）（Ｓ＝1/200）……66
第57図　３号墳主体部実測図（１）石棺（Ｓ＝1/30）……67
第58図　３号墳主体部実測図（２）（Ｓ＝1/30）……68
第59図　３号墳土層実測図（Ｓ＝1/80）……69
第60図　４号墳主体部実測図（Ｓ＝1/30）……69
第61図　４号墳土層実測図（Ｓ＝1/80）……69
第62図　２区遺構に伴わない遺物実測図（Ｓ＝1/3、３はＳ＝1/1）……70
第63図　３区地形測量図（調査前）（Ｓ＝1/200）……71
第64図　３区地形測量図（調査後）（Ｓ＝1/200）……71
第65図　３区地形測量図（５・６号墳測量図）（Ｓ＝1/100）……72
第66図　５号墳土層実測図（Ｓ＝1/80）……73
第67図　６・７号墳土層実測図（Ｓ＝1/80）……73
第68図　５号墳主体部実測図（１）石棺（Ｓ＝1/30）……74
第69図　５号墳主体部実測図（２）（Ｓ＝1/30）……75
第70図　５号墳遺物出土状況（Ｓ＝1/30）……76

第71図　5号墳出土遺物実測図（S＝1/3）……76
第72図　6号墳・7号墳主体部実測図（S＝1/30）……77
第73図　6号墳主体部実測図（S＝1/30）……78
第74図　溝出土遺物実測図（S＝1/3）……78
第75図　7号墳主体部実測図（1）石棺（S＝1/30）……79
第76図　7号墳主体部実測図（2）（S＝1/30）……80
第77図　7号墳石棺内出土遺物実測図（S＝1/1）……80
第78図　3区SK01出土遺物実測図（S＝1/3）……81
第79図　3区SK01実測図（2）遺物出土状況（S＝1/30）……81
第80図　SK01実測図（1）（S＝1/30）……82
第81図　SK01実測図（2）（S＝1/30）……82

大堤Ⅰ遺跡

第82図　大堤Ⅰ遺跡調査区位置図（S＝1/2000）……87
第83図　1号墳周辺地形測量図（調査前）（S＝1/300）……88
第84図　調査区地形測量図（調査後）及び土層図……89・90
第85図　墳丘土層図（図中の記号は第84図に対応）（S＝1/60）……91
第86図　1号墳遺物出土状況（図中の番号は第88図に対応）（S＝1/3）……92
第87図　1号石棺墓実測図（S＝1/15）……93
第88図　出土遺物（1、2はS＝1/3、3～5はS＝1/2）……95

樅の木古墳群

第89図　樅の木古墳群調査対象地位置図（S＝1:1500）……98
第90図　調査前地形測量図・調査区配置図（S＝1:400）……99
第91図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）調査前地形測量図（S＝1:200）……100
第92図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）土層A－A'・B－B'断面図（S＝1:80）……101
第93図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）土層C－C'断面図（S＝1:80）……102
第94図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）墳丘測量図（盛土検出時）（S＝1:200）……103
第95図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）調査後地形測量図（S＝1:200）……104
第96図　1号墳付近出土遺物実測図（1）（S＝1:3）……105
第97図　1号墳主体部実測図・同遺物出土状況実測図（S＝1:30）……108
第98図　1号墳主体部直上土師器（1個体）出土状況実測図（S＝1:3）……109
第99図　1号墳付近出土遺物実測図（2）（S＝1:2）……109
第100図　Ⅰ区・Ⅱ区遺構外（包含層）出土土器実測図（S＝1:3）……113
第101図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土碧玉製玉未成品実測図（1）（S＝2/3）……117
第102図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土碧玉製玉未成品実測図（2）（S＝2/3）……118
第103図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土瑪瑙製玉未成品実測図（S＝2/3）……121
第104図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土水晶製玉未成品・砥石実測図（S＝2/3）……122
第105図　Ⅱ区調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1:200）……123
第106図　Ⅱ区土層断面図（S＝1:80）……123

第107図　Ⅱ区SD01・03実測図（S＝1:60）……124
第108図　Ⅱ区SD02実測図（S＝1:60）……125
追加図　1号墳墳頂部盛土下旧表土出土石器実測図（S＝1:2）……138

真野谷遺跡

第109図　真野谷遺跡位置図（S＝1/2000）……139
第110図　石棺実測図（S＝1/30）……140
第111図　出土遺物実測図（S＝1/3）……140
第112図　地形測量図（調査後）（S＝1/200）……141

杉谷遺跡

第113図　調査対象地位置図（S＝1:1500）……144
第114図　調査前地形測量図・調査区設定図（X'-Xは基本土層断面）（S＝1:300）……145
第115図　基本土層断面図（X'－X）（S＝1:60）……146
第116図　調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1:150）……146
第117図　SI01実測図（S＝1:80）……147
第118図　SI01床面直上付近遺物出土状況実測図（番号は遺物実測図の番号に対応）（S＝1:30）……149
第119図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図）（S＝1:3）……151
第120図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図（碧玉製玉未成品）（1）（S＝2:3）……157
第121図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図（碧玉製玉未成品）（2）（S＝2:3）……158
第122図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図（碧玉製玉未成品）（3）（S＝2:3）……159
第123図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図（メノウ製玉未成品）（S＝2:3）……161
第124図　SI01床面付近及び覆土中出土遺物実測図（水晶製玉未成品）（S＝2:3）……163
第125図　SI01覆土中出土遺物実測図（小石・砥石）（S＝2:3）……164
第126図　SD01実測図（S＝1:60）……165
第127図　SD01（灰褐色土）出土遺物実測図（S＝1:3）……166
第128図　SX01・SK01付近実測図（S＝1:60）……167
第129図　SX01付近出土遺物実測図（S＝1:3）……169
第130図　遺構に伴わない出土遺物実測図（土器類）（S＝1:3）……173
第131図　遺構に伴わない出土遺物実測図（碧玉製玉未成品）（1）（S＝2:3）……177
第132図　遺構に伴わない出土遺物実測図（碧玉製玉未成品）（2）（S＝2:3）……179
第133図　遺構に伴わない出土遺物実測図（メノウ製玉未成品）（S＝2:3）……180
第134図　遺構に伴わない出土遺物実測図（水晶製玉未成品）（S＝2:3）……182
第135図　遺構に伴わない出土遺物実測図（打製石器）（S＝2:3）……183

室山遺跡

第136図　調査区配置図……211
第137図　竪穴住居跡実測図……212
第138図　出土遺物実測図……213

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧（１）……9
第２表　周辺の遺跡一覧（２）……10

大堤Ⅱ遺跡

第３表　１区SI01出土遺物観察表……33
第４表　１区SI06・SD02出土遺物観察表（１）……37
第５表　１区SI06・SD02出土遺物観察表（２）……37
第６表　１区SI06石　計測表……37
第７表　１区SI02・SI03出土遺物観察表……39
第８表　１区SI04・SI05出土遺物観察表（１）……42
第９表　１区SI05出土遺物観察表（２）……42
第10表　１区加工段１出土遺物観察表（１）……46
第11表　１区加工段１出土遺物観察表（２）……46
第12表　１区SK01出土遺物観察表……46
第13表　１区遺構に伴なわない出土遺物観察表（１）……52
第14表　１区遺構に伴なわない出土遺物観察表（２）……55
第15表　２区SI01出土遺物観察表（１）……61
第16表　２区SI01出土遺物観察表（２）……61
第17表　２区SI01出土石　計測表……61
第18表　２区１号墳出土遺物観察表……63
第19表　２区遺構に伴なわない出土遺物観察表（１）……70
第20表　２区遺構に伴なわない出土遺物観察表（２）……70
第21表　３区５号墳出土遺物観察表……83
第22表　３区６号墳出土遺物観察表……83
第23表　３区７号墳石棺内出土遺物（玉類）計測表……83
第24表　３区SK01出土遺物観察表……83

大堤Ⅰ遺跡

第25表　大堤Ⅰ遺跡遺物観察表……95

樅の木古墳群

第26表　Ⅰ区包含層出土の玉材　出土数と重量……115
第27表　Ⅰ区包含層出土　玉類の未製品・剥片の数量と重量……115
第28表　碧玉剥片の法量別個体数……116
第29表　めのう剥片の法量別個体数……119
第30表　樅の木古墳群周辺（Ⅰ区・Ⅱ区遺構外）出土玉類・黒曜石計測値一覧……127

杉谷遺跡

第31表　SI01床面直上付近・ピット内出土の玉材　出土数と重量……153

第32表　SI01床面直上付近・ピット内出土の玉材　出土数と重量 ……153
第33表　SI01床面直上付近・ピット内・覆土中出土　玉類の未成品（工程別）・剥片の数量と重量 ……155
第34表　SI01床面直上付近・ピット内・覆土中出土　碧玉剥片の法量別個体数 ……156
第35表　SI01床面直上付近・ピット内・覆土中出土　めのう剥片の法量別個体数 ……160
第36表　SI01床面直上付近・ピット内・覆土中出土　水晶剥片の法量別個体数 ……162
第37表　遺構に直接伴わない玉材　出土数と重量 ……175
第38表　遺構に直接伴わない玉類の未成品（工程別）・剥片の数量と重量 ……176
第39表　遺構に直接伴わない　碧玉剥片の法量別個体数 ……178
第40表　遺構に直接伴わない　めのう剥片の法量別個体数 ……178
第41表　遺構に直接伴わない　水晶剥片の法量別個体数 ……181
第42表　杉谷遺跡出土玉作関係資料計測値一覧（碧玉・めのう・水晶の剥片を除く）……185

写真図版目次

巻頭カラー図版

上　杉谷遺跡出土削片（湧別技法）
下　大堤Ⅱ遺跡７号墳石棺内出土玉類

巻末写真図版

図版１上　茂芳目遺跡調査前全景（東から）
中　茂芳目遺跡重機掘削風景
下　茂芳目遺跡重機掘削状況
図版２上　茂芳目遺跡掘削状況（途中）（南東から）
中　茂芳目遺跡杭列状遺構近景（１）（南から）
下　茂芳目遺跡杭列状遺構近景（２）（北西から）
図版３上　茂芳目遺跡杭列状遺構近景（３）（南西から）
中　茂芳目遺跡Ⅰ区北壁土層断面と杭列状遺構近景（南から）
下　茂芳目遺跡杭出土状況近景
図版４　茂芳目遺跡出土土器類
図版５上　布志名遺跡調査後全景（南西から）
下　布志名遺跡遺構検出状況（東から）
図版６上　布志名遺跡出土遺物
下　布志名遺跡出土遺物
図版７上　大堤Ⅱ遺跡全景（上空から）
下　大堤Ⅱ遺跡１区全景（上空から）
図版８上　大堤Ⅱ遺跡１区SI01（ピット検出状況）（南から）
下　大堤Ⅱ遺跡１区SI01（調査後）（南西から）
図版９上　大堤Ⅱ遺跡１区SI06・SD02（東から）
下　大堤Ⅱ遺跡１区SD02（土層）
図版10上　大堤Ⅱ遺跡１区SI06（遺物・炭化物出土状況）（東から）
下　大堤Ⅱ遺跡１区SI06（調査後）
図版11上　大堤Ⅱ遺跡１区SI04・SI05（東から）
下　大堤Ⅱ遺跡１区加工段１（北東から）
図版12上　大堤Ⅱ遺跡２区１号墳（調査前）（南東から）
下　大堤Ⅱ遺跡２区１号墳（SX01）
図版13上　大堤Ⅱ遺跡２区２号墳・SI01（調査前）（東から）
下　大堤Ⅱ遺跡２区２号墳（表土除去後）
図版14上　大堤Ⅱ遺跡２区２号墳
下　大堤Ⅱ遺跡２区２号墳（土層）

図版15上　大堤Ⅱ遺跡２区SI01（調査後）
　　下　大堤Ⅱ遺跡２区SI01（遺物出土状況）
図版16上　大堤Ⅱ遺跡２区３号墳・４号墳（南から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡２区３号墳（主体部石棺検出状況）
図版17上　大堤Ⅱ遺跡２区３号墳（主体部石棺）
　　下　大堤Ⅱ遺跡２区３号墳（主体部調査後）
図版18上　大堤Ⅱ遺跡２区４号墳（主体部石棺検出状況）
　　下　大堤Ⅱ遺跡２区４号墳（主体部石棺）
図版19上　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳（調査前）（西から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区６・７号墳（調査前）
図版20上　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳（主体部石棺）（西から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳（遺物出土状況）
図版21上　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳（主体部石棺）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳（主体部調査後）
図版22上　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳・６号墳（西から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区５号墳・６号墳（北東から）
図版23上　大堤Ⅱ遺跡３区６号墳溝土層
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区６号墳溝
図版24上　大堤Ⅱ遺跡３区６号墳（主体部）（南から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区６号墳（主体部）（西から）
図版25上　大堤Ⅱ遺跡３区６号墳・SK01（西から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（西から）
図版26上　大堤Ⅱ遺跡３区７号墳
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区７号墳（主体部石棺１）
図版27上　大堤Ⅱ遺跡３区７号墳（主体部石棺２）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区７号墳（主体部石棺３）
図版28上　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（西から）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（北から）
図版29上　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（蓋石除去後１）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（蓋石除去後２）
図版30上　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（小口石）
　　下　大堤Ⅱ遺跡３区SK01（完掘後）
図版31上　大堤Ⅱ遺跡１区SI01出土遺物
　　下　大堤Ⅱ遺跡１区SI06出土遺物
図版32上　大堤Ⅱ遺跡１区SD02出土遺物
　　下　大堤Ⅱ遺跡１区SI06出土石
図版33上　大堤Ⅱ遺跡１区SI03出土遺物　大堤Ⅱ遺跡１区SI05出土遺物
　　下　大堤Ⅱ遺跡１区SI04出土遺物

図版34　大堤Ⅱ遺跡１区加工段1出土遺物
図版35上　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（土師器）
下　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版36　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版37　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版38　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（須恵器）
図版39上　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（鉄器）
下　大堤Ⅱ遺跡１区遺構に伴わない遺物（石器）
図版40　大堤Ⅱ遺跡２区出土遺物
図版41上　大堤Ⅱ遺跡２区SI01出土遺物
下　大堤Ⅱ遺跡３区７号墳石棺内出土遺物
図版42　大堤Ⅱ遺跡３区出土遺物
図版43上　大堤Ⅰ遺跡全景（調査前）（北より）
下　大堤Ⅰ遺跡古墳全景（調査後）（北西より）
図版44上　大堤Ⅰ遺跡古墳鉄器出土状況
下　大堤Ⅰ遺跡遠景（西より）
図版45上　大堤Ⅰ遺跡石棺墓（開蓋前）
下　大堤Ⅰ遺跡石棺墓（開蓋後）
図版46上　大堤Ⅰ遺跡古墳北西側尾根との区画溝断面
中　大堤Ⅰ遺跡古墳壺棺、土師器出土状況
下　大堤Ⅰ遺跡石棺墓の目張り粘土
図版47　大堤Ⅰ遺跡出土遺物
図版48上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳（左）・２号墳（右）調査前全景（東から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳（手前）・２号墳（奥）墳丘盛土検出状況（南西から）
図版49上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳（左）・２号墳（右）墳丘盛土検出状況（東から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況近景（南西から）
図版50上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（北から）
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（北東から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（南東から）
図版51上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（南から）
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（西から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土検出状況（北西から）
図版52上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘土層断面（Ａ－Ａ’）東半
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘土層断面（Ａ－Ａ’）西半
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘土層断面（Ｃ－Ｃ’）南半
図版53上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳周溝（南東溝）内炭化物検出状況
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳周溝（南東溝）内土層堆積状況（A－A’ライン）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳周溝（北西溝）内平瓶出土状況

図版54上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳周溝（南西溝）内土層堆積状況（Ｃ－Ｃ’ライン）
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳周溝（北東溝）内土層堆積状況（Ｃ－Ｃ’ライン）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳（左）・２号墳（右）周溝内土層堆積状況（Ｃ－Ｃ’ライン）
図版55上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙検出状況（南西から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙検出状況近景（南から）
図版56上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙直上土師器調査状況（１）
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙直上土師器調査状況（２）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙直上土師器出土状況近景（南から）
図版57上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙直上土師器出土状況近景
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙内縦断土層堆積状況（南から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙内横断土層堆積状況（北から）
図版58上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙内底面遺物出土状況近景（北東から）
中　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙内底面鉄鏃出土状況近景
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙内底面刀子出土状況近景
図版59上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙完掘状況近景（南から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙完掘状況近景（南から）
図版60上　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳頂部土壙完掘状況（南西から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土・旧表土除去後完掘状況（南西から）
図版61　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳墳丘盛土・旧表土除去後完掘状況（南東から）
図版62上　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳墳丘盛土検出状況（南西から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳墳丘盛土検出状況（南東から）
図版63上　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳墳丘盛土検出状況（東から）
中　樅の木古墳群１区２号墳墳丘盛土検出状況（南西から）
下　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳墳丘盛土検出状況（西から）
図版64上　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳周溝（南東溝）内土層堆積状況（Ｂ－Ｂ’ライン）
中　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳周溝（南西溝）内土層堆積状況（Ｃ－Ｃ’ライン）
下　樅の木古墳群Ⅰ区１号墳（左）・２号墳（右）墳丘盛土、旧表土除去後完掘状況（南東から）
図版65上　樅の木古墳群Ⅰ区２号墳墳丘盛土・旧表土除去後完掘状況（南西から）
下　樅の木古墳群Ⅱ区調査前全景（西から）
図版66上　樅の木古墳群Ⅱ区SD01・SD03完掘状況（南から）
中　樅の木古墳群Ⅱ区SD02完掘状況（南東から）
下　追加資料　樅の木１号墳墳頂部盛土下旧表土出土石器
図版67上　樅の木１号墳付近出土土師器
下　樅の木１号墳付近出土石器
図版68上　樅の木１号墳周溝内出土須恵器
下　樅の木１号墳付近出土鉄器
図版69上　樅の木古墳群周辺遺物包含層出土土器
下　樅の木古墳群Ⅰ区包含層出土碧玉製未成品（１）

図版70上　樅の木古墳群Ｉ区包含層出土碧玉製未成品（２）
　　下　樅の木古墳群Ｉ区包含層出土瑪瑙製・水晶製玉未成品・砥石
図版71上　真野谷遺跡全景（調査前）（北から）
　　下　真野谷遺跡全景（調査後）（北から）
図版72上　真野谷遺跡石棺（１）
　　下　真野谷遺跡石棺（２）蓋石除去後
図版73上　真野谷遺跡全景（南西から）
　　下　真野谷遺跡溝状遺構
図版74　　真野谷遺跡出土遺物
図版75上　杉谷遺跡調査対象地全景（北東から）
　　下　杉谷遺跡調査前全景（北東から）
図版76上　杉谷遺跡調査前全景（南東から）
　　下　杉谷遺跡調査後完掘状況全景（南東から）
図版77上　杉谷遺跡SI01完掘状況（北西から）
　　下　杉谷遺跡SI01床面直上付近遺物出土状況
図版78上　杉谷遺跡SI01床面直上付近遺物出土状況・同土層堆積状況
　　中　杉谷遺跡SI01南東壁付近碧玉未製品出土状況（西から）
　　下　杉谷遺跡SI01　P.１完掘状況近景（西から）
図版79上　杉谷遺跡SI01完掘状況（南から）
　　下　杉谷遺跡SD01完掘状況近景（東から）
図版80上　杉谷遺跡SX01検出面礫石出土状況（南西から）
　　中　杉谷遺跡SX01横断（Ｂ’－Ｂ）土層堆積状況（北東から）
　　下　杉谷遺跡SX01完掘状況近景（北から）
図版81上　杉谷遺跡SX01完掘状況（北東から）
　　下　杉谷遺跡SX01完掘状況近景（南から）
図版82上　杉谷遺跡SK01完掘状況近景（西から）
　　下　杉谷遺跡調査風景
図版83　　杉谷遺跡SI01床面付近・覆土中出土土器
図版84　　杉谷遺跡SI01床面付近・覆土中出土碧玉製未成品
図版85　　杉谷遺跡SI01床面付近・覆土中出土瑪瑙製・水晶製未成品･川原石
図版86上　杉谷遺跡SI01覆土中出土砥石
　　下　杉谷遺跡SD01　SX01付近出土土器
図版87　　杉谷遺跡SX01付近出土土器
図版88　　杉谷遺跡SX01付近出土土器･遺構に伴わない出土土器
図版89　　杉谷遺跡遺構に伴わない出土土器
図版90上　杉谷遺跡遺構に伴わない碧玉製未成品
　　下　杉谷遺跡遺構に伴わない瑪瑙製未成品
図版91上　杉谷遺跡遺構に伴わない水晶製未成品

下　杉谷遺跡遺構に伴わない打製石器（1）
図版92　杉谷遺跡遺構に伴わない打製石器（2）
図版93上　室山遺跡遠景
下　室山遺跡竪穴住居跡検出状況

第１章　調査に至る経緯

中国横断自動車道尾道・松江線の建設は、松江都市圏と山陽地方を結び、また中国自動車道と接続して、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進し、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともなう埋蔵文化財の調査については、平成４年１月に建設省道路局長から日本道路公団に松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、同年４月に島根県教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。しかし、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成５年９月には工事実施計画が認可された。このような状況を受け、県教委では平成６年３月から分布調査を実施し、全体の９割あまりを踏査した。

この調査結果をもとに同年６月と８月に道路公団と調査の打合せを行った。この打合せで今回の分布調査が500ｍ幅を対象に踏査しているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成７年４月に完了し、公団へ回答した。

同年４月に日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、８月に第１回の連絡会を開催した。この会議では平成８年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、侵入路、排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。その後２回の連絡会で調整し、平成８年度から調査を実施することが決定した。

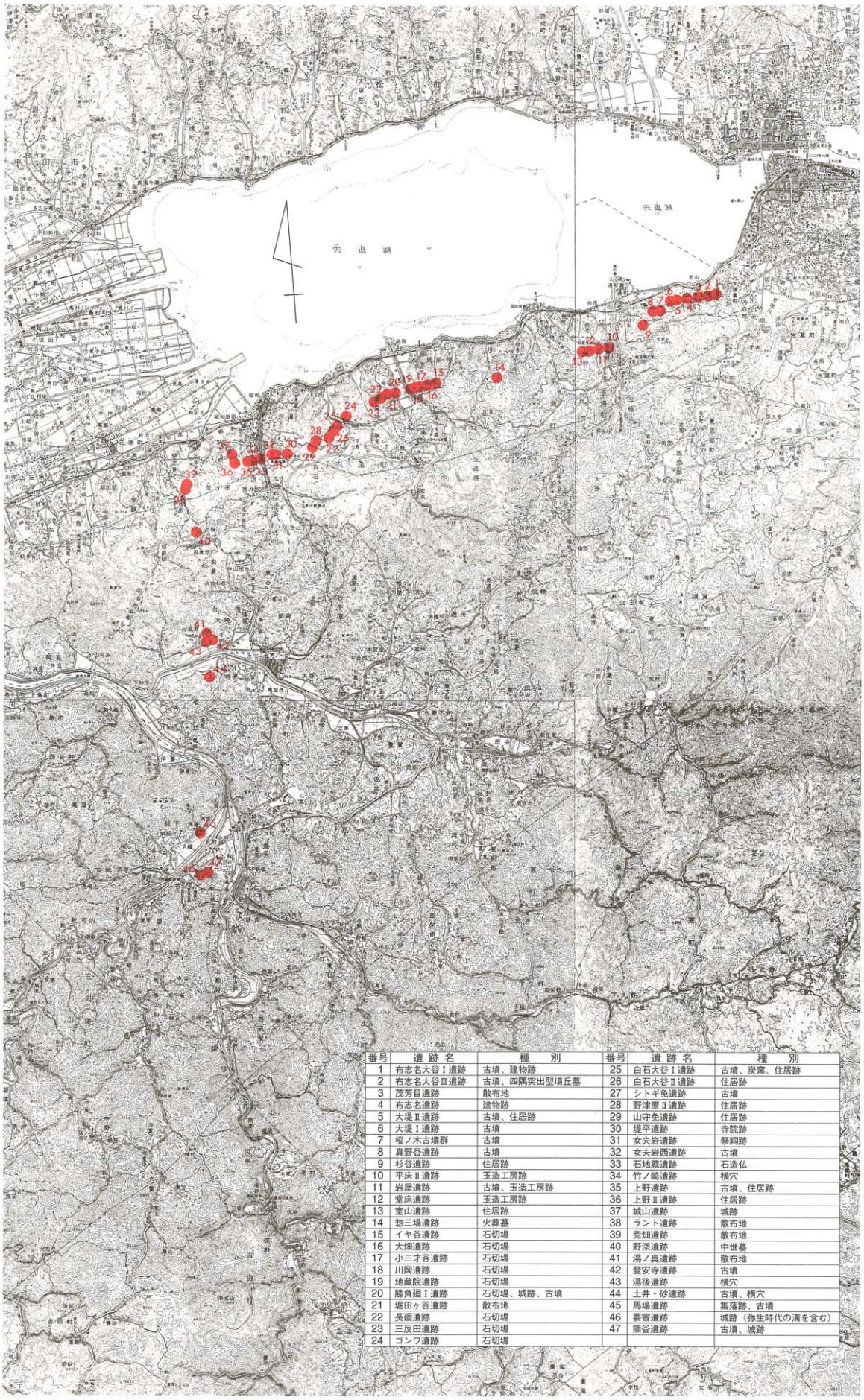
これを受けて、調査を円滑に進めるため、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事などの調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚書を平成８年３月26日に交わし、本格的に調査に入ることとなった。

平成８年度は、試掘調査を含めて大谷Ｉ遺跡など７遺跡を発掘調査した。

平成９年度は、試掘調査を含めて平床遺跡など22遺跡を発掘調査した。

そして平成10年度は、試掘調査を含めて茂芳目遺跡など22遺跡の発掘調査を行った。

今回報告する茂芳目遺跡～室山遺跡はいずれも八束郡玉湯町に所在し、平成９年度から平成10年度にかけて発掘調査を行ったものである。



番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	布志名大谷Ⅰ遺跡	古墳、建物跡	25	白石大谷Ⅰ遺跡	古墳、炭窯、住居跡
2	布志名大谷Ⅲ遺跡	古墳、四隅突出型墳丘墓	26	白石大谷Ⅱ遺跡	住居跡
3	茂芳目遺跡	散布地	27	シトギ免遺跡	古墳
4	布志名遺跡	建物跡	28	野津原Ⅱ遺跡	住居跡
5	大堤Ⅱ遺跡	古墳、住居跡	29	山守免遺跡	住居跡
6	大堤Ⅰ遺跡	古墳	30	堤平遺跡	寺院跡
7	樫ノ木古墳群	古墳	31	女夫岩遺跡	祭祀跡
8	真野谷遺跡	古墳	32	女夫岩西遺跡	古墳
9	杉谷遺跡	住居跡	33	石地蔵遺跡	石造仏
10	平床Ⅱ遺跡	玉造工房跡	34	竹ノ崎遺跡	横穴
11	岩屋遺跡	古墳、玉造工房跡	35	上野遺跡	古墳、住居跡
12	堂床遺跡	玉造工房跡	36	上野Ⅱ遺跡	住居跡
13	室山遺跡	住居跡	37	城山遺跡	城跡
14	惣三場遺跡	火葬墓	38	ラント遺跡	散布地
15	イヤ谷遺跡	石切場	39	荒畑遺跡	散布地
16	大畑遺跡	石切場	40	野添遺跡	中世墓
17	小三才谷遺跡	石切場	41	湯ノ奥遺跡	散布地
18	川岡遺跡	石切場	42	登安寺遺跡	古墳
19	地蔵院遺跡	石切場	43	湯後遺跡	横穴
20	勝負廻Ⅰ遺跡	石切場、城跡、古墳	44	土井・砂遺跡	古墳、横穴
21	堀田ヶ谷遺跡	散布地	45	馬場遺跡	集落跡、古墳
22	長福遺跡	石切場	46	要害遺跡	城跡（弥生時代の溝を含む）
23	三反田遺跡	石切場	47	熊谷遺跡	古墳、城跡
24	ゴンワ遺跡	石切場			

第1図　尾道松江線（三刀屋～玉湯間）ルート上の遺跡（S＝1/150,000）

第２章　遺跡の位置と環境

今回報告する８遺跡は全て八束郡玉湯町に所在する。そのうち室山遺跡は玉造温泉街の西約1.5kmに位置し、残りの７遺跡はＪＲ玉造温泉駅の東２km以内の県道浜乃木湯町線沿いに点在する。

玉湯町は宍道湖の南東岸に位置し、東は松江市、南は大原郡大東町、西は宍道町と境界を接している。人口約6000人の温泉町であり、伝統工芸の布志名焼や瑪瑙細工などが特産である。奈良時代の天平５年（733）に編纂された『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）によれば、現在の玉湯町の町域は、意宇郡拝志郷の東部と、意宇郡忌部神戸の西半分にあたる。町の北部には国道９号とＪＲ山陰線が東西に通っているが、これらは古代山陰道のルートにほぼ沿っていると思われる。町の中央部分を玉湯川（『風土記』では玉作川）が北流するが、この川を遡って山間に分け入る県道は、意宇郡家から大原郡家、飯石郡家を経由して、やがて備後国に通ずる通道（当時の官道）に相当するものと考えられる。

『風土記』は、拝志郷には正倉が置かれたと記す。所在地は玉湯町林村本郷に比定されている。また、『風土記』によれば、その編纂当時の意宇郡の郡役人は、大領の出雲臣広嶋以下ほとんどが出雲臣であるが、主政（三等官）は林臣であった。林臣は拝志郷の豪族で、皇族に連なる一族として付近一帯に隠然たる勢力を誇っていたようである。後述するが、林村には前方後円墳を含む50基から構成される林古墳群があり、林臣との関わりが連想されるところである。

『風土記』の忌部神戸の条にも興味深い記述がある。「忌部神戸。郡家の正西二十一里二百六十歩なり。國造、神吉詞奏しに、朝廷に参向ふ時の御沐の忌玉作る。故、忌部と云ふ。即ち川の邊に湯を出す。出湯の在る所は、海陸を兼ねたり。仍りて男も女も、老いたるも少きも、或るは道路を駱驛ひ、或るは海中を洲に沿い、日に集ひて市を成し、繽紛燕樂ぶ。一たび濯げば形容端正しく、再び浴すれば、萬病悉に除こる。古より今に至るまで驗を得ずといふことなし。故、俗人、神湯と曰ふなり」というもので、この記述から、この時代既に玉造温泉には老若男女が集い賑わう歓楽地であったことが分かる。さらにはここから、この地では出雲国造家がその地位に就く際に禊ぎが行われ、また天皇に献上するための玉の製作が行われていたことも明らかにされている。

このような形態における玉の献上がいつ頃まで行われたものかははっきりしない。しかし、延長５年（927）に編纂された『延喜式』には、「出雲国造神寿詞を奏す。玉六十八枚。赤水精八枚、白水精十六枚、青石玉四十四枚…」とあることから、少なくともこの頃までは行われていたようである。また『延喜式』には、「凡そ出雲国の進る所の御富岐玉六十連。三時大殿祭料卅六連、臨時廿四連。毎年十月以前、意宇郡神戸玉作氏をして造り備へしめ、使いを差して進上す」ともあり、大殿祭等の儀式のため、出雲の玉が毎年進上されていたことが分かる。さらに、『正倉院文書』の「出雲国計会帳」によれば、天平５年（733）の８月19日に、真珠などとともに「水精」が進上されていることが分かる。あるいは、「九条家本『延喜式』巻十」の裏文書にある「主税寮出雲国正税返却帳」によれば、長保２年（1000）や同４年に、「水精」の進上に応じて税稲が返却された事実が確認できる。

一般に玉作は、弥生時代から広い地域で行われるが、律令時代になると廃れる。ところが出雲の玉作は、古墳時代後期に最盛期を迎え、少なくとも11世紀初頭までは続いていたことが文献から明

らかである。そして、その出雲における玉作の中心は、玉湯川の流域と、東に隣接する松江市の忌部川流域である。これは両河川の間に、玉の原石になる良質の瑪瑙や碧玉の産出地である花仙山（『風土記』には玉作山と記載）があるためで、この辺りは、全国でもほかに例を見ない玉作遺跡の集中地域である。

このように、玉湯町とその周辺は、玉作を中心に歴史的に興味深い地域である。ここでは、主な遺跡の紹介を通じて、この地域の歴史を概観しておきたい。

旧石器時代

島根県内では、この時代にまで遡ることのできる遺跡は多くはないが、近年、宍道湖・中海沿岸地域を中心に、少しずつ資料が集まってきている。そのうち林村の鳥ヶ崎遺跡からは、中期旧石器時代まで遡る可能性を持つ剥片や石核などが採集されている。また、松江市乃木福富町の廻田遺跡からは、後期のナイフ形石器が出土している。

縄文時代

玉湯町内にはこれと言った資料がないが、周辺地域では遺跡が増加してくる。松江市の乃木湖岸遺跡や、宍道町の野津原Ⅱ遺跡で発見された有茎尖頭器は、縄文時代草創期のものと推定される。土器が見つかっていないため時期の限定が難しいが、縄文時代も後半と推定される遺跡に、宍道町東来待の弘長寺遺跡がある。この遺跡は、狭い範囲から豊富な種類の石器を大量に出土したことで知られる。特に石錘の出土量が多いことから、漁労が活発に行われたことがうかがえる。その他、縄文後期から晩期の深鉢が出土した、東来待の三成遺跡などがある。

旧石器時代に深い谷であったと推定される宍道湖・中海沿岸地域は、気候が温暖化し縄文時代になると海水面が上昇し、水道状を呈するようになったと考えられる。このためこの地域は、前面に湖水、背後には低丘陵が控え、漁労や狩猟に適した住みやすい環境だったと思われる。従って玉湯町内においても、今後この時代の遺跡が発見される可能性は充分にある。

弥生時代

島根県教育委員会が1986年に行った玉作遺跡分布調査では、53の遺跡が報告されている。その大部分は古墳時代以降のものであるが、弥生時代のものもいくつか確認できる。

出雲での玉作は、弥生時代前期にまで遡ることができる。現在のところ、島根県下で最古の玉作遺跡は松江市の西川津遺跡で、緑色凝灰岩を使って管玉が生産されていた。中期の遺跡としては、松江市竹矢町の布田遺跡がある。後期の遺跡としては、松江市矢田町の平所遺跡があり、ここでは水晶製の算盤玉や丸玉を生産していた工房跡が発見された。玉湯町域での玉作の開始は、古墳時代まで下るものと従来は考えられてきた。しかし、1983～84年、出雲玉作跡宮ノ上地区で実施された発掘調査では、工房跡は検出されなかったが、弥生末期～古墳時代前期の土器とともに玉類未成品が出土しており、玉作開始が弥生時代にまで遡る可能性が出てきた。

玉作に直接は関わらないが、そのほか重要な遺跡には、松江市乃木福富町・乃白町・浜乃木町にまたがる田和山遺跡群がある。ここでは以前から、全長約20mの後期の前方後円墳である田和山1号墳をはじめとする古墳群の存在が知られていたが、それに加えて、3重の環壕を巡らせ、物見櫓

のような役割を担ったと思われる建物を備えたと推定される遺構などが検出された。時期的には弥生時代前期～中期とされる。田和山遺跡群から北東約250mのところには、友田遺跡がある。この遺跡は前期～中期の土壙墓26基、中期の墳丘墓６基、後期の四隅突出形墳丘墓１基などから構成される墳墓群で、土壙墓群からは勾玉や管玉のほか大量の石鏃が出土したため、「戦士の墓」などと呼ばれる。

玉湯町内では、布志名大谷Ⅲ遺跡が弥生時代の墳墓群である。ここでは四隅突出形墳丘墓３基のほか、特殊な貼石構造を持つ墳丘墓１基（四隅突出形の可能性もある）をはじめ、弥生時代～古墳時代の多種多様の墓制を示す遺構が検出されている。

宍道町東来待の三成遺跡からは３基の墳墓が発見されている。当初、これらは中期の古墳と報告されていたが、近年になって弥生時代の墳丘墓の可能性が指摘されている。特に２号墓には貼石が認められるもので、注目される。弥生時代中期～後期の来待地区に、有力な集団が存在していた可能性をうかがわせるものである。白石から佐々布にかけての丘陵地帯では、山守免遺跡、野津原Ⅱ遺跡、上野遺跡、上野Ⅱ遺跡など、高地性集落が次々と発見されている。

古墳時代

玉作関係の遺跡が数多く出現し、特に玉湯川と忌部川の流域に集中して営まれる。

玉湯川の流域では、宮垣地区、玉ノ宮地区、宮ノ上地区の３か所が国指定の史跡となっている。宮垣地区は記加羅志神社跡を中心に立地しており、古墳時代前期末～平安時代の工房跡が約30棟検出されたほか、玉の原石や玉類の未成品、砥石、穿孔用の鉄製錐など、大量の玉作関係の遺物が出土した。また、同一の遺構から玉作関連と生活関連の遺物が同時に出土していることから、玉作工房と住居が一体になっていたことが明らかになった。宮ノ上地区は玉作湯神社境内に位置する。玉作湯神社は『風土記』や『延喜式』に記載のある古社で、大穴持命、少彦名命に加えて、玉の神である櫛明玉命を祭神としている。この地区は、玉作開始が玉湯町内では最も早く、弥生時代まで遡ると推定されるが、古墳時代前期と後期の玉作の舞台でもあった。玉ノ宮地区には、櫛明玉命を祭る玉ノ宮という神社が、大正年間まで存在した。ここでは玉作に関わる明確な遺構は確認されていないが、古墳時代～奈良時代にかけての玉作関連の遺物はまとまって出土している。また、この地区からは、鉄滓や炉壁をともなって７世紀と９世紀と推定される精錬炉が２基検出され、製鉄が行われていたことも明らかになっている。この製鉄遺跡で生産された鉄製品が、玉作の工具として使われたものなのか、製鉄と玉作の関連が興味深い。このほか玉湯川の流域には、平床遺跡、日焼廻遺跡、狐廻遺跡など多数の玉作遺跡が存在している。玉湯川の流域からは離れるが、林村の堂床遺跡は、６世紀後半～７世紀前半という短い期間に、25棟という数多くの工房が営まれた遺跡として注目される。

忌部川流域は、玉湯川流域に次いで玉作遺跡が集中して存在する。このうち後原玉作跡からは、石釧の未成品が出土しており、古墳時代前期に遡るものと考えられる。また中島遺跡では、中期の工房跡が確認されている。大角山遺跡は、竪穴住居跡５棟から構成される中期の玉作遺跡である。出土した土師器に形式差がほとんどなく、住居跡相互の切り合い関係もないことから、ごく短期間営まれた集落と考えられる。

古墳や横穴墓は、やはり玉湯川流域に多く分布している。このうち徳連場古墳は、５世紀末頃の

築造と考えられる小型の円墳である。玉造築山古墳もほぼ同時期の築造と思われ、墳形が明確ではないが、やはり円墳と推定される。双方とも、地元では白粉石または白来待と呼ばれる石英安山岩質凝灰岩を石材とする舟形石棺を用いているという特徴がある。宍道町西来待の横田古墳でも同じ石材を利用した舟形石棺を持つなど、舟形石棺は中海・宍道湖岸に濃く分布している。報恩寺古墳群は6基のうち5基までが小型の円墳だが、1基は全長約50mの前方後円墳で、玉湯町では扇廻古墳と並ぶ最大の古墳である。5～6世紀の築造と考えられる。6～7世紀になると、この地にも多くの横穴墓が出現するようになる。花立横穴群は5穴で構成される。調査段階で現状をとどめていたのは2穴のみだが、もともとは全て横穴で、白粉石（石英安山岩質凝灰岩）を石材とする、切り石を組み合わせた箱式石棺を収めていたと考えられる。副葬品のほとんどは須恵器で、頭部と足元に分けて置かれている。岩屋寺跡横穴群は国指定史跡で、来待石（凝灰質砂岩）の岩盤を掘り込んでつくられている。2穴で構成され、2穴とも4隅を柱状に陽刻するなど、極めて入念な構造である。玉湯川が形成した平野は狭小で、この地域の農業生産力も高くはなかったであろう。それにも関わらず、不相応に思えるほどの数や規模の古墳が築造された背景としては、玉作との関連性を考慮すべきであろう。

林村にも古墳や横穴墓は多く存在する。中でも林古墳群は、宍道湖に突出する低丘陵上に約50基が密集する、玉湯町内では最大規模の古墳群である。前述のように、この古墳群は林臣と密接な関わりがあると考えられる。古墳の分布が5群に分けられることから、大部分が小型の円墳だが、方墳1基、前方後円墳4基も含まれる。このうち43号墳は全長約18mの小型の前方後円墳で、横穴式石室を持つ。6世紀中期～後期の築造と思われ、出雲における横穴式石室の出現期のものとして重要である。また、多くの副葬品が認められたが、そのうち、玄室内から出土した須恵器坏の出土状況にも注目が必要である。それは、2つの坏を並べたもので、奥壁の近くに2セット、玄門付近に1セットの、計3セットが存在した。これは、坏を枕に転用したものと考えられる。

忌部川流域では、二名留古墳群、大角山古墳群、向原古墳群、田和山古墳群、松本古墳群、菅沢谷横穴群、弥陀原横穴群などが知られ、何れも中期以降のものである。このうち大角山1号墳は、全長60m余りの大規模な前方後円墳である。田和山1号墳は、全長約20mの小型の前方後円墳であるが、前方後円墳の築造が減り横穴墓が主流になる6世紀後半になって、あえて前方後円墳を築造しているところが興味深い。また、二名留2号墳からは、5世紀後葉のものと比定される子持勾玉が出土している。

奈良・平安時代

律令時代になると全国的に玉の生産は行われなくなり、玉作遺跡の発見例は花仙山の周辺だけにほとんど限定される。製作された玉類の性格については、前述の通りである。ほかには蛇喰遺跡があり、これは8世紀後半～9世紀の玉作関係遺跡である。

蛇喰遺跡は出雲玉作跡宮垣地区の西に隣接する遺跡で、竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。ここで注目されるのは、第一にヘラ書き文字のある須恵器が500点以上出土したことで、これは一遺跡としては全国的にも類を見ないほどの出土量と言える。文字には「白田」、「由」、「有」、「林」などが多く見られた。「由」や「有」が、「湯」に通ずるなど、地名を連想させるものが多い。またこれらの須恵器は、松江市東忌部町の湯峠窯跡で生産されたものと考えられる。因みに湯峠窯

跡は、花仙山の南麓、玉造と忌部を結ぶ道筋に存在した遺跡で、出雲国庁もここから須恵器の供給を受けていた。また、一般に、寺院や官衙からの出土が多いとされる円面硯、緑釉、製塩土器が多く出土している。玉類の未成品は平玉を中心に大量に出土しているが、完成品に近いものが多くを占めた。

その他の遺跡としては、林村に、瓦類や礎石が出土した松ノ前廃寺があり、林臣一族が建立した私寺と考えられている。

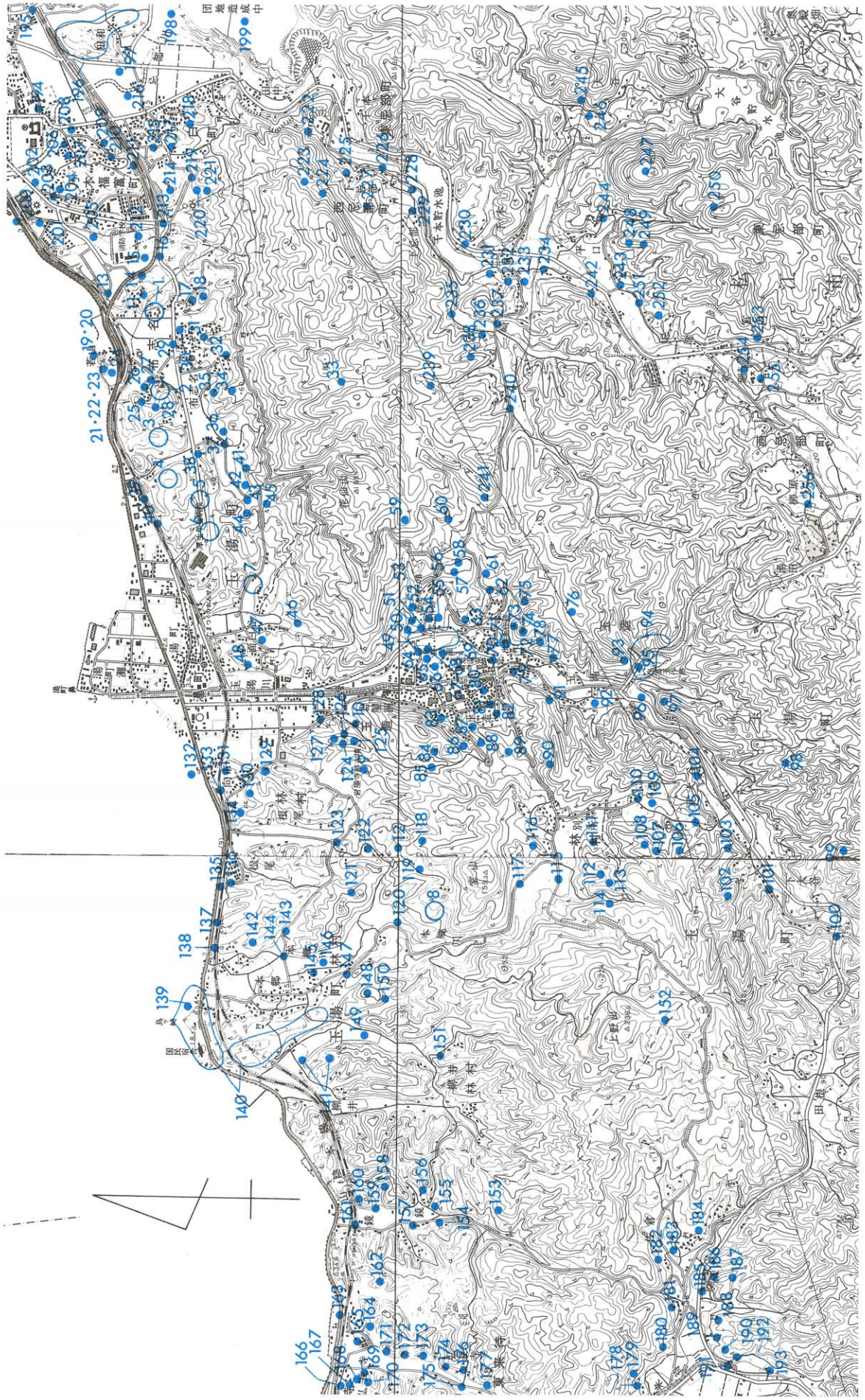
鎌倉・室町時代

全国的に山城が多く出現する時期であり、玉湯町周辺地域も例外ではない。特に玉湯川に沿って山間に分け入る谷筋には、古代から奥出雲に通じる重要な街道が設けられており、付近には山城が密集している。玉作湯神社の西側には、玉造要害山城跡がある。標高約108mの小山塊にあり、規模は大きくないが、奥出雲への街道と湯峠を越えて忌部に抜ける間道を押さえる交通の要衝に立地している。毛利氏による改修も想定できるが、築城は鎌倉時代末期にまで遡り、湯氏の居城であったと考えられている。

江戸時代

その創設については諸説あるが、18世紀の中頃までには、布志名の地で布志名焼が始まった。一説には、富士名義綱（後醍醐天皇の船上山での挙兵に、塩冶高貞とともに真っ先に馳せ参じたという）の家臣船木与兵衛次政の末裔を名乗る与次兵衛村政が、明和年間（1764～1772）に開窯したと伝えられる。真偽のほどはもう一つ定かではないが、この船木一族や、土屋氏、永原氏らによって布志名焼は発展し、松江藩主松平治郷の手厚い保護などもあり大いに繁栄した。宍道湖南岸の若山付近を中心に多くの窯跡が存在しており、現在もなお、４つの窯元が操業している。

第2図　玉湯町の位置



第3図　周辺の遺跡（S=1/35,000）

地図番号	遺跡名	種　別	地図番号	遺跡名	種　別
1	茂芳目遺跡	散布地	65	小丸山遺跡	玉作跡
2	布志名遺跡	建物跡	66	小丸山古墳	古墳
3	大堤「遺跡	古墳・住居跡	67	記加羅志神社跡古墳	古墳
4	大堤。遺跡	古墳	68	記加羅志神社跡土壙墓	土壙墓
5	樅ノ木古墳群	古墳	69	蛇喰遺跡	玉作跡
6	真野谷遺跡	古墳	70	お茶屋跡	住居跡
7	杉谷遺跡	住居跡	71	出雲玉作跡(宮ノ上地区)	玉作跡
8	室山遺跡	住居跡	72	玉作湯神社境内古墳	古墳
9	岩屋遺跡	古墳・玉作跡	73	玉造要害山城跡	城跡
10	平床「遺跡	玉作跡	74	伝湯家綱墓	古墓
11	布志名大谷」遺跡	古墳・四隅突出型墳丘墓	75	鈩谷鈩跡	製鉄遺跡
12	堂床遺跡	玉作跡	76	高支城跡	城跡
13	布志名大谷「遺跡	古墳・炭窯	77	古宝古墳	古墳
14	布志名大谷。遺跡	古墳・建物跡	78	サイゲ寺跡	寺院跡
15	布志名才の神遺跡	祭祀遺跡	79	玉造古墓	古墓
16	足立窯跡	窯跡	80	玉造築山古墳	古墳
17	判官山古墳群	古墳	81	伝佐々木伊予守古墓	古墓
18	伝富士名判官義綱古墓	古墓	82	大門小路横穴群	横穴
19	灘舟木窯跡	窯跡	83	波止遺跡	玉作跡
20	後福島窯跡	窯跡	84	平床遺跡	玉作跡
21	永原窯跡	窯跡	85	日焼廻遺跡	玉作跡
22	利平窯跡	窯跡	86	波止古墳	古墳
23	沢窯跡	窯跡	87	花立古墳群	古墳
24	空福島窯跡	窯跡	88	花立横穴群	横穴
25	鍛冶山窯跡	窯跡	89	高尾古墳群	古墳
26	舟木藤平窯跡	窯跡	90	滝岩古墓	古墓
27	鍛冶畑遺跡	散布地	91	延木谷遺跡	玉作跡
28	二斗垣古墳群	古墳	92	廻原遺跡	玉作跡
29	永保山窯跡	窯跡	93	高畦谷鈩跡	製鉄遺跡
30	下山窯跡	窯跡	94	出雲玉作跡(玉ノ宮地区)	玉作跡
31	布志名城山城跡	城跡	95	大連塚古墳	古墳
32	小川古墳	古墳	96	大野田遺跡	川跡
33	カナクソ谷鈩跡	製鉄遺跡	97	段山城跡	城跡
34	後迫古墳	古墳	98	小谷要害山城跡	城跡
35	宮田古墳群	古墳	99	要害山古墳	古墳
36	中河原古墳群	古墳	100	田仏遺跡	玉作跡
37	布田遺跡	玉作跡	101	大田遺跡	玉作跡
38	山崎横穴群	横穴	102	いもの廻鈩跡	製鉄遺跡
39	大堤古墳	古墳	103	正福寺跡	寺院跡
40	助次郎古墳群	古墳	104	西遺跡	玉作跡
41	岩屋口遺跡	玉作跡	105	大口遺跡	玉作跡
42	永丁部遺跡	玉作跡	106	寺ノ空横穴群	横穴
43	狐廻遺跡	玉作跡	107	宮ノ奥横穴群	横穴
44	狐廻墳墓群	墳墓	108	神田遺跡	玉作跡
45	柿田古墳群	古墳	109	塚ヤブ古墳	古墳
46	半坂古墳群	古墳	110	松ノ前廃寺	寺院跡
47	面白谷遺跡	玉作跡	111	ソリ田遺跡	玉作跡
48	小丸子山古墳	古墳	112	穴薬師横穴群	横穴
49	出雲玉作跡(宮垣地区)	玉作跡	113	大槇谷横穴群	横穴
50	青木原横穴群	横穴	114	砂子谷鈩跡	製鉄遺跡
51	青木原古墳群	古墳	115	有ノ木遺跡	製鉄遺跡
52	徳連場古墳	古墳	116	長畑古墳群	古墳
53	徳連場横穴	横穴	117	川原田遺跡	散布地
54	烏場古墳群	古墳	118	根尾高尾古墳群	古墳
55	烏坊集落跡	住居跡	119	カツザキ遺跡	玉作跡
56	烏坊古墓群	古墓	120	野武士田遺跡	散布地
57	金屋廻玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	121	林城山城跡	城跡
58	梅加原古墳群	古墳	122	宮畑遺跡	玉作跡
59	横屋堀玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	123	根尾築山古墳群	古墳
60	蔵ラ廻玉材採掘坑	玉材採掘坑跡	124	岩屋寺跡裏横穴群	横穴
61	向新宮遺跡	玉作跡	125	岩屋寺跡横穴群	横穴
62	新宮横穴群	横穴	126	岩屋寺跡	寺院跡
63	元稲荷古墳	古墳	127	岩屋寺跡裏古墳	古墳
64	青木原土壙墓	土壙墓	128	岩屋石切場	石切場

第1表　周辺の遺跡一覧（1）

地図番号	遺跡名	種　別	地図番号	遺跡名	種　別
129	扇廻古墳	古墳	193	金子遺跡	散布地
130	極楽寺古墳	古墳	194	福富「遺跡	散布地
131	向市遺跡	玉作跡	195	友田遺跡	墳墓
132	報恩寺「窯跡	窯跡	196	田和山遺跡群	弥生環壕・古墳
133	報恩寺。窯跡	窯跡	197	薬師前遺跡	散布地
134	報恩寺古墳群	古墳	198	野向古墳	古墳
135	小金松横穴	横穴	199	菅沢横穴群	横穴
136	小金松古墳	古墳	200	福富湖岸遺跡	散布地
137	林横穴	横穴	201	二名留古墳群	古墳
138	小畑古墳群	古墳	202	神立遺跡	散布地
139	鳥ヶ崎遺跡	散布地	203	廻田遺跡	散布地
140	林古墳群	古墳	204	廻田古墳	古墳
141	雷古墳群	古墳	205	大角山遺跡	集落跡他
142	中倉古墳群	古墳	206	蓮花垣遺跡	散布地
143	椎ノ木谷古墓	古墓	207	屋形遺跡	散布地
144	椎ノ木谷古墳群	古墳	208	松本遺跡	散布地
145	六反田遺跡	玉作跡	209	福富。遺跡	散布地
146	脇田遺跡	玉作跡	210	乃白玉作跡	玉作跡
147	頼清寺裏古墳群	古墳	211	屋形古墳群	古墳
148	マコモ谷古墳群	古墳	212	大角山古墳群	古墳
149	稗田遺跡	散布地	213	すべりざこ横穴墓群	横穴
150	マコモ谷石切場	石切場	214	松本古墳	古墳
151	殿山石切場	石切場	215	松本修法壇跡	修法壇跡
152	穂束城跡	城跡	216	乃白遺跡	散布地
153	惣三場遺跡	火葬墓	217	天場古墳	古墳
154	草の上遺跡	散布地	218	乃白権現遺跡	玉作跡
155	草の上東遺跡	散布地	219	弥陀原横穴群	横穴
156	庄廻遺跡	散布地	220	松本横穴群	横穴
157	岩穴遺跡	散布地	221	岩屋口古墳	古墳
158	鏡北廻古墳	古墳	222	清水尻遺跡	散布地
159	大門遺跡	散布地	223	中垣古墳	古墳
160	大紋古墳	古墳	224	下鍛冶古墳	古墳
161	塚畑遺跡	散布地	225	平松遺跡	玉作跡
162	荒神谷遺跡	散布地	226	小城口遺跡	玉作跡
163	松石横穴	横穴	227	宮の上遺跡	散布地
164	松石遺跡	散布地	228	垣ヶ尻遺跡	玉作跡
165	松石古墳群	古墳	229	下忌部玉作跡	玉作跡
166	弘長寺遺跡	散布地	230	千本玉作跡	玉作跡
167	弘長寺古墳	古墳	231	一崎遺跡	玉作跡
168	明寿廻遺跡	散布地	232	C26遺跡	古墓
169	明寿廻古墳群	古墳	233	C21遺跡	散布地
170	弘長寺横穴群	横穴	234	C22遺跡	散布地
171	水行遺跡	散布地	235	砂子原遺跡	玉作跡
172	高狭遺跡	散布地	236	一崎玉作跡	玉作跡
173	家の下遺跡	散布地	237	C19遺跡	散布地
174	多井北遺跡	散布地	238	C23遺跡	散布地
175	立平遺跡	散布地	239	C18遺跡	散布地
176	下多井遺跡	散布地	240	片田遺跡	玉作跡
177	多井遺跡	散布地	241	湯峠窯跡	窯跡
178	蔵敷遺跡	散布地	242	堂廻遺跡	玉作跡
179	西廻遺跡	散布地	243	一丁田遺跡	玉作跡
180	大坊遺跡	散布地	244	玉神谷遺跡	玉作跡
181	清水尻遺跡	散布地	245	下忌部遺跡	散布地
182	常命壽遺跡	散布地	246	水源地土製勾玉出土遺跡	散布地
183	柴木田遺跡	散布地	247	久多美山城跡	城跡
184	岩屋遺跡	散布地	248	平口横穴群	横穴
185	戸構遺跡	散布地	249	C36遺跡	散布地
186	佐倉横穴群	横穴	250	桑迫城跡	城跡
187	佐倉末の廻横穴群	横穴	251	中島遺跡	玉作跡
188	佐久多神社裏古墳群	古墳	252	後原玉作跡	玉作跡
189	栗屋山横穴群	横穴	253	C24遺跡	散布地
190	角田古墳群	古墳	254	客古墳	古墳
191	紺屋田遺跡	散布地	255	忌部神社神宮寺跡	寺院跡
192	角田横穴群	横穴	256	塚田遺跡	散布地

第2表　周辺の遺跡一覧（2）

【参考文献】

加藤義成　『修訂　出雲国風土記参究』　1957　松江今井書店

『玉湯町史　上巻』　1961　玉湯町

『新修島根県史　史料篇１』　1966　島根県

『新修島根県史　通史篇１』　1968　島根県

『玉造　烏坊遺跡群 ― 古墳群・集落跡・古墓群の記録 ― 』　1970　玉湯町教育委員会

『史跡出雲玉作跡 ― 発掘調査概報 ―』　1972　玉湯町教育委員会

加藤義成　「文献に見る玉作りについて ― 出雲国風土記を中心として ― 」『松江考古　第２号』　1979　松江考古学談話会

『玉湯町史　下巻（一）』　1982　玉湯町

『松江圏都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』　1983　松江市教育委員会

『史跡出雲玉作跡 ― 宮ノ上地区 ― 第１次発掘調査概報 ―』　1984　玉湯町教育委員会

『史跡出雲玉作跡 ― 宮ノ上地区 ― 第２次発掘調査概報 ―』　1985　玉湯町教育委員会

『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅳ　玉作関係遺跡』　1987　島根県教育委員会

『史跡出雲玉作跡 ― 玉ノ宮地区 ― 第１次・２次発掘調査概報 ―』　1988　玉湯町教育委員会

勝部　衛　「玉造・花立横穴群」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第ＸＶ集』　1989　島根県教育委員会

『田和山古墳群発掘調査概報』　1991　松江市教育委員会

『二名留古墳群発掘調査報告書』　1992　松江市教育委員会

『菅沢谷横穴群』　1994　（財）松江市教育文化振興事業団

加藤義成　『古代文化叢書１　出雲国風土記論究』　1995　島根県古代文化センター

『二名留遺跡発掘調査報告書』　1995　（財）松江市教育文化振興事業団

『福富Ⅰ遺跡・屋形１号墳　一般国道9号松江道路（西地区）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書２』　1997　島根県教育委員会

『松本古墳群・大角山古墳群・すべりざこ古墳群　一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書３』　1997　島根県教育委員会

『布志名大谷Ⅰ遺跡・布志名大谷Ⅱ遺跡・布志名才の神遺跡　一般国道９号松江道路（西地区）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書４』　1997　島根県教育委員会

『古代出雲文化展　―神々の国　悠久の遺産 ―』　1997　島根県教育委員会　朝日新聞社

『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』　1997　島根県教育委員会

『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ』　1998　島根県教育委員会

「田和山遺跡群発掘調査現地説明会資料」　1998　松江市教育委員会　（財）松江市教育文化振興事業団

『島根県教育庁文化財課　埋蔵文化財調査センター年報Ⅶ』　1999　島根県教育委員会

「一般国道９号（松江道路連結部）建設予定地内　布志名大谷Ⅲ遺跡　～現地説明会資料～」　1999　島根県埋蔵文化財調査センター

『宍道町史　史料編』　1999　宍道町

『蛇喰遺跡発掘調査報告書』　1999　玉湯町教育委員会

「玉造築山古墳」（玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット）　玉湯町教育委員会

「報恩寺古墳群」（玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット）　玉湯町教育委員会

「林古墳群第43号古墳」（玉湯町立出雲玉作資料館パンフレット）　玉湯町教育委員会

『島根県遺跡地図Ⅰ（出雲・隠岐編）』　1993　島根県教育委員会

『平成８年度玉湯町遺跡分布図』　1996　玉湯町教育委員会

第３章　茂芳目遺跡

第１節　遺跡の位置と調査の概要

茂芳目遺跡は、八束郡玉湯町大字布志名55－３番地外に所在する。現玉湯町の東端付近で、宍道湖岸から西南西方向にのびる比較的大きな谷地形によって形成された沖積平野の中に位置する。当遺跡の所在する小平野を取り囲むように東・西・南方の丘陵上には弥生時代から古墳時代を中心とする時期の遺跡が点在する。その中で平野に位置する茂芳目遺跡は、その立地において特異な存在であるが、かねてより圃場整備や農業用水路掘削の際、弥生土器等が出土する周知の遺跡であった。

この度の発掘調査地は、現在の宍道湖岸から約300ｍ南方の休耕田に位置し、付近の標高は約2.5ｍ前後の地点である。

過去の分布調査や遺物の採取経緯を勘案し、遺物包含層が現地表面からかなり低いものと想定されたため、まず重機によるトレンチ調査を実施した。その結果、調査Ⅰ区・Ⅱ区よりも東の地点では、地表下２～３ｍを掘削したものの遺構・遺物は検出されず、圃場に係わる客土堆積が顕著であったため調査対象範囲から除外することにした。一方、調査Ⅰ区・Ⅱ区の付近では、堆積土中から土器片が数点出土した。そこで図示したとおり二つの調査区を設定し（第４図）、全面発掘調査を実施した。

調査は、平成10年10月14日から着手し、同年11月４日の作業員撤収を以て終了した。調査の結果、遺構として杭列状遺構を検出し、遺物としては遺構外から縄文土器片、弥生土器片数点等を採取した。

第２節　調査の結果

１：基本層序（第５図）

当遺跡は、現水田、休耕田からなる低湿地であったため人力での掘削は難渋を極め、また遺物包含層も深いことが予測された。そこで全調査区について重機による掘削と人力による掘削を適宜並行して実施した。基本層序は図示したとおりである。１層は現水田に伴う耕作土、２層・３層はかつての圃場にかかる客土、４層は木片や植物繊維を多量に含み、５層は土器片を出土する遺物包含層、６層は暗灰褐色土で基盤層（地山）と判断された。各層ともに湿潤で地下水の湧出が顕著であった。　Ⅰ区・Ⅱ区ともに、ほぼ同様の層序関係が確認されている。

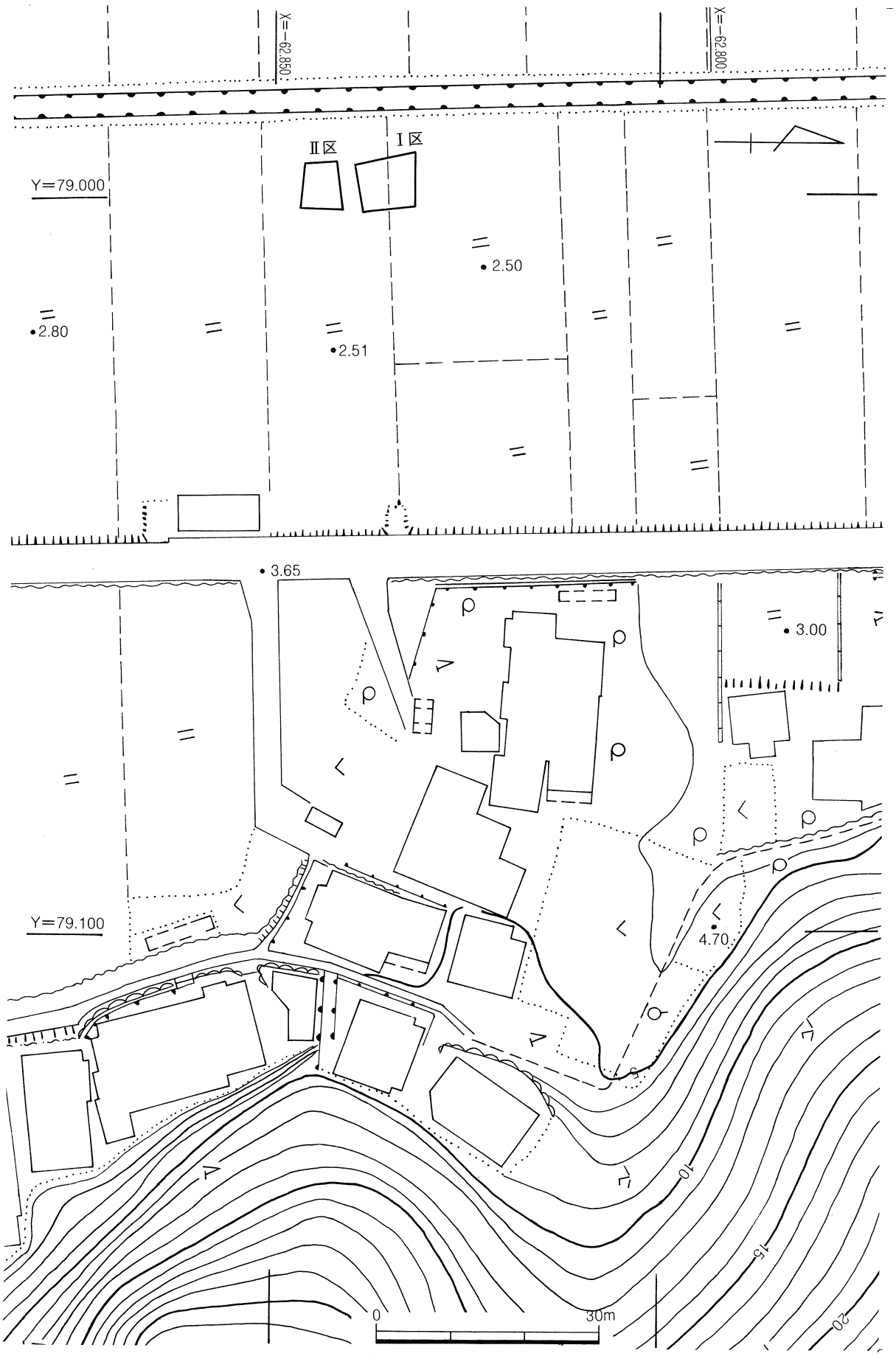
２：遺構（第５・６図）

検出された遺構は、Ⅰ区の杭列状遺構のみである。

杭列状遺構（第６図）

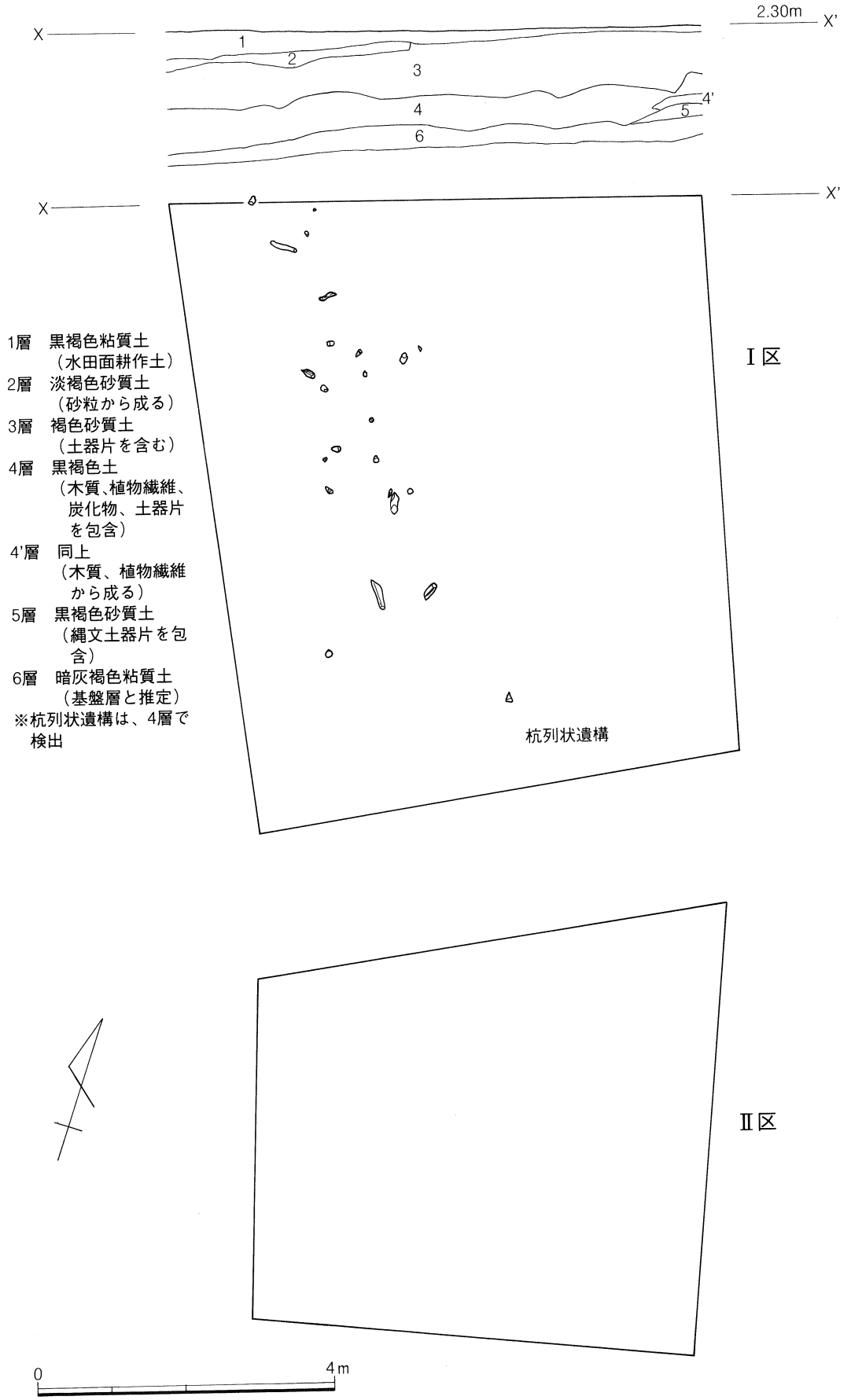
Ⅰ区の西半、地表下約1.8ｍ、標高約1.5～0.5ｍの第４層以下の土層において検出された直線的にのびる杭列である。調査区内において、ほぼ長さ７ｍ、幅1.8ｍの範囲内で杭が23本以上確認されている。Ⅰ区北側壁にも認められることから杭列はさらに北西方向の調査区外へと続いている可能性があるが、反対の南東方向には続かないものと判断された。

杭の規模は、長さ約20～80㎝、直径約３～15㎝と大小様々で特に規格性はうかがえなかった。多くは杭の先（下端部）を鋭角に削りだしており、人為的な細工を施すものであった。なお、杭につ



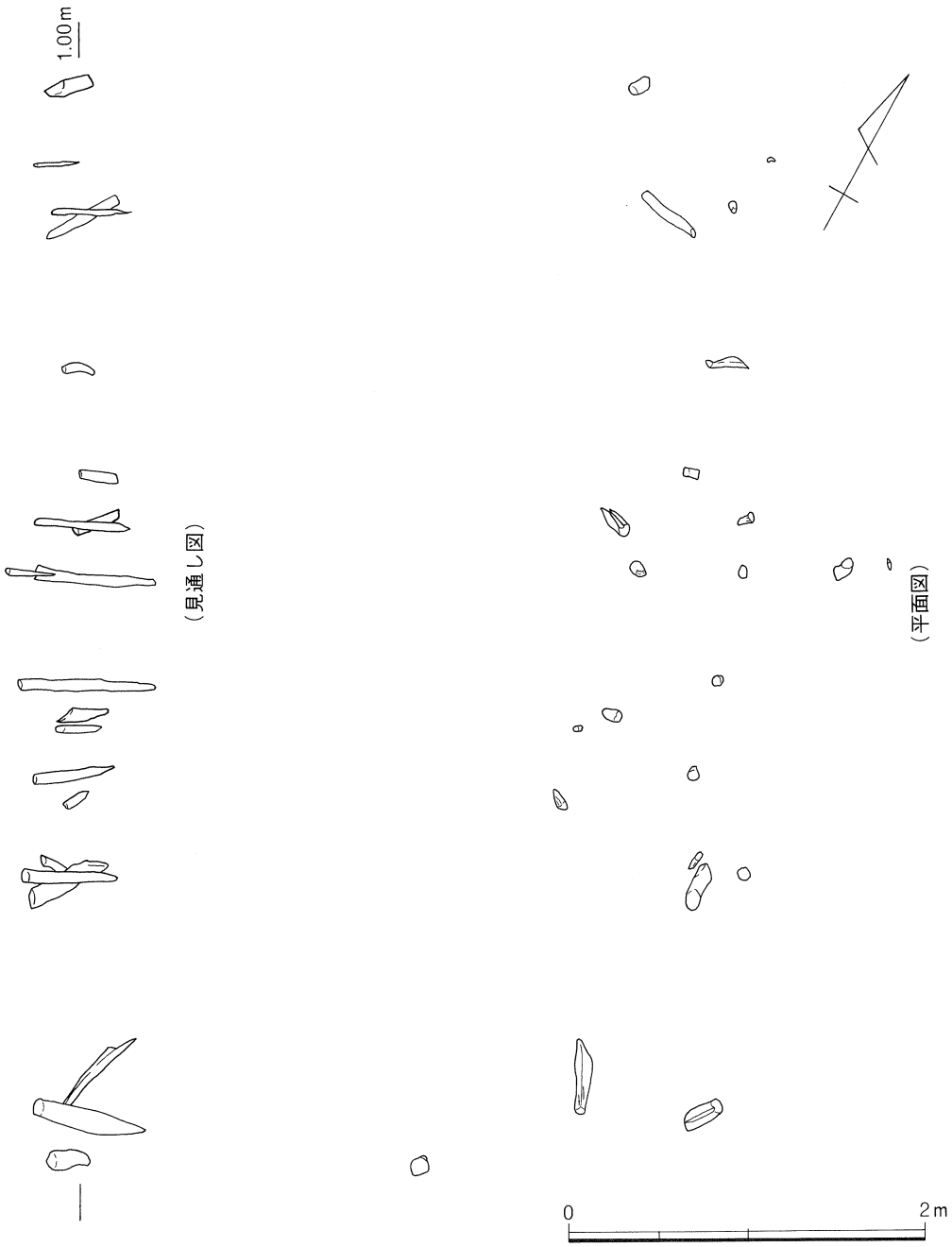
第4図　茂芳目遺跡調査前地形測量図・調査区配置図（S=1：750）

いては大雨によって調査区が水没した際、多くが破損、流失してしまい採取及び実測図化を断念した。



第5図　調査区及び遺構配置図・土層堆積状況図（S=1:80）

杭列に直接伴う遺物は出土せず時期は判然としない。しかし、検出面と同位と推定される付近の土層からは縄文土器片及び弥生土器片が出土しており構築時期を示唆する。遺構の性格についても判然としないが、現宍道湖岸にほど近い立地、湿潤な土層堆積が認められることからすると、水辺付近に設けられた何らかの施設と考えられるのではなかろうか。



第6図　Ⅰ区杭列状遺構実側図（S＝1：40）

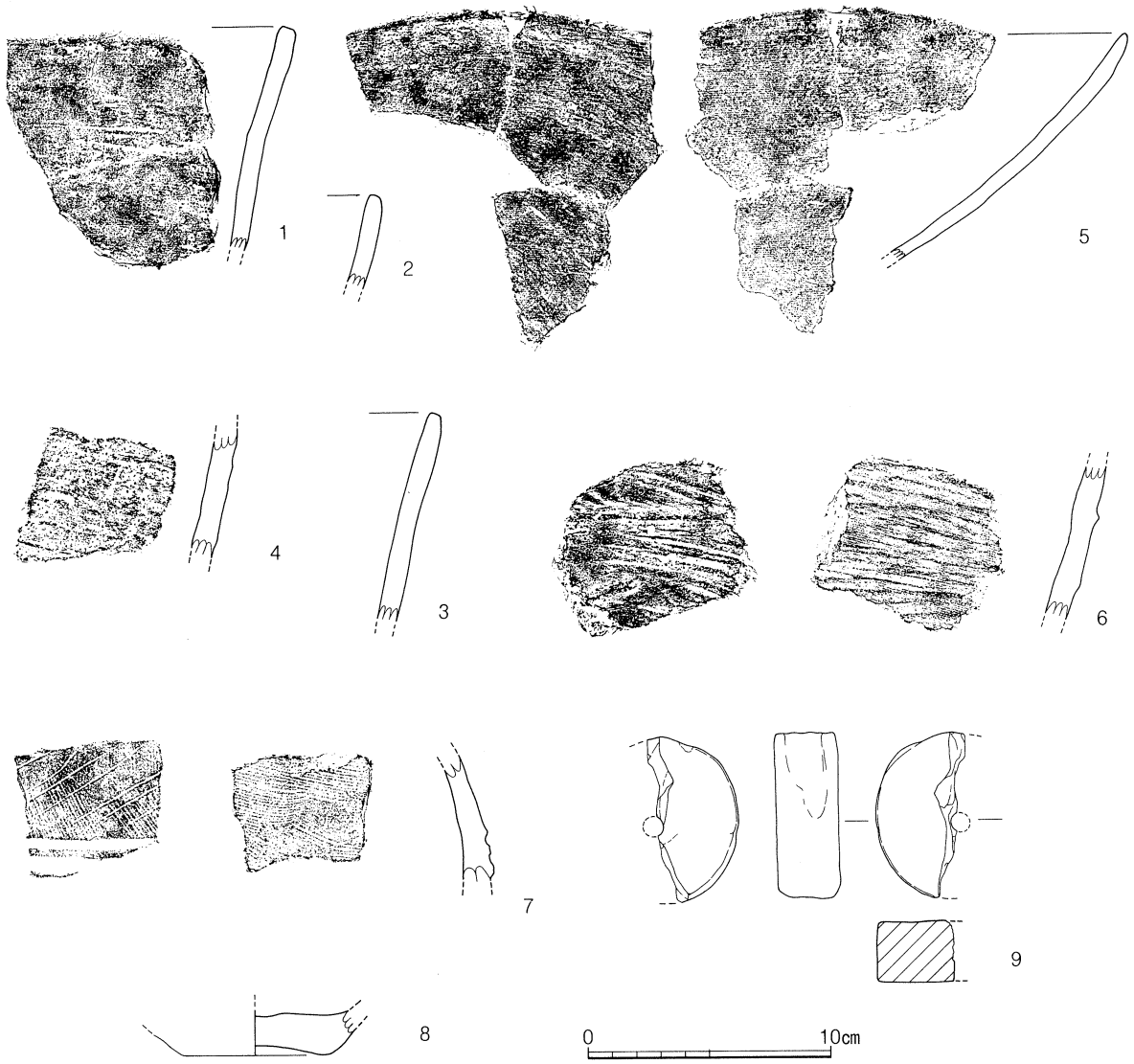
3：遺物（第７図）

以下は、全て遺構外から出土した遺物である。

７－１は、第３層中から出土した縄文土器で、無紋粗製深鉢の口縁部片である。小片で法量は不明であるが、外面にケズリ状の調整とナデが、内面には丁寧なナデが見られる。焼成は良好で黒灰色を呈し、径２㎜以下の微細な砂粒を多く含む。縄文時代後期頃の所産であろうか。

７－２・３・４・５は、第５層中から出土した縄文土器片である。同層からは他に弥生土器小片４点以上、縄文土器小片８点以上が出土している。いずれも小片のため実測は省略する。

７－２は、若干内湾気味に立ち上がる口縁部の小片で法量は不明である。浅鉢片の可能性がある。外面は灰褐色を呈し風化著しく調整不明で、内面は黒灰色を呈しわずかにミガキが認められる。焼成は良好で胎土には微細な砂粒を多く含んでいる。縄文時代後期頃の所産であろうか。



第7図　出土遺物実側図（S＝1：3）

7－3は、復元口径29.2cmの無紋精製深鉢の口縁部片である。内外面ともにミガキが認められ、一部に巻貝によると思われる条痕が施される。焼成は良好で黒灰色を呈し、径2㎜以下の微細な砂粒を含んでいる。縄文時代後期頃の所産であろうか。

7－4は、縄文時代晩期頃の粗製深鉢の胴部片と推測される。小片で法量は不明であるが、外面には条痕調整あるいは強いナデが認められ、内面にはナデらしき調整がうかがえる。焼成は不良らしく見える。灰褐色を呈し、径1～2㎜の砂粒を多く含んでいる。

7－5は、 復元口径25.2cmの無紋精製浅鉢の胴部～口縁部片と推測される。内外面ともにミガキが認められ一部に煤の付着が顕著である。焼成は良好で黒灰色を呈し、径3㎜以下の微細な砂粒を含んでいる。縄文時代後期頃の所産であろうか。

7－6・7・8・9は重機掘削した際の排土中から採取した遺物である。

7－6は、縄文土器で胴部小片である。小片で法量は不明であるが、内外面の器面調整に貝殻腹縁を用いたと推測される条痕地が認められ、その後のナデもうかがえる。外面の一部には、おそらく貼付けたと思われる刺突の無い微隆帯紋が一条めぐっている。黒褐色を呈し、焼成は良好で径1

～２㎜の微細な砂粒を少量含んでいる。施紋と器面調整の特徴から縄文時代前期にさかのぼる微隆帯紋土器の深鉢片と推測される。

７－７は、弥生土器で壷の胴部片と推定される。小片で法量は不明であるが、外面は刷毛目調整ののち上部には斜め方向の沈線、下部には横方向の凹線紋二条が施されている。内面は横方向の刷毛目調整が認められる。焼成は不良と見られ、淡黄白色を呈し、胎土には径１㎜以下の白色の砂粒を含んでいる。施紋等の特徴から弥生時代中期（第Ⅳ様式）頃の広口壷と推測される。

７－８は、弥生土器の壷の底部片と推測される。底径６㎝を測り、風化のため調整は不明瞭である。焼成は良好で、外面は淡赤褐色、内面は暗褐色を呈し、胎土には１～３㎜の砂粒を微量含んでいる。

７－９は、使途不明の土製品の破片である。残存部の径6.8㎝、厚さ2.5㎝を測り、残存状況から本来は円形状を呈し、中央部には復元直径0.8㎝ほどの円孔が開いていたと推測される。焼成は良好で、黄褐色を呈し、胎土は緻密で径１㎜程の砂粒をわずかに含んでいる。

なお、排土中からは、他に黒曜石チップ２点、須恵器片２点以上、土師器片２点以上、弥生土器片５点以上、縄文土器片10点以上が採集された。しかし、いずれも小片のため実測は省略する。

第３節　小　結

茂芳目遺跡で検出された杭列状遺構は時期が判然としないものの、宍道湖沿岸の低地に関する土地利用の歴史を知るうえで有益である。

５層の遺物包含層を中心に出土した縄文土器片は、数こそ少ないが、今後玉湯町内の縄文遺跡の動向を知るうえで足掛かりとなる成果である。包含層の土質、堆積状況から察するに、これらの遺物は、いずれも付近の微高地あるいは丘陵地帯から流れこんだものと思われる。現在の住宅が立ち並ぶ平野縁辺部や丘陵上に当時の居住空間を示す遺構が存在する可能性も検討すべきであろう。

こうした平野部（低湿地）の調査では、今回は不十分であったが、地質学の成果による古地形の復元が重要といえる。さらに、それに基づく当時の地理的条件を十分視野に入れた発掘調査を実施し、学際的に歴史景観を復元すべきことを痛感した。

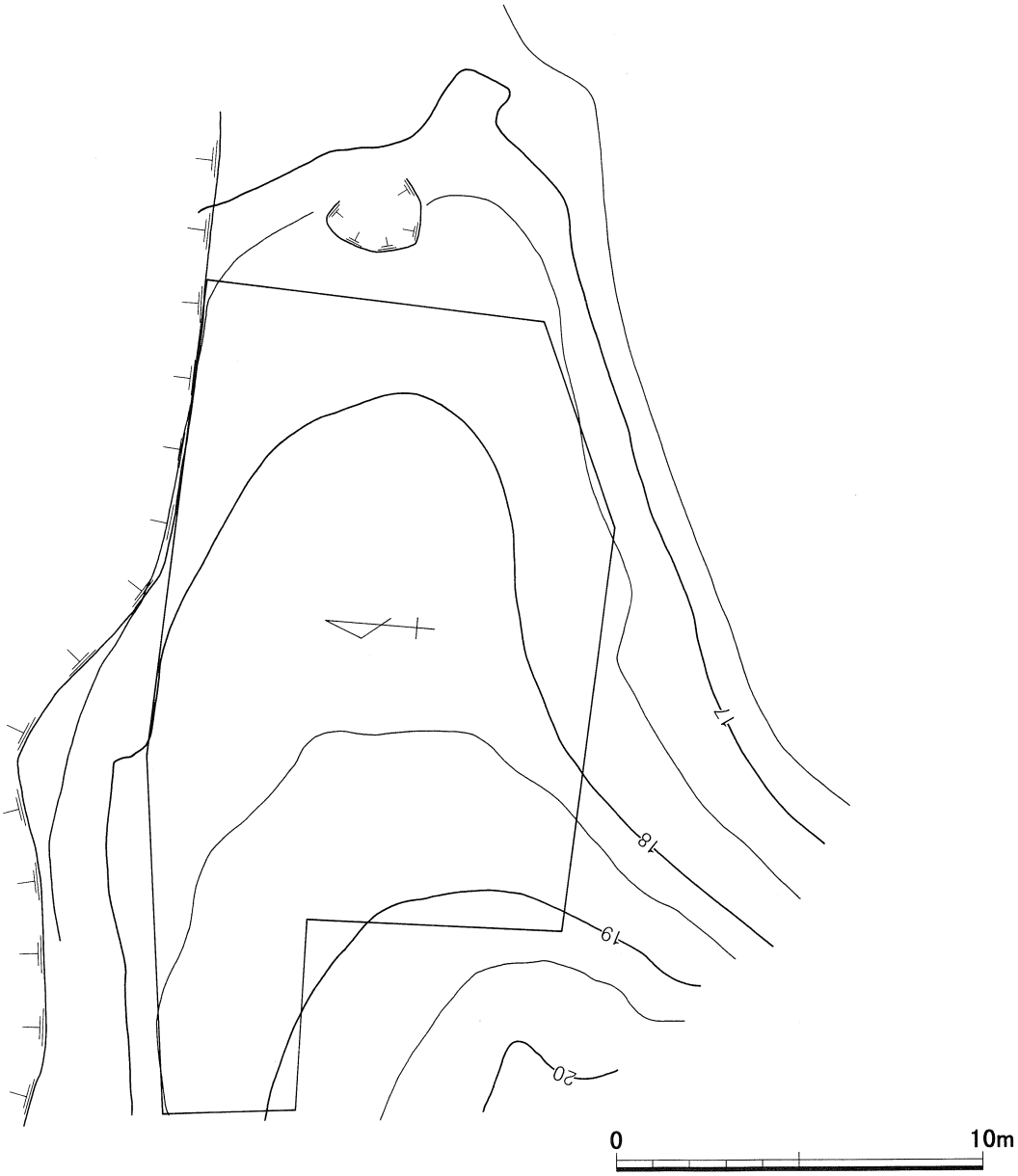
調査風景～低湿地の掘削は重労働の極み。カメラに向かいホッと一息。

第４章　布志名遺跡

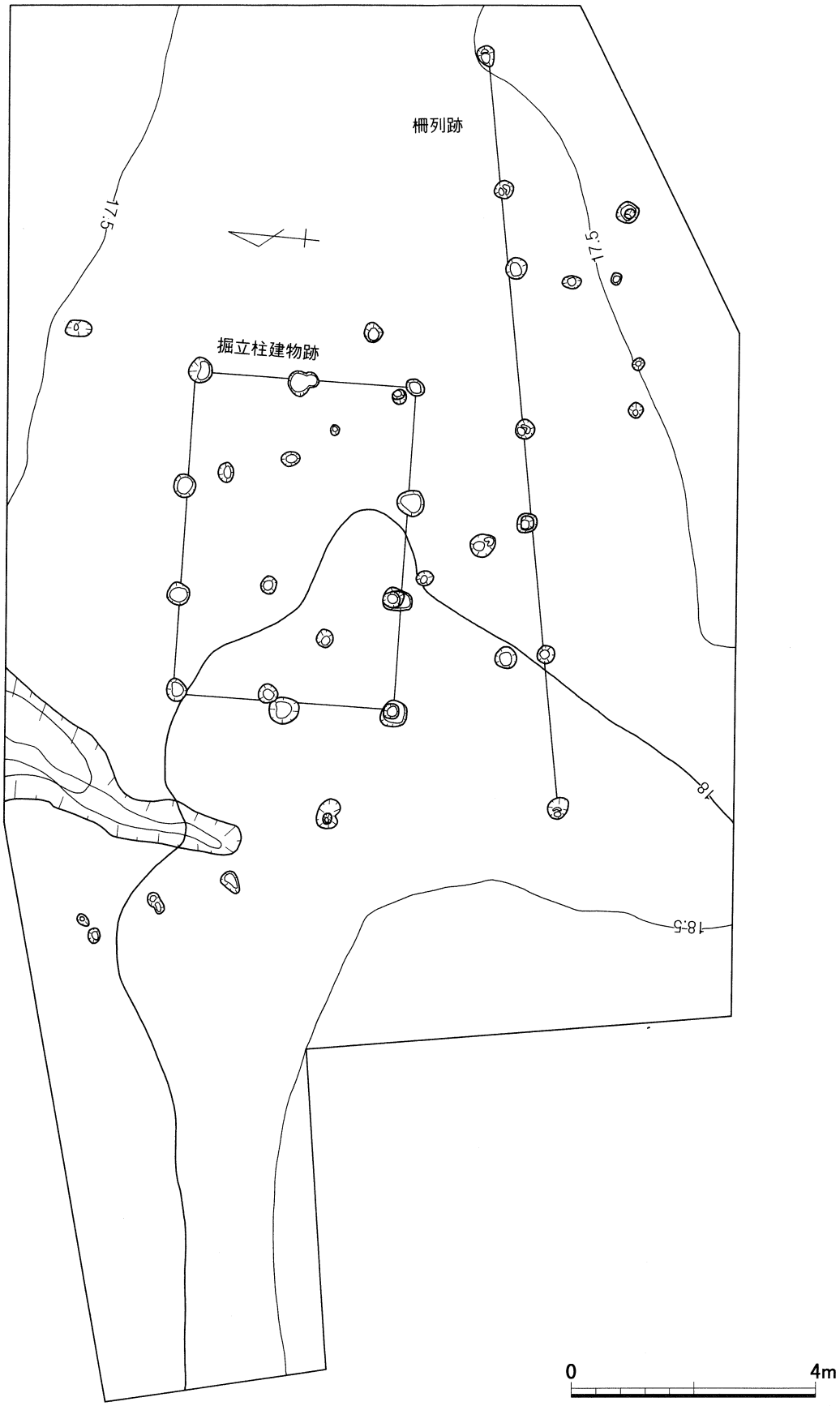
第１節　位置と調査の概要

布志名遺跡は玉湯町布志名502-１外に所在する。ここは布志名の集落から宍道湖に向かって広がっている水田地帯の西方に位置し、標高37ｍあまりの山頂から東側に伸びている標高20ｍ前後の丘陵及び北斜面に存在している。南側には県道浜乃木・玉湯線が通り、北には宍道湖、島根半島が見下ろせ、谷を挟んで西側には大堤Ⅱ遺跡が存在する。また、同丘陵の山頂部には二斗垣古墳、北斜面下方には布志名焼きの鍛冶山窯跡、船木藤平窯跡、遺物散布地の鍛冶畑遺跡等がある。

調査は先ず遺跡の範囲を確認するため平成10年６月23日から斜面及び尾根に長さ10ｍ前後、幅２ｍのトレンチを37本設置して試掘調査を行った。その結果、遺跡は尾根先端部分の約200㎡に限ら



第8図　布志名遺跡調査前地形測量図



第9図　布志名遺跡遺構配置図

れていることが判明したので引き続き本調査を実施し、８月25日に発掘作業を終了した。検出した遺構は掘立柱建物１、柵列１で、出土遺物には弥生時代中期末及び奈良・平安時代の土器がある。今回の調査は道路建設に伴うものであったため尾根の一部しか調査できなかったが、遺跡そのものは現在墓地になっているところを含め2000㎡以上になるものと思われる。なお、試掘調査期間中に鍛冶山窯跡の一部が道路建設に掛かることが判明したので、公団と協議を重ね計画を変更して現地に残ることになった。

第２節　検出した遺構

１）掘立柱建物跡

検出した掘立柱建物は、尾根のほぼ中央に造られた２間×３間の建物１棟である。この建物は主軸が尾根方向に向けて建てられており、柱間の方向がきれいに東西南北に揃っている。これは方位を意識して建造されたものとも考えられるが、たまたま、尾根の方向が東西に向いていたため偶然方位が合ってしまった可能性も否定できない。建物の規模は東西5.3m、南北3.6mあまりで、柱間の長さは1.6mと1.8mとがある。３間間口の柱穴は中央の柱間がやや狭く1.6mで、その両脇が1.8mである。一方２間間口の方は北側の柱間が1.8m、南側が1.6mで、少し北側の柱間が広くなっている。柱穴は径が0.3m～0.5mで、深さは検出面から0.22m～0.46mを計り、柱穴の中には建て替えたと思われる痕跡のあるものがあった。なお、建物の西側に尾根から北斜面にかけて溝が検出されたが、方位が建物と少しずれているためこの建物に関係するものかどうかは判断できなかった。

２）柵列

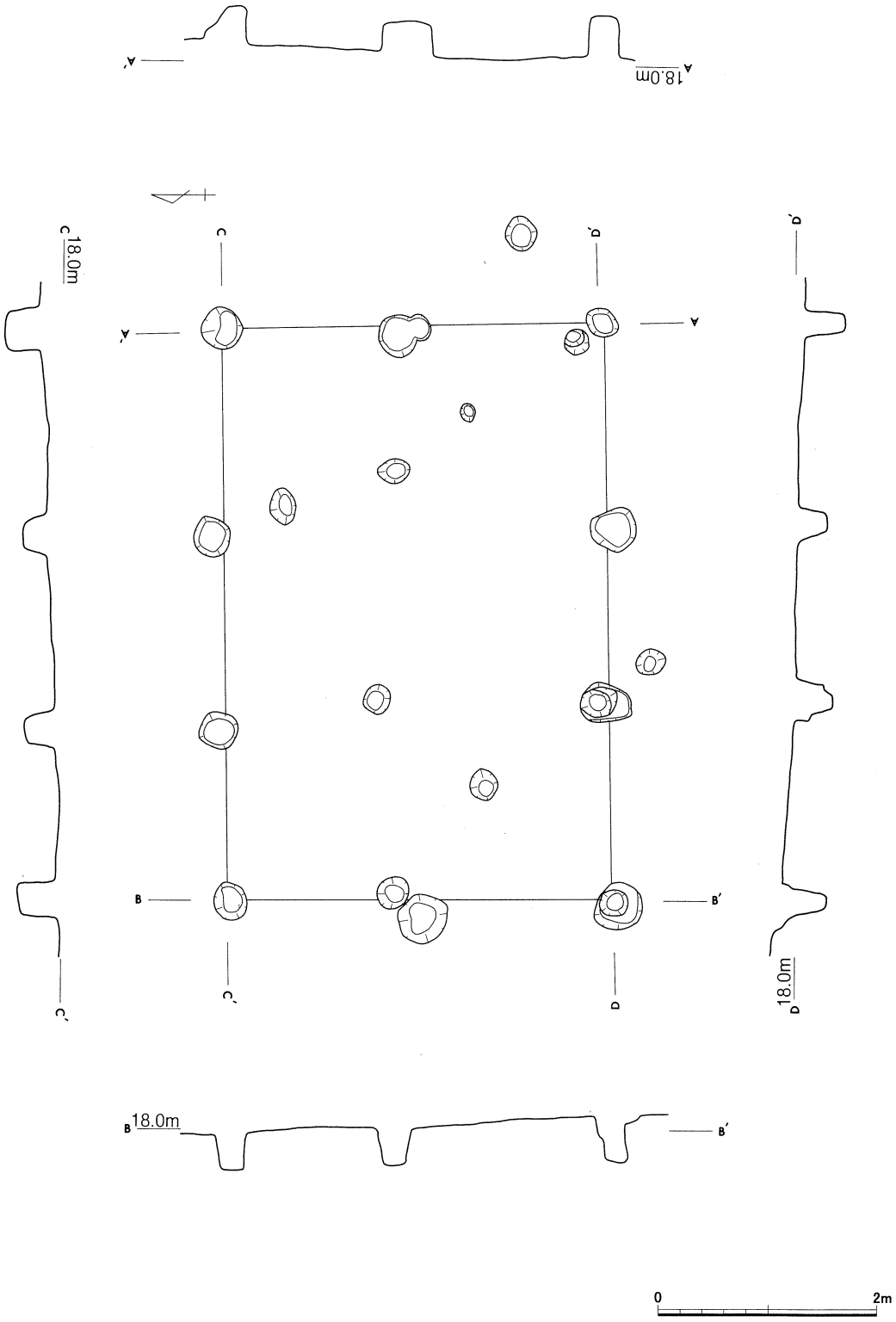
掘立柱建物の南側から検出したもので、７穴の柱穴からなっている。その長さは12.3mで、建物跡よりやや北側に方位がずれている。柱間隔はおおむね1.4mと2.4mに分けられる。東端から２本目と３本目の間及び４本目と５本目の間がやや狭い。柱穴は0.3m前後で、深さは0.25m～0.4mあまりである。

第３節　出土遺物（第12図）

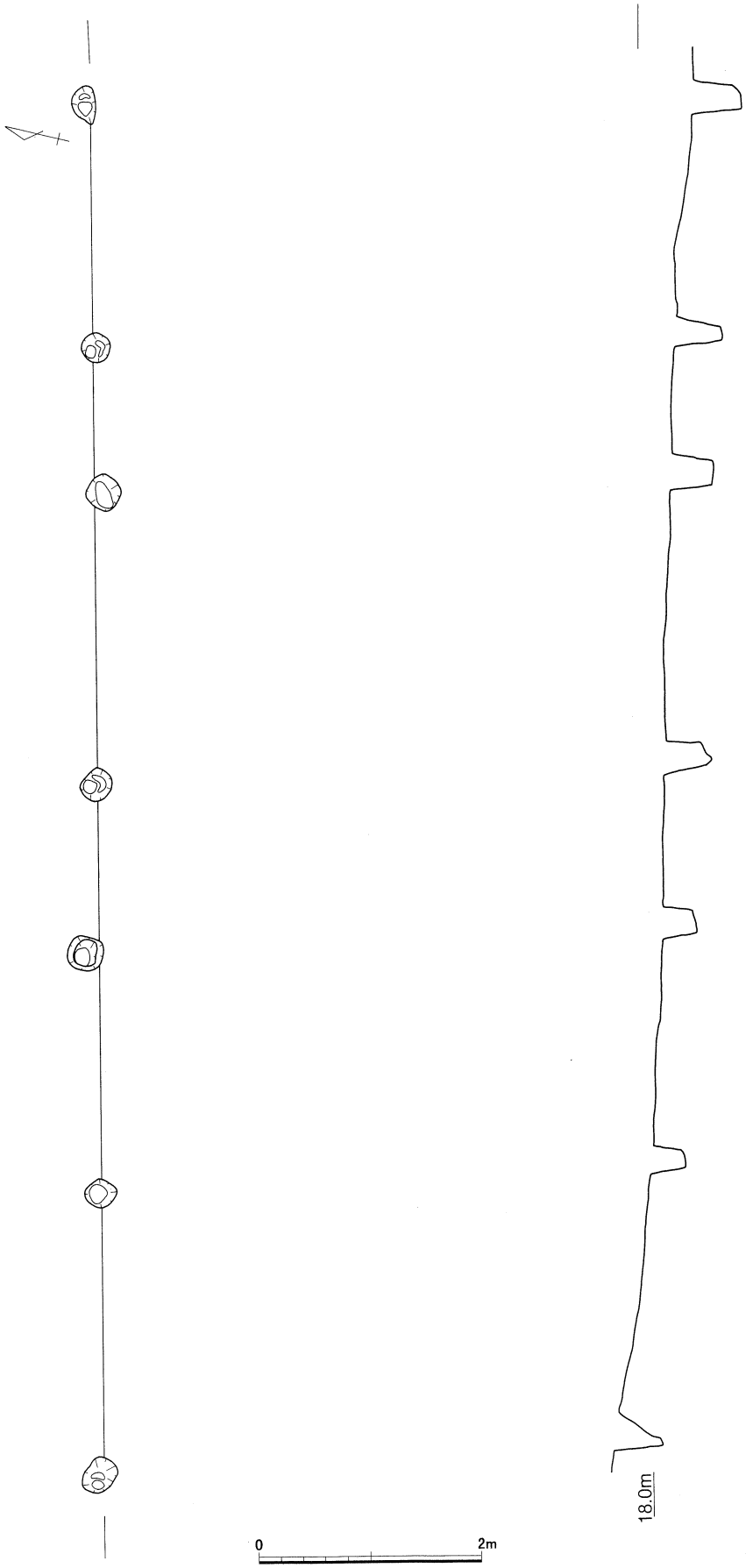
今回の調査では建物跡が見つかった尾根を中心に弥生土器、土師器、須恵器等の破片が出土した。以下その概要を述べる。

弥生土器（１～３）１は甕の頸部から肩部にかけての破片で全体的に風化を受けている。頸部の推定径は20㎝あまりで、肩はよく張り出している。調整は内面にハケ目が施されていたものと思われる。厚みは0.8㎝前後、色調は外面が黄茶褐色、内面が暗褐色で、焼成はやや軟質である。２は壷甕類の底部片である。底の径は4.5㎝で、厚みは1.2㎝あまりを計る。やや赤みかかった褐色を呈し、胎土は多くの砂粒を含む。焼成は良好である。３は口径20㎝あまりの高坏の坏部上半の破片である。坏部は「Ｓ」字形に屈曲しており、口縁部下方が外反してくびれている。口縁部は上面が平らで、その幅は1.6㎝を計る。その面には４本の凹線が施されている。坏部の調整は内外とも横ナデである。

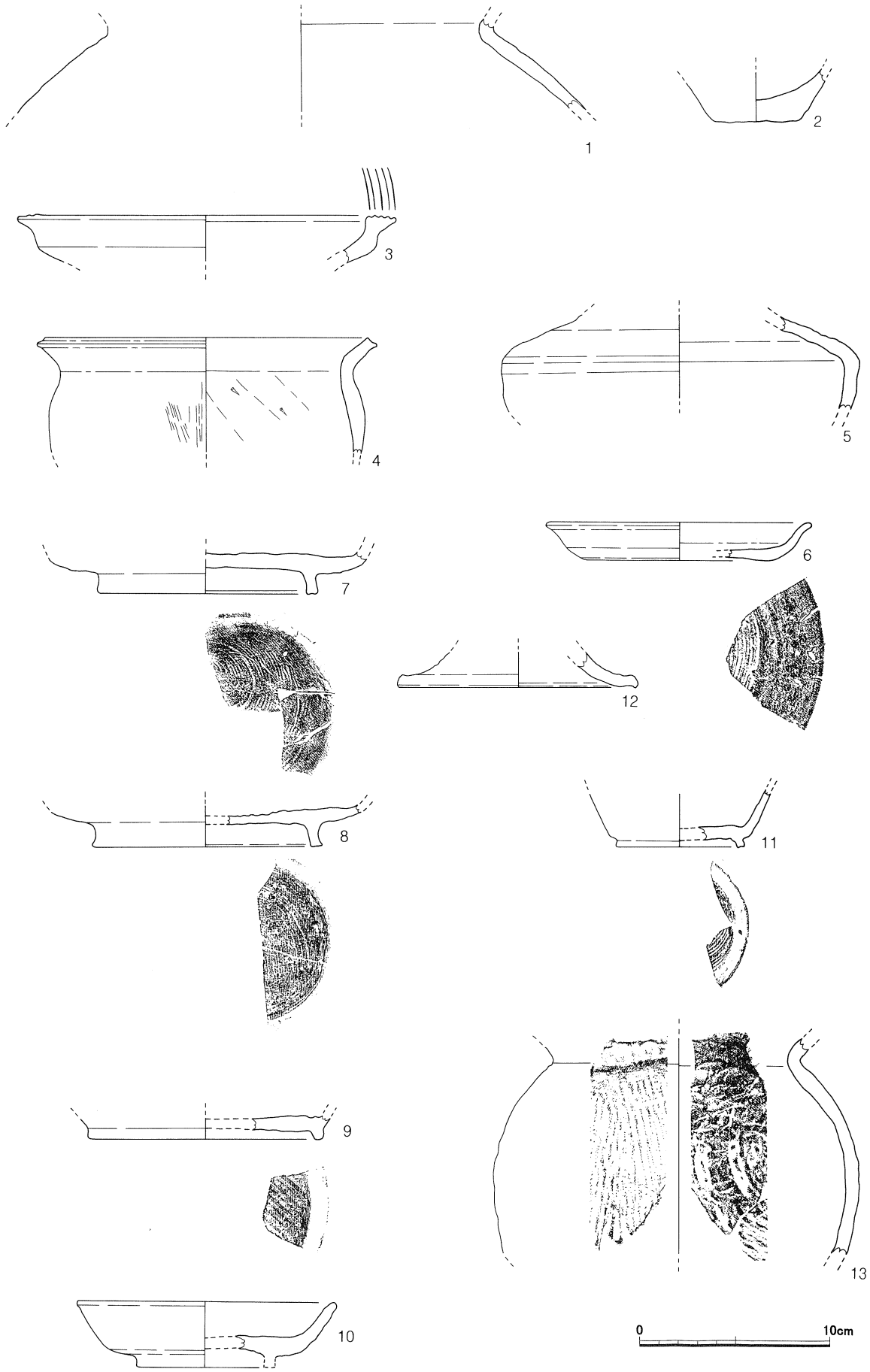
土師器（４）４は口径17.0㎝を計る甕である。胴部があまり張り出さないもので、頸部から外反して口縁部にいたっている。口縁端部は内傾し、やや凹み、頸部より上方にはナデ、下方にはヘラケズリ（内面）とハケ目（外面）がそれぞれ施されている。ケズリは下から上に向かって斜めに施



第10図　掘立柱建物跡実測図



第11図　柵列跡実測図



第12図　出土遺物実測図

され、ハケ目は縦方向である。淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。

須恵器（５～13）５は長頸壷の肩部から胴部にかけての破片。胴部最大径は18.8cmで、肩はよく張り出し、大きく屈曲して胴部にいたっている。淡い灰色を呈し、器面には回転ナデが施されている焼成良好の土器である。６は口径13.6cm、器高3.0cm、底径9.9cmを計る坏である。体部は底部から内湾ぎみに上がり若干外反して口縁部にいたっている。口縁端部は丸く、厚みは底部と体部との境がもっとも厚く0.7cmあまりを計る。底部外面には回転糸切りの痕跡があり、他の器面には回転ナデが施されている。色調は濃い青灰色で、胎土、焼成とも良好である。７～11は高台付の坏である。７は底径11.6cm、高台の高さ1.0cmを計る。高台は若干内傾しており、内側には糸切りの痕跡が残る。体部は高台から外側に大きく張り出しており、回転ナデが施されている。淡い灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。８は底径12.2cmあまりで、高台は、外形がやや外反しており、高さは1.1cmあまりである。高台の内側には糸切りの痕跡があるがナデによって大半が消去されている。高台の底部はやや凹みぎみで、体部は外側に大きく張り出している。９は底径12.5cm、高台の高さ0.5cmを計る。高台は体部の端に廻っており、やや退化した形態をなしている。高台内側の底部外面には板状のものでナデた痕跡がある。胎土、焼成とも良好で淡い灰色を呈している。10は口径13.6cm、残存高2.9cmを計る坏である。体部は内湾ぎみで丸みをおびており、口縁端部は丸い。底部には高台が付いていたが、剥がれ落ちている。淡い灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。11は高台が付く坏の破片と思われるものである。底径6.6cm、残存高2.9cmを計る。高台は高さ0.4cmあまりで内傾しており、小さく外反して体部にいたっている。体部は外傾して逆「ハ」の字形に開く。底部外面に糸切り、その他の器面に回転ナデ、横ナデが見られる。色調は明るい灰色で胎土、焼成とも良好。12は高坏の脚部の破片。底径12.6cm、残存高1.9cmを計る。脚部は端部からやや外反して上にのび、端部は若干内傾している。内面は端部付近がやや凹んでいる。暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。13は壷の頸部から胴部にかけての破片。頸部の径13.0cm、胴部最大径19.3cmを計る。胴部は内湾していて丸みを持っている。外面には平行タタキ、内面には同心円状のタタキが見られる。頸部は小さく外反しており、横ナデが施されている。

第４節　まとめ

今回の調査対象地は北向きの緩斜面が広い範囲にわたって存在していることから、調査当初、大規模な集落跡等の遺構が検出されるものと思われていたが、試掘調査の結果、丘陵先端部約200m²にしか遺跡が営まれていないことが判明した。出土した遺物を見てみると、弥生時代中期末及び奈良時代末～平安時代にかけての二時期のものがある。後者は坏の高台が取り付けられている位置及び形態からさらに二つの時期に細分できる。検出した遺構としては掘立柱建物１棟、柵列１である。掘立柱建物は２間×３間で、方位が揃っていたため方位を意識して造った建物とも考えられるが、たまたま、尾根の方向が東西に向いていたため偶然方位が合ってしまった可能性が強い。この建物跡は周辺から出ている土器から奈良時代末～平安時代にかけて築造されたものと思われる。柵列については掘立柱建物と方向が若干ずれているため時期が異なるものと推測される。奈良時代の掘立柱建物は近くの松江市乃木福富町の福富Ｉ遺跡から検出されているが、(註１)玉湯町の布志名地区では、今回の調査がはじめてで、当地域の奈良時代～平安時代にかけての実態を知る上に重要な手掛かりになるものと思われる。

（註）

1．島根県教育委員会『福富Ⅰ遺跡・屋形1号墳』「一般国道9号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」2　1997年

第５章　大堤Ⅱ遺跡

第１節　遺跡の位置

大堤Ⅱ遺跡は八束郡玉湯町大字布志名に所在する遺跡である。遺跡は、標高が約10m～35mを測る低丘陵の南西側に展開している。この丘陵の北側には宍道湖が、南東側には布志名の小平野が広がっている。また良質な碧玉を産出することで知られる花仙山は南に約２㎞の所にある。

周辺の遺跡については第２章で述べているので省略するが、比較的近距離に多くの遺跡が展開していることがうかがえる。

第２節　調査の経過と概要

調査は平成10年５月１日より開始した。まず最初に中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内分布調査の結果をもとに、遺跡の範囲を確認するためのトレンチ調査から行った。大堤Ⅱ遺跡では合計74本のトレンチを設定し掘削を行ったが、そのうち、遺跡の中央を南北にのびる尾根より東側のものから多数の遺物が確認されたため、この部分の本調査を行うこととした。また遺物はほとんど確認されなかったものの、地形に高まりが認められ古墳の存在が想定された西側の部分も本調査を行うこととした。（この段階では東側のものを「東区」、西側のもを「西区」とした。）しかし、遺跡内に林立する樹木の伐採等、諸条件整備の遅れもあり、本調査は８月になってから開始することとなった。

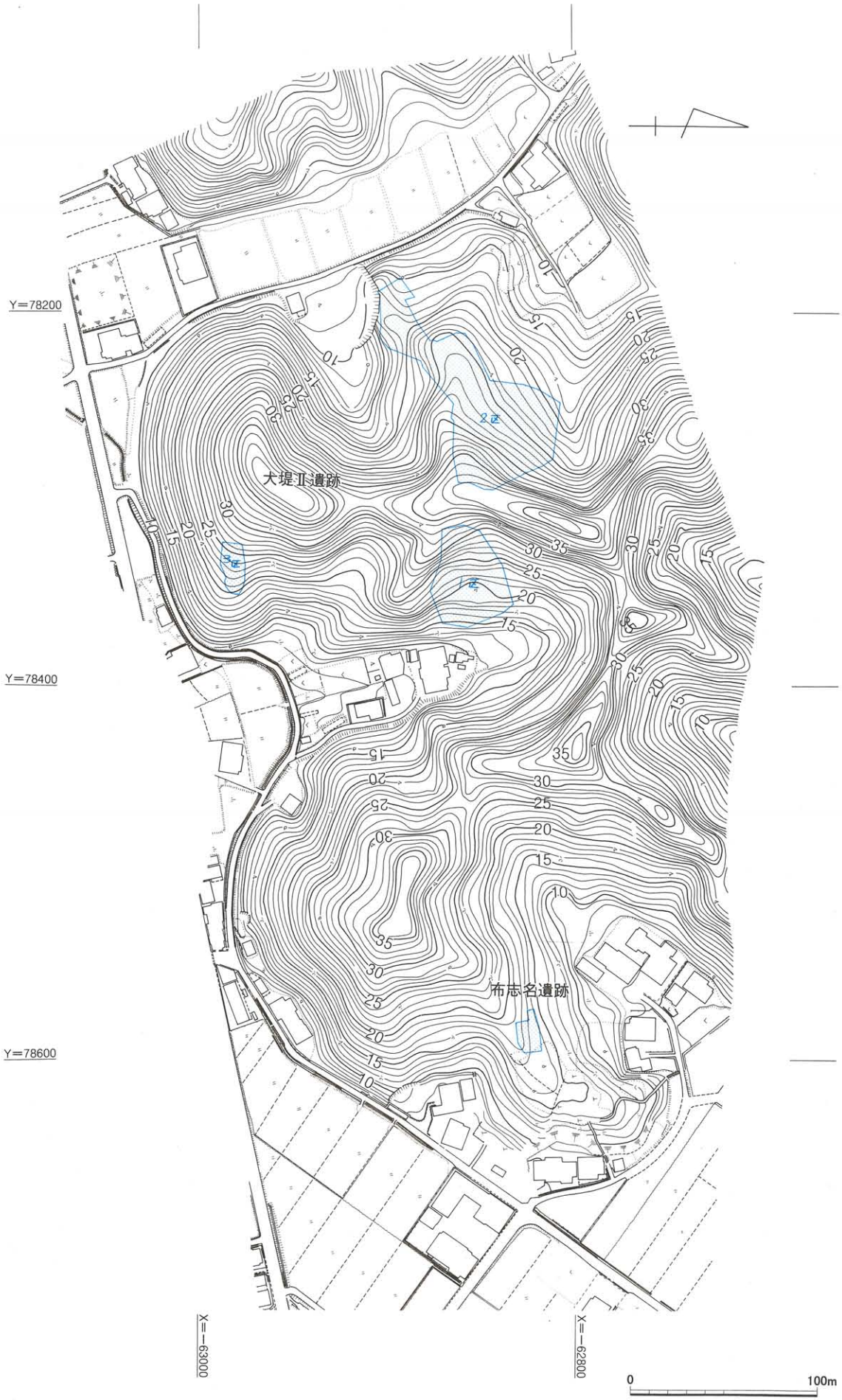
調査は古墳の周辺を除いて基本的に表土を重機によって掘削し、その後包含層以下は人力によって掘削して行った。当初は１班体制であったが９月からはもう１班が合流して、東区と西区に別れて調査を進めた。その後、道路建設に伴う住居移転の代替地内にも古墳が存在することが明かとなり、その部分も合わせて調査を行うこととなった。（この段階で「東区」としていたものを「１区」、「西区」としていたものを「２区」、新たに加わった代替地を「３区」とした。）（第13図）

調査が進むにつれ、１区では弥生時代から奈良・平安時代にかけての遺構群が、また２区・３区においては合計６基以上の古墳が存在することが明らかとなってきた。このため11月19日には、以後の調査の進め方についての指導を受けるため、調査指導会を開催した。また11月28日には、調査の成果を公表するための現地説明会を開催し、多数の方の参加を得た。

その後さらに調査を進め、航空写真撮影や測量などを行って平成10年12月24日にすべての調査を終了した。

調査指導

現地説明会



第13図　布志名遺跡　大堤Ⅱ遺跡位置図（S=1/3000）

第３節　調査の結果

１．１区の調査（第14図）

１区は標高約17m～35mの東向きの斜面に位置している。この斜面は丘陵に向かって入る小さな谷筋に面しており、やや奥まった印象を受けるところにある。

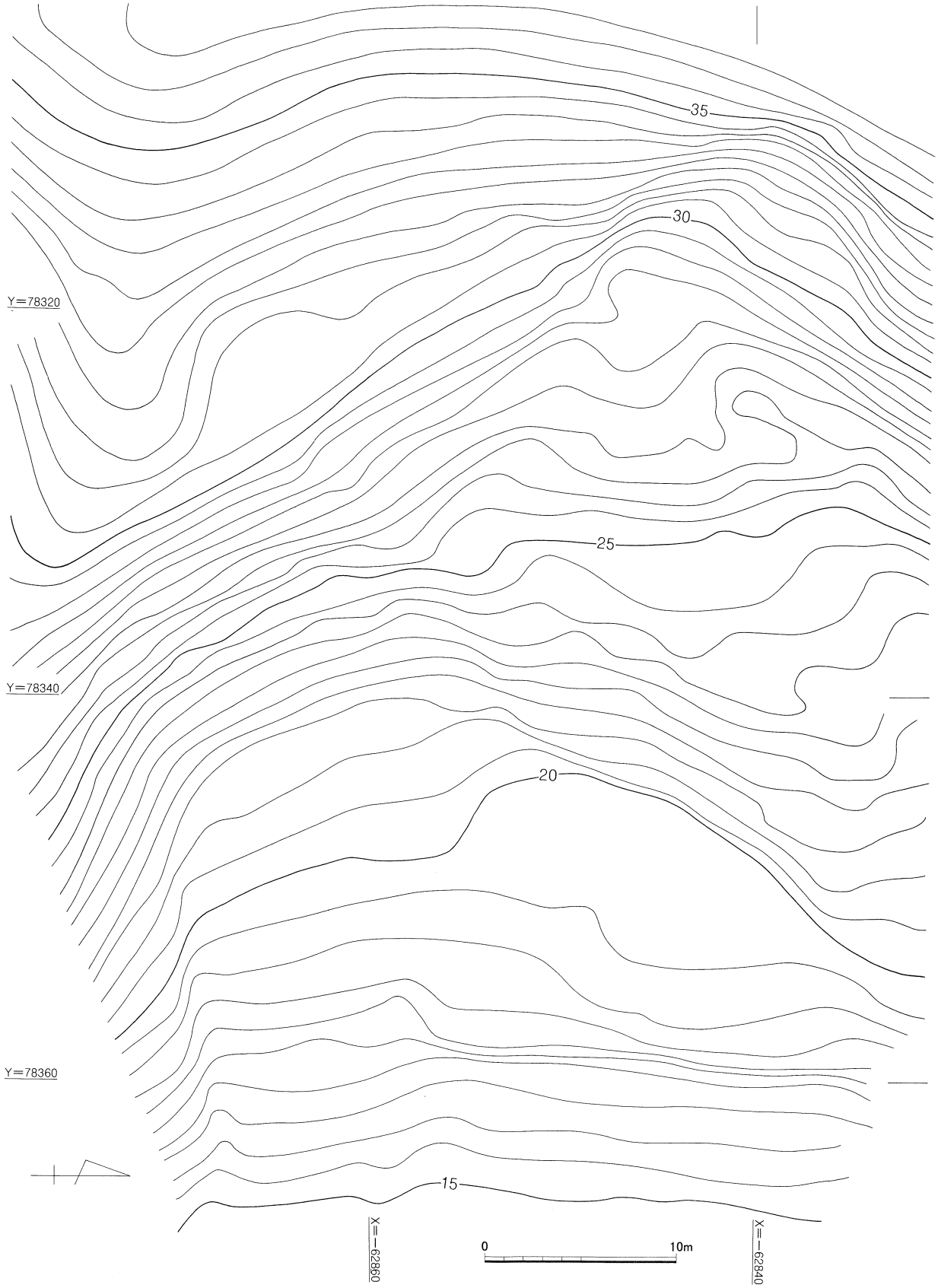
本調査区では弥生時代の遺構と、奈良時代～平安時代にかけての遺構を検出した。

以下弥生時代の遺構、奈良～平安時代にかけての遺構の順に述べていきたい。

第14図　1区地形測量図（調査後）遺構配置図（S＝1/300）

［弥生時代の遺構］

弥生時代の遺構は、ほぼ同時期のものと考えられる建物跡２基を検出した。この時期のものと考えられる遺構は１区ではほかに確認されず、２区において１基検出したのみである。



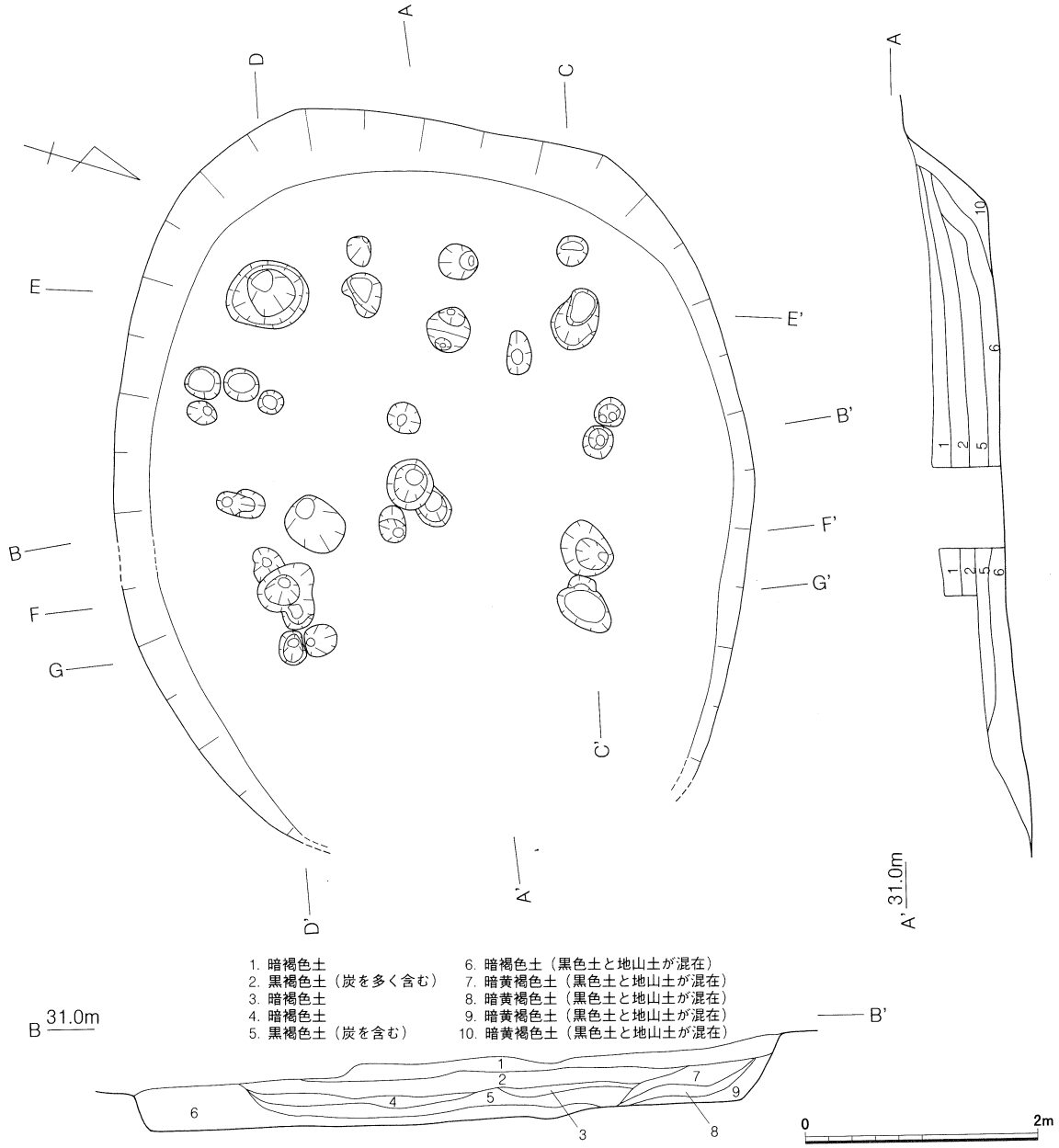
第15図　1区地形測量図（調査前）（S=1/300）

SI01（第16図、第17図）

（立地）調査区の西側、標高約30mの所に位置している。わずかに下がってはいるもののほとんど丘陵尾根の頂部とも言える所で、ほぼ同時期と考えられる他の遺構よりも高い所にある。すぐ東側は地滑りを起こしたためか崖のような急斜面になっていた。

（規模・形態）東側の一部が既に流出しており原形をとどめていないが、西側は比較的良好な残存状況の建物跡である。平面形は円形と方形の中間的な形を呈し、規模は床面の南北方向で計測して約５mを測る。壁は斜めに掘り込まれており、西側の残りの良い部分では約60cmの高さがあった。

壁際では壁体溝などは検出されなかった。

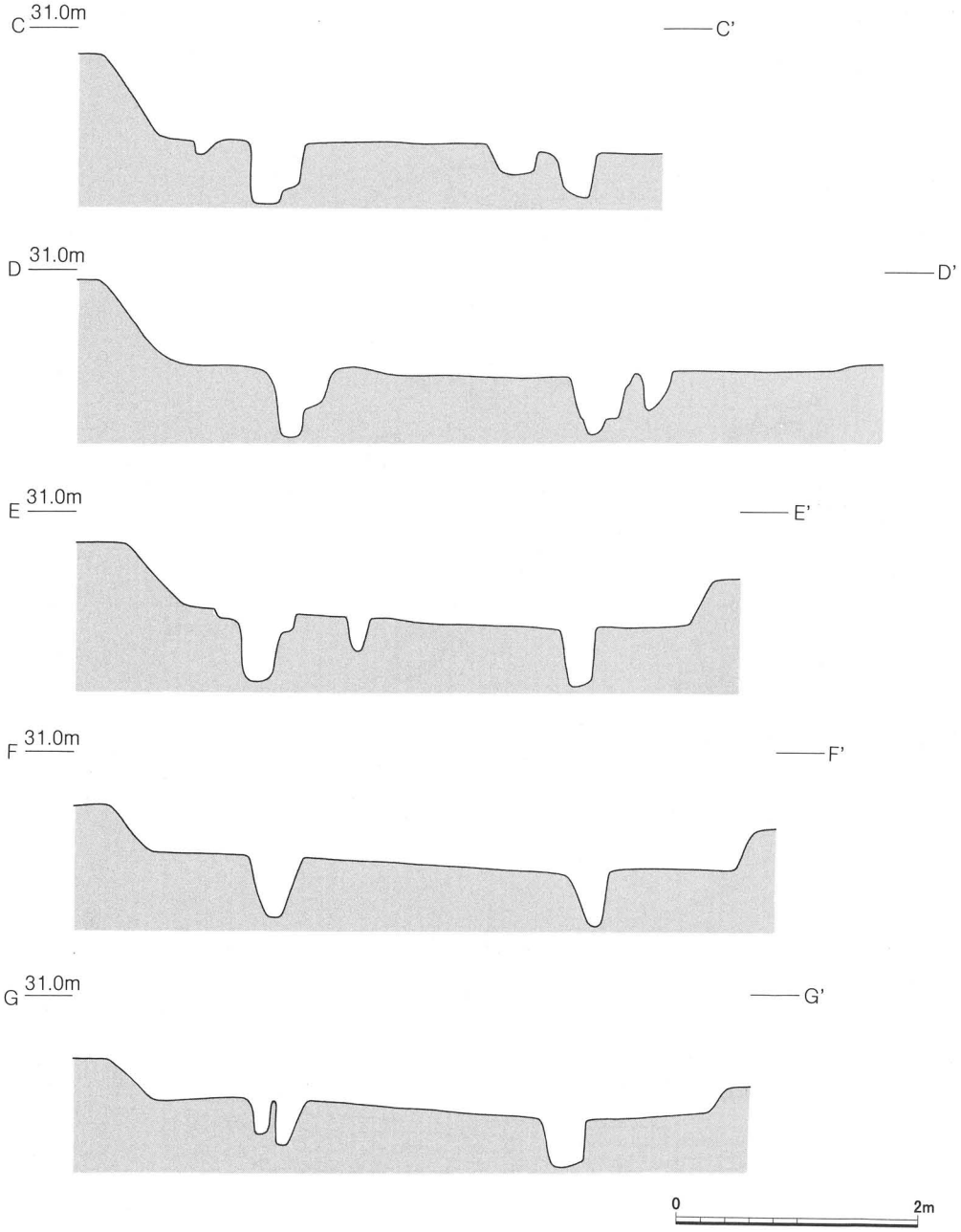


第16図　SI01実測図（1）（S＝1/60）

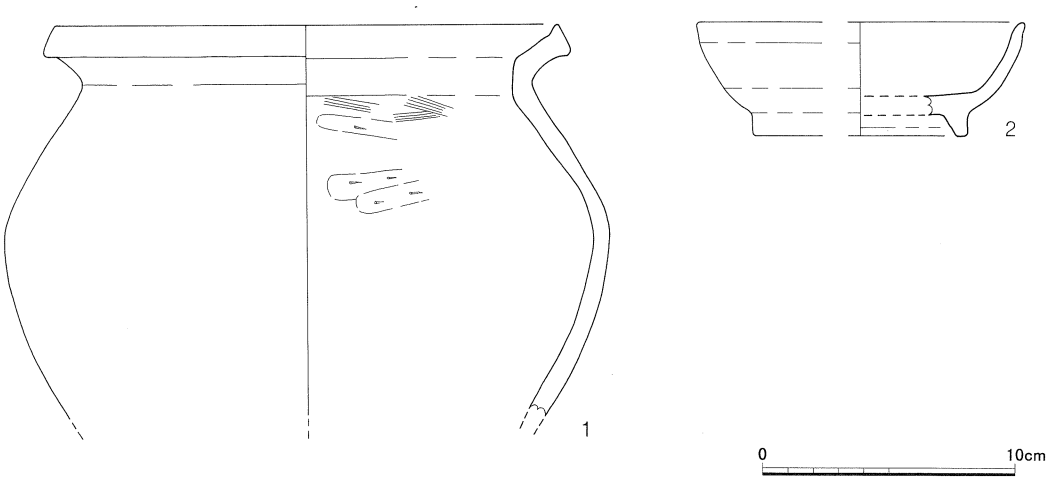
床面では大小を含めて多数のピットを確認した。このうち柱穴に相当すると考えられるのは６基あり、いずれも径約30～50㎝、深さ50㎝を測るものである。その状況から建物の柱は４本で、少なくとも１回程度の建て替えが行われたことが推測される。また中央よりやや東側のピットは、規模は小さいものの覆土に僅かに炭を含んでいたことから中央ピットの可能性がある。

（出土遺物）（第18図、第３表）遺物は覆土中や床面直上からわずかに出土している。このうち図化できたのは第18図に掲載したものである。１は床面直上から出土した甕である。口縁部は内傾し、内面は頸部の屈曲部分よりわずかに下方までヘラケズリを施す。２は須恵器の坏である。覆土中からの出土であり、直接遺構に伴うものではないと考えられる。

（時期）出土遺物は少ないものの、１から判断して弥生時代後期前半頃のものと考えられる。



第17図　SI01実測図（2）（S＝1/60）



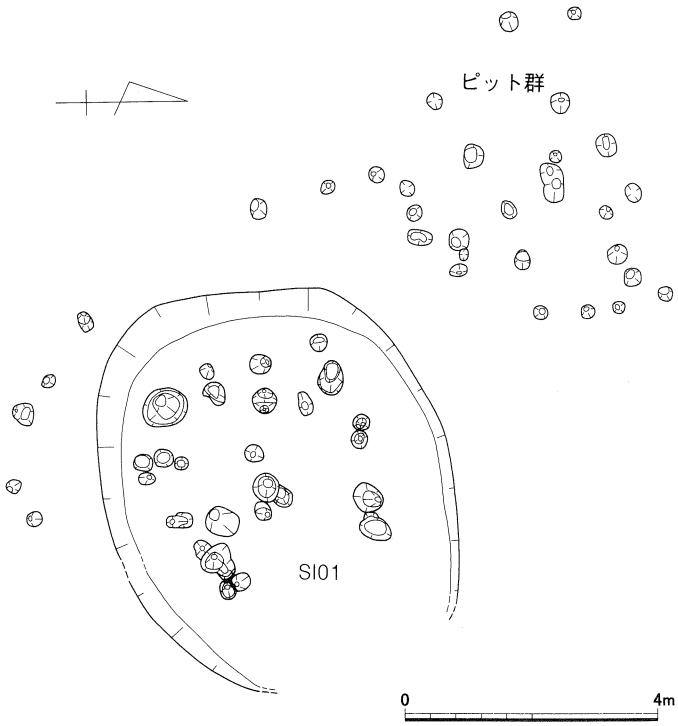
第18図　SI01出土遺物実測図（S＝1/3）

第3表　1区SI01出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
18-1	31	SI01（床面）	甕（弥生土器）	口径(20cm)	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ、ハケメ、ヘラケズリ(横方向)	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	茶褐色	表面風化により調整不明瞭 口径推定復元
18-2	31	SI01（覆土中）	高台付坏（須恵器）	口径(12.8cm) 器高4.5cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	茶灰色	口径推定復元

SI01周辺ピット群

SI01の周辺では多数のピットが認められた。ピットは北西側にまとまってあるものと南側にあるものとがあるが、ほとんどが径20～30㎝、深さ20～40㎝を測るものである。北西側にあるものはSI01からやや離れたところにあることから、直接SI01に伴うものではないと考えられるが、同一の平坦面上にありなんらかの関連性が想定される。掘建柱建物の可能性もあるが明確に柱穴が並ばずはっきりしない。また南側のものは柵または垂木などの跡の可能性も考えられ、SI01に伴う可能性がある。なお付近から遺物の出土はなかった。



第19図　SI01周辺ピット群実測図（S＝1/120）

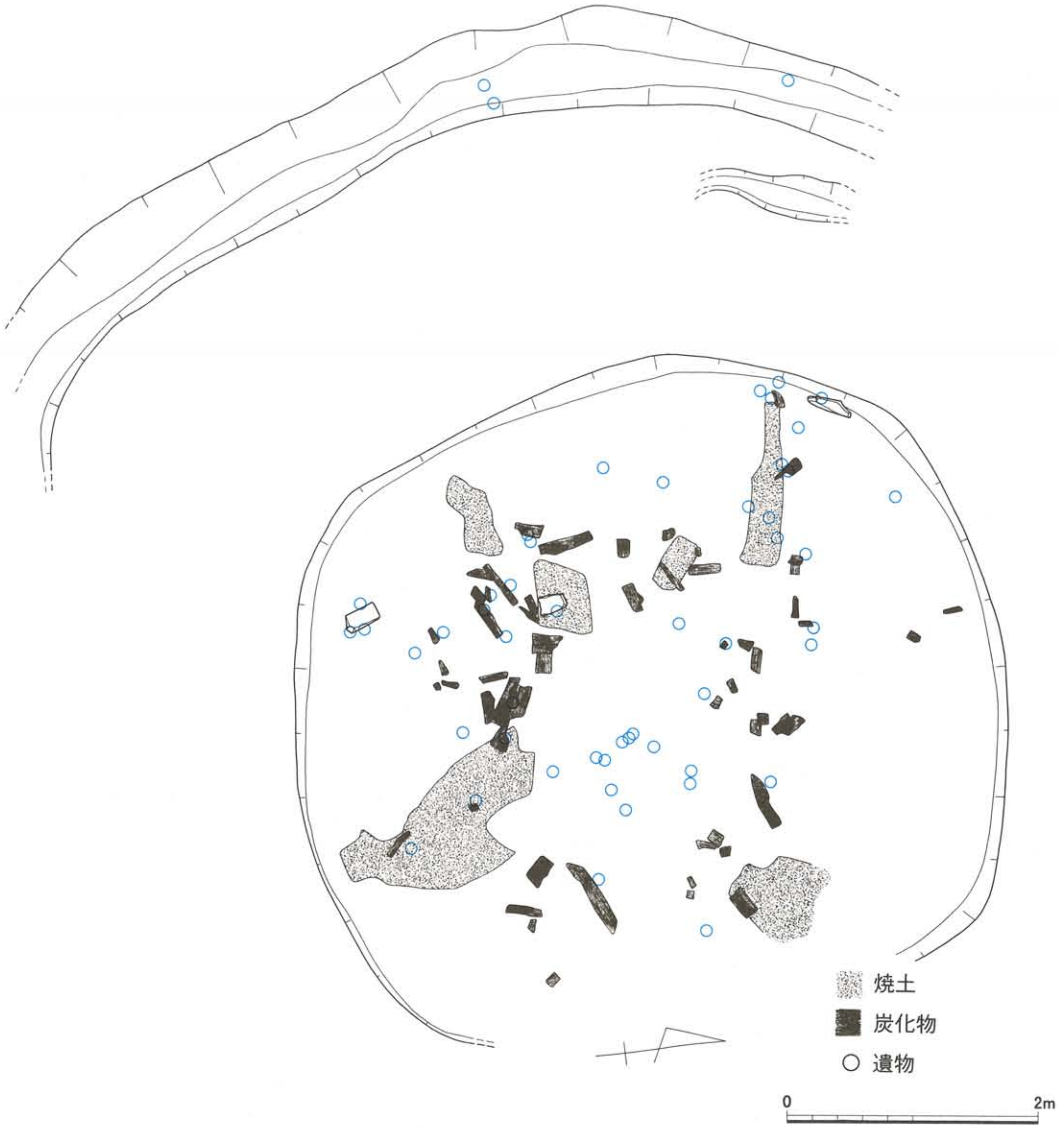
SI06、SD02（第20図～第22図）

（立地）標高約17mのところに位置している。尾根からの急斜面が緩やかになり平坦な面を造っているところで、調査区の中では一番東にあたり、そこから先は再び斜面となっている。周辺にも遺構が認められるが、同時期と考えられるものは確認していない。後述するSI04、SI05の調査後に発見したものである。

（規模・形態）東側の一部が流出しており残存状況は良くない。平面形は辺が膨らみをもった胴張りの隅丸方形プランのものと考えられ、円形と方形の中間的な形態のものと言える。規模は壁体溝の内側で計測して南北方向約5.6mを測る。

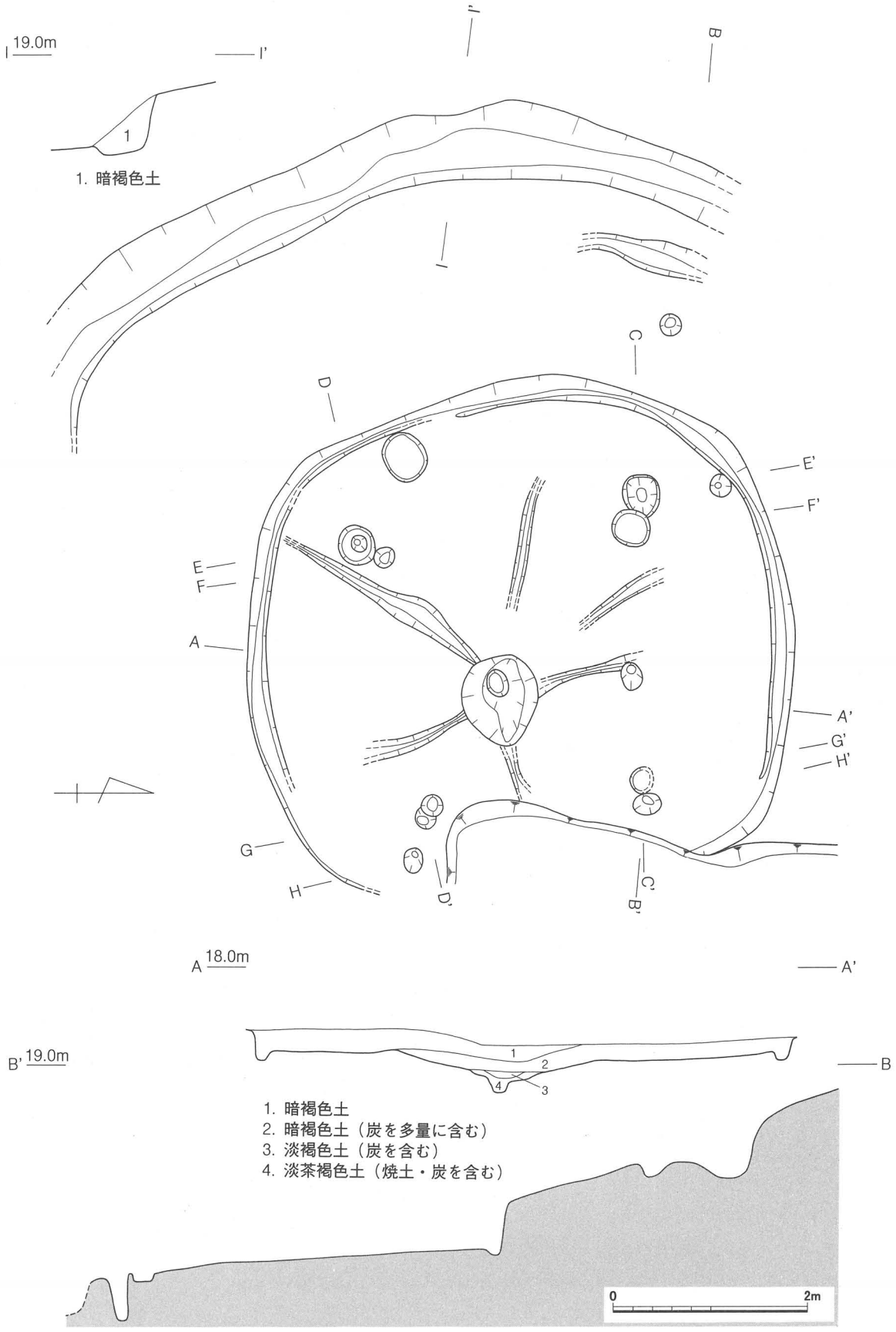
壁はほぼ垂直に掘り込まれ、調査段階では約50cmの高さを測る。壁際には幅約10cmを測る壁体溝が巡らされていたが、西側と北東側の一部で途切れていた。

床面では13基のピットを検出した。これらの内、その配置状況から柱穴と考えられるものは８基あり、主柱が４本の建物で１度の建て替えのあったことが想定される。ただし中には浅いものも含まれ疑問も残る。また、床面の中央からやや南に寄った所には中央ピットが配されていた。ピット



第20図　SI06実測図（1）遺物出土状況図（S＝1/60）

は規模が約90cmを測るもので２段掘りになっており、覆土には焼土や炭が含まれていた。中央ピットからはそこをを中心として６方向に溝が延びていた。溝は深さ約５cmほど掘り込まれた浅いもの

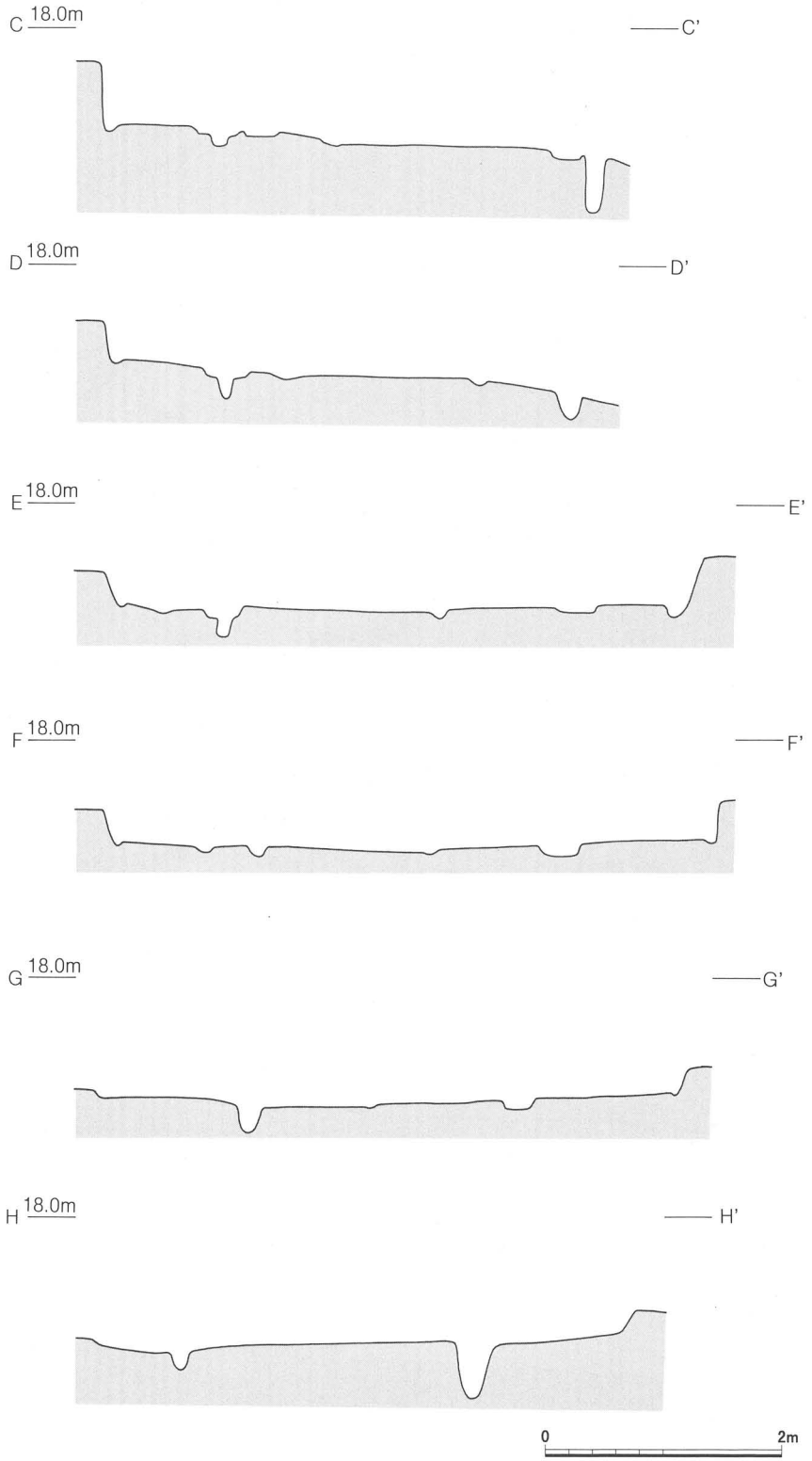


第21図　SI06実測図（2）（S＝1/60）

であり、そのうち一つは壁体溝近くまで延びている状況がうかがえた。

この竪穴の西側約２ｍのところでは、現状で長さ約7ｍ、幅50㎝～60㎝、深さ40㎝を測る断面形が逆台形を呈した溝を検出した。SI06に伴う溝と判断した。確認されたのは斜面上方側のみで北側と南側にも巡らされていたかどうかは不明である。

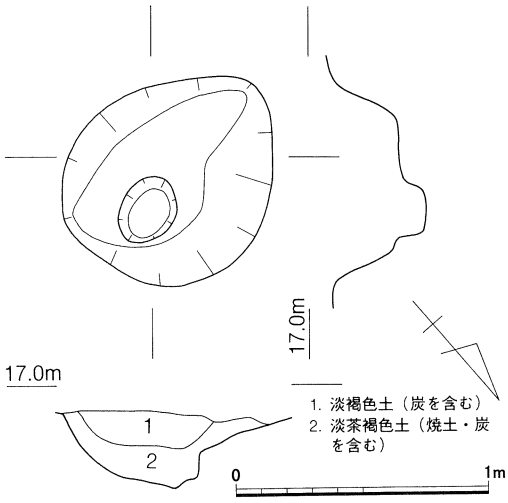
なお、SI06内では床面や覆土中から大量の炭や焼土が確認されており、焼失したことが考えられる。



第22図　SI06実測図（3）（S＝1/60）

（遺物出土状況）（第20図）遺物は床面付近および溝内から出土している。竪穴内からはほぼ全面的に出土しているが、ほとんどは小片である。また中央ピットからは高坏片も出土している。このほか、表面に焼けた面をもつ偏平な石も確認した。

（出土遺物）（第24図、第４表）遺物は弥生土器の甕や高坏、鉄製品、磨石などがある。このうち図化が可能であったのは第24図に掲載したものである。詳細については第４表に記載した。いずれのものも小片のうえ風化が激しく調整等不明な点も多い。１は口縁部が内傾しわずかに上下に拡張するものである。２は高坏の脚部としているが別の器種になる可能性もある。３の高坏は当地域では類例の少ないものである。４の鉄製品は錐であると考えられる。



第23図　SI06中央ピット実測図（S＝1/30）

（時期）出土遺物から判断して、弥生時代後期前半頃の時期に該当するものと思われる。

第4表　1区　SI06・SD02出土遺物観察表（1）

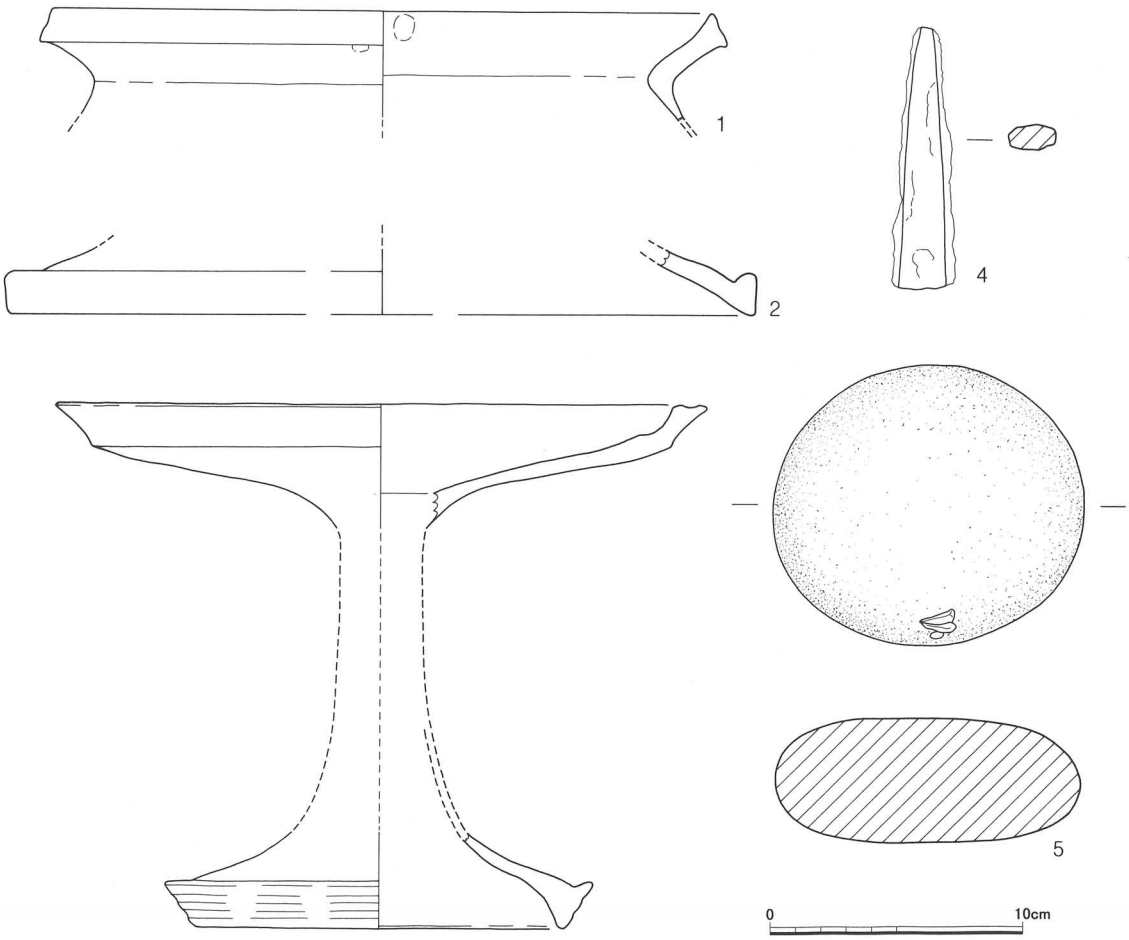
挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量（cm）	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
24-1	31	SI06（床面）	甕（弥生）	口径（26.0cm）	外面:ヨコナデ、凹線文? 内面:ヨコナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄白色	風化により調整不明瞭 指頭圧痕?
24-2	31	SI06（床面）	高坏?（弥生）	口径（29.5cm）	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	1～4mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	風化により調整不明瞭
24-3	31	SI06（床面）	高坏（弥生）	口径25.8cm 底径14.6cm	外面:強いナデ、 内面:強いヨコナデ、凹線文	1～3mm程度の砂粒を多く含む	良好	橙色	風化により調整不明瞭 脚部内面はケズリか?
25-1	32	SD02	甕（弥生）	口径（25.8cm）	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ケズリ?	1～3mm程度の砂粒、石英多く含む	良好	黄白色	風化により調整不明瞭 口径反転復元 口縁端部を若干つまむ
25-2	32	SD02	甕（弥生）	口径（22.6cm）	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	1～3mm程度の砂粒を多く含む	良好	浅黄橙色	口縁部は上方に拡張 2条の凹線
25-3	32	SD02	?（弥生?）	最大径18.2cm	外面:強いヨコナデ、ナデ 内面:ナデ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	軟質	外面:黄橙色 内面:浅黄橙色	若干段状になっている
25-4	32	SD02	甕?（弥生）	底径（4.8cm）	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	浅黄橙色	
25-5	32	SD02	甕?（弥生）	底径（5.8cm）	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	黄橙色	底部内面に指頭圧痕?
25-6	32	SD02	高坏（弥生）	底径（10.8cm）	外面:ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄橙色	外面赤色顔料塗彩か

第5表　1区　SI06・SD02出土遺物観察表（2）

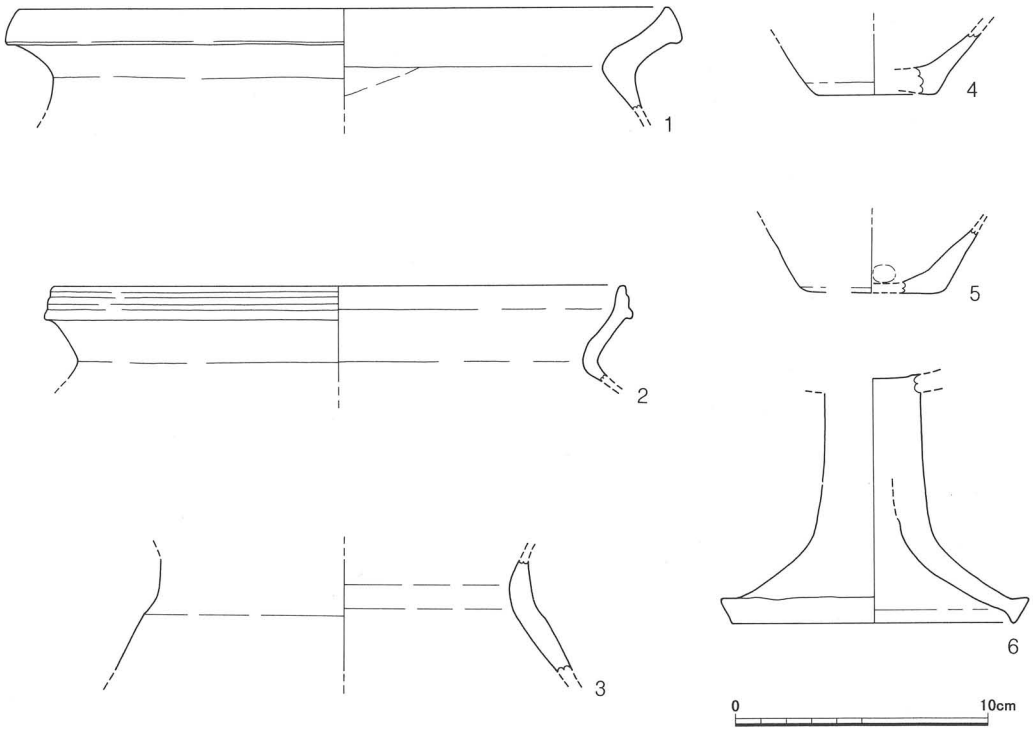
挿図番号	写真図版	出土地点	品　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　考
24-4	31	SI06（床面）	鉄製錐?（鉄器）	3.5			
24-5	31	SI06（床面）	磨石（石器）	11.1	12.2	4.8	

第6表　1区　SI06　石　計測表

写真図版	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（kg）	備　考
32	36.5	27.0	5.5	8.5	中央部に焼けた面有り
32	26.5	13.0	9.5	7.7	中央下部に焼けた面有り
32	24.5	15.0	11.0	6.8	



第24図　SI06出土遺物実測図（S＝1/3、4はS＝1/1）



第25図　SD02出土遺物実測図（S＝1/3）

[奈良～平安時代にかけての遺構]

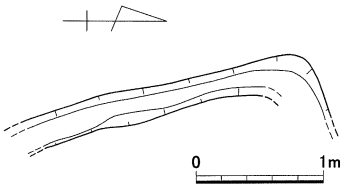
奈良時代～平安時代にかけての遺構は6基確認した。すべてが標高約20～22m付近に位置している。調査段階では竪穴の遺構としているが、加工段と捉えた方が適していると考えらる遺構である。

SI02（第26図）

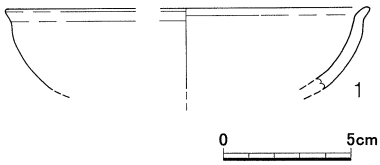
（立地）尾根からの急斜面が緩やかになったところ、標高21m付近に位置している。

（規模・形態）残存していたのはわずかな部分でその全容は不明であるが、北側のコーナーがほぼ直角に曲がっており、方形のプランであったことが推測される。床面ではピット等は確認していない。

（出土遺物）（第27図、第7表）遺物は覆土中より須恵器1点を確認したのみである。



第26図　SI02実測図（S＝1/60）



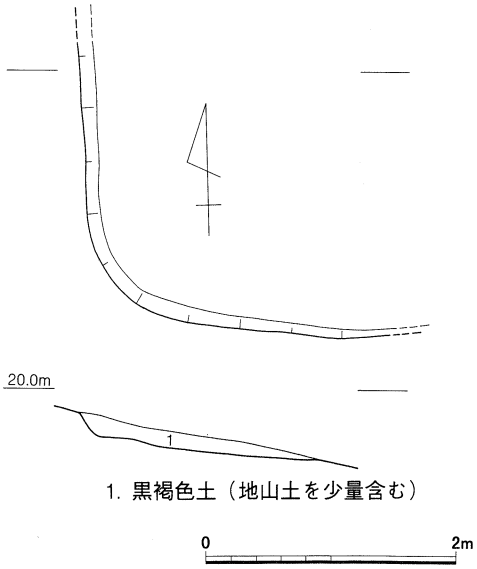
第27図　SI02出土遺物実測図（S＝1/3）

SI03（第28図）

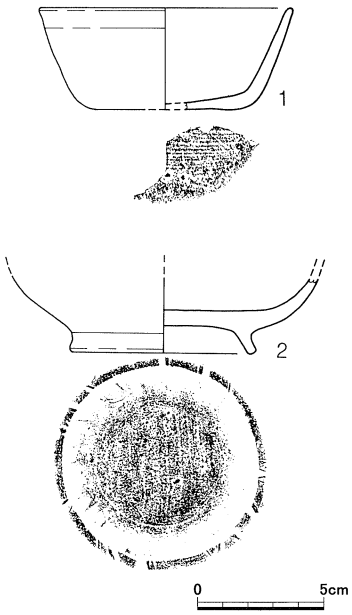
（立地）SI02より東に4mほど行ったところ、標高20mに位置する遺構である。

（規模・形態）SI02と同様に残存していたのはわずかでありその全容は不明であるが、南西側がほぼ直角に曲がっており、同じく方形プランであったと思われる。

床面からピット等は確認されなかった。



第28図　SI03実測図（S＝1/60）



第29図　SI03出土遺物実測図（S＝1/3）

第7表　1区　SI02・SI03出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
27-1		SI02	坏（須恵器）	口径(4.6cm)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm以下の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元 口縁部わずかに外反
28-1	33	SI03	坏（須恵器）	口径(10.2cm) 器高 4.0cm	外面:回転ナデ、糸切り(静止) 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径反転復元 体部は直線的に開く
28-2	33	SI03	高台付坏（須恵器）	底径 7.0cm	外面:回転ナデ、糸切り(静止) 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	体部は丸みを帯びる

（出土遺物）（第29図、第７表）遺物は覆土中より須恵器の坏が２点出土している。どちらも底部は糸切り痕が認められる。

SI04（第30図）

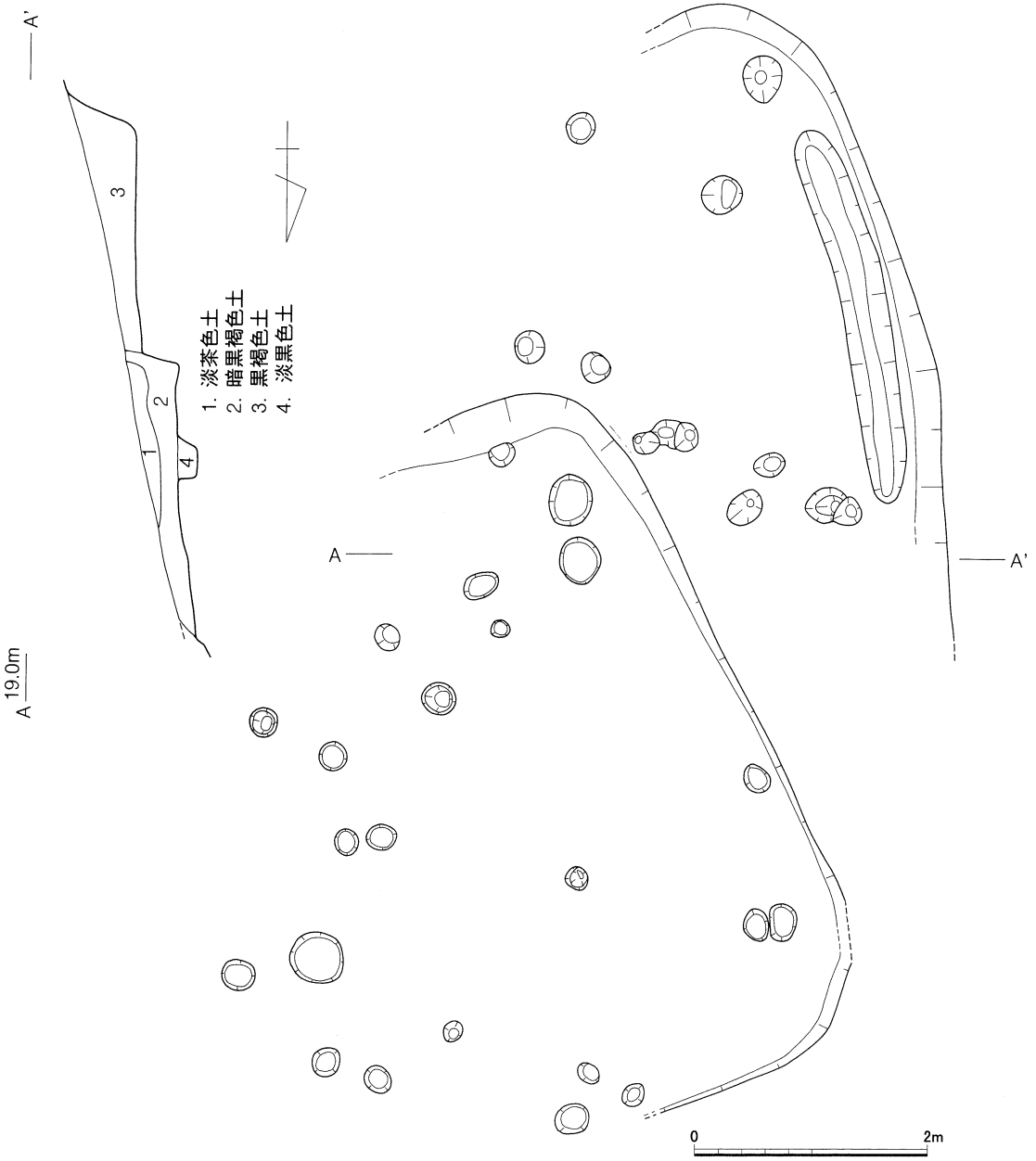
（立地）調査区東側の平坦地、標高19m付近に位置している。

（規模・形態）本遺構も上部が削平されているうえに後述するSI05に切られており、その全容は不明である。現存する部分の長さは南北方向で4.5mを測り、その形態から平面形は方形を呈するものと思われる。

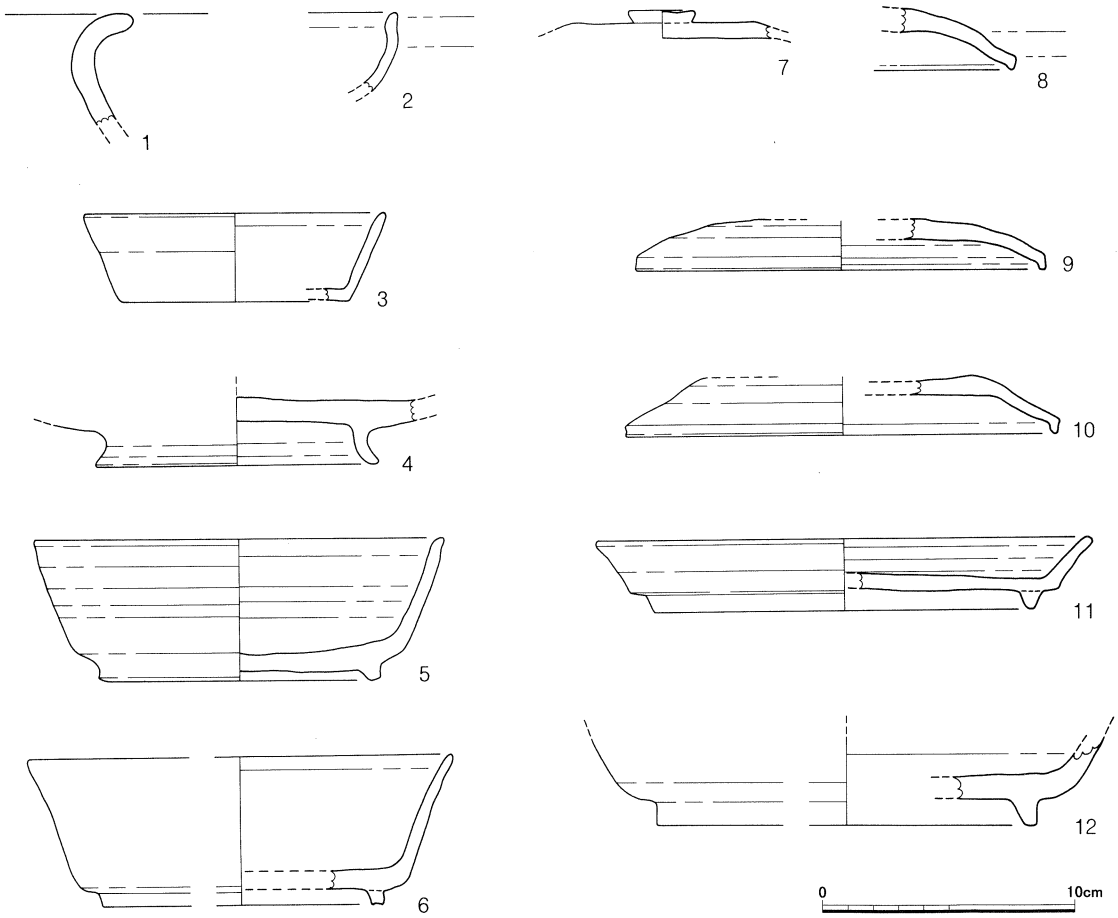
床面ではピットを多数確認したが、規則性は認められなかった。またほとんどのピットは掘りが浅いものであり柱穴に相当すると考えられるものではなかった。

壁際の一部にはわずかに溝が掘り込まれていた。壁際全体には廻らされていなかったと思われる。

（出土遺物）（第31図、第８表）出土遺物は第31図に掲載したもので覆土中からの出土している。詳



第30図　SI04・SI05実測図（S＝1/60）



第31図　SI04出土遺物実測図（S＝1/3）

細は第８表に記載した。ほとんどが須恵器で、蓋、坏、皿などがある。坏や皿などは体部が直線的に開くタイプのものである。

SI05（第30図）

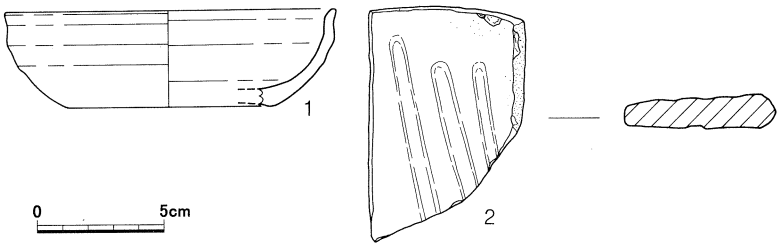
（立地）SI04の北東側すぐのところに位置している。標高は18mを測る。

（規模・形態）確認できたのは一部で、西側の部分のみである。検出段階での南北方向の辺の長さはおよそ5.5mを測る。形態は方形プランを基調としているものと考えられる。

床面ではピットを多数確認している。柱穴に相当すると考えられるものもあるが規則的な配置状況ではなく、はっきりしない。

（出土遺物）（第32図、第８・９表）出土遺物は第32図に掲載したものである。須恵器の坏のほかに砥石が出土している。

なお、このあたり一帯からは包含層中より多数の須恵器が出土している。それらについては遺構に伴わない遺物として掲載した。



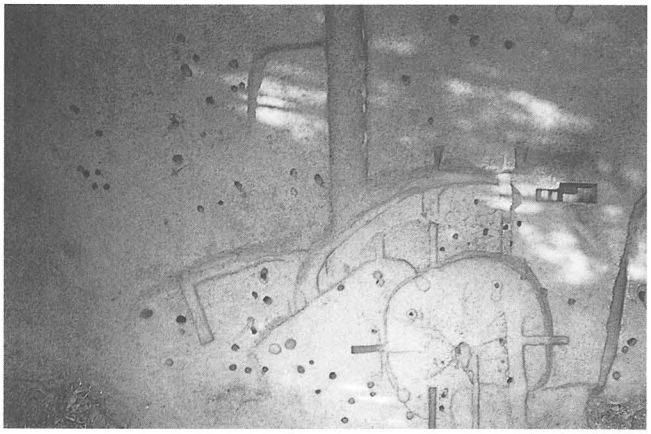
第32図　SI05出土遺物実測図（S＝1/3）

第8表　1区　SI04・SI05出土遺物観察表（1）

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量（cm）	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
31-1	33	SI04	甕 （土師器）		外面:ヨコナデ 内面:	1～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡黄白色	表面風化
31-2	33	SI04	坏 （須恵器）		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
31-3		SI04	坏 （須恵器）	口径（11.6cm） 器高3.5cm	外面:回転ナデ、糸切り? 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径推定復元
31-4	33	SI04	皿? （須恵器）	底径（11.2cm）	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径反転復元
31-5	33	SI04	高台付坏 （須恵器）	口径（16.1cm） 器高5.6cm 底径10.4cm	外面:回転ナデ、ナデ、 底部糸切り?ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
31-6		SI04	高台付坏 （須恵器）	口径（16.7cm） 器高5.7cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良	青灰色	
31-7	33	SI04	蓋 （須恵器?）		外面:回転ナデ 内面:ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡白橙色	口径反転復元 須恵器の焼成不良か?
31-8	33	SI04	蓋 （須恵器）		外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
31-9	33	SI04	蓋 （須恵器）	口径（16.2cm）	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	口径反転復元
31-10		SI04	蓋 （須恵器）	口径（17.0cm） 器高2.3cm	外面:回転ナデ、 ヘラケズリ後回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良	青灰色	口径反転復元 口縁部一部欠損
31-11	33	SI04	高台付皿 （須恵器）	口径（19.4cm） 器高2.85cm 底径15.0cm	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良	淡白灰色	口径反転復元
31-12		SI04	高台付皿 （須恵器）	底径（15.0cm）	外面:回転ナデ、 回転糸切り? 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	表面風化 口径反転復元
31-13		SI05	坏 （須恵器）	口径（13.2cm） 器高3.8cm	外面:回転ナデ、糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒	良好	灰白色	口径推定復元

第9表　1区　SI05出土遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版	出土地点	器　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　　考
32-2	33	SI05	砥石 （石器）	（9.1cm）	7.0cm	1.2cm	3条の筋が見られる



1区　SI03～SI06

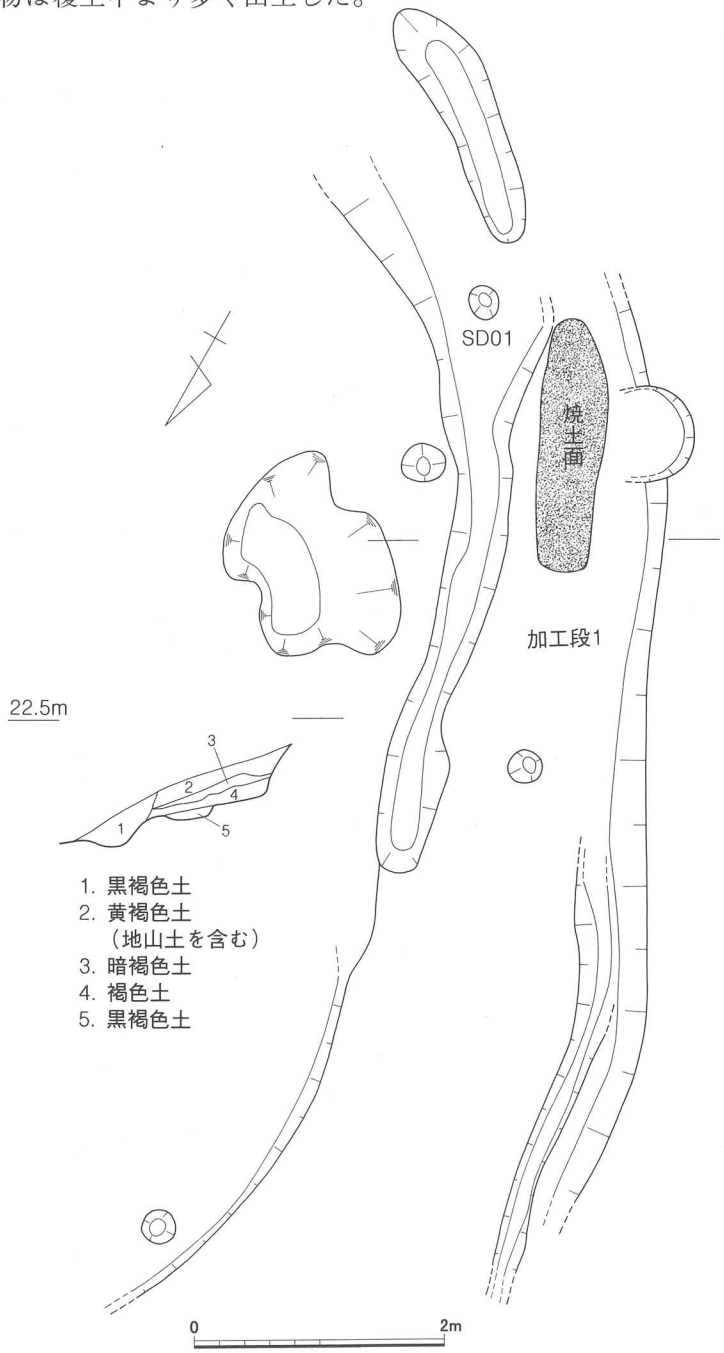
加工段１、SD01（第33図）

（立地）調査区の中央より南側、急斜面から緩斜面への変換点付近、標高およそ22mのところに位置している。

（規模・形態）加工段１は斜面を深さ約30～40㎝程度南北方向に掘り込んでつくられている。規模は残存している部分で長さおよそ７ｍを測る。床面は盛土をしてつくりだしたものと考えられるが、流出しているほか、後世に掘られた溝（SD01）により残存状況が良くないため明らかにできなかった。また床面ではピットは確認されなかったものの南側の部分では焼土面を検出した。

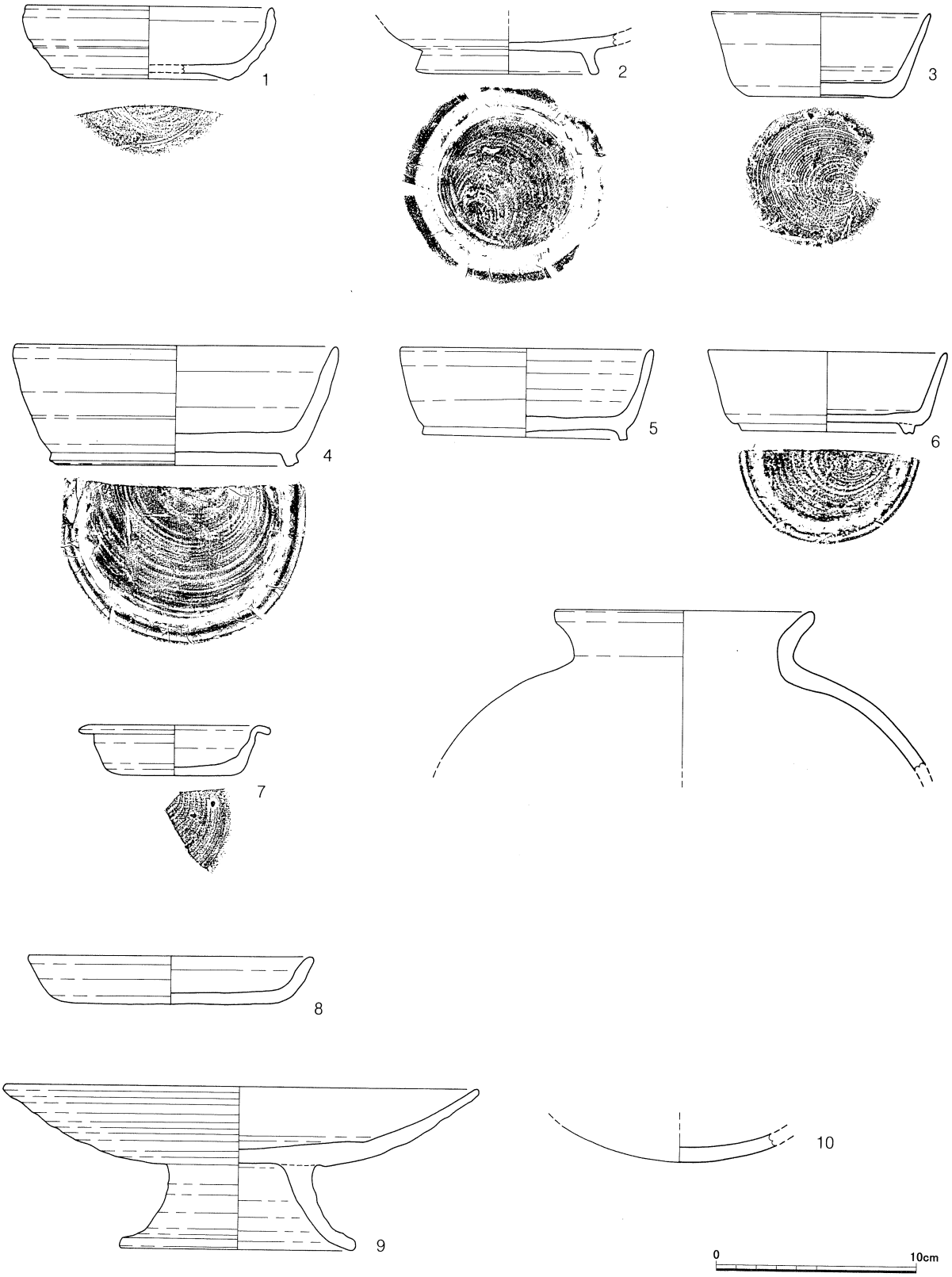
SD01は加工段１のすぐ東側に位置する。南側の状況がはっきりしないが、残存している部分で長さ約５ｍ、幅0.5ｍ、深さ20～30㎝のものである。

（遺物出土状況）遺物は覆土中より多く出土した。

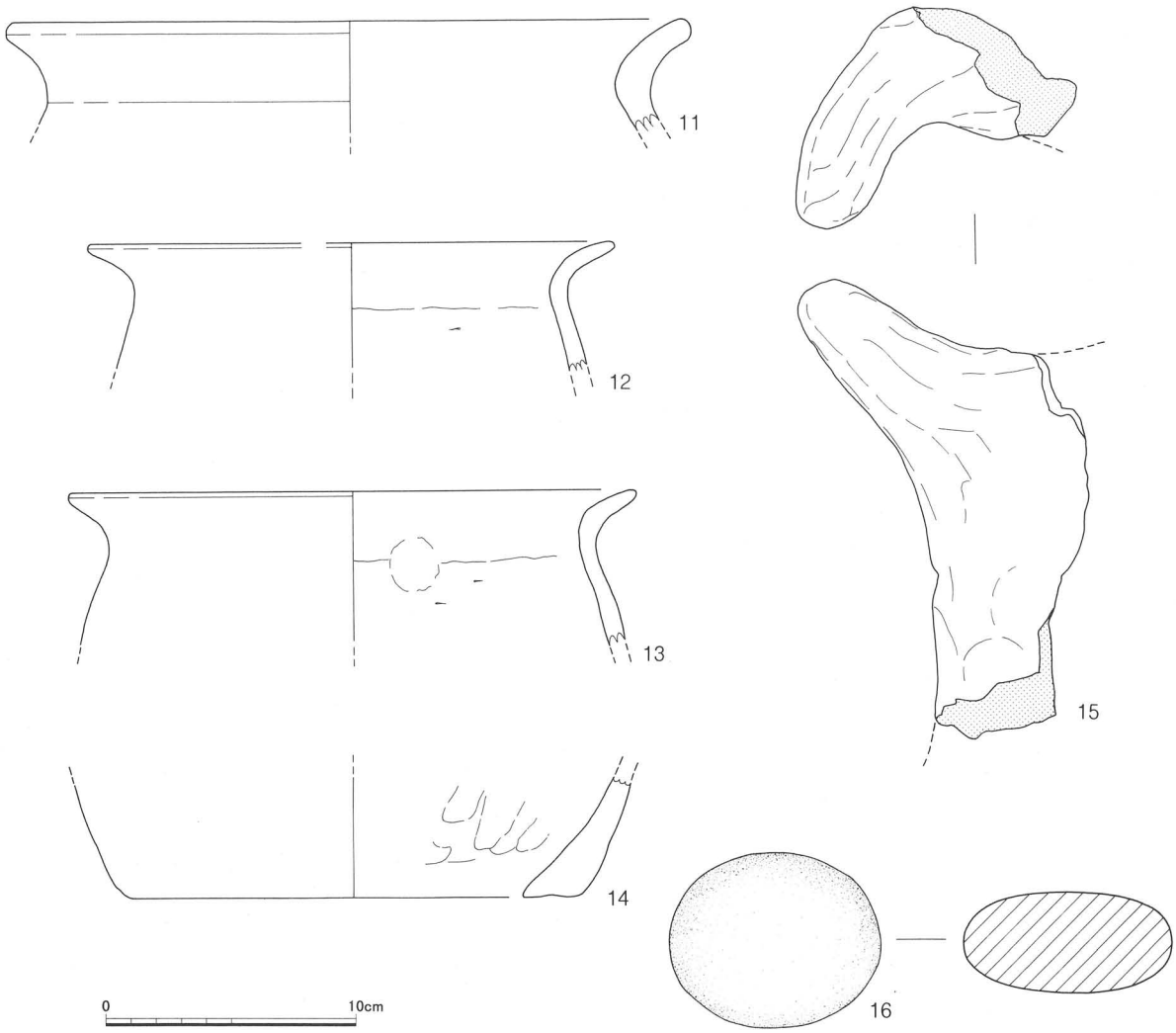


第33図　加工段1、SD01実測図（S＝1/60）

（出土遺物）（第34・35図、第10・11表）出土した遺物は第34・35図に掲載したものである。詳細は第10・11表に記載した。須恵器は底部に回転糸切り痕が残るものが多く見られる。坏は体部が丸みを帯びるものもみられるが直線的に開くものが多い。また１点ではあるがいわゆる灯明皿も出土した。土師器は概して残りが良くなく図示できたのはわずかである。このほか土製支脚なども出土した。



第34図　加工段1出土遺物実測図（1）（S＝1/3）



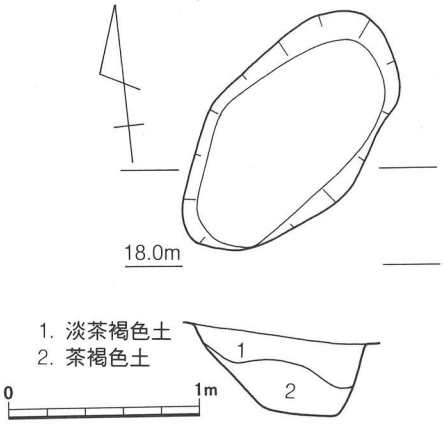
第35図　加工段1出土遺物実測図（2）（S＝1/3）

SK01

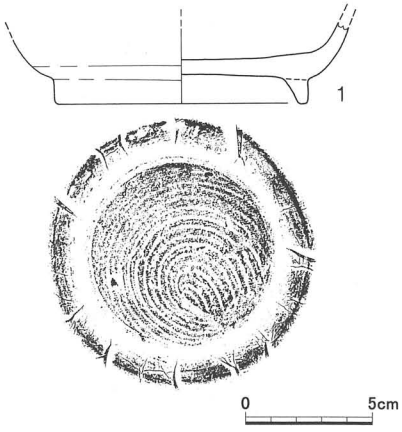
（立地）SI06から約１m北のところに位置している。

（規模・形態）平面形は楕円状を呈する土壙である。規模は長さ1.5m、幅0.9m、深さ40cmを測る。

（出土遺物）（第37図、第12表）覆土中より須恵器の坏が１点出土したのみである。



第36図　SK01実測図（S＝1/40）



第37図　SK01　出土遺物実測図（S＝1/3）

第10表　1区　加工段1　出土遺物観察表(1)

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
34-1	34	加工段1	坏 (須恵器)	口径(12.6cm) 器高3.6cm 底径8.0cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	濃青灰色～褐色	口径反転復元
34-2	34	加工段1	高台付坏	底径8.5cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡白灰色	
34-3	34	加工段1	坏 (須恵器)	口径(11.0cm) 器高4.2cm 底径7.2cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
34-4	34	加工段1	高台付坏 (須恵器)	口径(15.95cm) 器高4.95cm 底径10.9cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	2～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄灰色	
34-5	34	加工段1	(須恵器)	口径(12.6cm) 器高4.5cm 底径9.4cm	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	外面:茶褐色 内面:赤紫褐色	口径反転復元
34-6	34	加工段1	高台付坏 (須恵器)	口径(12.0cm) 器高4.0cm 底径10.6cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒・雲母を含む	良好	外面:褐灰色 内面:灰色	高台に圧痕が残る
34-7	34	加工段1	皿 (須恵器)	口径(9.6cm) 器高2.5cm 底径6.8cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:強い回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	灯明皿か?
34-8	34	加工段1	皿 (須恵器)	口径(14.1cm) 器高2.4cm	外面:回転ナデ、ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡灰色	口径反転復元 やや摩滅
34-9	34	加工段1	低脚坏 (須恵器)	口径(23.8cm) 器高8.1cm 底径11.8cm	外面:回転ヘラケズリ、回転ナデ 内面:回転ナデ	1～5mmの砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径推定復元
34-10		加工段1	横瓶 (須恵器)	口径(12.8cm)	外面:回転ナデ、 雑な平行タタキ後ナデ 内面:あて具痕	1～4mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色～褐色	
34-11	34	加工段1	甕 (土師器)	口径(26.7cm)	外面:ナデ 内面:ナデ	2～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄色	全体的に摩滅
34-12	34	加工段1	甕 (土師器)	口径(20.8cm)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	2～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙色	口径推定復元
34-13	34	加工段1	甕 (土師器)	口径(22.8cm)	外面:ヨコナデ?、ハケメ? 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙色	全体的に摩滅
34-14		加工段1	?	口径(17.6cm)	外面:ナデ? 内面:ヘラケズリ(方向不明)、 ナデ	2～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙色	全体的に摩滅 推定復元
34-15	34	加工段1	土製支脚	器高:		2～3mm程度の砂粒を含む	良好	橙色	

第11表　1区　加工段1　出土遺物観察表(2)

挿図番号	写真図版	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
35-16		加工段1 (石器)	磨石	8.3cm	6.9cm	3.9cm	

第12表　1区　SK01 出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
37-1		SK01	高台付坏 (須恵器)	底径10.0cm	外面:回転ナデ、 回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡白灰色	

「遺構に伴わない遺物」（第38図～第42図、第13表～第14表）

１区では直接遺構に伴わない遺物が多数出土している。ほとんどが小片で図化が不可能なものも多くあったが、可能であったもののうちいくつかを掲載した。詳細については第13，14表に記載した。

第38図に掲載したものは土師器・土製支脚である。土師器はほとんどが破片であり、また表面が風化しており全体が把握できるものは少ない。

８は唯一全体が分かるものである。器高は19.0cmを測り、外面には、風化等で一部しか確認できないが、赤色顔料が塗られている。

９は土製支脚である。三股突起のもので、器高は20.0cmを測る。底部はわずかに上げ底状になっている。

第39図～第41図に掲載したものは須恵器である。須恵器も多くは破片であるが、多様な器種が見られる。時期的には８世紀代と考えられるものが多いようである。

10は底部はヘラケズリを施す坏身である。この時期のものは１区からはほとんど出土していない。

13は蓋と考えられる。つまみは認められなかった。取れてしまった可能性も否定できないが、天井部の様子からは最初から付けられていなかったものと思われる。

15～19は高台の付く坏で、いずれのものも体部はゆるやかに湾曲する。底部はナデによる調整が施されるものと、回転糸切り痕が残るものが見られる。

20～26、29、30は高台の付かない坏（椀）である。体部は丸みをもち、口縁部はわずかに外反するものや内傾するものが見られる。23～25、30では底部に回転糸切り痕が認められる。

27、28は体部が直線的に開くタイプの坏である。27は高台付きである。28は底部には回転糸切り痕が認められるほか、「由」という字が刻まれている。

31～34は皿である。小型の皿で口縁部が屈曲する、いわゆる灯明皿といわれているものである。同様のものは加工段１からも出土している。

35～37は皿である。35，36のようにゆるやかに湾曲するものや、37のように直線的に開くものもある。底部はいずれのものも回転糸切り痕が認められる。

38，39は高台の付く皿である。口縁部はわずかに外反する。底部には回転糸切り痕が認められる。

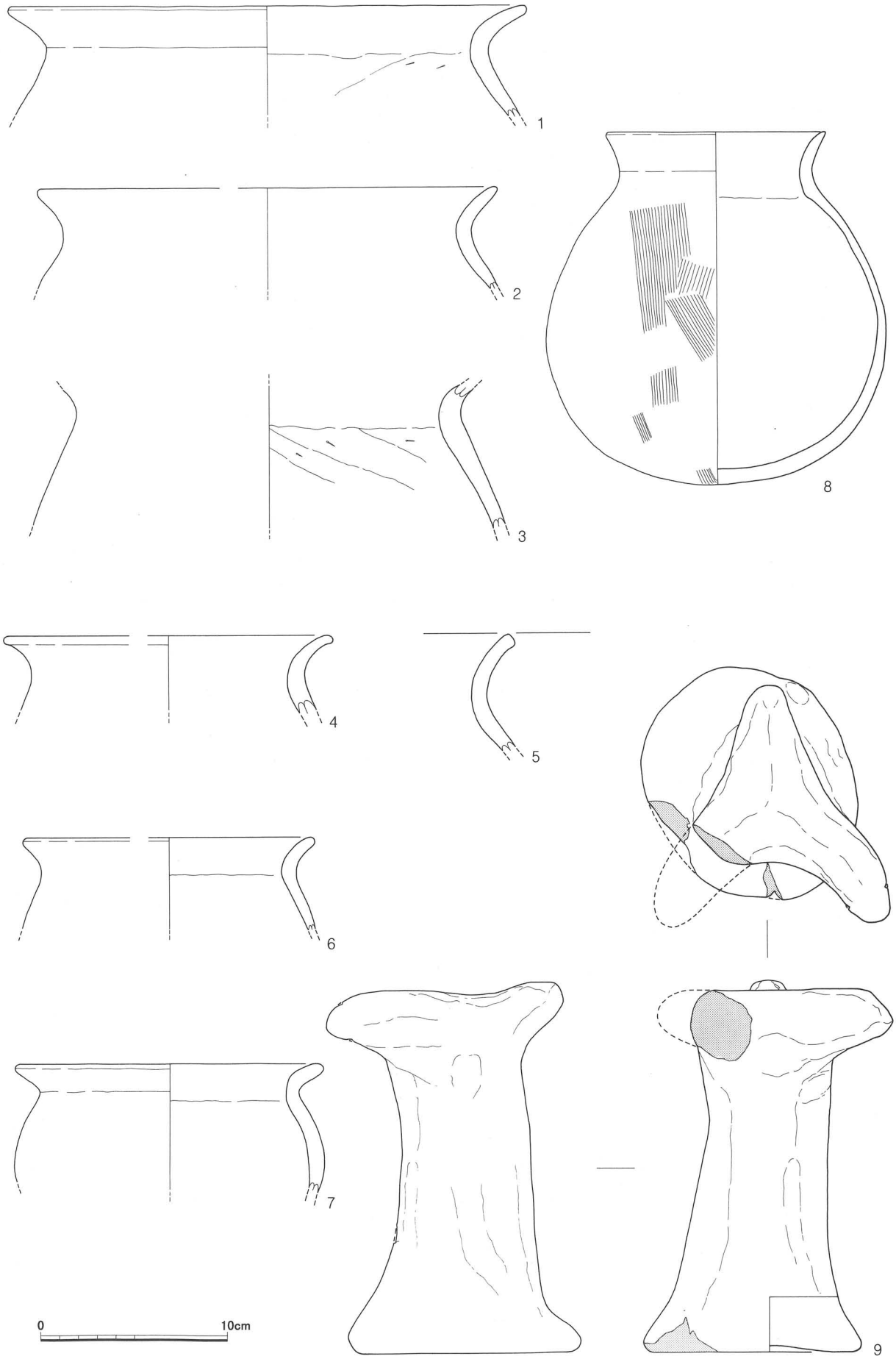
40は鉄鉢形土器の底部、41は鉢の口縁部である。また42は把手付きの甕になるものと思われる土器である。中世のものである可能性もある。

44～47は甕である。44は外面にヘラ書きの雑な波状文が施されている。47は底部と胴部の一部が欠損している。

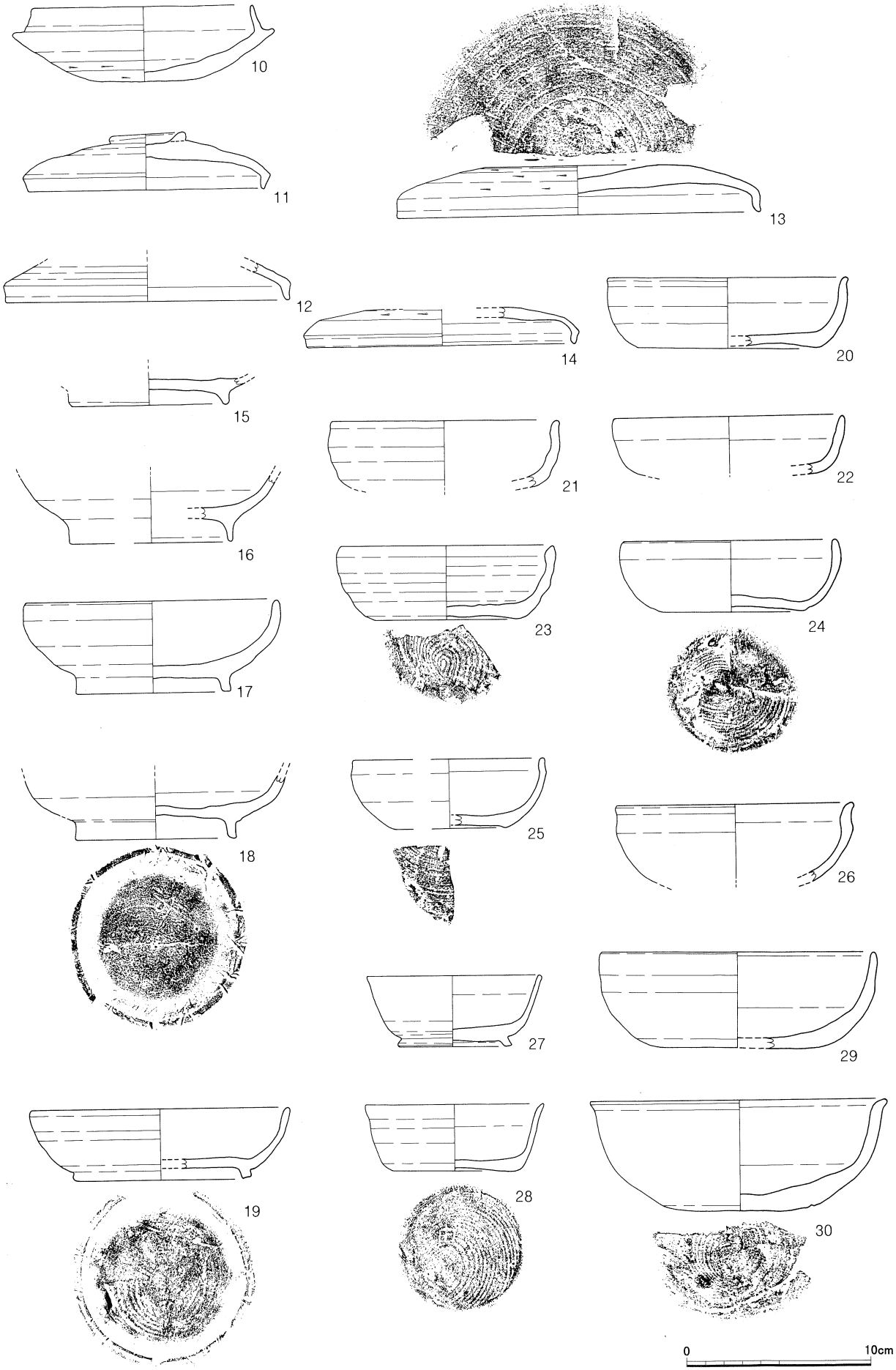
50は灰釉陶器である。内面には重ね焼きの痕跡が見られる。

第43図に掲載したものは鉄器である。53，54については器種が明らかでない。

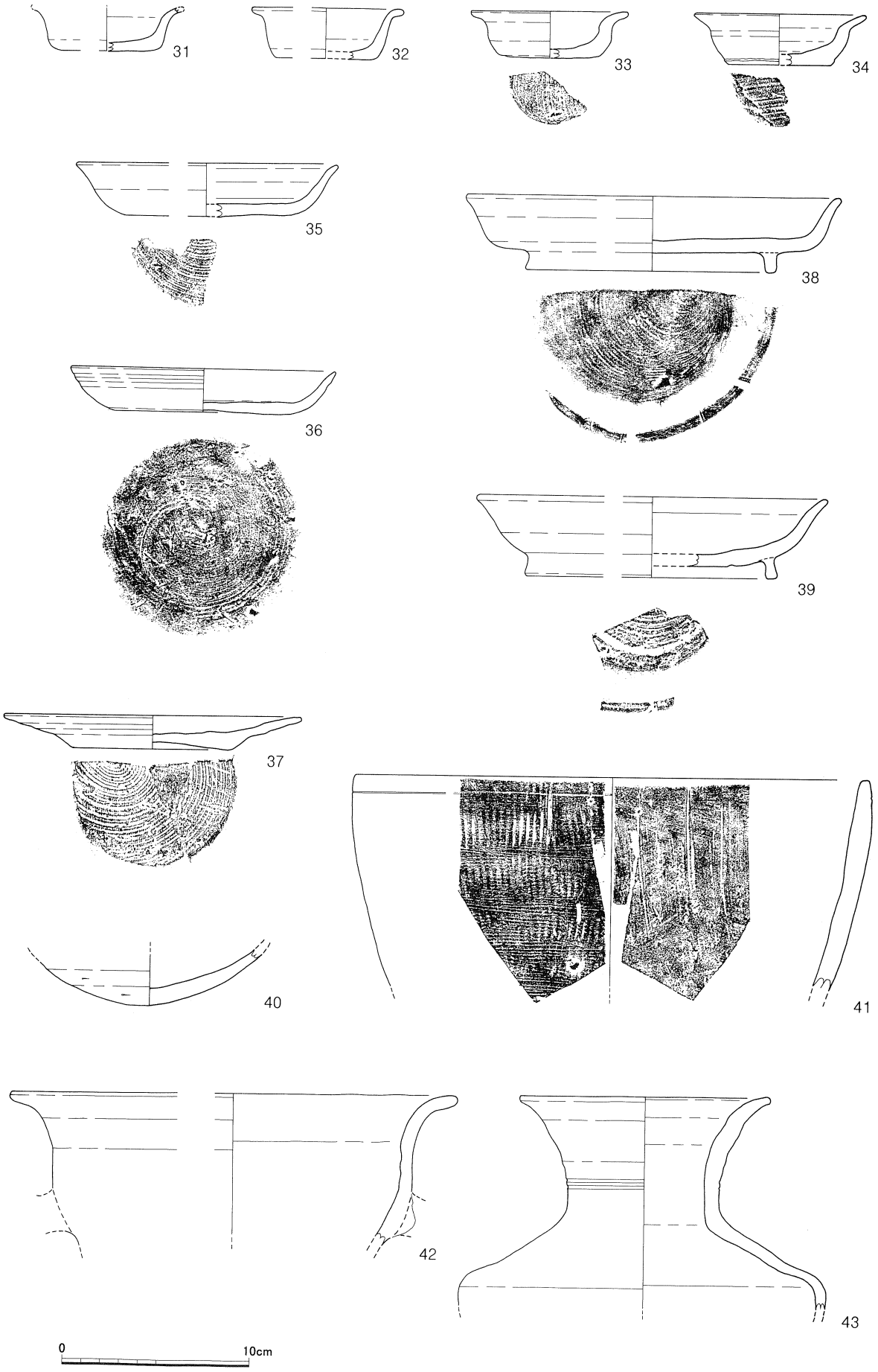
第44図に掲載したものは石器である。石斧や石鏃、磨石などがある。56の石斧は刃部が広く丸いもので基部は細く尖基となっている。



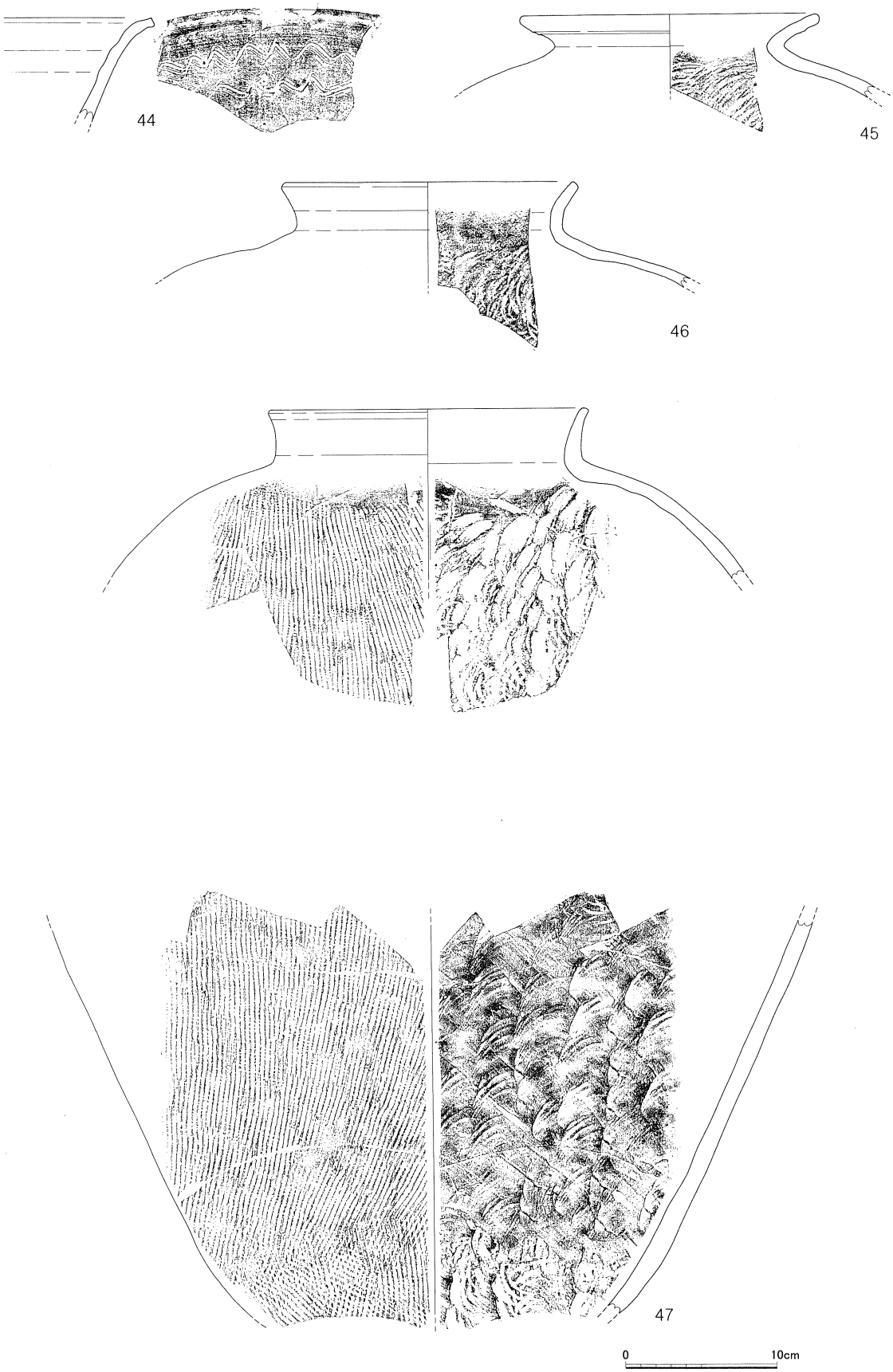
第38図　遺構に伴わない遺物実測図（1）（S＝1/3）



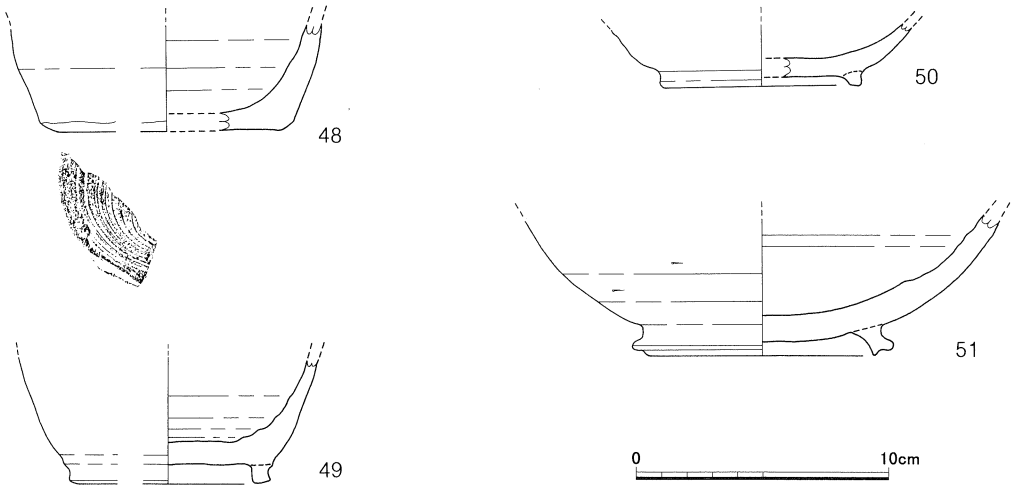
第39図　遺構に伴わない遺物実測図（2）（S＝1/3）



第40図　遺構に伴わない遺物実測図（3）（S＝1/3）



第41図　遺構に伴わない遺物実測図（4）（S＝1/4）



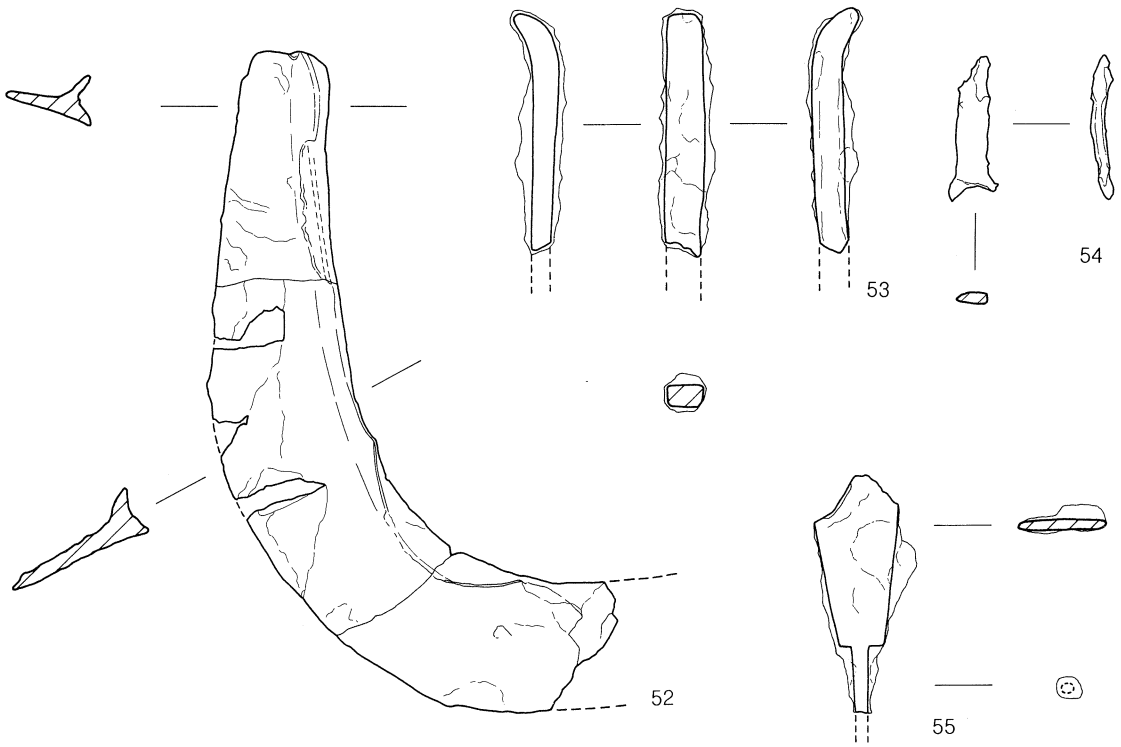
第42図　遺構に伴わない遺物実測図（5）（S＝1/3）

第13表　1区　遺構に伴わない出土遺物観察表（1）

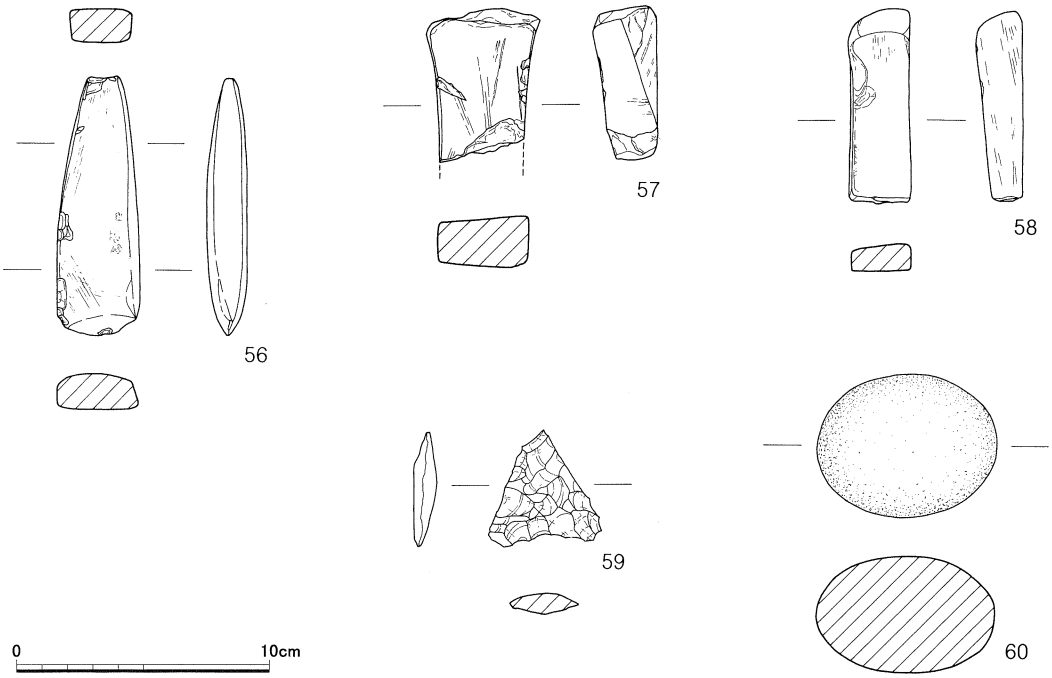
挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量（cm）	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
38-1		トレンチ70	甕（土師器）	口径（27.6cm）	外面:ヨコナデ?、ハケメ? 内面:ヨコナデ?、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡橙色～黄褐色	口径復元 全体的に摩滅
38-2		トレンチ68	甕（土師器）	口径（24.8cm）	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	口径推定復元 風化により調整不明
38-3		1区包含層	甕（土師器）		外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	（外）淡褐色 （内）茶褐色	
38-4	35	1区包含層	甕（土師器）	口径（17.8cm）	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐色	口径復元
38-5	35	1区包含層	甕（土師器）		外面:ヨコナデ 内面:　?	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡茶褐色	内面は風化により調整不明
38-6		1区包含層	甕（土師器）	口径（15.8cm）	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ?	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐色	口径復元 内面は風化により調整不明
38-7		1区包含層	壺（土師器）	口径（15.8cm）	外面:ヨコナデ? 内面:ヨコナデ?、ヘラケズリ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	摩滅により調整不明
38-8	35	トレンチ44	壺（土師器）	口径11.8cm 器高19.0cm	外面:ヨコナデ、主に縦方向のハケメ 内面:ヨコナデ、ヘラケズリ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	外面は全体に赤色塗彩
38-9	35	1区包含層	土製支脚	器高20.0cm	外面:ナデ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	褐色～淡褐色	三股突起 底部はわずかに上底
39-10	35	1区包含層	坏（須恵器）	口径（12.0cm） 器高4.1cm	外面:回転ナデ、ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径反転復元
39-11	35	トレンチ44	蓋（須恵器）	口径12.85cm 器高3.1cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	輪状つまみ
39-12		1区包含層	蓋（須恵器）	口径（15.4cm）	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-13	35	1区包含層	蓋（須恵器）	口径（19.8cm） 器高2.7	外面:回転ナデ・ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径反転復元 つまみがない
39-14	35	1区包含層	蓋（須恵器）	口径（14.4cm） 器高2.1cm	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	灰色	口径反転復元
39-15		1区包含層	高台付坏?（須恵器）	底径8.5cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	白灰色	
39-16	36	1区包含層	高台付坏（須恵器）	底径（8.7cm）	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
39-17	35	1区包含層	高台付坏（須恵器）	口径（14.0cm） 器高5.0cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
39-18		1区包含層	高台付坏(須恵器)	底径8.8cm	外面:回転ナデ、回転糸切り後ナデ? 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口縁部欠損
39-19		1区包含層	(須恵器)	口径(14.2cm) 器高3.8cm 底径9.0cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-20	35	1区包含層	坏(須恵器)	口径(12.8cm) 器高3.9cm 底径(8.0cm)	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-21		1区包含層	坏(須恵器)	口径(12.4cm)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-22		1区包含層	(高台付?)坏(須恵器)	口径(12.6cm)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡紫色?	口径反転復元
39-23	36	1区包含層	坏(須恵器)	口径(12.0cm) 器高4.0cm 底径7.8cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	暗灰色	口径反転復元
39-24	36	1区包含層	坏(須恵器)	口径(11.8cm) 器高7.2cm 底径3.7cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の白っぽい砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-25		1区包含層	坏(須恵器)	口径(10.6cm) 器高3.7cm 底径6cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm以下の白っぽい砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
39-26		1区包含層	坏(須恵器)	口径(12.8cm)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色～茶褐色	口径反転復元
39-27	36	1区包含層	高台付坏(須恵器)	口径9.4cm 器高3.85cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡灰色	
39-28	36	1区包含層	坏(須恵器)	底径5.6cm 口径9.7cm 器高3.6cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を多く含む	良好	灰白色	底部ヘラ書き「由」
39-29	36	1区包含層	坏(須恵器)	口径(14.8cm) 器高5.2cm	外面:回転ナデ、糸切り? 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	やや良好	茶褐色	口径反転復元
39-30	36	1区包含層	(須恵器)	口径(16.0cm) 器高6.0cm	外面:回転糸切り後ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡茶白灰色(一部除く)	器面に炭化物付着
40-31	37	1区包含層	皿(須恵器)	器高(2.4cm)	外面:回転ナデ、糸切り? 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	濃青灰色～淡灰色	灯明皿 風化で調整不明
40-32	37	1区包含層	皿(須恵器)	口径(8.0cm) 器高2.7cm	外面:回転ナデ、糸切り? 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	灯明皿 口径反転復元
40-33	37	1区包含層	皿(須恵器)	口径(8.2cm) 器高2.5cm 底径(5.4cm)	外面:回転ナデ、静止糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	濃青灰色	灯明皿 口径反転復元
40-34	37	1区包含層	皿(須恵器)	口径(9.2cm) 器高2.7cm 底径5.4cm	外面:回転ナデ、静止糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色～褐色	灯明皿 口径反転復元
40-35		1区包含層	皿(須恵器)	口径(14.1cm) 器高2.8cm 底径(8.8cm)	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
40-36	37	1区包含層	皿(須恵器)	口径14.2cm 器高2.3cm 底径10.0cm	外面:回転ナデ、回転糸切り後簡単なナデ 内面:回転ナデ	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	
40-37	37	1区包含層	皿(須恵器)	口径(15.8cm) 器高1.8cm 底径(8.4cm)	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	口径反転復元
40-38	37	1区包含層	高台付皿(須恵器)	口径(20.0cm) 器高3.7cm 底径(12.4cm)	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ	1mm度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
40-39	37	1区包含層	高台付皿(須恵器)	口径(19.7cm) 器高4.0cm 底径13.0cm	外面:回転ナデ、回転糸切り 内面:回転ナデ、ナデ	1mm度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径反転復元
40-40	37	1区包含層	鉢(須恵器)		外面:ヘラケズリ 内面:回転ナデ、ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	
40-41	37	1区包含層	鉢?(須恵器)	口径(37.4cm)	外面:ナデ、沈線(ヘラ書き)、タタキ後カキメ 内面:ナデ後ケズリ?	1～2mm程度の砂粒を含む	良好	青灰色	

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
40-42	37	1区 包含層	甑? (須恵器)		外面:回転ナデ、把手痕? 内面:回転ナデ	1mm程度の 砂粒を含む	良好	青灰色～褐色	口径推定復元
40-43	38	1区 包含層	壺(長頸壺?) (須恵器)	口径(13.4cm)	外面:回転ナデ、2条の沈線 内面:回転ナデ	1～2mm程度の 砂粒を多く含む	良好	淡青灰色	口径反転復元 口縁部外反
41-44	38	1区 包含層	甕 (須恵器)		外面:回転ナデ、波状文 内面:回転ナデ	1～4mm程度の 砂粒を含む	良好	青灰色	ヘラ書きの雑な波状文
41-45	38	1区 包含層	甕 (須恵器)	口径(19.3cm)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ、叩き痕	1mm程度の 砂粒を含む	良好	淡青灰色	内外面供に自然釉がかかる
41-46	38	1区 包含層	甕 (須恵器)	口径(19.0cm)	外面:回転ナデ、タタキ? 内面:回転ナデ、ナデ	1～2mm程度の 砂粒を含む	良好	淡青灰色	外面に自然釉がかかる
41-47	38	1区 包含層	甕 (須恵器)	口径21.0cm	外面:回転ナデ、タタキ 内面:回転ナデ、あて具痕	1～2mm程度の 砂粒を含む	良好	淡青灰色	
42-48		1区 包含層	壺 (須恵器)		外面:回転ナデ、ナデ、 回転糸切り 内面:回転ナデ	1～2mm程度の 砂粒を含む	良好	青灰色	
42-49	38	1区 包含層	高台付坏 (須恵器)		外面:回転ナデ後ナデ、ナデ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒 を含む	良好	青灰色	
42-50	38	1区 包含層	椀? (灰釉陶器)	底径:7.8cm	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ		良好	淡黄褐色	
42-51	38	1区 包含層	壺? (　?　)	底径:9.0cm	外面:ケズリ?、ナデ? 内面:回転ナデ、回転ナデ後 ナデ		良好	茶褐色	内面の一部に自然釉



第43図　遺構に伴わない遺物実測図（6）（S＝1/2）



第44図　遺構に伴わない遺物実測図（7）（S＝1/3、59はS＝1/1）

第14表　1区　遺構に伴わない出土遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版	出土地点	品　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
43-52	39	1区包含層	鋤先?（鉄器）				
43-53	39	1区包含層	釘?（鉄器）	(6.4)	1.0	0.8	
43-54	39	1区包含層	?（鉄器）	3.7	0.8	0.3	
43-55	39	1区包含層	鉄鏃（鉄器）	(6.3)	2.2	0.2	関部は直角
44-56	39	トレンチ44	片刃石斧（石器）	10.2	3.2	1.6	
44-57	39	1区包含層	砥石（石器）	6.0		2.0	
44-58	39	1区包含層	砥石?（石器）	7.6		1.0	先の部分が欠損
44-59	39	1区包含層	石鏃（石器）	1.5	1.5	0.3	黒曜石製・平基式
44-60	39	1区包含層	磨石（石器）	5.6	7.0	4.6	

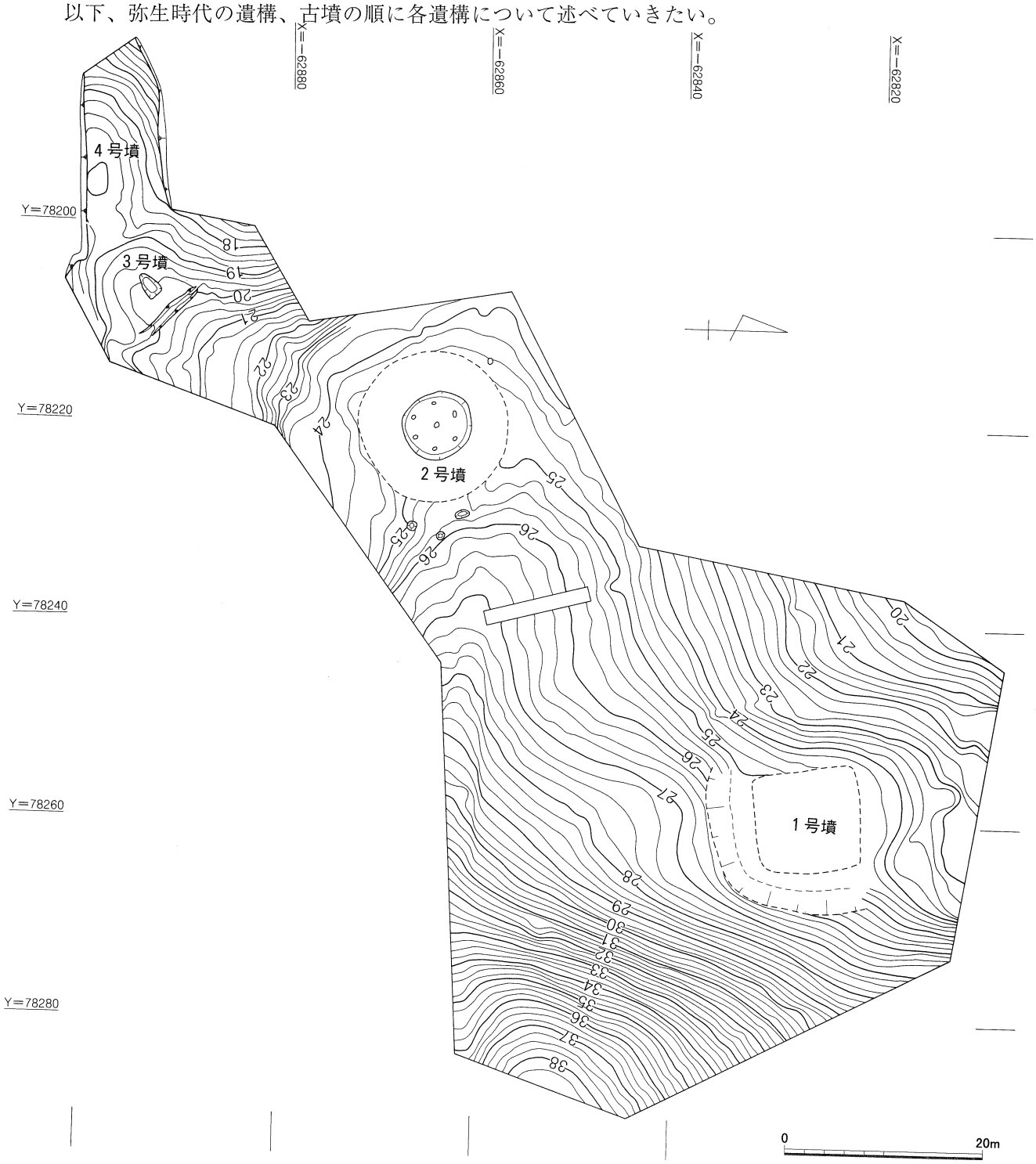
2．2区の調査

2区は1区と尾根を挟んで反対側に広がる西向きの緩斜面、標高約15m～40mのところに位置している。西隣には大堤Ⅰ遺跡のある低丘陵があり、その丘陵との間には宍道湖側に向かって伸びる小さな谷がある。

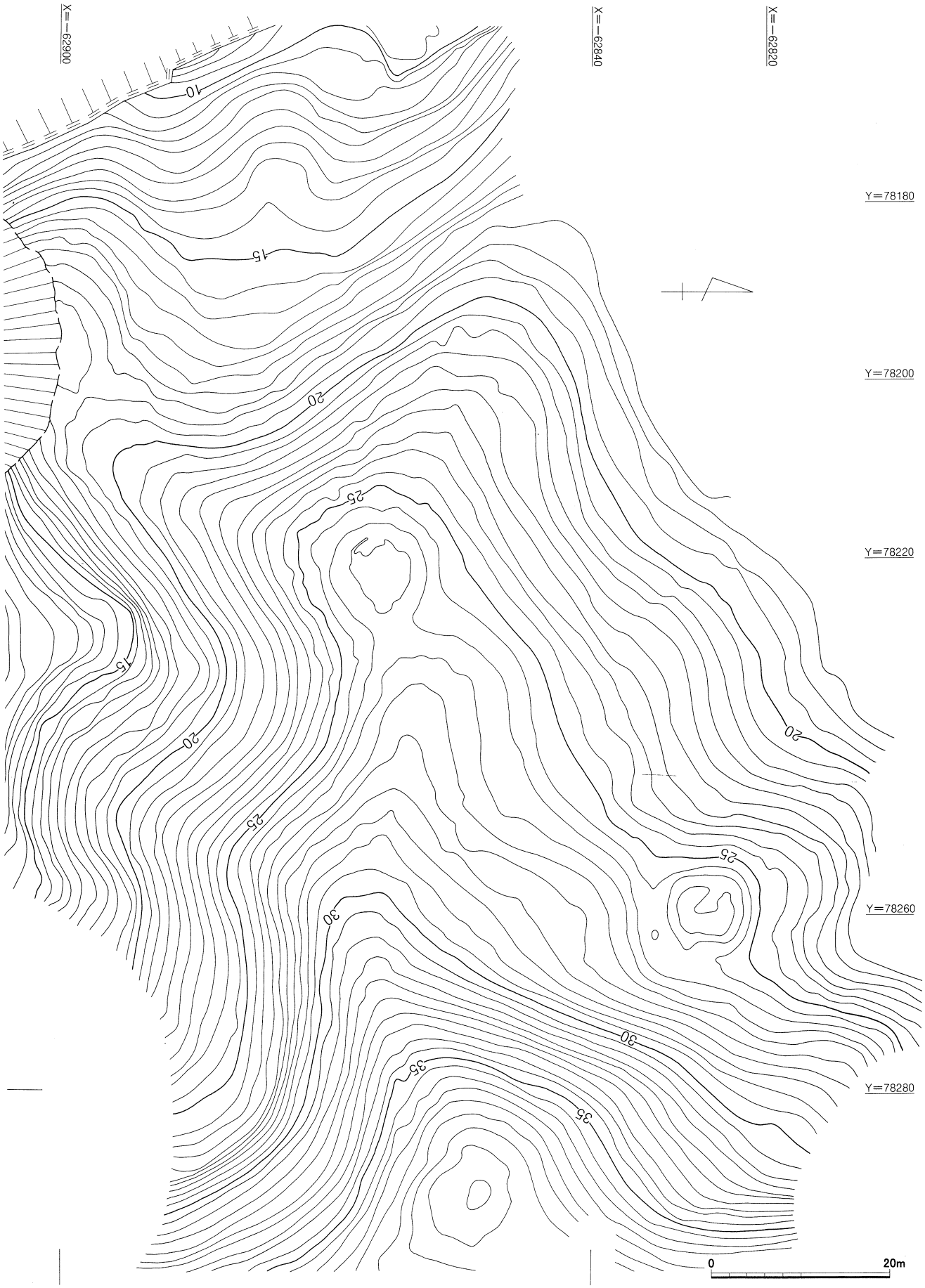
この調査区では、調査前より地形的な高まりを確認しており、数基の古墳が存在するものと思われていた。

調査の結果、古墳4基と弥生時代の遺構1基を検出した。

以下、弥生時代の遺構、古墳の順に各遺構について述べていきたい。



第45図　2区遺構配置図・地形測量図（調査後）（S=1/600）



第46図　2区地形測量図（調査前）（S＝1/600）

「弥生時代の遺構」

SI01（第47～49、55図）

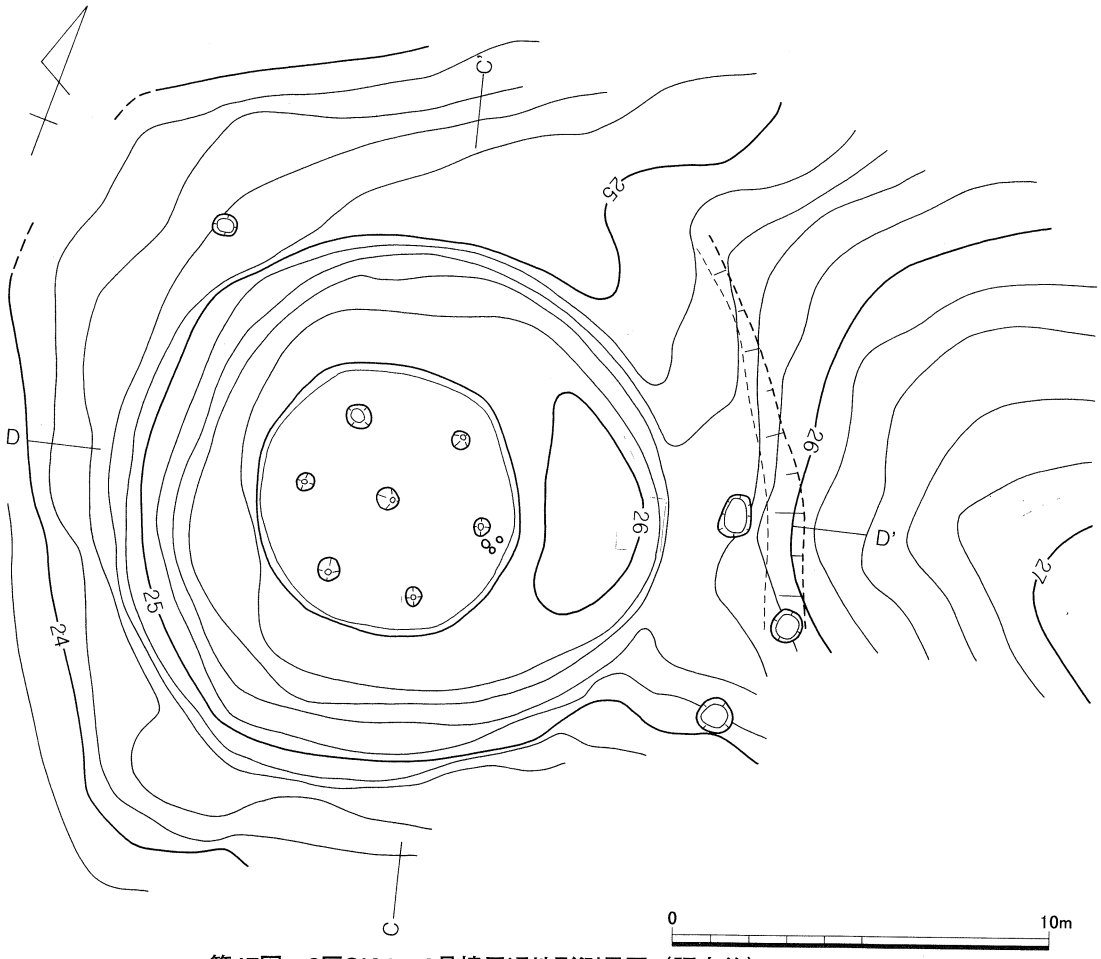
（立地） 後述する２号墳の調査中に確認した遺構でその直下に位置しており、床面での標高は25.5ｍである。西隣の谷平野を見下ろす位置にあり、水田面からの比高は約20ｍを測る。

２区及び周辺では、同様の遺構は確認されておらず、単独で存在しているようである。

（規模・形態） 古墳築造時に上面が失わている可能性はあるが、比較的残存状態の良好な遺構である。平面形は円形に近いものの隅丸六角形状を呈している。規模は床面で計測して約6.8ｍ、最大で7.0ｍを測る比較的大型のものである。また、壁はほぼ垂直に掘り込まれ、現状での高さは約50㎝を測る。壁際には幅約10㎝、深さ約５㎝の壁体溝が巡らされていた。ただし西側の一部で途切れており全周はしていない。

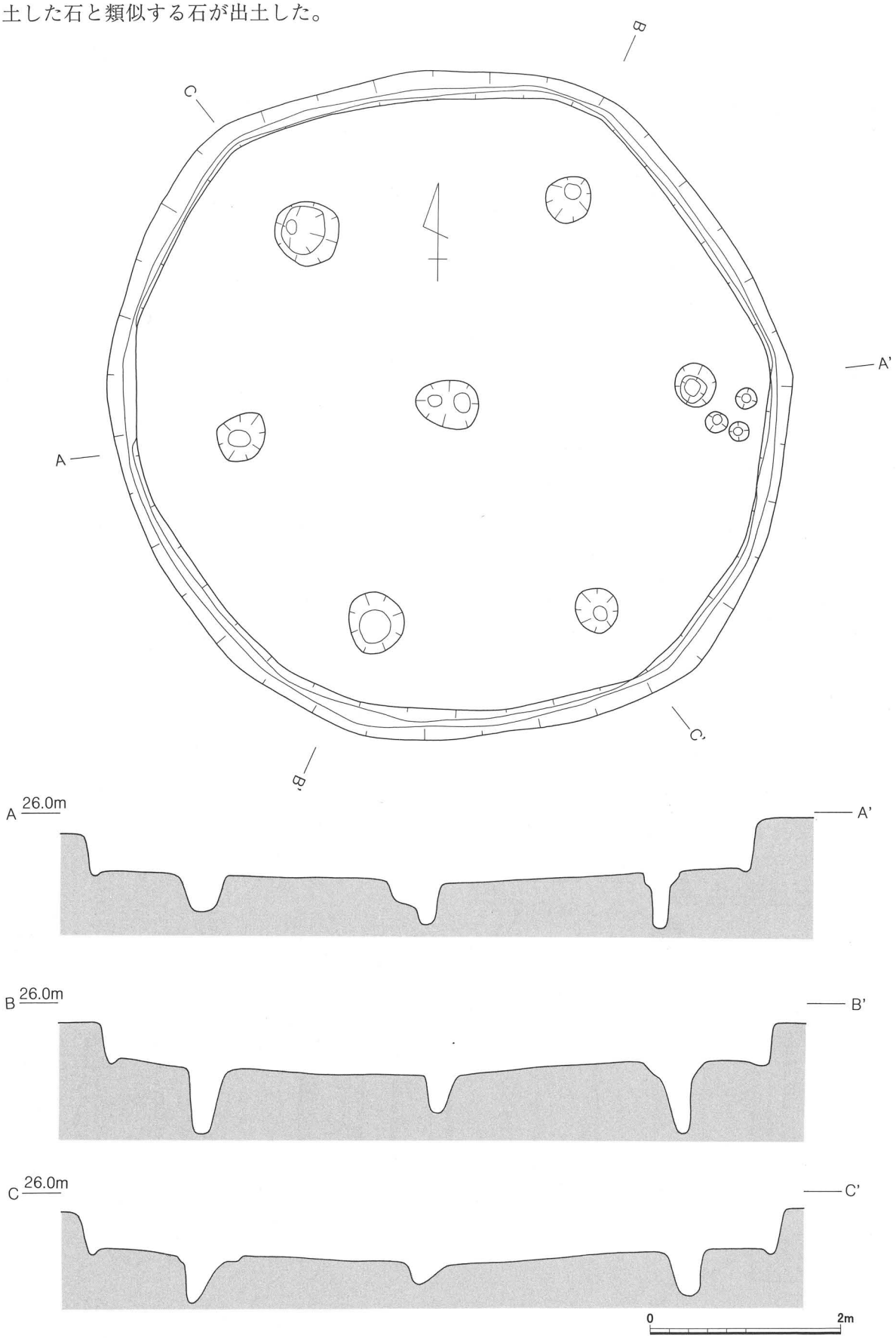
床面ではピットを10基検出した。これらのピットの内、それぞれの角に対応する６基のピットは、その規模が径約50㎝、深さ50㎝～70㎝を測るしっかりとしたものでり、この建物の柱穴に相当すると考えられる。また、東側ではまとまって３基の小規模なピットが検出されたが、その性格は不明である。床面中央付近にあるピットは、柱穴であった可能性も否定できないものの、覆土中にわずかながら炭を含んでいたことから炉（中央ピット）と考えらる。

覆土は黄色系の土と若干の炭化物を含む黒色系の土が交互に堆積している状況が認められた。このような事例は、安来市の門生黒谷Ⅲ遺跡や岩屋口北遺跡において報告されており、本遺構もそうした事例に類似しているものと思われる。(註１)



第47図　2区SI01・2号墳周辺地形測量図（調査後）（S＝1/200）

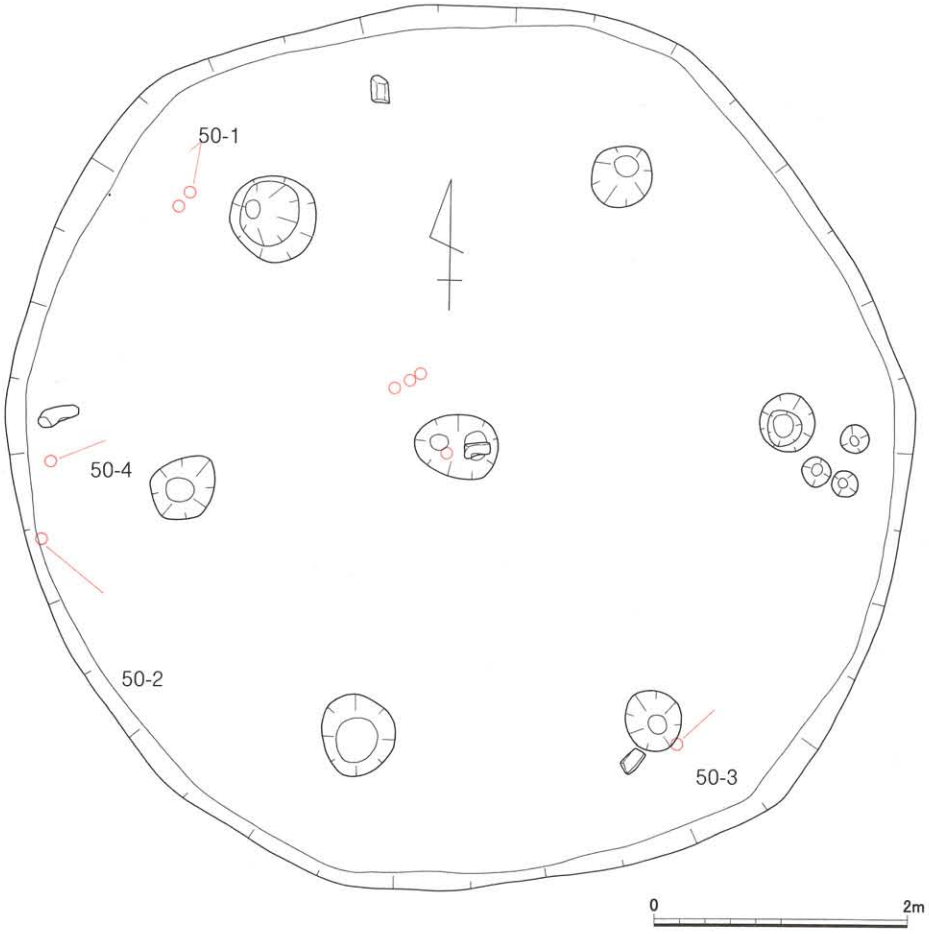
（遺物出土状況）（第49図）出土遺物は少なく、北西側の壁に近い部分の床面から土器片が出土したほか、中央ピットと西壁付近から砥石が出土したにすぎない。また４か所から１区SI06において出土した石と類似する石が出土した。



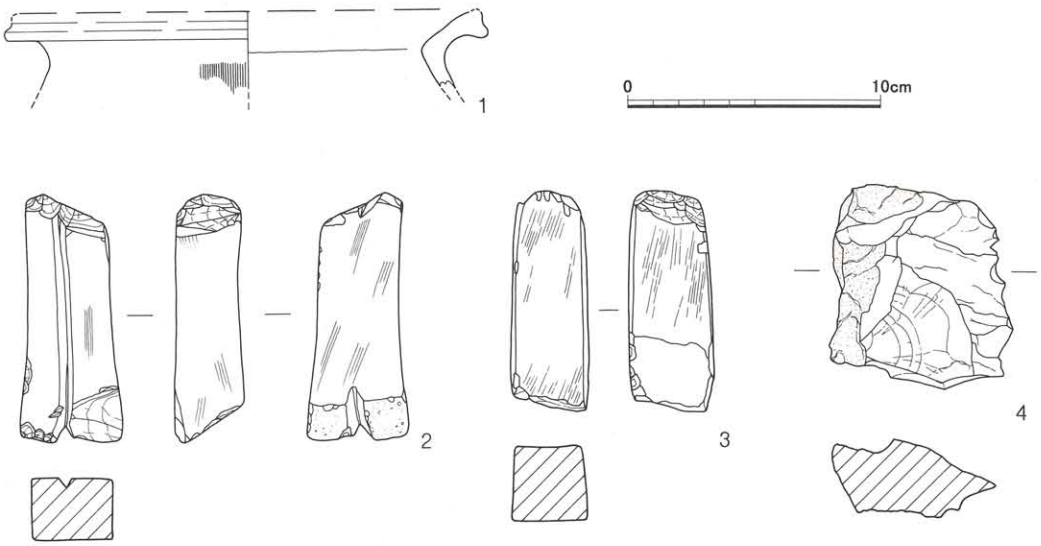
第48図　2区SI01実測図（1）（S＝1/60）

（出土遺物）（第50図、第15～17表）出土した遺物は第50図に掲載したものである。詳細については第15・16表に記載した。２は砥石である。表面にはＶ字形の溝が形成されているが、これは鉄製品などによる研磨の結果と思われる。なお石については第17表に計測値を載せている。

（時期）床面から出土した１から判断して、弥生時代後期前半頃のものと考えられる。(註２)



第49図　2区SI01実測図（2）遺物出土状況（S＝1/60）



第50図　2区SI01出土遺物実測図（S＝1/3）

第15表　2区　SI01出土遺物観察表（1）

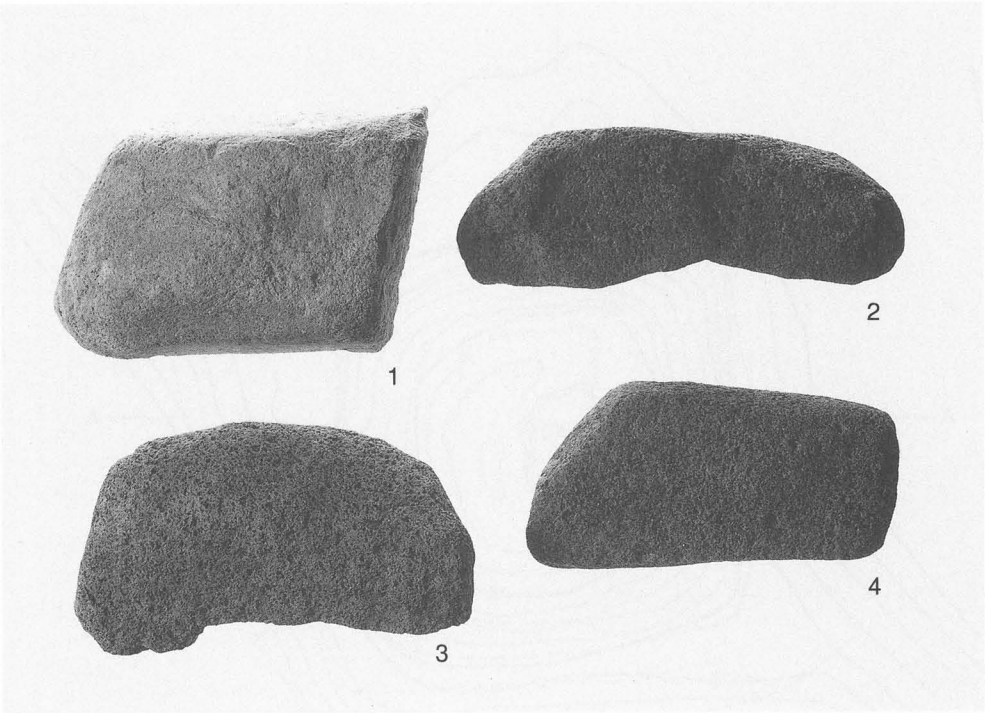
挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量（cm）	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
50-1	41	SI01	甕（弥生）	口径（18.4cm）	外面:ヨコナデ、ハケメ、凹線文（一条）？ 内面:ヨコナデ?	2～4mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	口径反転復元 風化のため調整不明瞭

第16表　2区　SI01出土遺物観察表（2）

挿図番号	写真図版	出土地点	品　種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　　考
50-2	41	SI01	砥石	9.8	4.0	2.7	鉄製品などの研磨によると考えられるV字型の溝
50-3	41	SI01	砥石	8.7	3.2	3.0	柔らかい石材
50-4	41	SI01	石材	7.5	7.0	(2.9)	

第17表　2区　SI01　出土石　計測表

番号	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（kg）	備　　考
1	17.0	13.0	7.5	3.0	
2	20.5	10.5	7.5	1.9	
3	22.0	7.5	5.5	1.6	
4	17.5	8.5	5.0	1.6	



［古墳］

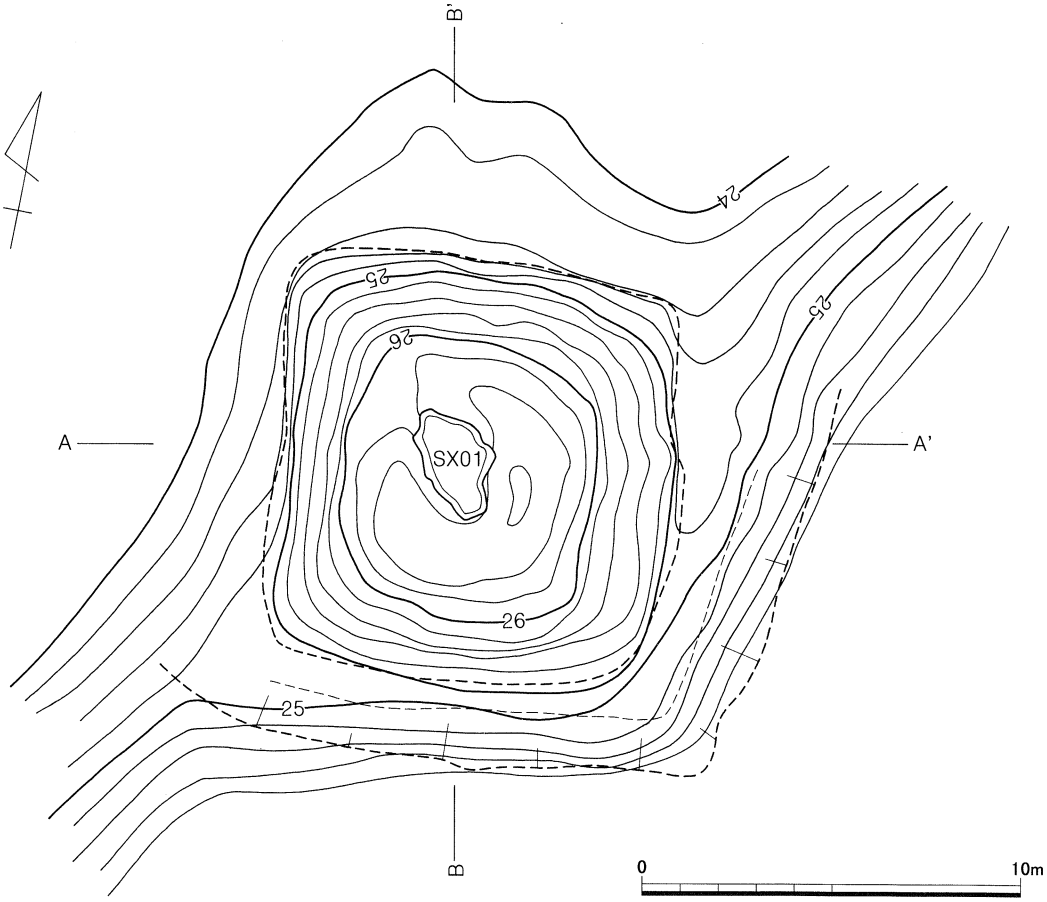
1号墳（第51・52図、第55図）

（立地） 丘陵尾根からの急な斜面が緩斜面に変わる変換点付近に、斜面側に寄せて造られている。標高はおよそ25mを測るが、この丘陵にむかって入る小さな谷筋に面した所に築かれており、見晴らしが良いとは言えない位置にある。

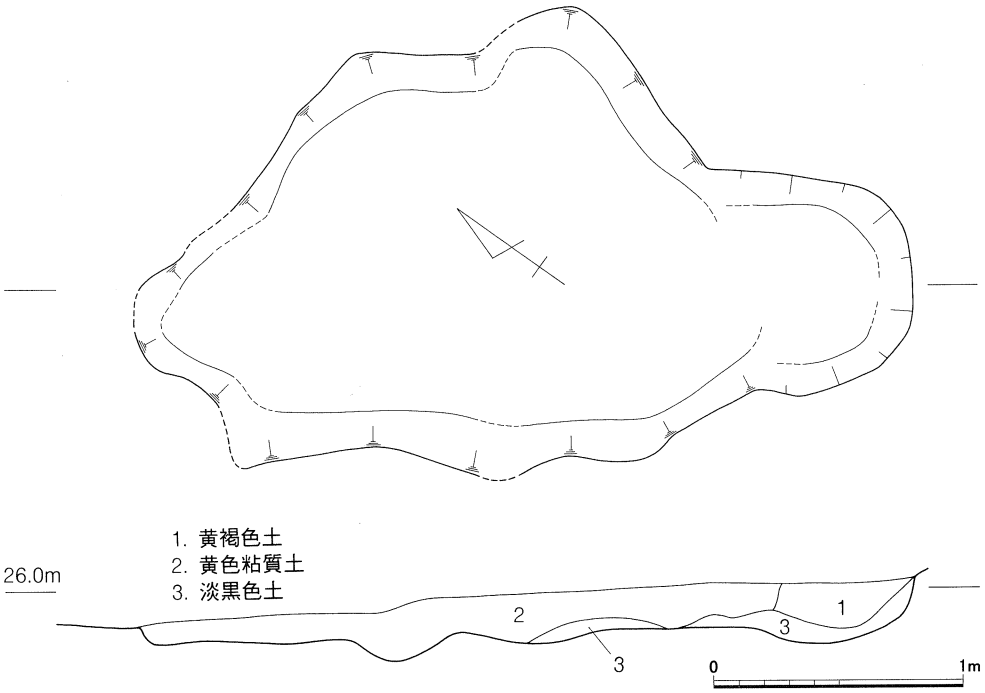
（調査前の状況） 調査前は山林であった。わずかに地形の高まりが存在することは確認できていたが、はっきりと認識できたのは伐採後である。またその段階で高まりの中央付近が陥没している状況がうかがえた。

（墳丘の概要） 古墳は、規模が墳丘裾の部分で計測して1辺が約11mを測る方墳である。高さは東側で約1.5m、西側で約2mを測り、東西で異なっている。なお、北西側では緩斜面が続いており、この方面からみると実際よりも高く見える。

墳丘は基本的に地山を削り出しその上に土を盛ることによって築かれている。墳丘の区画は、丘陵の斜面側にあたる東側から南側にかけては幅2～3m、深さ40～50cmの溝をL字形に掘削することによって、北側にはテラス状の平坦な面を造りだすことによってなされている。西側では溝や平坦面等は認められなかった。墳丘の盛土は平均して80cm程度、多いところでは1m程度施されている。土層を観察すると、地山層のすぐ上には黒色土の層（第7層）があり、その上に褐色系のほぼ同系色をした層があることがわかる。黒色土の層は、北西方向に緩やかに傾斜している状況が観察できることから、本来の表土面であると思われる。また褐色系の層（1層～5層）を形成する盛土は周辺の地山層とほとんど同じ色調であり、溝の掘削や成形の際にでた土を利用しているものと考えられる。墳丘表面に葺石などは認められなかった。



第51図　1号墳地形測量図（表土除去後）（S＝1/200）

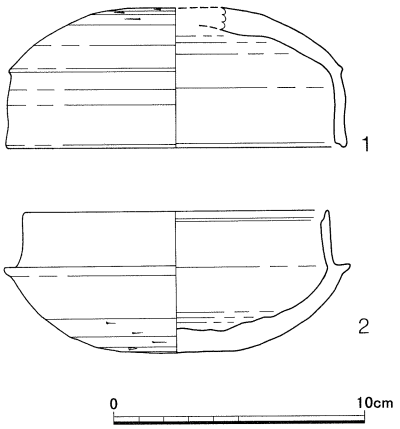


第52図　1号墳SX01実測図（S＝1/30）

（主体部）（第52図）主体部については、第52図においてその可能性のある部分を図示している。この付近は調査前より落ち込んでいることが確認されていたが、調査の結果、この落ち込みは後世に掘り返された痕跡であることがわかり、その際破壊されたことも考えられる。この周辺で石材などは見つかっていないことから、おそらく木棺であったものと考えられるが詳しいことはわからない。仮にこの部分の一部を木棺の一部と想定した場合、棺底幅が約60cm前後のものであったと想定される。

（遺物出土状況）遺物は北側の平坦地と、西側の墳裾からわずかに出土したのみである。いずれも破片であった。また主体部の可能性のある付近や、溝からの遺物の出土は一切なかった。なお、盛土層から石斧が出土しているが、これについては第62図に掲載した。

（出土遺物）（第53図、第18表）接合の結果、図示できたものは第53図に掲載したものである。詳細については第18表に記載している。1の坏蓋、2の坏身ともに口縁端部に段を有し外面にはヘラケズリが施される。



第53図　1号墳出土遺物実測図（S＝1/3）

（時期）出土遺物から6世紀第1四半期を中心とする時期が考えられる。(註3)

第18表　2区　1号墳出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
53-1	40	1号墳墳裾	坏蓋（須恵器）	口径(13.4cm) 器高(5.5cm)	外面:丁寧な回転ヘラケズリ（天井部）回転ナデ 内面:回転ナデ、静止ナデ（天井部）	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色（やや黄色をおびる）	口径推定復元 口縁部に明瞭な段
53-2	40	1号墳墳裾	坏身（須恵器）	口径(12.2cm) 器高　5.6cm	外面:回転ナデ、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	1mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	口径推定復元 口縁部に明瞭な段

2号墳（第54図、第55図）

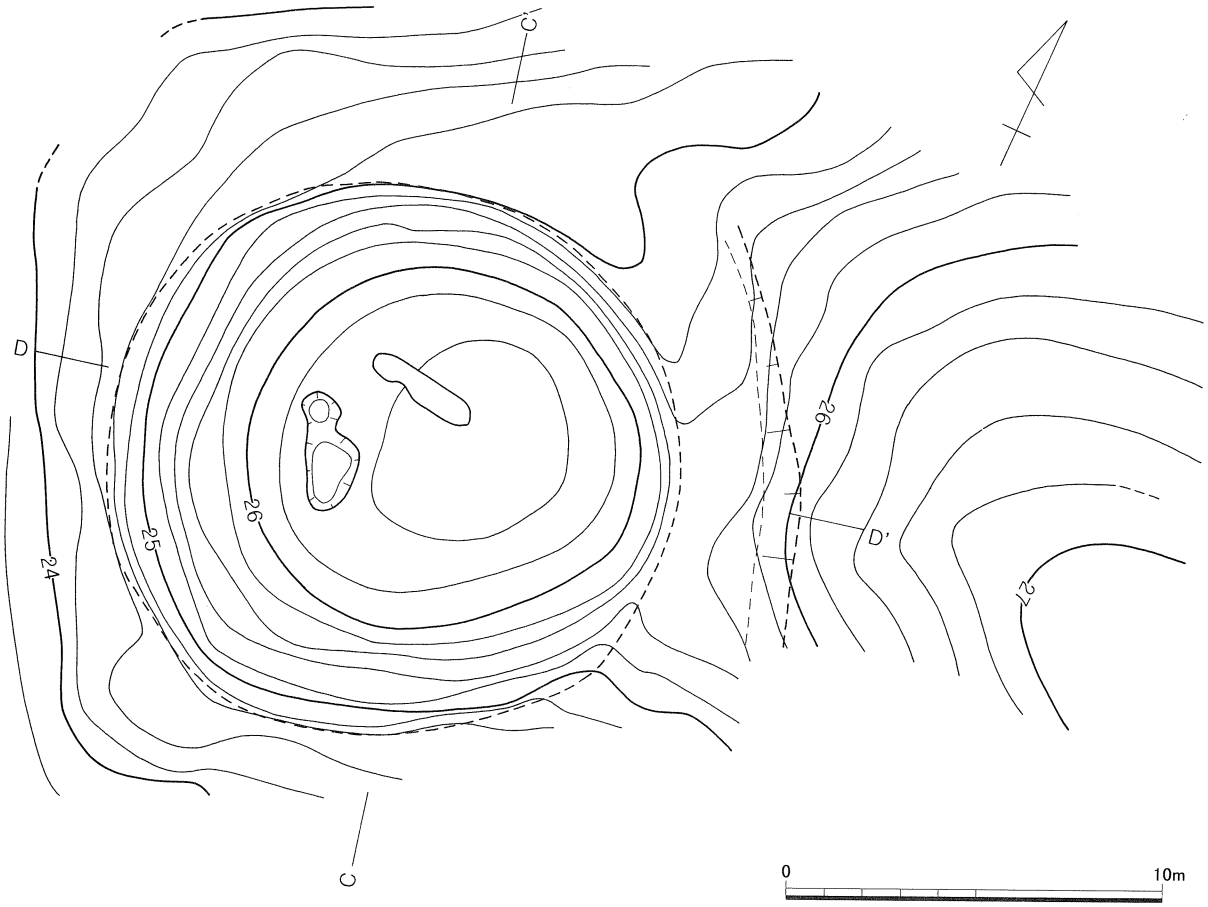
（立地） 2号墳は1号墳の南西約40mのところに位置している。丘陵頂上から下ってくる小尾根筋が分岐する地点にあたり、標高は約26mを測る。ここからはこの丘陵と西側にある丘陵との間の谷を望むことができる。

（調査前の状況） 調査前は山林で高まりがはっきりと認識できる状態ではなかった。なお、地元の方の話から、この周辺が一時期畑地として利用されていたことが明らかとなった。

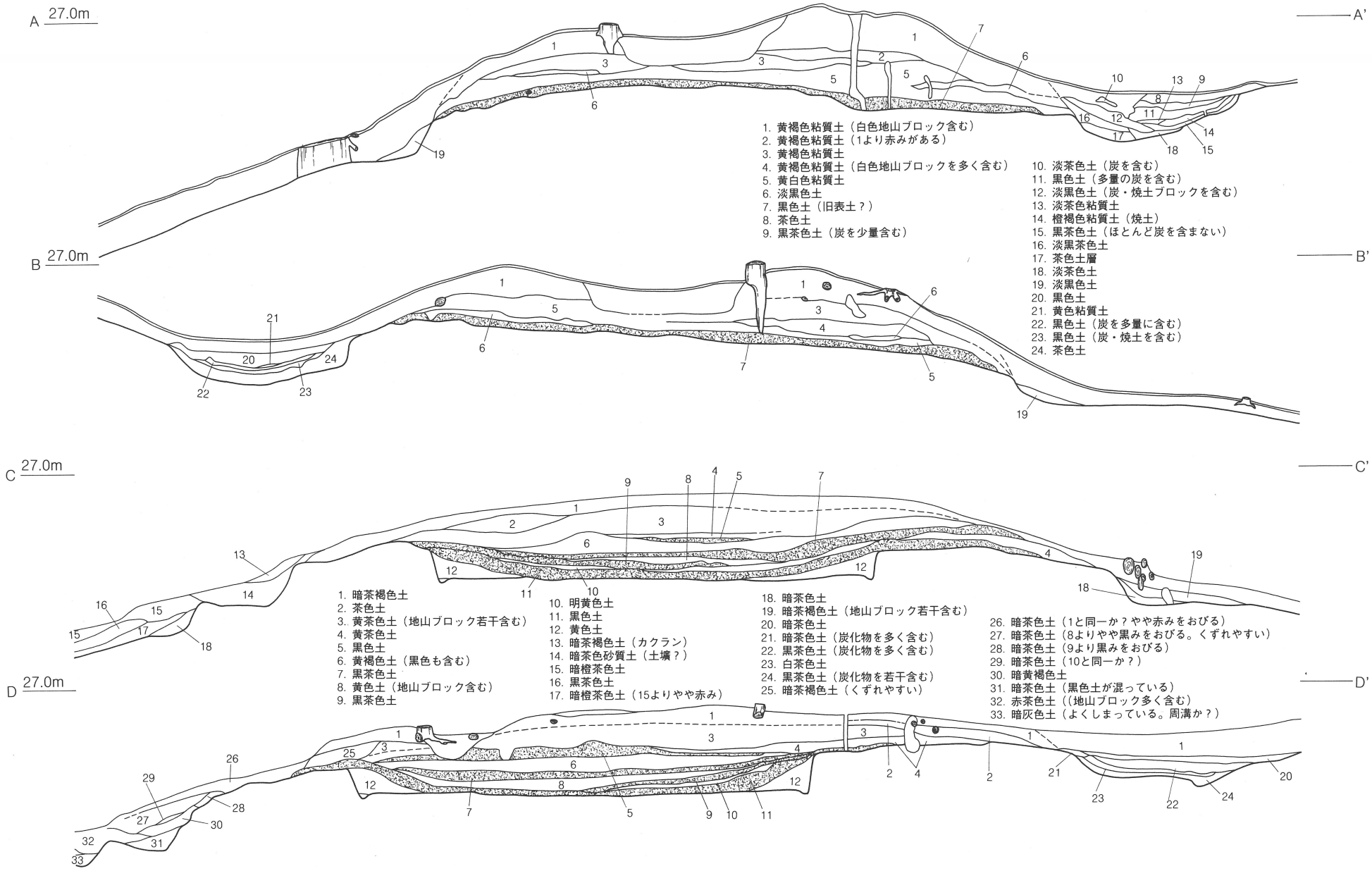
（墳丘の概要） 古墳は規模が墳丘の裾で計測して、径が南北方向で約14.0m東西方向で約15.0mを測る円墳である。墳裾からの高さは調査時で東側で約1m、西側では約2mを測る。

この古墳も基本的に地山を削り出し後盛土をして築かれている。墳丘は東側に尾根に直交する溝を掘り、北側には若干の平坦面を形成することによって、そして西側と南側は地山を削り出すことによって区画している。盛土は現況で40cm～60cmなされているが、調査時点での墳頂部がかなり広く平坦であったことや、周辺への流出が認められることなどからすると、本来はもっとなされていたものと思われる。土層を観察すると、地山面および弥生時代の遺構の覆土の上に褐色系の土が盛られていることがわかる。この盛土の色調は周辺の地山の土の色調とほぼ同じであることから、1号墳と同様に地山成形の際に出た土を利用しているものと考えられる。

墳裾からの高さは東西で異なり、見かけの墳丘の高さは東西で約1mの差がある。さらに、墳丘の西側はやや急な斜面が続いており、こちら側からは実際より高く見えることから、谷を意識している可能性が高いと考えられる。



第54図　2号墳地形測量図（表土除去後）（S=1/200）



第55図　2区　1号墳・2号墳土層実測図（S＝1/80）

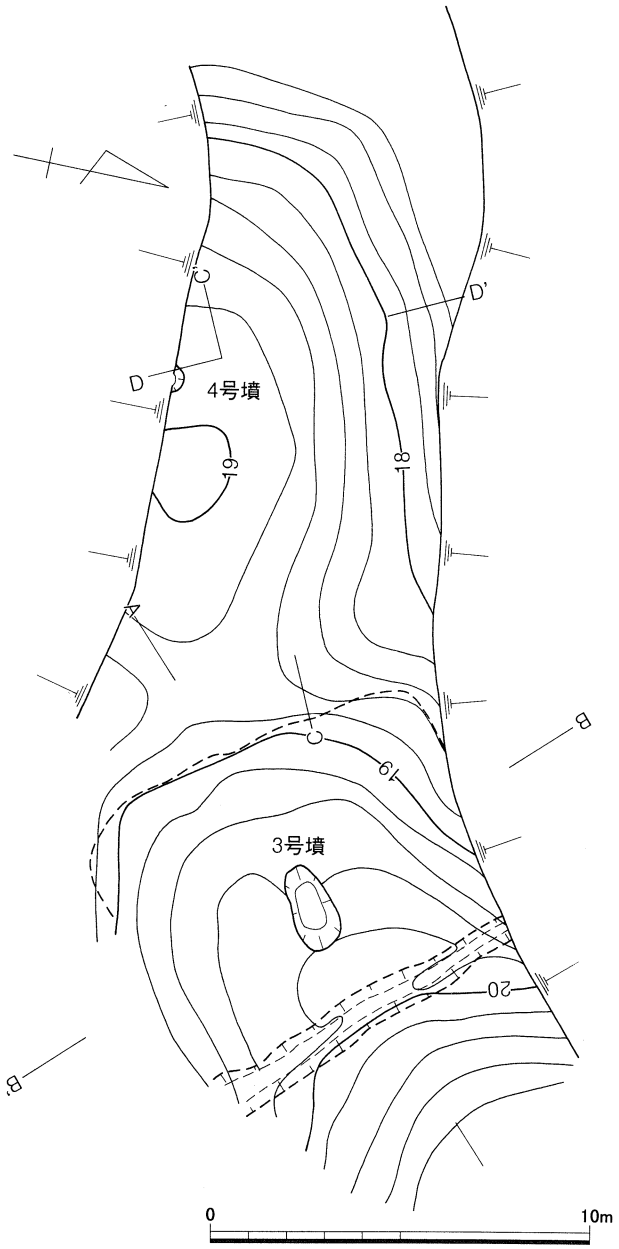
（主体部） 墳頂部では攪乱坑は確認されたが、前述のように一時期畑地としての利用がされていたほか、盛土の削平流出等があったためか主体部の検出はできなかった。また周辺からは石材なども確認されなかった。

（遺物出土状況） 遺物は墳頂部、墳裾、溝いずれからも出土しなかった。また周辺からも一切出土していない。

3号墳

（立地） 2号墳の南西約20mの緩斜面に位置しており、標高は約20mを測る。

（調査前の状況） 調査前は1、2号墳の場合と同様に山林であった。なだらかな斜面が続いており高まりなどは確認されていなかったため古墳が存在するという認識はなかったが、遺跡の範囲確定のためのトレンチ調査をおこなった際に石棺蓋石を検出したことで分かった古墳である。



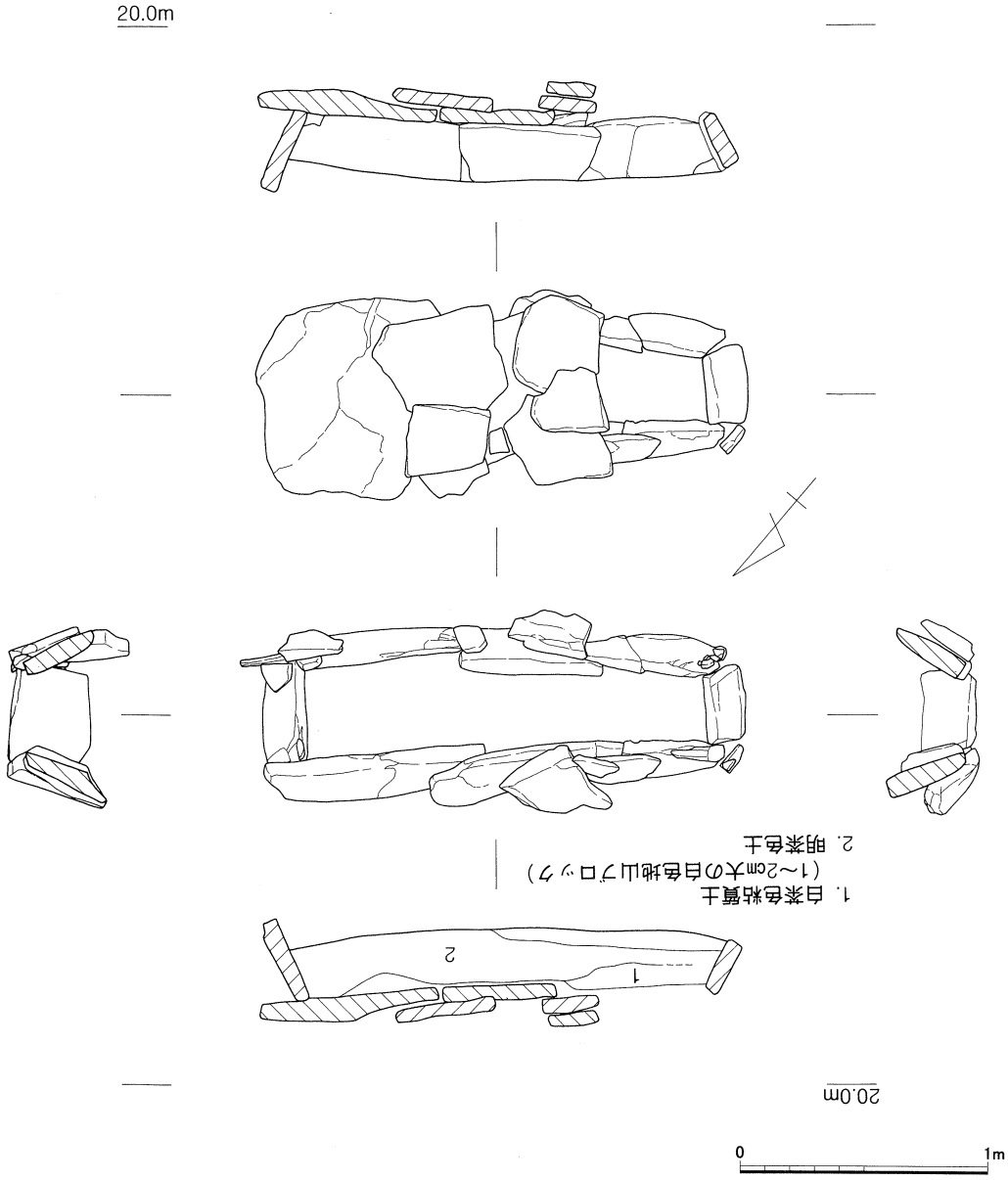
第56図　3・4号墳周辺地形測量図（調査後）（S＝1/200）

（墳丘の概要） やや長方形を呈する方墳である。規模は東西方向で約7.5m、南北方向ははっきりとしないものの９m前後になるものと考えられ、小規模なものである。

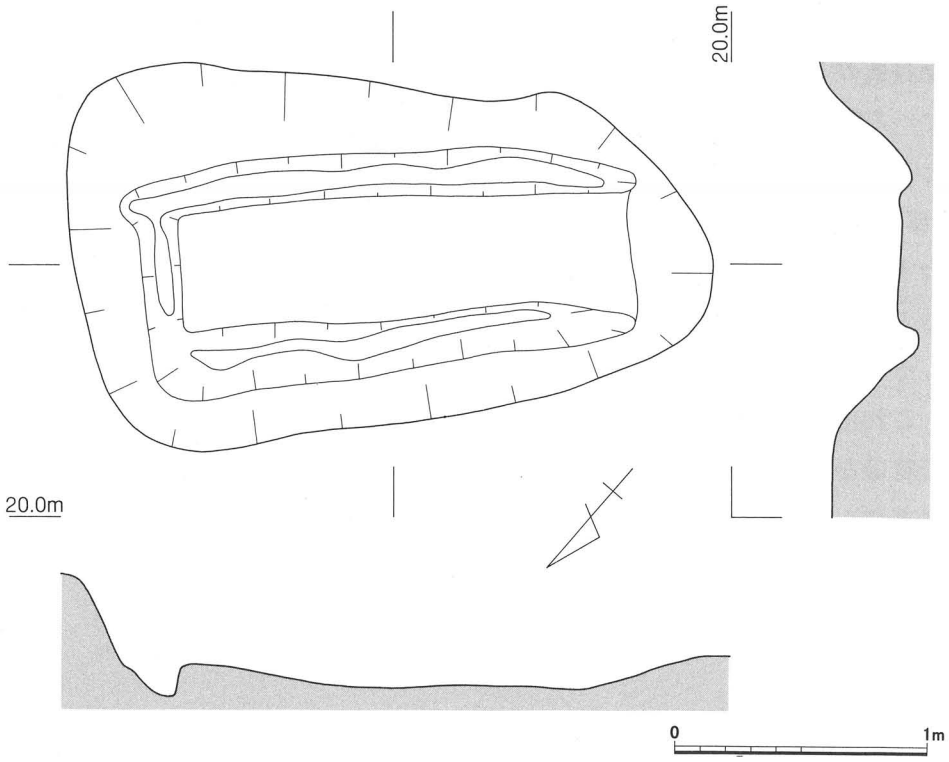
墳丘は、緩斜面の上方側にあたる北東側に尾根筋に直交する形で浅い溝を掘って画し、南西側を若干整形している程度で、盛土はほとんど認められなかった。築造当初からほとんどなされていなかったものと考えられる。

（３号墳主体部） ほぼ中央に組み合わせ式の箱式石棺を検出した。

石棺　石棺は主軸をN―50°―Eの方向に向けている。規模は内法で長さ1.75m、幅は約40cm～50cm、床面からの高さは23cm前後を測る。蓋石は、最大のもので長さ70cm前後、幅80cm前後の割石を用いており、それは北東側小口の上にのせられていた。その隣にはそれよりもやや小さめの石が使われており、これらの蓋石間にはそれを塞ぐように小さめの石が配されていた。検出時には南西側小口の上に蓋石はなかったが本来はあったものと推測され、３枚の石で主に覆われていたのであろう。棺身は北東側小口に40cm大の石を、南西側にはそれより小さめの石を配し、側石を基本的に３枚の石によって構成している。側石が小口石を挟むようになっており、また各石材の間隙にはそれ



第57図　3号墳主体部実測図（1）石棺（S＝1/30）



第58図　3号墳主体部実測図（2）（S＝1/30）

を塞ぐように小さな石が配されていた。各辺の石ともかなり内傾していた。土圧による可能性も否定できないが、当初から内傾させられていたことが考えられる。

床面は地山面となっており、特別に粘土を施すといったことは認められなかった。

用いられている石材の大きさなどから判断して、北東側が頭位であったものと考えられる。

墓壙　墓壙は長さ2.5m、幅1.4～1.6mを測るもので、石棺に比べ大きく掘り込んでいる。北東側の方が広く歪んだ形状を呈している。

（遺物出土状況） 墳丘、溝、主体部内いずれからも遺物はいっさい出土しなかった。また古墳周辺からも一切出土していない。

4号墳

（立地） 3号墳に隣接するように築かれている。標高は約19mを測り、谷を見下ろすことのできる位置にある。

（調査前の状況） 本古墳の周辺は、近年の土採取によって南側が大きく削り取られており、崖のようになっていた。その際に破壊されたと考えられる主体部石棺の一部が、残存、露出していた。

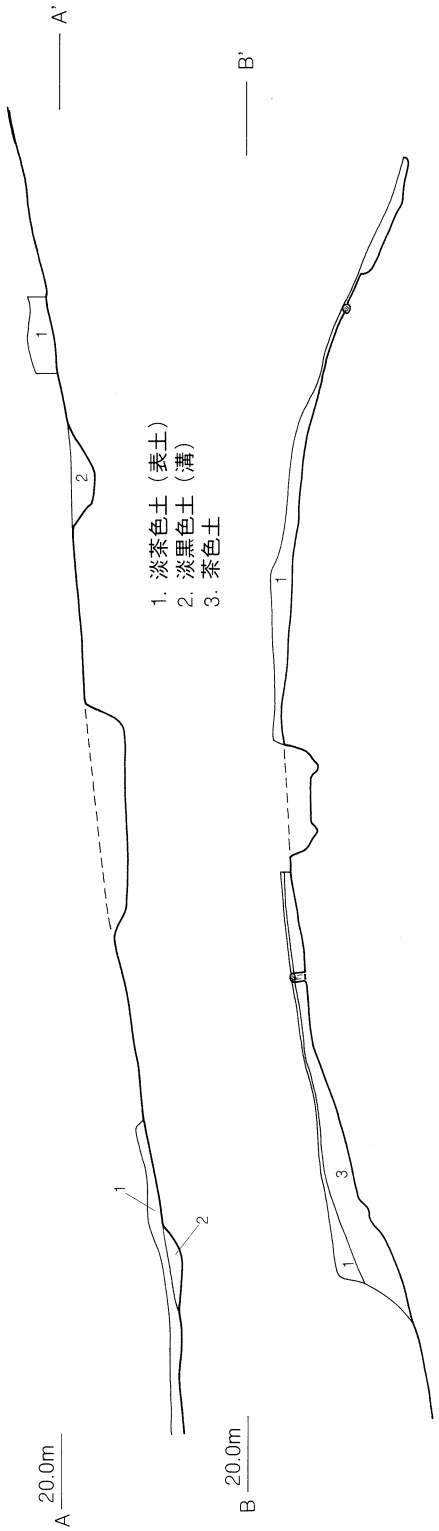
（墳丘の概要） 墳丘は前述のとおり大きく破壊されている上、北側にも流出しておりその詳細は不明である。但し3号墳と4号墳の間は溝状になっており、そのことを勘案すると、規模が10m前後の古墳であった可能性が考えられる。また3号墳と同様に盛土はほとんど認められなかった。

（4号墳主体部） 前述のとおり既に大きく破壊されており、わずかに2枚の石材が残っていただけである。これらはほぼ原位置にあると考えられ、直交する位置関係にあることから側石と小口部にあたるものと思われる。推測の域を出ないが、やや大きめの石材のほうが側石になると思われる。

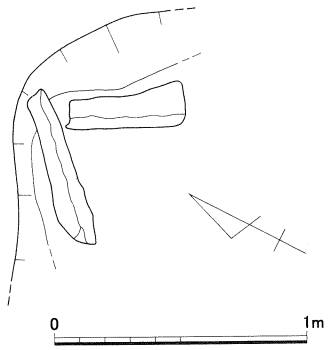
その場合、この石棺の主軸は３号墳のものとほぼ一致する。また小口石を側石で挟む形態も同じであると言える。なお用いられている石材も３号墳のものと同じであった。

（遺物出土状況） 遺物は周辺も含めていっさい出土しなかった。

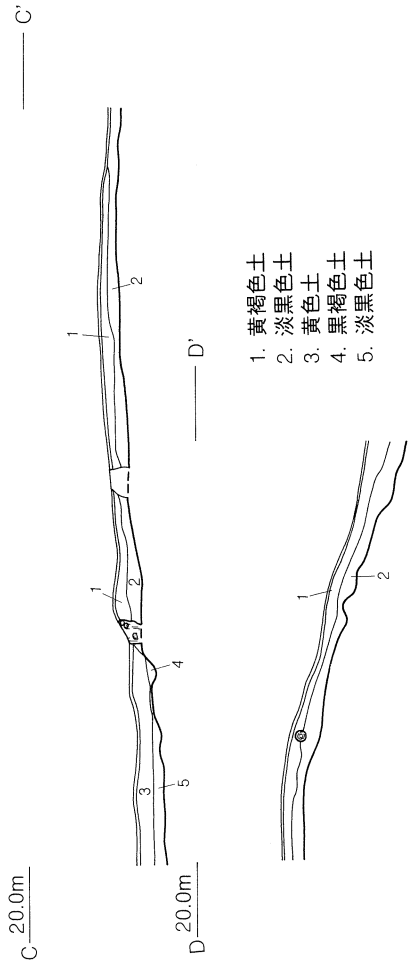
（３・４号墳の時期） 遺物等の出土がないため時期は不明であるが、ほぼ同時期につくられた可能性が高いと思われる。



第59図　3号墳土層実測図（S＝1/80）



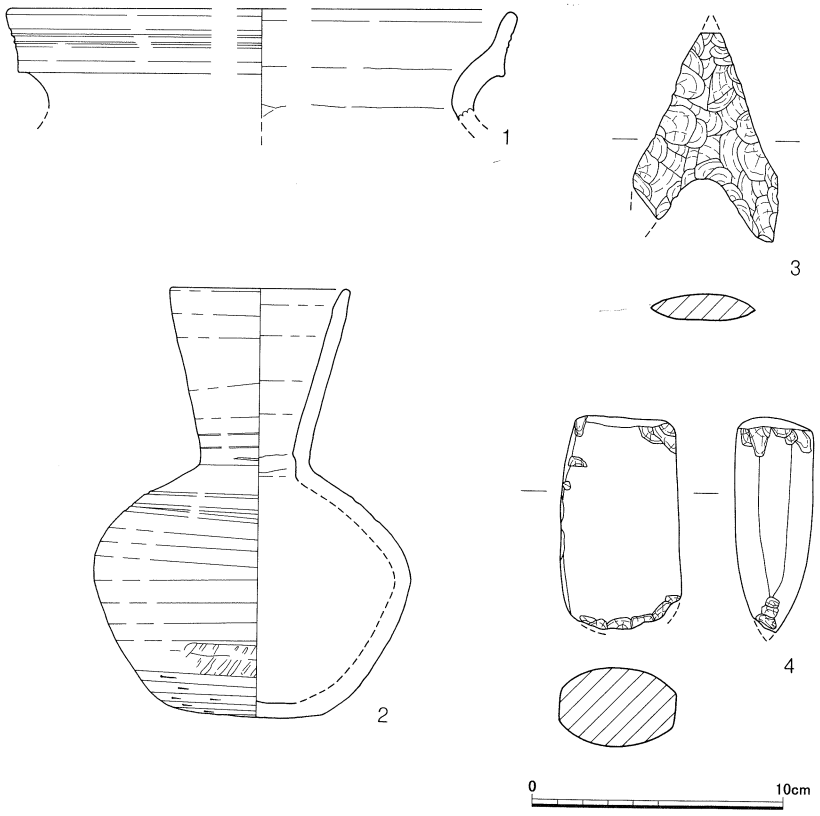
第60図　4号墳主体部実測図（S＝1/30）



第61図　4号墳土層実測図（S＝1/80）

［遺構に伴わない遺物］

２区ではほとんど遺物が出土しなかった。出土したのは第62図に掲載したもののほか小片がわずかにあった程度である。



第62図　2区遺構に伴わない遺物実測図（S＝1/3、3はS＝1/1）

第19表　2区　遺構に伴わない出土遺物観察表（1）

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量（cm）	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　考
62-1	40	包含層	甕（弥生）	口径（20.0cm）	外面:横ナデ、ナデ、擬凹線文 内面:横ナデ、ナデ、ヘラケズリ	1mm以下の砂粒やや多く含む	良好	外面:淡黄褐色 内面:淡黄褐色	口径推定復元 元は5条の擬凹線文?
62-2	40	包含層	長頸壺（須恵器）	口径6.9cm 器高17.0cm	外面:回転ナデ（口縁部～肩部）、回転ヘラケズリ（底部）沈線、回転ヘラ切り後回転ナデ 内面:回転ナデ、ナデ	1mm以下の砂粒やや多く含む	良好	暗青灰色 （口縁部は暗灰色）	肩部に2条の沈線

第20表　2区　遺構に伴わない出土遺物観察表（2）

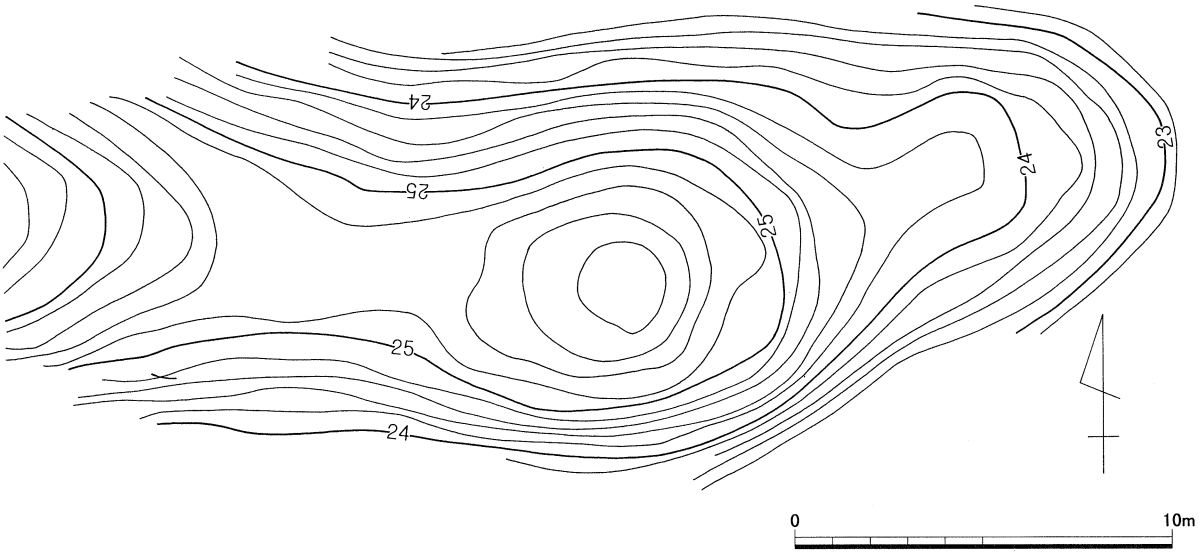
挿図番号	写真図版	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	備　考
62-3	40	包含層	石鏃	2.7	1.8	0.3	凹基式
62-4	40	1号墳盛土内	石斧	8.4	4.8	3.1	側面は面を持つ

3．3区の調査

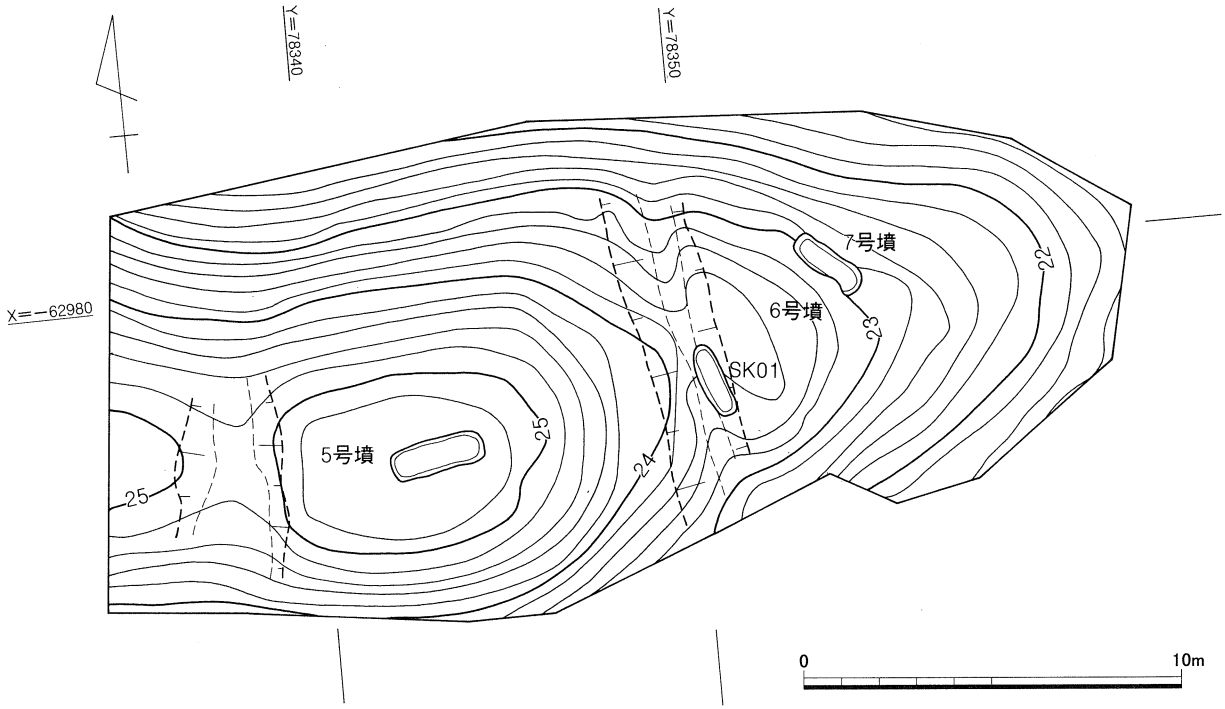
3区は道路建設に伴う住居代替用地として、急遽調査を行うこととなったところである。1・2区を隔てる南北方向にのびる尾根から派生した小尾根筋の先端付近に位置しており、標高は約25mを測る。1区からは南に100mほど行ったところにあたり、西方向には布志名の小平野を見渡すことができる位置にある。

本調査区では石棺を主体部にもつ古墳や土坑を確認した。周辺にはさらに古墳が存在する可能性もあるが、現地踏査をしたかぎりでははっきりと確認されていない。

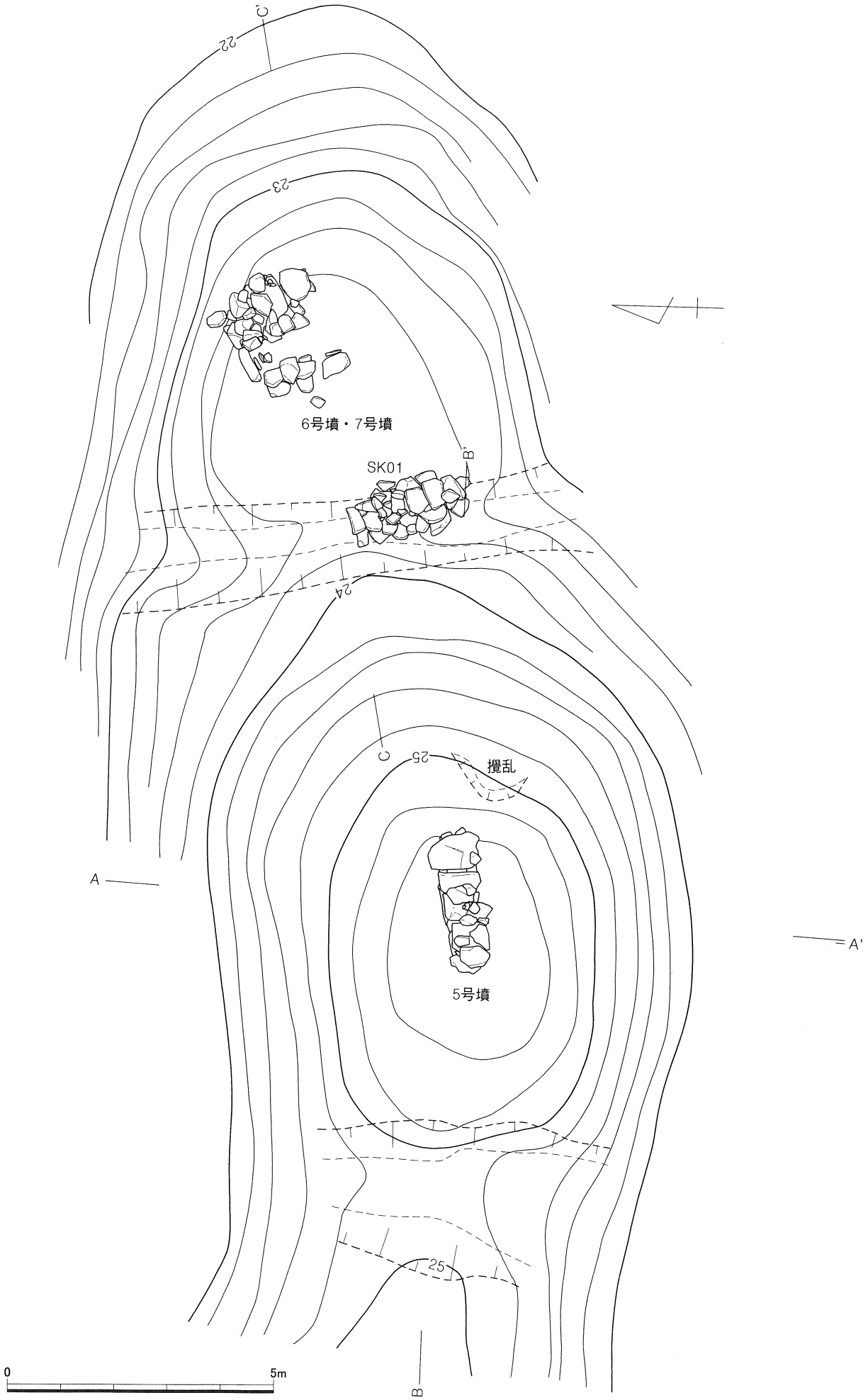
以下遺構ごとに記す。なお、古墳については2区からの続きの呼称を用いた。



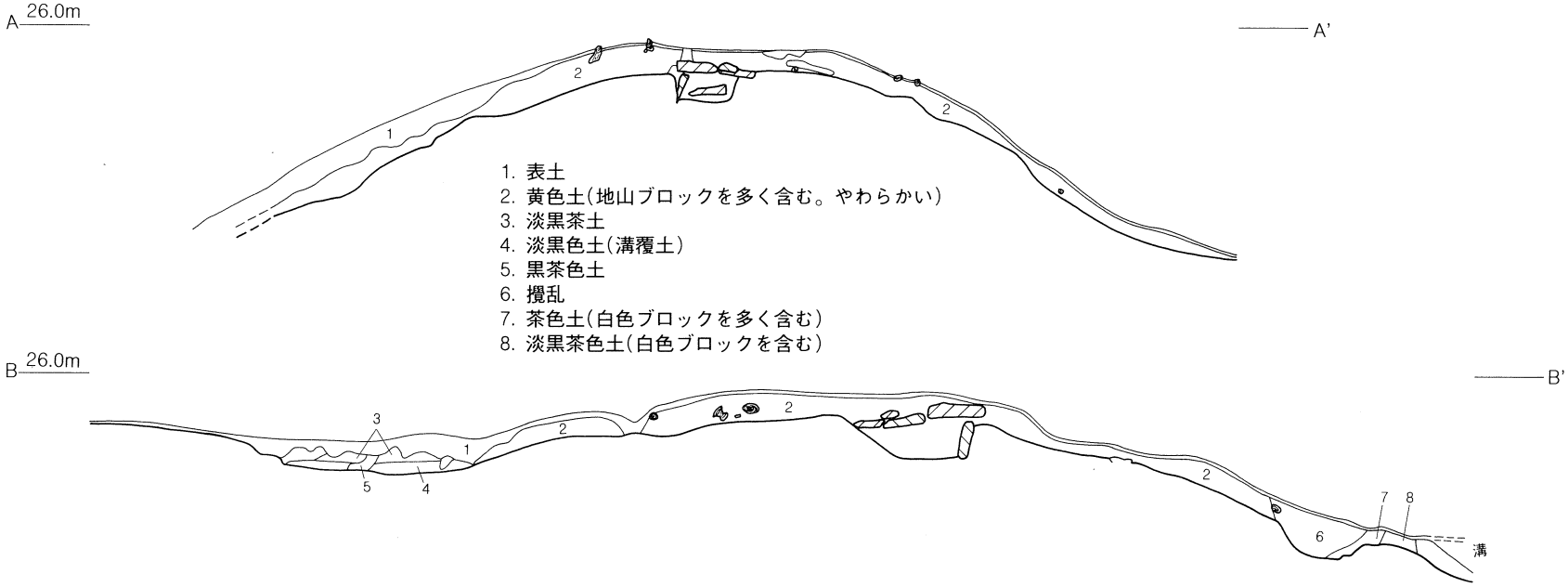
第63図　3区地形測量図（調査前）（S＝1/200）



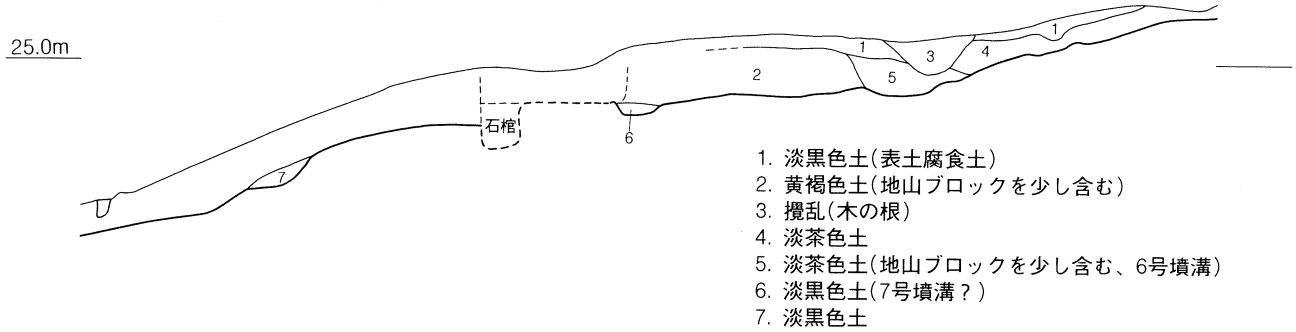
第64図　3区地形測量図（調査後）（S＝1/200）



第65図　3区地形測量図（5・6号墳測量図）（S＝1/100）



第66図　5号墳土層実測図（S＝1/80）

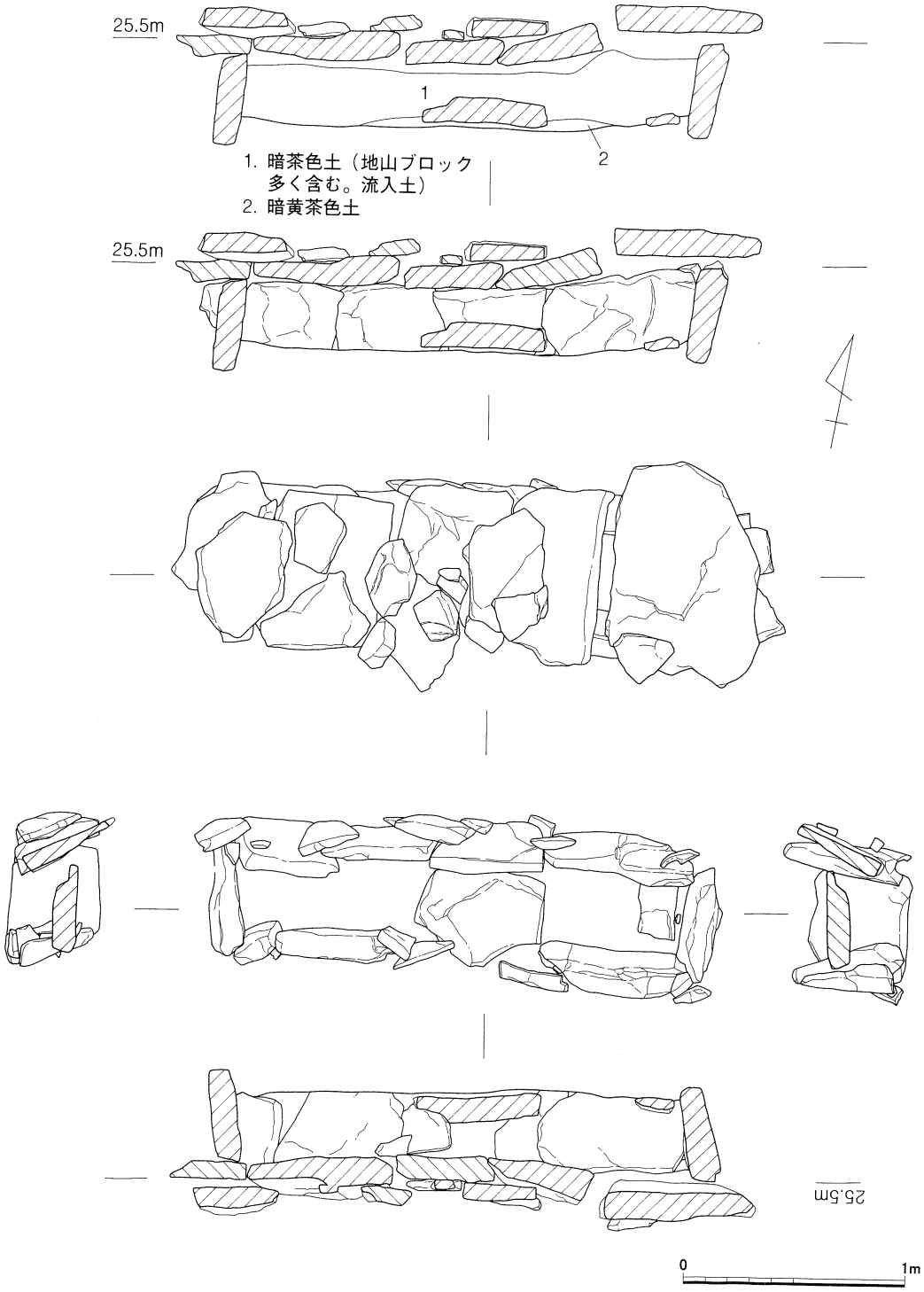


第67図　6・7号墳土層実測図（S＝1/80）

5号墳（第65・66図）

（立地） 標高約25mに位置している。南側の斜面はかなりの傾斜をもって平地まで下っており、水田面との比高差が実際よりも感じられる位置にある。

（調査前の状況） 調査前は山林であった。南側と北側は急な斜面となっており、一部では崩落している箇所も見られた。



第68図　5号墳主体部実測図（1）石棺（S＝1/30）

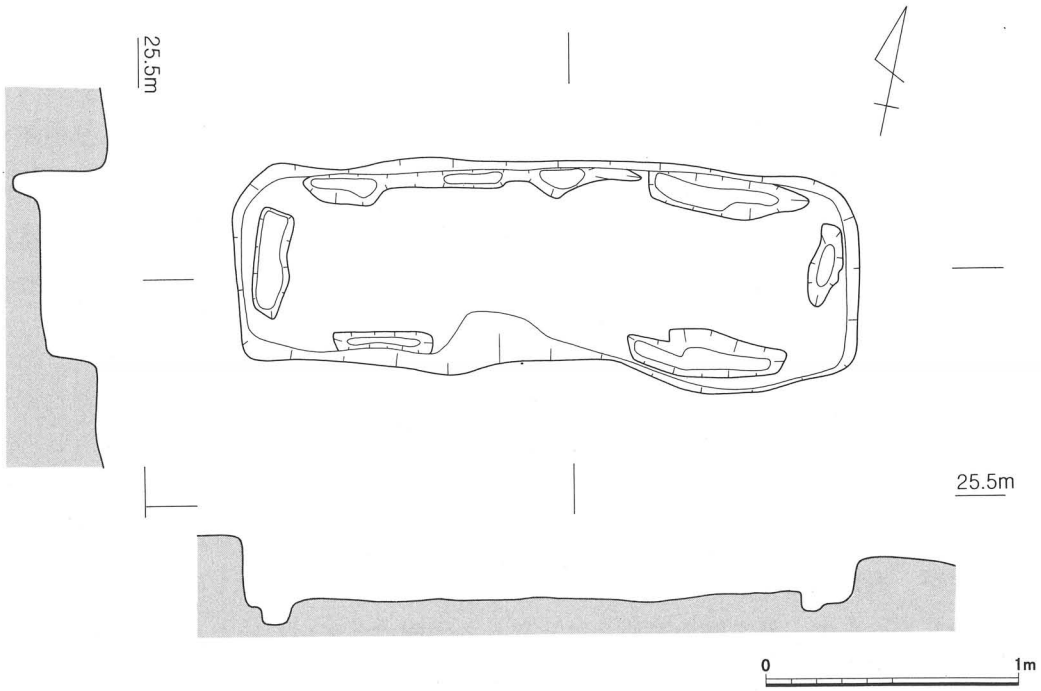
現地での踏査で、若干の地形的高まりが認められたほか、表土直下に石が並んで存在することも確認でき、石棺の存在が想定された。

（墳丘の概要） 墳丘は西側では尾根を直交する溝を掘ることによって区画されている。この溝は幅約２～３ｍを測るが、深さはわずかに掘り込まれた程度の非常に浅いものである。これに対して東側は、なだらかな斜面が続いており墳裾ははっきりとしない。ただし一部に傾斜の変化するところが見られることから、そこが裾であった可能性も考えられる。なお、さらに東側には溝が掘り込まれているが、土層の状況などから後述する６号墳に伴うものと考えた。北側と南側は前述のとおり、急斜面となっており地形の変化が見られなかった。このように墳丘は本来の急峻な地形をそのまま利用して造られたもので、地山の加工などはほとんど行われなかったものと思われる。規模は西側以外の状況がはっきりとしないため断言できないものの、西側溝から主体部石棺中央までの距離で反転させた場合は約９ｍ、仮に東側溝が５号墳に伴うとすれば約11ｍとなり、いずれにせよ10ｍ前後の古墳と考えられる。

盛土等はほとんど確認されなかった。後述の主体部石棺が表土直下にあったことや土層の様子などからは、周辺に流出したことが考えられるものの、それほど施されてはいなかったものと思われる。

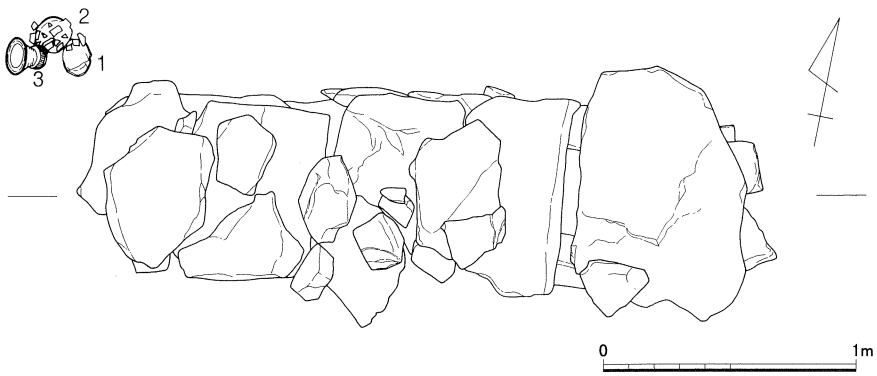
（主体部） 主体部として組み合わせ式の箱式石棺を検出した。

石棺　石棺は主軸をＮ―79°―Ｅ方向にとり東西方向を指向している。規模は内法で計測して長辺2.0ｍ、短辺50㎝、石棺蓋石から測った深さは、約30㎝～40㎝を測る。石棺は割石を用いて造られていた。蓋石は５枚の中心となる大きめの石と、蓋石間を塞ぐやや小さめの石で構成されている。石は最大のもので長さ65㎝、幅90㎝のものを用いており、それは東側の小口部分を覆うのに使用されていた。棺身は北側の側石が４枚、南側の側石が３枚、両小口１枚ずつの計８枚の石で構成されている。また側石と側石の間にも小さめの石がそれを塞ぐように配されていた。検出した段階では

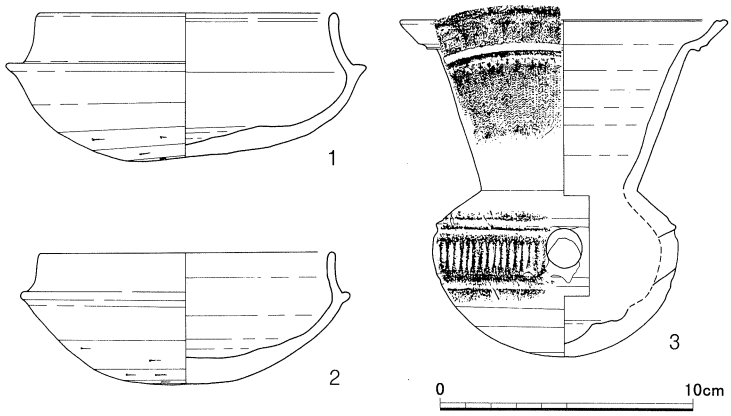


第69図　5号墳主体部実測図（2）（S＝1/30）

ほとんどの側石がやや傾いており、南側の一部は倒れている状況であったが、おそらくこれは土圧によるもので、本来は垂直に立てられていたものと思われる。また東小口側には枕石と思われる石が置かれていた。このことと、東側小口の石は西側のものよりも大きいこと、さらに蓋石の配石状況などと合わせて考えると、こちら側が頭位とみて間違いないであろう。石棺内の床面に粘土を貼るといったような状況は確認されなかった。なお、検出した時にはすでに棺内に土砂が流入していた。



第70図　5号墳遺物出土状況（S＝1/30）



第71図　5号墳出土遺物実測図（S＝1/3）

墓壙　石棺を納めている墓壙は長さ約2.4m、幅約80cmを測るもので、これは石棺の大きさにほぼ等しいといえる。平面形はほぼ長方形を呈しており、垂直気味に掘り込まれていた。

（遺物出土状況）遺物は石棺外の西側から坏や甕など3点がまとまって出土した。棺内からの出土はなかった。

（出土遺物）出土した遺物は第71図に掲載したものであり、詳細は第21表に記載している。これらのうち2は一見すると土師器のようにも思われるが、成形が須恵器の坏と同じと考えられることから、須恵器の焼成不良のものである可能性が高い。

（時期）出土した遺物から6世紀第2四半期を中心とした時期が考えられる。

6号墳・7号墳（第65・67図）

5号墳の東側において、箱形石棺・石棺状の石組みを検出した。当初は古墳が1基存在するものと考えていたが、調査中に2基が重なり合っていることが明かとなったものである。当初そのような状況は想定しておらず、両古墳の関係をはっきりと把握できていないところもあるため、ここでは一括して扱うこととしたい。なお調査順に、上に存在したものを6号墳、下に存在したものを7号墳とした。

（立地） 5号墳から東にやや下ったところに位置しており、標高は約23～24mを測る。

（調査前の状況） 5号墳と同様に調査前は山林であった。立木伐採後に地形的な変化が僅かながら認められたほか、表土下に石が存在することは確認された。調査前の地形測量図からは方墳が存在する可能性が考えられた。

（墳丘の概要） 前述のとおり2基の古墳が重なり合う状態で存在していた可能性が高い。土層の状況などから判断して、まず最初に箱式石棺を主体部とする7号墳が造られ、その後に石組みを主体部とする6号墳が造られたものと想定される。

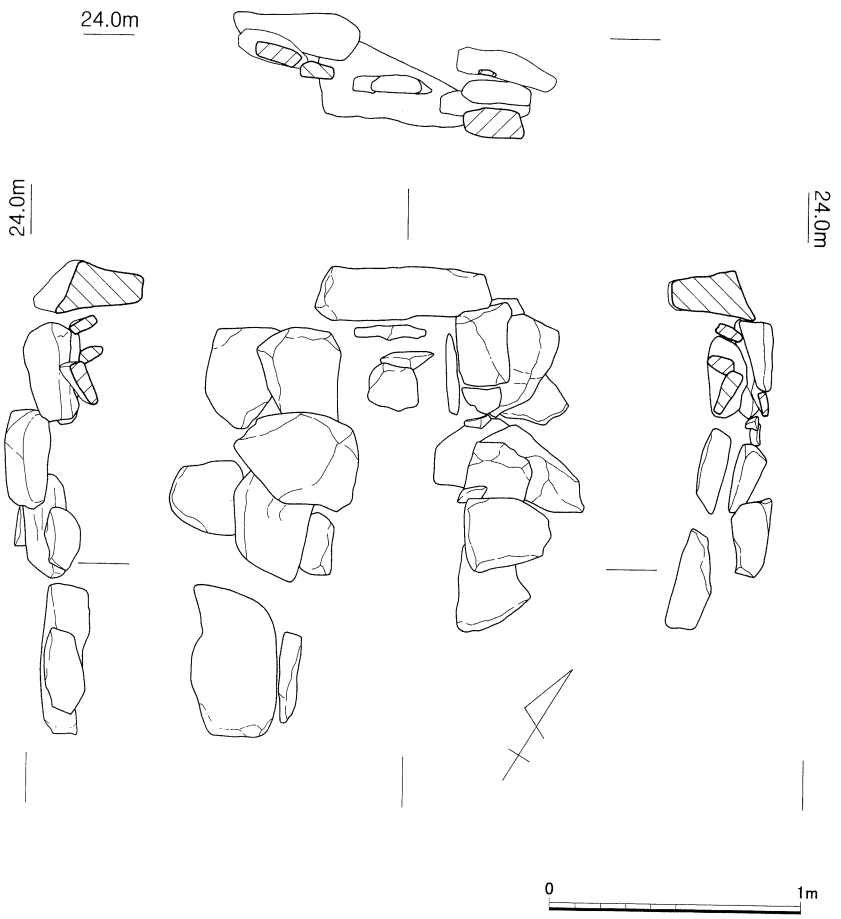
6号墳の墳丘は、東側は溝によって区画し盛土をして築いたものと考えられるが、南北両方向と東側にはかなり流出しているようであまり原形をとどめていない。よって本来の墳形や規模は明らかではない。ただし地形測量図と土層の様子などから考えると、方墳でその規模が東西方向が約6mの小規模な古墳であった可能性が高い。

7号墳は、6号墳の主体部のすぐ西側で検出した非常に浅い溝と、東側で確認した石棺によりかろうじて認識できたものである。墳丘は6号墳の築造の際に破壊されているのか、原形はとどめておらず形態・規模とも不明である。おそらく、ほかの古墳と同様に溝で区切り簡単な盛土をする程度のものであったと考えられる。規模も判然としないが、6号墳同様小規模なものであったと思われる。

（6号墳主体部） 自然石と割石をもちいて構築した石棺状の石組みである。表土直下で確認していることから、後世に破壊を受けたことは十分考えられるが、現状では非常に簡単なつくりとなっている。規模は現存し

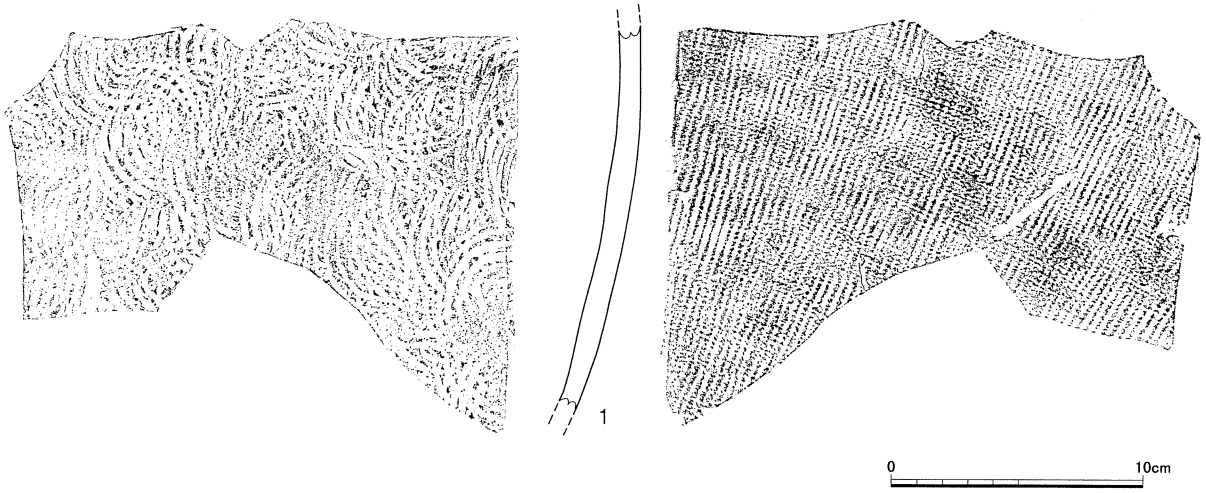
第72図　6号墳・7号墳主体部実測図（S＝1/30）

ている部分で計測して、長軸約1.5m、幅50cmを測る。左右両側は扁平な石が用いられ、それらは壁面が揃うように置かれている。小口に当たる部分の石にはやや大きめの割石が使用され、他の石と異なり立てられていた。さらに、各壁の内側には小さめの平らな石が立て並べられている状況が一部確認された。それが巡らされていたかどうかは分からないが、その可能性は考えられる。小口側には枕状に石が置かれていることから、こちら側が頭位になるものと考えられる。床面についてはわりの側石の状況から、検出面がほぼそれにあたるものと思われる。



第73図　6号墳主体部実測図（S=1/30）

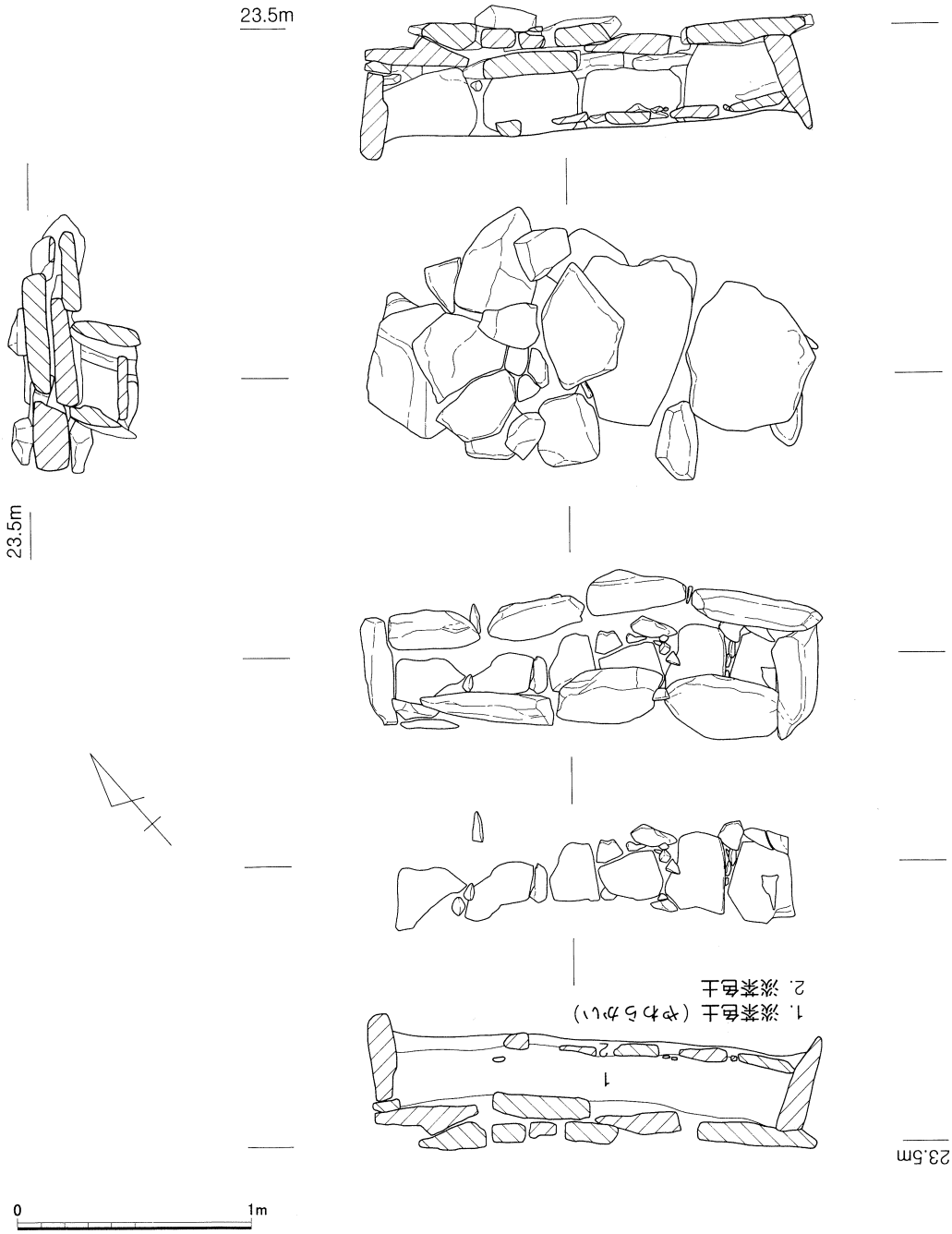
（遺物出土状況） 6号墳に伴うと考えられる西側の溝内から、須恵器の甕片と土師器の細片が出土している。しかし主体部付近では何も出土しなかった。



第74図　溝出土遺物実測図（S=1/3）

（７号墳主体部） 主体部として箱形石棺を検出した。

石棺　組み合わせ式の箱形石棺である。石棺は主軸をＮ－50°－Ｗの方向に向けてつくられ、南北方向が指向されている。規模は内法で計測して長辺1.7ｍ、短辺30～40㎝、石棺蓋石から測った深さは約30㎝を測る。石棺は割石を用いて造られているが、５号墳のものと比較するとやや丸みを帯びた印象をうける。蓋石は基本的に４枚の石によって構成され、北西側蓋石の上にはその間隙を塞ぐように小さめの石が置かれていた。棺身は側石７枚、小口石一枚ずつの計９枚の石で構成され、蓋石と同様に間隙を塞ぐ石の配置が認められた。棺床には６枚の石が敷き並べられて床面をつくっていたが、全体的に雑に置かれていた。また床石は南西側小口付近の石に他のものと比べてやや大きめの石が用いられている。このことは側石や蓋石にもいえることから、こちら側が頭位であったものと推測される。粘土で目張りを施すといったことは認められず、検出時には既に土砂が流入していた。



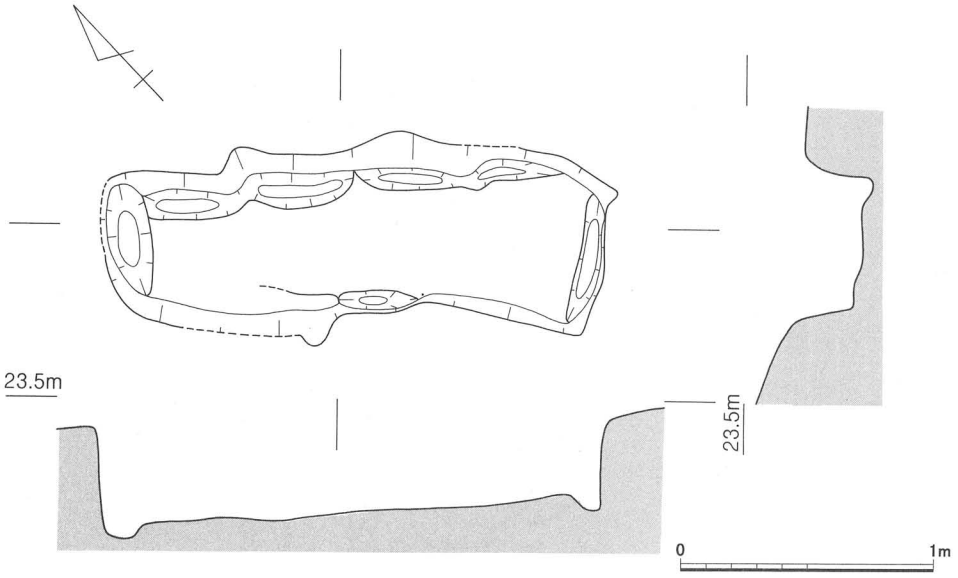
第75図　7号墳主体部実測図（1）石棺（S=1/30）

墓壙　石棺を納めている墓壙は長さ約2.0m、幅約50cmを測るもので、石棺の大きさにほぼ等しい。平面形はやや不整形な長方形を呈している。

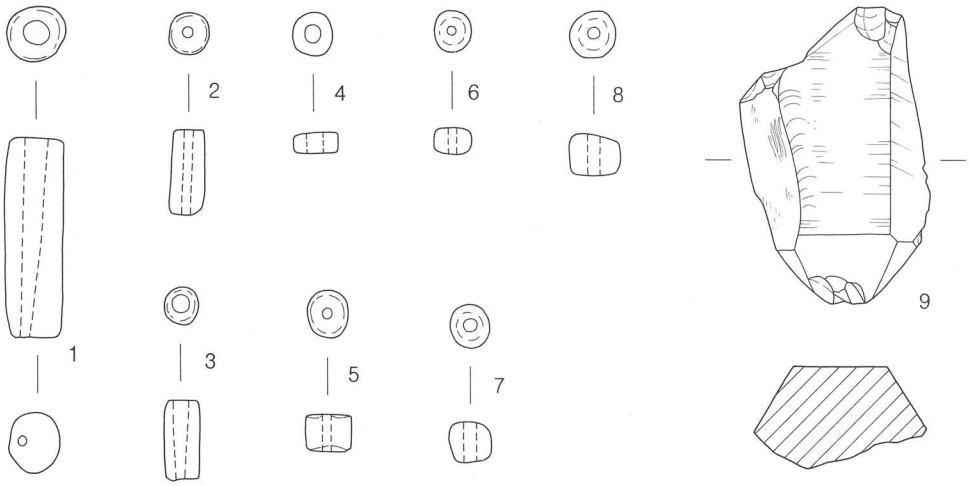
（遺物出土状況） 石棺内から管玉や小玉などの玉類と、水晶の未成品が出土した。管玉と水晶の未製品は床石の間隙に落ち込むような状況で出土したが、小玉については石棺内の流入土をふるいにかけた段階で確認したため正確な出土位置は不明である。土器は出土しなかった。

（出土遺物） 出土遺物は第77図に掲載し、詳細は遺物観察表に記載した。玉は碧玉製のものとガラス製のものがある。9は水晶で未成品と考えられるものである。

（時期） 時期については土器などの出土がなく明らかにできなかった。



第76図　7号墳主体部実測図（2）（S=1/30）



第77図　7号墳石棺内出土遺物実測図（S＝1/1）

SK01

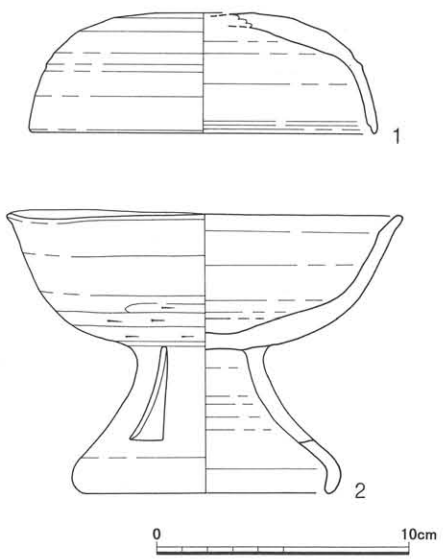
（立地） 6号墳の溝内に位置しており、標高は約23.5mを測る。

（墓壙の概要） 墓壙の上に石を置いて蓋をした、石蓋土壙といわれるものである。土壙は主軸をN－15°－Wの方向に向けており、7号墳の主体部石棺と同様に南北方向が指向されている。土壙は、平面形が細長の長方形を呈し、その規模は上面で計測して長辺2m、短辺40～50cmを測る。また深さは北側の部分で測って40cm程度あり、西側の部分はわずかに2段になっている様子がうかがえた。土壙は板状の石によって覆われていた。蓋石となる石が東西両側壁上に並べられた板状の石の上に置かれるという構造で、側壁上の石は墓壙東側では1枚ずつ、西側では2段に置かれている。これは地形の状況の結果、つまり東側に対して西側のほうが低いことから、蓋石を水平に置くために西側に石を積む必要があったものと考えられる。検出段階では西側の石が墓壙内にやや落ち込んでおり、それに伴って蓋石も若干落ち込んでいる状況であったが、本来は水平になっていたものと思われる。また南側小口部分にはほぼ正方形の石が立てられていた。床面は地山面となっており、粘土貼り等は認められなかった。なお、床面は南側が北側に比べてやや広く、小口部分の石と合わせて考えて、こちら側が頭位になるものと思われる。

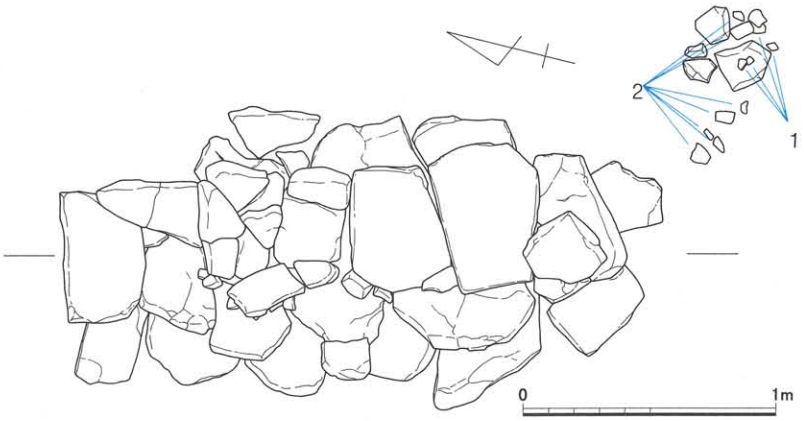
（遺物出土状況） 遺物は墓壙の外、南東側から出土している。遺物は、大小あわせて4つの石があるところからまとまって出土したが、いずれも破片であった。状況からみて、供献された際に破砕されたものと思われる。

（出土遺物） 出土した遺物は第78図に掲載したもので、須恵器の坏蓋と高坏である。詳細については第24表に記載した。いずれも破片であったが接合の結果わかったものである。

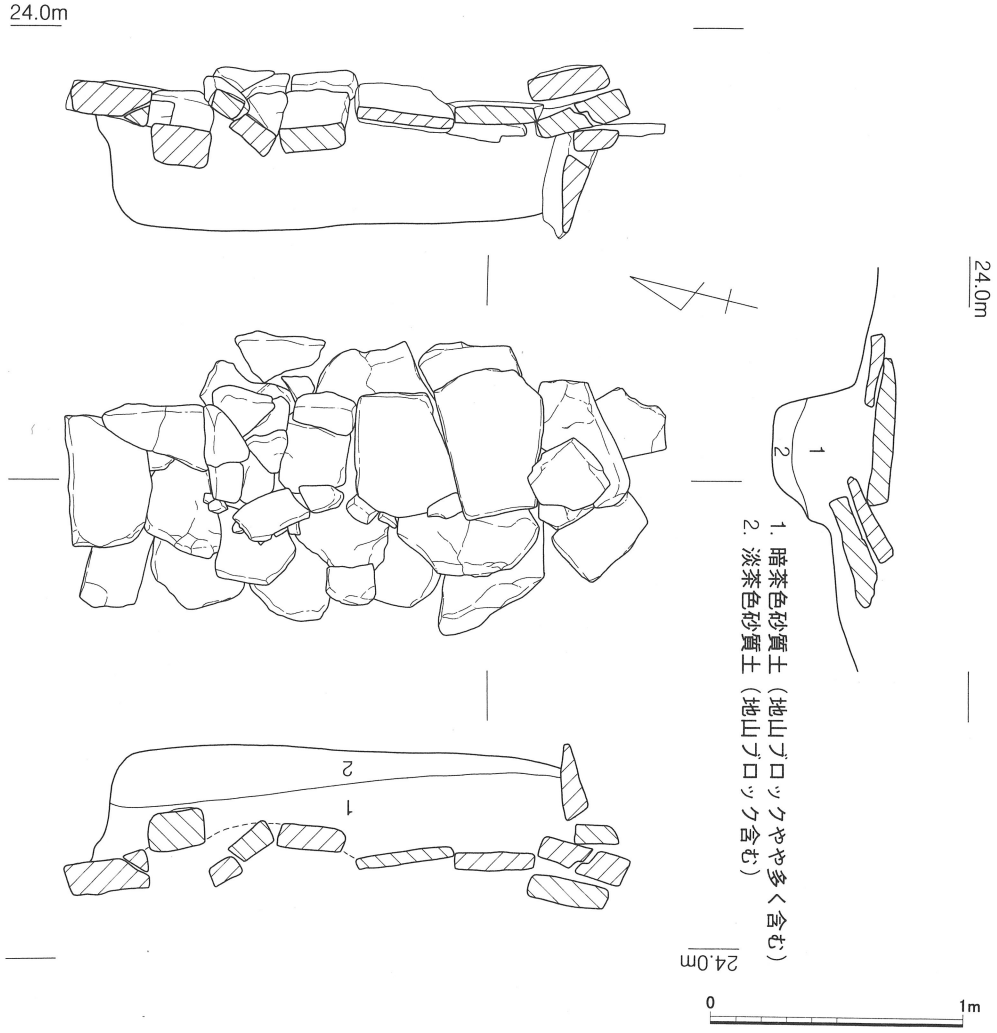
（時期） 出土遺物から6世紀第3四半期を中心とする時期のものと考えられる。



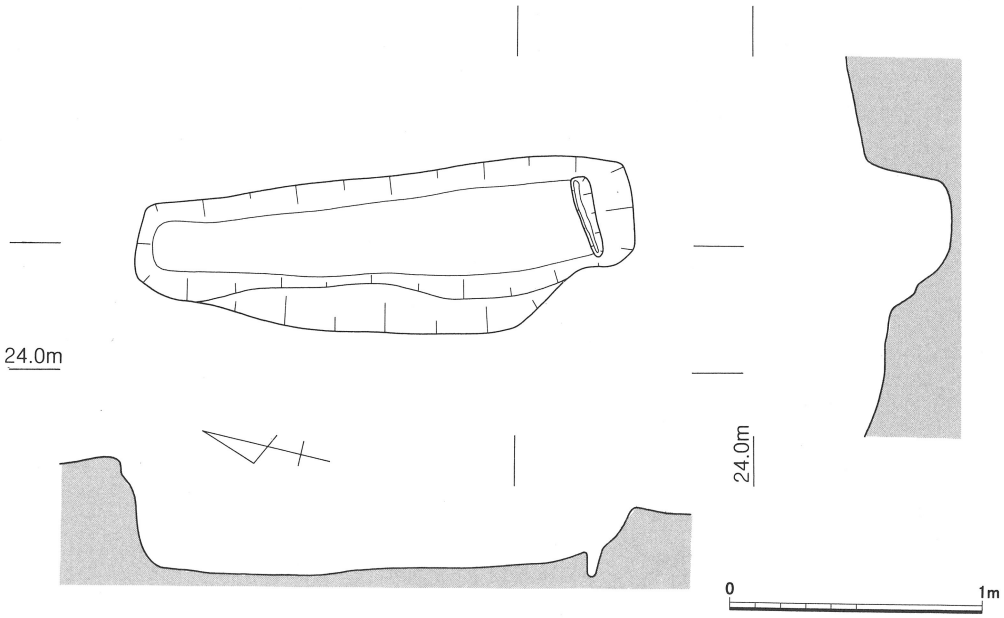
第78図　3区SK01出土遺物実測図（S＝1/3）



第79図　3区SK01実測図（2）遺物出土状況（S＝1/30）



第80図　SK01実測図（1）（S＝1/30）



第81図　SK01実測図（2）（S＝1/30）

第21表　3区　5号墳出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
71-1	42	5号墳	坏身 (須恵器)	口径11.5cm	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ(底部) 内面:回転ナデ、沈線	1mm以下の白色砂粒若干含む	良好	青灰色	口縁部に段を有する
71-2	42	5号墳	坏身 (須恵器?)	口径(11.5cm) 器高5.2cm	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ(底部) 内面:回転ナデ	2mm以下の砂粒をやや多く含む	不良?	肌灰色	口径推定復元 口縁は1/2以上欠損 全体的に風化がはげしい
71-3	42	5号墳	瓹 (須恵器)	口径12.8cm 器高13.4cm	外面:回転ナデ、波状紋、 沈線、回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ、波状紋	2mm以下の砂粒をやや多く含む	良好	暗青灰色	

第22表　3区　6号墳出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
74-1	42	6号墳溝	甕 (須恵器)		外面:タタキ 内面:当て具痕	1～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡青灰色	

第23表　3区　7号墳石棺内出土遺物(玉類)計測表

挿図番号	写真図版	出土地点	器種	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)	材質	色調	備　　考
77-1	41	石棺内	管玉	27	7.4×7.8 7.5×7.1	3.2×3.3 1.4×1.35	碧玉	深緑色	片面穿孔
77-2	41	石棺内	管玉	10	5.6×5.7 4.65×4.8	1.25×1.35	ガラス	藍色	片面穿孔?
77-3	41	石棺内	管玉	10	4.5×4.45	2.45×2.1 1.6×1.65	碧玉	淡緑色	片面穿孔
77-4	41	石棺内	臼玉	3	5.7×5.6	1.45×1.45	碧玉?	淡緑色	
77-5	41	石棺内	臼玉	5	7.0×6.5	1.2×1.8	ガラス	藍色	
77-6	41	石棺内	丸玉	3.5	5.6×5.7	1.35×1.35	ガラス	藍色	
77-7	41	石棺内	丸玉	5	6.5×6.5	2.35×2.8	ガラス	水色	
77-8	41	石棺内	丸玉	5	7.2×6.8	1.2×1.2	ガラス	藍色	
77-9	41	石棺内	未製品?				水晶	透明	

第24表　3区　SK01出土遺物観察表

挿図番号	写真図版	出土地点	種　別	法量(cm)	手法の特徴	胎　土	焼成	色　調	備　　考
78-1	42	SK01	坏蓋 (須恵器)	口径(13.8cm) 器高(4.75cm)	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ(天井部) 内面:回転ナデ、 静止ナデ(天井部の一部)	1mm以下の砂粒少量含む	良好	淡青灰色 (やや黄色をおびる)	口径推定復元
78-2	42	SK01	高坏 (須恵器)	口径15.7cm 器高11.2cm 底径9.6cm	外面:回転ナデ、 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ (一部回転ナデ後静止ナデ)	1mm以下の砂粒若干含む	良好	淡黄灰色	台形3方スカシ

(註1) 島根県教育委員会『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』1998
島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡(F区)』1997

(註2) 土器の年代については、松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年・山陽・山陰編』を参考にした。

(註3) 土器の年代については、大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』11　1994を参考にした。

第４節　まとめ

１．弥生時代の遺構・遺物について

弥生時代の遺構は、１区から２基（SI01、SI06）、２区から１基（SI01）の計３基の建物跡が検出された。いずれのものも出土遺物から弥生時代後期前半と考えられるものであるが、それぞれに異なった様相もみせている。以下、気づいた点を述べてみたい。

（１）平面形について

前節において報告したとおり、検出した3基の平面形はいずれのものも円形と方形または多角形との中間的な形態となっている。

弥生時代後期前半代には、竪穴の平面形が比較的小規模なものは円形プランから隅丸方形プランに、比較的大規模なものは円形プランから隅丸多角形プランのものにというように、円形プランのものから隅丸方形・隅丸多角形プランへと次第に変化していくことが指摘されている。(註１)

今回確認したものは、いずれのものもそれらの中間的な形態であり、そうした現象の一端を示しているものと思われる。

（２）立地について

１区SI01は標高約30m、（水田面からの比高約25m）のほとんど丘陵頂部ともいえるところに位置している。同じく１区において確認されたSI06が標高約17m（同　比高約12m）に位置していることからみても、高所に立地しているのがわかる。また２区SI01はこれらの遺構からは離れた西側斜面に単独で存在してようであり、それぞれの遺構によって立地に違いを見せている。

後期前半代には集落の立地にも変化が認められる時期とされ、丘陵辺縁部に立地するもののほかに標高30m前後の低丘陵上に立地する集落が出現してくることが指摘されている。(註２)その背景としてなんらかの緊張状態があった可能性も考えられており、大堤Ⅱ遺跡において確認されたものにもそうした側面があることも考えられる。

しかしながら本遺跡においては、距離的にも近くまた時間的にも近いと考えられるものが高所にまとまって立地しているのではないことを考えると、同時期の併存でなおかつ同一の集落として捉えた場合、集落内におけるそれぞれの建物のもつ機能や役割が異なり、それが立地に反映された可能性もあると推測される。

（３）その他

２区SI01における覆土の状況はやや変わっており、炭化物を含む黒色系の層が複数層確認された。同様の例は安来市所在の門生黒谷Ⅲ遺跡SI10岩屋口北遺跡SI04おいても認められる。(註３)特に門生黒谷Ⅲ遺跡SI10はその上に古墳が築造されているという点においても同じである。

今回こうした例が再び確認されたことは同様の例がほかにも存在し、なんらかの行為がおこなわれた可能性を示すものと考えられ注目される。

また１区SI06の中央ピットからは高坏が出土しているが、いわゆる中央ピットから土器が出土する例は比較的多くあるようで、当地域の弥生時代のものとして安来市所在の岩屋口北遺跡SI04などが知られている。(註４)出土する土器には高坏などが多く認められるようであり、住居廃棄時に火処に関する祭祀を行った結果とも考えられている。(註５)本遺構においてもそのような行為が行われたことを示すものと考えられる。

布志名地区で弥生時代の遺構が確認されたのは初めてであり、玉湯町内においてもそれほど多くは知られていない。今回断片的ながらもそのような遺構が確認されたことは、この地域における弥生時代を考える上での一つの手がかりになるものと思われる。

2．奈良～平安時代の遺構・遺物について

奈良～平安時代の遺構は全部で６基検出した。いずれも残存状況の良くないものであり、全容が把握できるものはない。しかしながら、これまで布志名地区ではこの時期の遺跡はあまり知られておらず、同年度に調査した布志名遺跡において確認された建物跡が知られる程度である。今回の調査において確認された遺構や遺物は当地域の様相を知る上での一つの手がかりになるものと思われる。

ところで玉湯町では全国的に玉の生産が行われなくなる奈良～平安時代においても玉を生産していたことが知られ、その時期の玉作関係遺跡が展開している。岩屋遺跡(註６)、平床Ⅱ遺跡(註７)、蛇喰遺跡(註８)などはそうした時期の玉作遺跡である。大堤Ⅱ遺跡や布志名遺跡においてもわずかながら碧玉片などの玉材や砥石が出土しているものの、両遺跡はそうした玉作関係の遺跡とは異なった様相をみせており別の性格のものと考えられる。

さて、大堤Ⅱ遺跡からは１点ではあるがヘラで「由」と書かれた須恵器が出土している。蛇喰遺跡においても「白田」「由」「林」などのヘラ書きのある須恵器が多量に出土しており、報告では書かれた文字と地名との関係、またそれらの須恵器が近隣に所在する湯峠窯産のものである可能性が指摘されている。断言はできないものの、大堤Ⅱ遺跡出土のものもその可能性が高いと言えよう。

こうした同時期の遺跡がどのような関連をもつかは現状では明らかでなく、今後の課題としておきたい。

3．古墳時代の遺構・遺物について

古墳時代の遺構は古墳７基、SK01（石蓋土壙）１基の、全部で８基を検出した。これらについて若干の考察をしてみたい。

各古墳の築造時期については出土遺物が少なく明かでないものもあるが、時期の分かるものとしては、１号墳、５号墳、SK01があり、それぞれの古墳はその出土遺物から６世紀を中心とする時期に築かれていることがうかがえる。また時期の判断できる遺物は出土していないものの、これらと比較的同時期に築造されたと推測されるものは６号墳と７号墳である。

また今回調査した古墳７基のうち４基はその主体部に箱式石棺を用いており、箱式石棺をもつ古墳が比較的多いといえる。そしてそれらを採用している古墳はほとんどが10mを越えない小規模なものである。また墳丘を持たないSK01は石蓋土壙という形態であり、規模などによって採用される埋葬施設に違いをみせているようである。

ところで布志名周辺においてはいくつかの古墳が知られている。未調査でありその概要ははっきりとしないものの古墳時代後期のものと推測されており、今回調査したものも併せてこの時期に多くの古墳が築かれているようである。

古墳時代後期には花仙山周辺に玉作工房が集中してくることが指摘されており、本遺跡周辺でも布志名狐廻遺跡など後期の玉作遺跡が展開している。これらが直接関連があるかどうかは別として

も、そうした事実は興味深いことと思われ注目される。

(註)

1. 丹羽野 裕・池渕 俊一
『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会　1998
2. 註1に同じ
3. 島根県教育委員会『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（F区)』1997
4. 註3に同じ
5. 池渕俊一『石田遺跡』島根県教育委員会　1998
6. 島根県教育委員会「埋蔵文化財調査センター年報Ⅵ」1998
7. 註6に同じ
8. 玉湯町教育委員会『蛇喰遺跡』1999

第６章　大堤Ⅰ遺跡

第１節　大堤Ⅰ遺跡の位置

大堤Ⅰ遺跡は八束郡玉湯町大字布志名にあり、大堤Ⅱ遺跡から谷一つ隔てた西隣の丘陵の尾根上に位置する（**第82図**）。尾根のピークとなる部分で古墳１基を、また古墳の裾付近で石棺墓１基を検出した。

第２節　調査前の状況

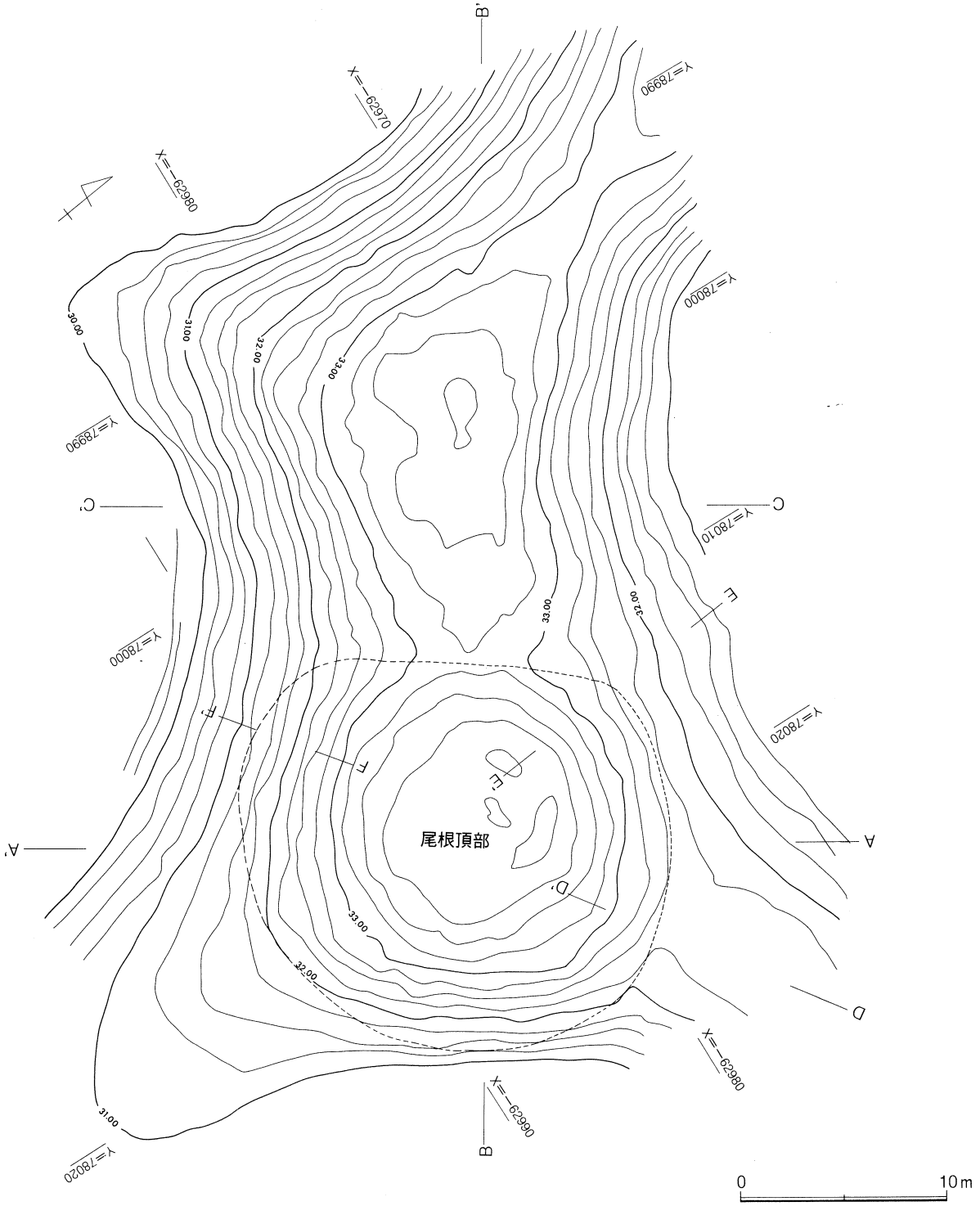
同遺跡を伐採して地形測量した際には、尾根上のピークを後円部、ピークから北西へ伸びる尾根筋を前方部とする前方後円墳と予想した（**第83図**）。しかし、試掘調査の段階で、墳丘と尾根筋を区画する区画溝が検出された（**第84図**Ｂ断面）。一方前方部の墳端と見られる地形は確認されなかった。よって、後円部と見た尾根上のピークのみが墳丘となる円墳と判断した。

第３節　１号墳

（１）区画溝　墳丘から北西及び東方向へ続く尾根筋と墳丘との間には溝が掘られ、墳丘と尾根筋部分を区画している。この溝は、これら二方向の尾根筋との境にのみ見られるもので、墳丘を全周していない（**第84図**）。現況で最も深い部分でも50cmしか残っていない浅い溝である。墳丘の南へ続く尾根は調査区の範囲外であったが、現地形の観察や地形測量を実施したところ、ここにも区画のための溝らしき地形は見出されなかった（**第83図**）。古墳と北西・東の尾根を画するだけが目的の溝であったと考えられる。

（２）墳丘の規模と形態　尾根筋との区画溝が直線的であるのを除けば、大堤Ⅰ遺跡１号墳の墳裾

第82図　大堤Ⅰ遺跡調査区位置図（S=1/2000）

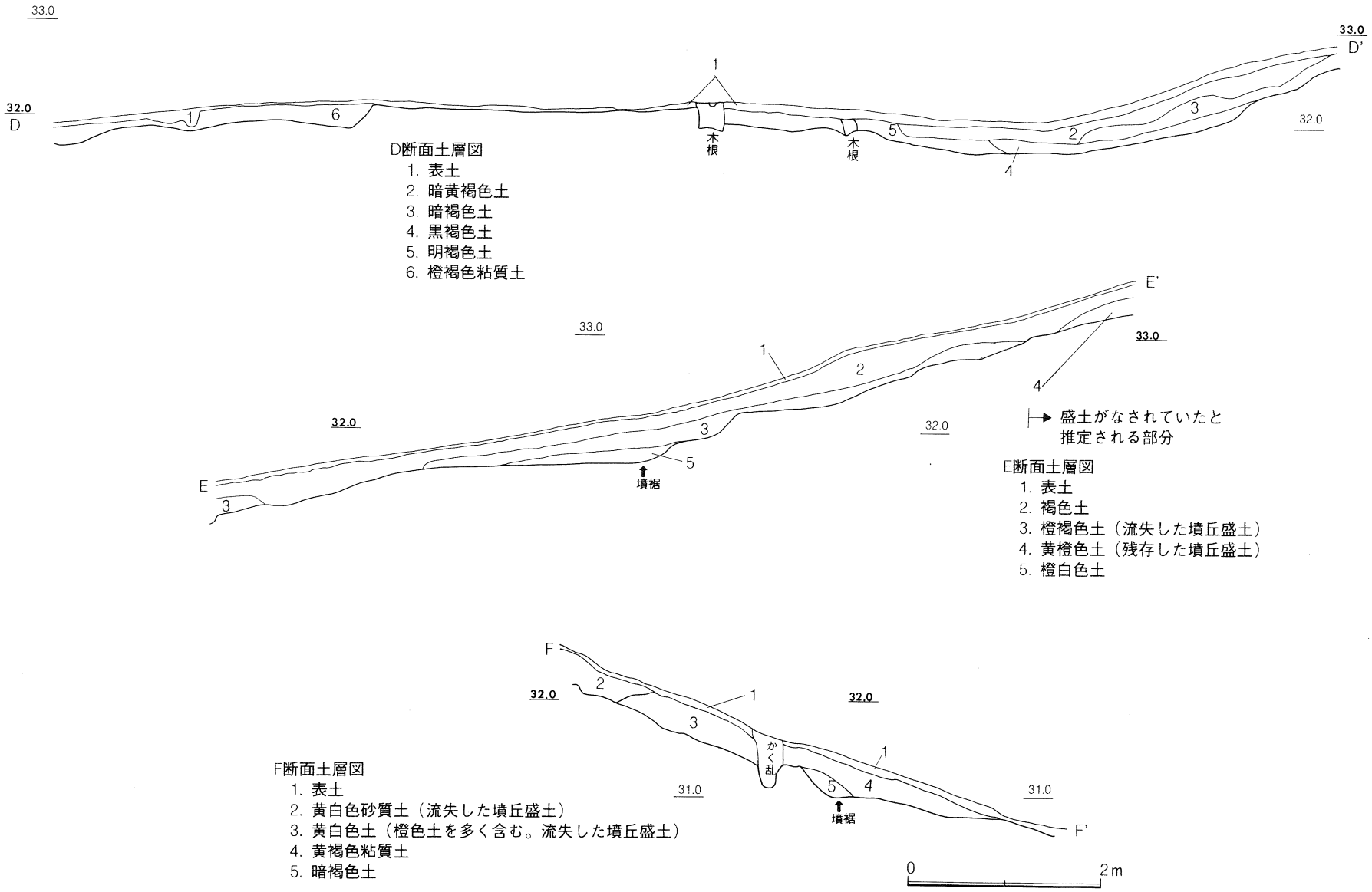


第83図　1号墳周辺地形測量図（調査前）（S＝1/300）

の平面形は基本的に円であり、直径約20mの不整形な円墳である。墳丘の現存高は、北西尾根筋との区画溝の底からは1.1m（**第84図**B断面）、東尾根筋との区画溝の底及び東墳裾からは2.1m（**第85図**D、E断面）、西の墳裾からは2.8mを測る（同F断面）。また、墳丘から南へ続く尾根筋の現地形は、東側の墳裾とほぼ同じレベルを境に傾斜が緩くなっている（**第83図**）。このように、墳丘は北西方向を除く各方向から大きく見えるよう築造されている。

墳丘の現存部分の最高所は径9～10mの平坦面となっている。この平坦面が、墳頂とするには広すぎ、周囲からの比高も低すぎること、及び埋葬施設の検出されないことから、後世に大規模な削

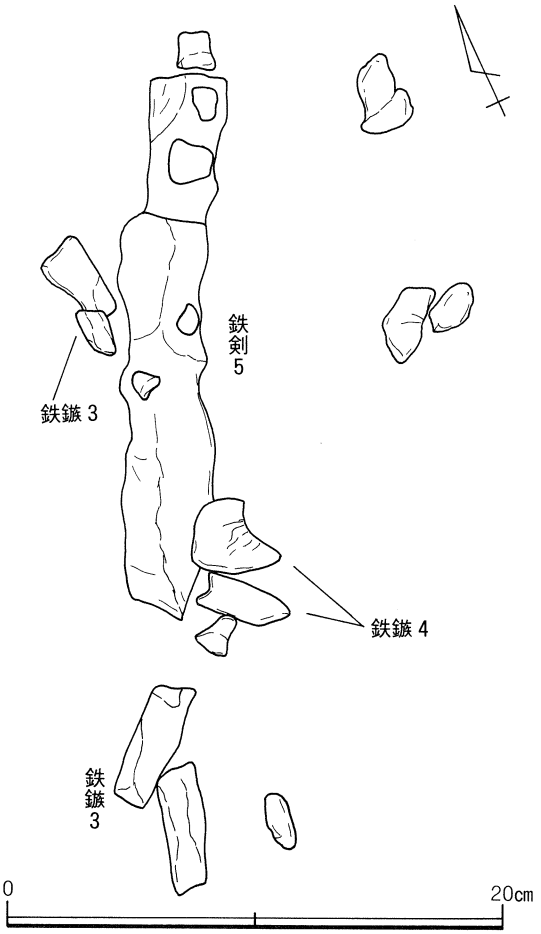
第84図　調査区地形測量図（調査後）及び土層図



第85図　墳丘土層図（図中の記号は第84図に対応）（S＝1/60）

平を受けたものと判断される（以下、この平坦面を「現況墳頂部」と称する）。

（3）土層堆積状況　**第85図**Ｅ断面では、同じ橙色系の土でもより鮮やかな橙色を呈する墳丘盛り土（第４層）と、褐色を帯びた盛り土の流失土（第３層）とを識別することができる。また、**第84図**Ｂ断面でも鮮やかな黄橙色の土（第８層）が墳丘盛り土の残りと見られる。これらによれば、現況墳頂部より上方には盛り土がなされたようである。その他の断面に見られる墳丘の流失土は、墳丘東側のＡ断面東半で橙色系（**第84図**）、西側のＦ断面では黄白色系である（**第85図**）。これは、墳丘の地山が東半分では橙色系、西半分では黄白色系であることに対応しており、手近な地山の土を削って盛り土としたことを示している。



第86図　1号墳遺物出土状況（S＝1/3）
（図中の番号は第88図に対応）

（4）遺物出土状況（第84・86図）　現況墳頂部中央の地山面より、鉄製の剣１点、鏃２点がまとまって出土した。また、東側の墳丘斜面下部から区画溝にかけての覆土中には、土師器の壷棺及び壷の破片が広い範囲に散布していた。土師器は、周溝底面から浮いた状況で出土している（**図版46**）ので、当初から墳裾あるいは溝中に埋置されたものではなく、墳丘が削平された際に廃棄され、出土位置まで転落してきたと見られる。これに対し、鉄器は墳丘が大幅に削平されたにもかかわらず墳丘上にとどまっているので、原位置を大きく動いていない可能性が高い。恐らく、ちょうど現況墳頂部＝埋葬施設の底のレベルまで削平がなされた際、丈が高い壷棺と壷は破壊者の目にとまって傍らの溝にうち捨てられたが、埋葬施設の底にあった鉄器類は平たいので気づかれないままに残ったものと考えられる。

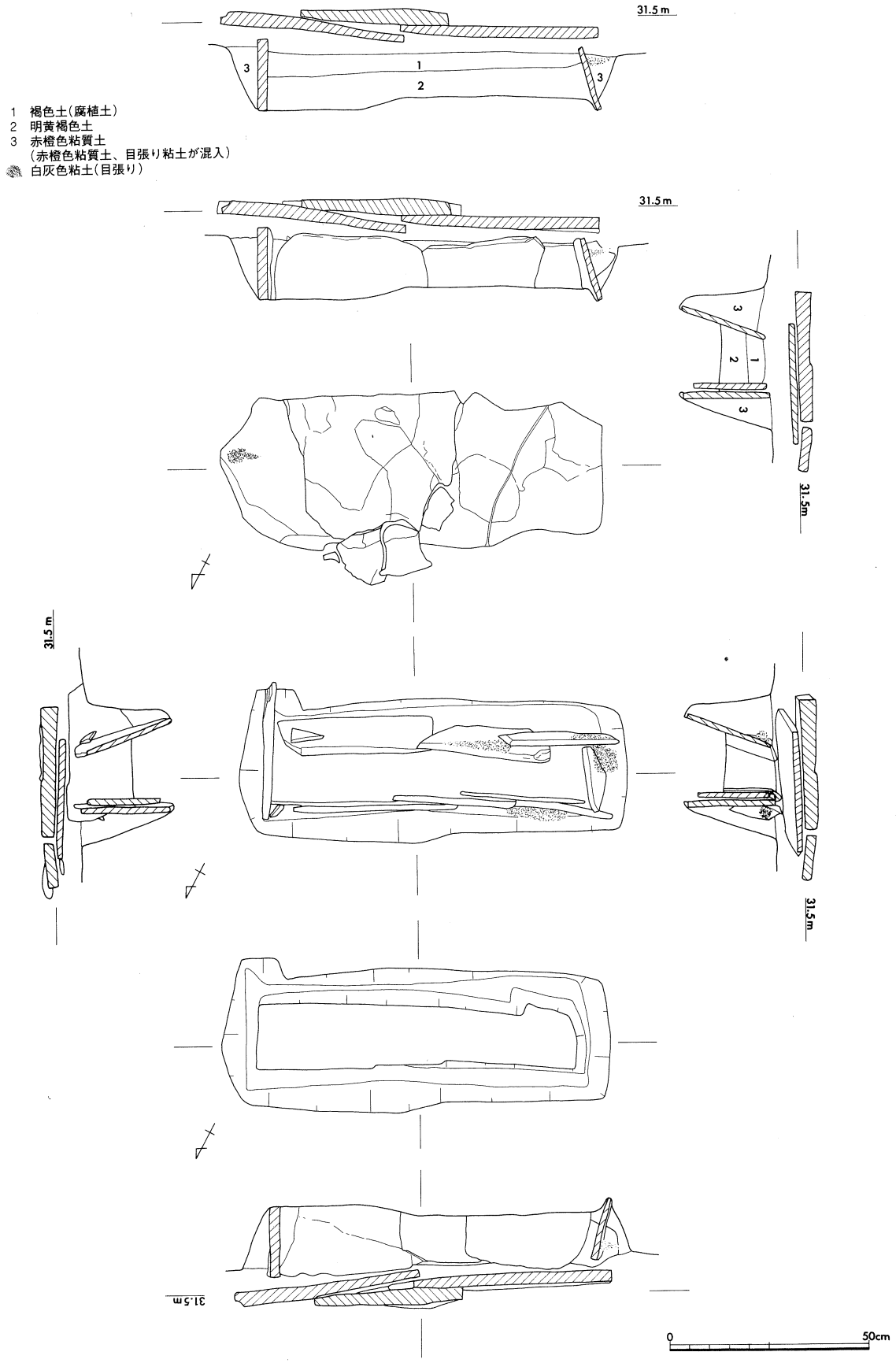
（5）墳丘築成の過程　以上の諸状況から、以下のような墳丘築成の過程があったと推定される。①北西を除く各方向の地山を削って、現況墳頂部までを成形する。同時に、削り出した土を盛り土して墳丘を作る。②墳丘築成後、頂部中央に墓坑を掘る。又は②′墓坑となる部分を残して墳丘を築成する。墓坑の床面は現況墳頂部と一致する。③主体部を作り、壷棺に納めた遺体を埋葬する。④墓坑を埋め戻す。

第４節　１号石棺墓（第87図）

（1）規模と形態　古墳の東側裾より約４ｍ東方に、地山を掘り込んで箱式石棺墓が１基作られていた。

主軸はＮ－62°―Ｅをとり、古墳の東へ伸びる尾根にほぼ平行する（**第84図**）。

内法で長さ81㎝、幅18～15㎝、高さ17㎝を測る。小口石は、東側小口には幅が広く、厚く、重



第87図　1号石棺墓実測図（S＝1/15）

みのある石（幅35cm、厚さ３cm）を、西側小口には幅、厚さとも約半分の石（幅15cm、厚さ1.5cm）をそれぞれ一個ずつ用いている。石の組み方は、東側は小口石が側石に蓋をする置き方であるのに対し、西側は小口石の幅が狭いため、小口石が側石に挟まれる組み方になっている。側石は、西側の小口石と同じ厚さ（1.0～1.5cm）の薄い石を、北側は４枚、南側は３枚用いて壁を構成する。西側が東側に比べて幅が３cm細くなるように配置する。以上のように、１号石棺墓は西小口に対して東小口を広く作っている。通例の箱式石棺と同様、本石棺墓も広い方に頭部を向けて埋葬されたと考えられる。

（２）掘り方　これらの石を据え付けるための掘り方は、小口石の底は棺床とほぼ同レベルで浅いのに対し、側石はいずれも棺床より深く差し込まれている。側石はいずれも薄くて自立できないので、掘り方を深くして立たせたのであろう。南の側石の掘り方はやや内傾しているが、これは土圧で傾いたものではない。目張り粘土が乱れていないことからも、築造当初から意識的に内傾させたものと判断される。他方で、小口石の掘り方は東西両側ともに浅いため、厚みの無い西側の小口石は自立できないので、南の側石を内傾させ、西小口石を北の側石との間にはさみつけて立たせたと考えられる。

（３）目張り粘土　側石や西小口石の上端付近に部分的に確認されただけで、蓋石の上や外にははみ出ていなかった。一部の側石、小口石を接着する目的のみに使用されている。目張り粘土の使用が限られていてすき間が多かったため、調査時には外部の土や木根が棺内に多く流入していた。

（４）蓋石　大型の厚い石を３枚使用して石棺を覆っている。３枚の大きさはほぼ同じであるが、頭側のものはわずかに脚側のものより幅広い。

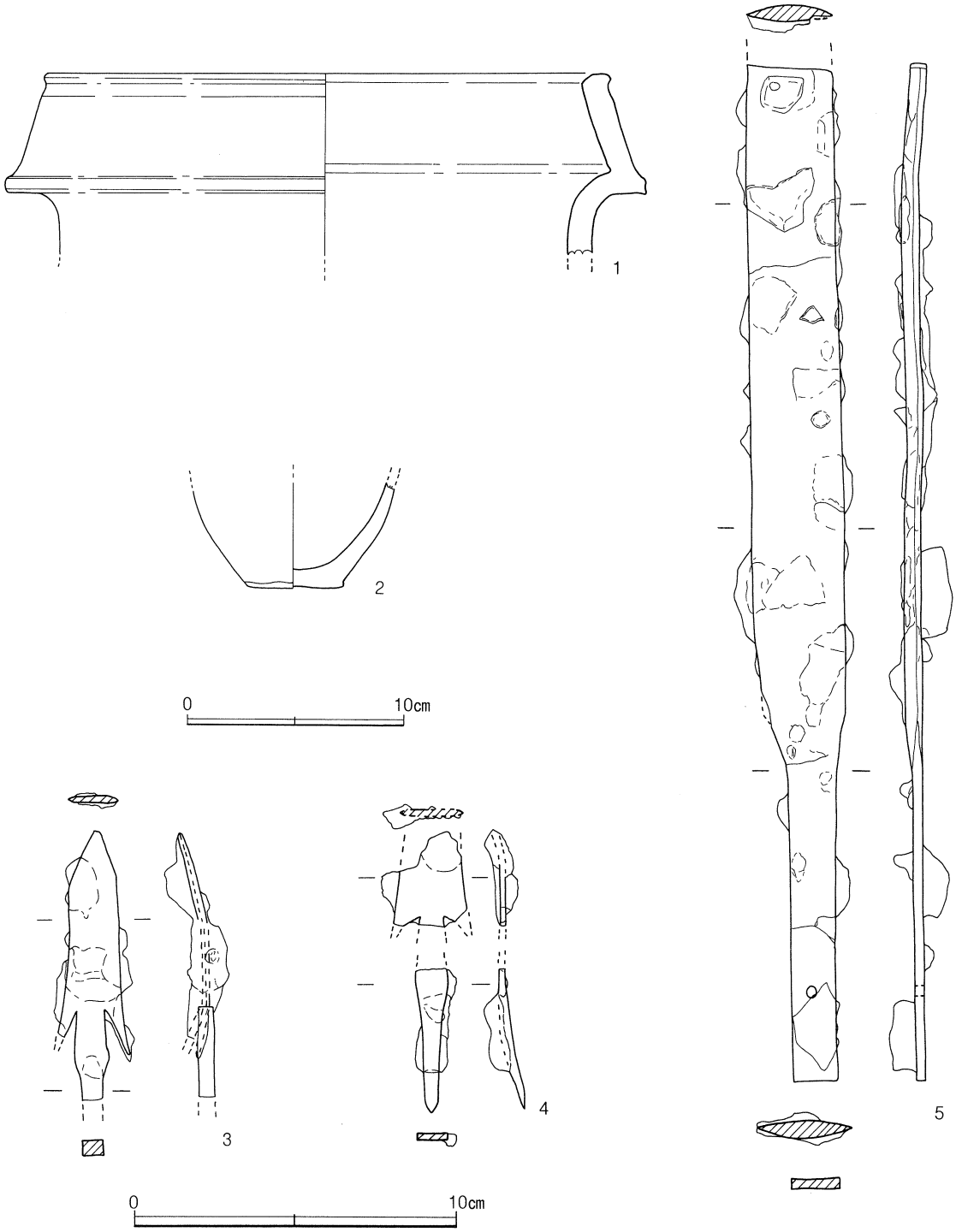
（５）構築の過程　上記の諸状況と土層観察より、次のような構築の過程が考えられる。

①小口石が埋置できる深さまで長方形の掘り方を掘る。②一段と深い側石の掘り方を掘る。③小口石、側石を組み合わせて据え付ける。④上端付近を目張り粘土で互いに接着する。⑤棺外の小口石と側石の上端まで土を埋め戻す。⑥蓋石を載せる。

③～⑤のいずれかの段階で遺体あるいは遺骨の入棺がなされたと推定される。

第５節　出土遺物（第88図、遺物観察表）

土師器２点（１～２）、鉄器３点（３～５）が出土している。１は大型壷の口縁部である。口縁下方の突出部は既にタガ状になっている。口縁端部は接地部のほか内側にも平坦面が作られる。その形式から古墳前期のものである。２は壷の底部である。１の壷棺底部としては底径が小さすぎるため、別個体とした。鹿島町奥才古墳群の第34号墳の墓坑では、大型の壷棺に小型の壷を蓋として被せて埋納した例が知られており、本品もそのように使用された可能性がある。３は、逆刺をもつ柳葉形の鏃である。完全な左右対称ではなく、頸部の右側縁の線を延長するとちょうど鏃身部の先端に当たる。茎部よりやや幅の広い箆被（のかつぎ）部が確認できる。４も、逆刺をもつ柳葉形の鏃である。鏃身部と頸部は、接合しなかったが、破断面の幅などから同一個体と見られる。箆被部があると思われるが、境界が明確でない。５は剣の茎及び刃部の一部である。刃部は両丸造りで鎬は認められない。完全な左右対称ではなく、茎が刃部の一方の側縁に寄っている。関は一部欠損しているが撫角関である。茎が偏っているため、関の造りも左右不均等となっている。茎は茎尻まで同じ幅を保ち、茎尻は直線的に裁断されている。茎尻から2.6cmの位置に、径３ｍｍの目釘穴が穿たれている。



第88図　出土遺物（1、2はS＝1/3、3～5はS＝1/2）

第25表　大堤Ⅰ遺跡遺物観察表

番号	種別	器種	法　　量	備　　考
1	土師器	壺	口径：25.8cm、器高：8.4cm	色調:灰褐色、焼成:良好 胎土:1mm以下の白色粒を少し含む
2	土師器	壺底部	底径：4.6cm、器高：4.9cm	色調:淡黄褐色、焼成:良好 胎土:1mm以下の石英粒、白色粒を少し含む
3	鉄器	鏃	鏃身部:長さ5.9cm　厚さ2mm　幅1.55cm 箆被部:長さ2.1cm　厚さ5mm　幅1.0cm 茎部:長さ6mm　厚さ5mm　幅6.5mm	重量：16.85g
4	鉄器	鏃	鏃身部:長さ6mm　厚さ5mm　幅6.5mm 箆茎～部:長さ4.4cm　厚さ2～3mm　幅4～10mm	重量：8.95g
5	鉄器	剣	身部:長さ20.2cm　厚さ3mm　幅2.9mm 茎部:長さ10.3cm　厚さ5.5mm　幅1.6cm	重量：134.79g

第6節　小結

大堤Ⅰ遺跡1号墳は、その区画溝から出土した壷1より、古墳前期末と判断される。古墳前期末～中期初頭にかけて、方墳が主体であった出雲地方にも円墳が導入されるが[註1]、本古墳が築造されたのもその傾向の一環であったと考えられる。出土した大型壷の用途は、①奥才34号墳の如く合せ口式に組み合わされ、古墳の主体部として使われた、②墳頂への供献土器として使用された、③破砕され、その破片で被葬者を覆った、④周溝や墳裾の土坑内に埋置され、祭祀に使われた、等が考えられる[註2]。このうち、④は周溝底面から浮いて出土したことから否定される。①も有力な可能性であるが、主体部として使われた例は陽徳遺跡Ⅱ区1号墳（方墳、5～6m）[註3]、奥才34号墳（方墳、11m）などの小規模古墳であり、箱式石棺などに比べ1ランク下の埋葬施設と考えられる[註1]。本古墳（円墳、20m）程度の規模を持つ奥才14号墳（円墳、18m）、五反田1号墳（円墳、25m）などは箱式石棺や石槨を主体としている[註4]。従って、既発見の古墳のデータから見る限り、出土した大型壷は本古墳の主体部とみるよりも②、③のような使われ方をされた可能性が高い。

大堤Ⅰ遺跡の石棺墓は幅15～18cmときわめて小さい。このような小型の石棺墓については、成人の死体をそのまま収納するには小さすぎるので、乳幼児の墓あるいは洗骨による再葬墓とされている。しかし、本遺跡から1.2km東に位置する大谷Ⅲ遺跡では、乳幼児の頭蓋骨さえ収納できないほど小規模な石棺墓が検出されており（大堤Ⅲ遺跡1号石棺）[註5]、上記のような説明だけでは不足である。今日の火葬と同様遺骨を破砕したものか、死体の一部の骨を選択して埋葬したか、いずれにせよその埋葬法については幅広く検討する必要があろう。

（註）

1.『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』（島根県教育委員会、1998年）第3章第2節（2）

2.松本岩雄「墳丘出土の大形土器」（『山陰考古学の諸問題』（山本清先生喜寿記念論集刊行会、1986年）

3.『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』（島根県教育委員会、1995年）

4.このような古墳間の階層秩序は、島根県鹿島町奥才古墳群や、安来市の五反田古墳群などで確認されている。（『奥才古墳群』（鹿島町教育委員会、1985年））

5.『布志名大谷Ⅲ遺跡』（島根県教育委員会、2001年）

第７章　樅の木古墳群

第１節　遺跡の位置と調査の概要

樅の木古墳群は、八束郡玉湯町大字布志名607番地外に所在する。東方に開口する小さな谷地形の南側緩斜面に立地し標高23～26mを測る。現状では、東・西・南方の周囲が山林に囲まれており眺望は良くない場所といえる（第89図）。

当古墳群は、平成６年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財分布調査の際、既に周知遺跡として認識されていた。調査前の現地は主に植林と雑木林からなる山林であったが、地表面観察によりマウンド状の地形が確認され、少なくとも小規模古墳が２基以上存在するものと推測された。

発掘調査は、平成10年（1988）８月17日に着手した。まず、調査前の地形観察、地形測量を丁寧に実施した。その後、明らかに古墳の存在が予測される地点を除き、遺構遺物の埋蔵状況の把握、調査対象地の範囲確認のためトレンチ調査（トレンチ総数18箇所）を実施した。その結果、同年９月４日、発掘調査区Ⅰ区・Ⅱ区（第90図）を設定し、総面積約1,500㎡を対象とする全面発掘を開始した。調査は雨がちな天候に左右されたもののほぼ順調に進み、同年10月22日には作業員を撤収した。調査開始から実働のべ約36日間の現地調査であった。

発掘調査の結果、遺構として、Ⅰ区から古墳２基（１号墳・２号墳）、Ⅱ区から溝状遺構3条をそれぞれ検出した。

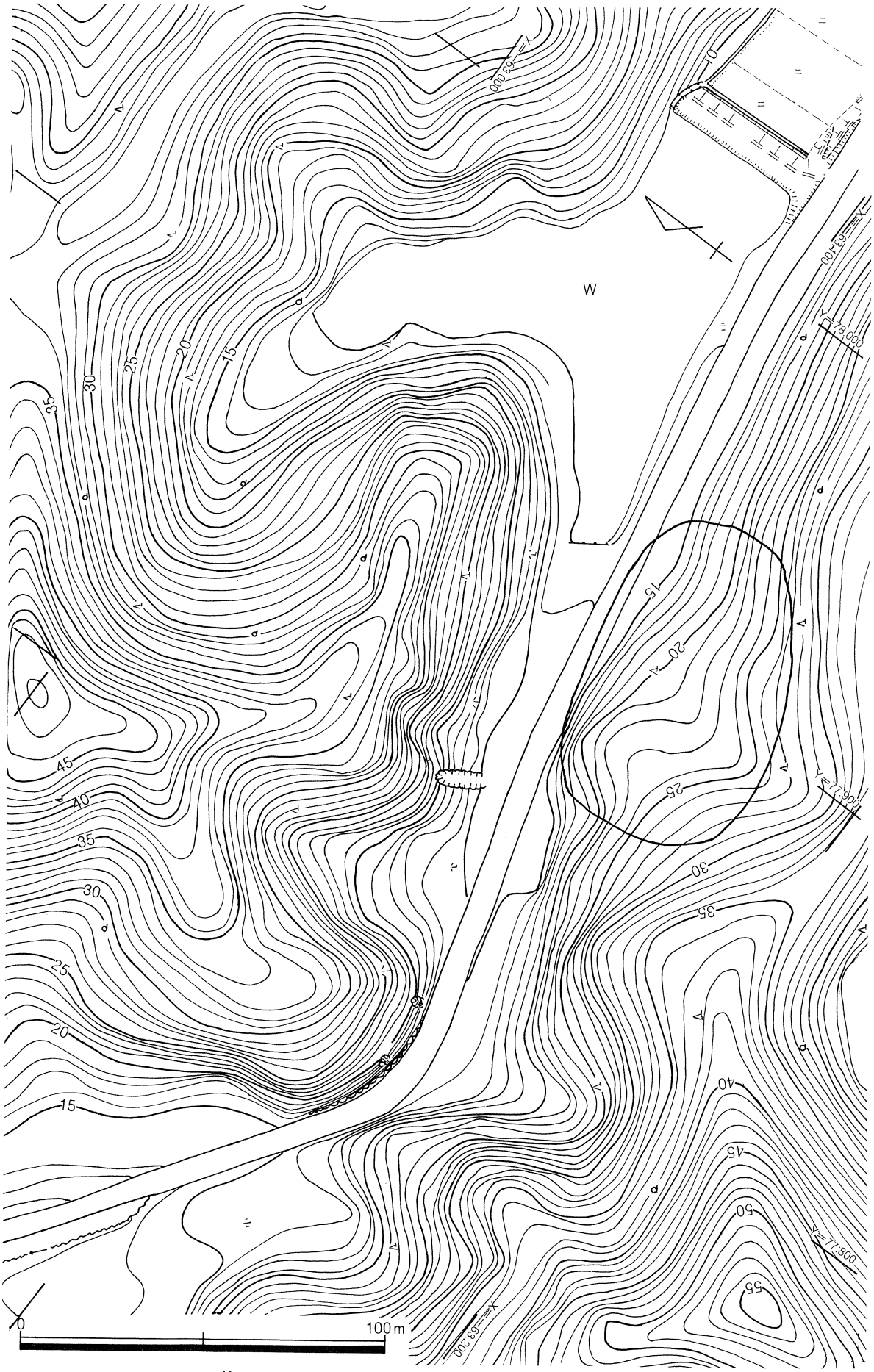
１号墳は、一辺約8m、高さ約1.5m弱を測る方墳で、墳裾に浅い周溝をもつ。この周溝は墳丘のほぼ四隅が浅く掘り残されており、陸橋状の構造を呈している。墳丘は、旧地表を整地後、盛土によって成形したものと推定される。埋葬主体は素掘りの土壙１基で墳丘中央の盛土層から検出された。土壙内からは鉄鏃、刀子が出土し、墳頂部からは土師器が出土している。

２号墳は、１号墳北東側に近接して検出された。墳丘を「コ」の字形に画する浅い周溝をもつ。一辺約7m、高さ１m以上を測る方墳と推定される。既に墳頂部は削平あるいは流失したらしく埋葬主体は検出できなかった。

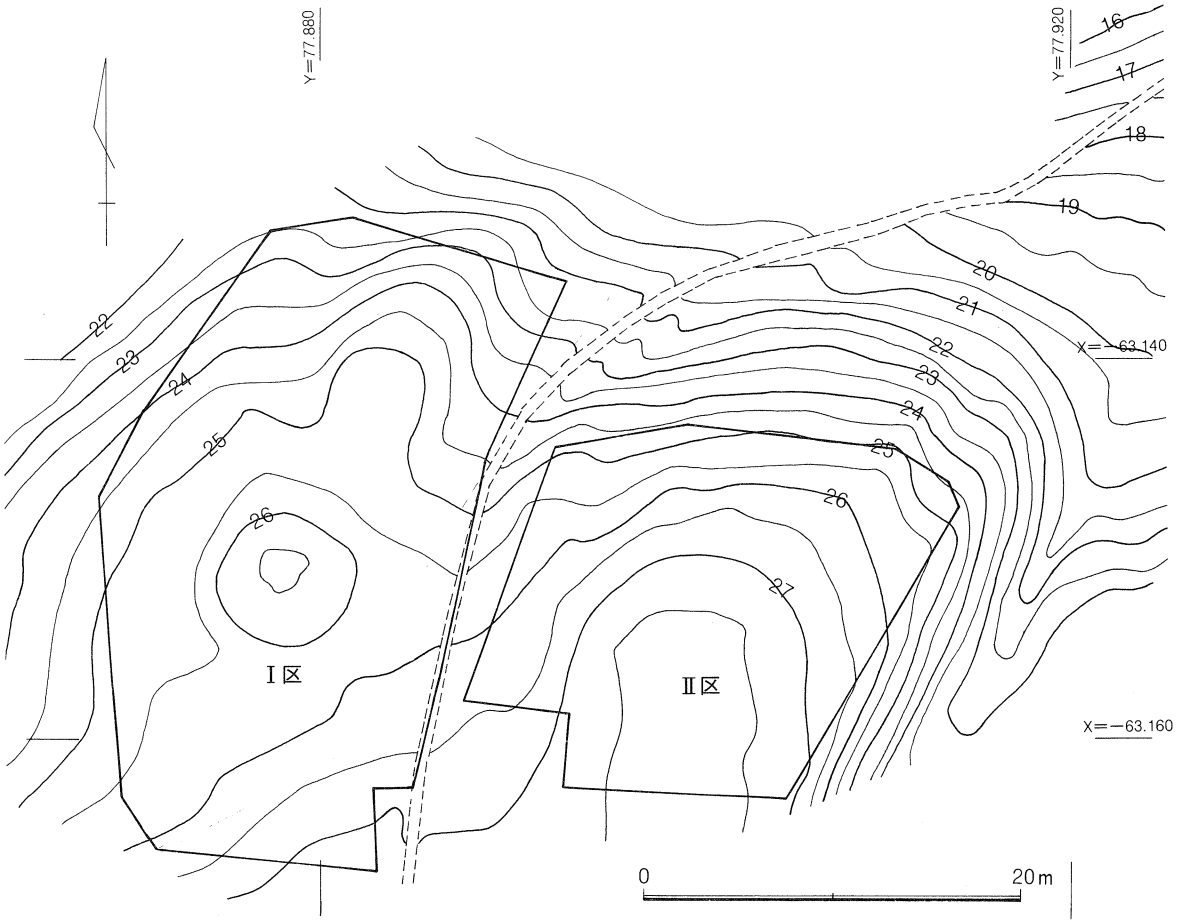
１号墳・２号墳ともに築造時期は判然としないが、出土遺物の特徴等から古墳時代中期前半頃のものと推定される。

Ⅱ区から検出された地山面を掘り込んだ溝状遺構は、遺物が伴わず時期、性格ともに不明である。

一方、特記すべき遺物としては、Ⅰ区南半を中心に広がる遺物包含層から出土した碧玉製勾玉・管玉の各種未成品や剥片、あるいは瑪瑙製勾玉の各種未成品や剥片、砥石類、鉄製品等の玉作関係資料がある。これらの大半は、古墳時代前期初頭頃の土師器を伴って出土している。玉作関連の遺構は検出されなかったが、周辺の緩斜面にその存在を示唆するものとして注目される。



第89図　縦の木古墳群調査対象地位置図（S＝1：1500）



第90図　調査前地形測量図・調査区配置図（S＝1：400）

第２節　調査の結果

１：Ⅰ区の調査

（１）調査前の状況と調査方法（第91図）

調査対象地はもともと植林・雑木林からなる山林であったが、地表面観察によって既に２基の方墳が存在するものと予測された。そこで、立木伐採後に地形測量を実施し、古墳の位置、墳形、規模、残存状況を検討し、土層観察用の畦（ベルト）３本の設定（第91図Ａ－Ａ’・Ｂ－Ｂ’・Ｃ－Ｃ’）を行なった。古墳２基が調査区のほぼ中央に位置することから、それぞれの畦を延長し調査区全体の基本層序の確認にも利用することにした。

１号墳・２号墳については、土層観察用の畦を残し、表土以下の堆積土を墳頂部から慎重に掘り下げた。墳形、規模、構築方法、築造時期の復元を念頭に置き、墳丘盛土、埋葬施設、旧表土層、地山面、周溝、伴出遺物の検出に努め、随時写真と実測による記録化を実施した。

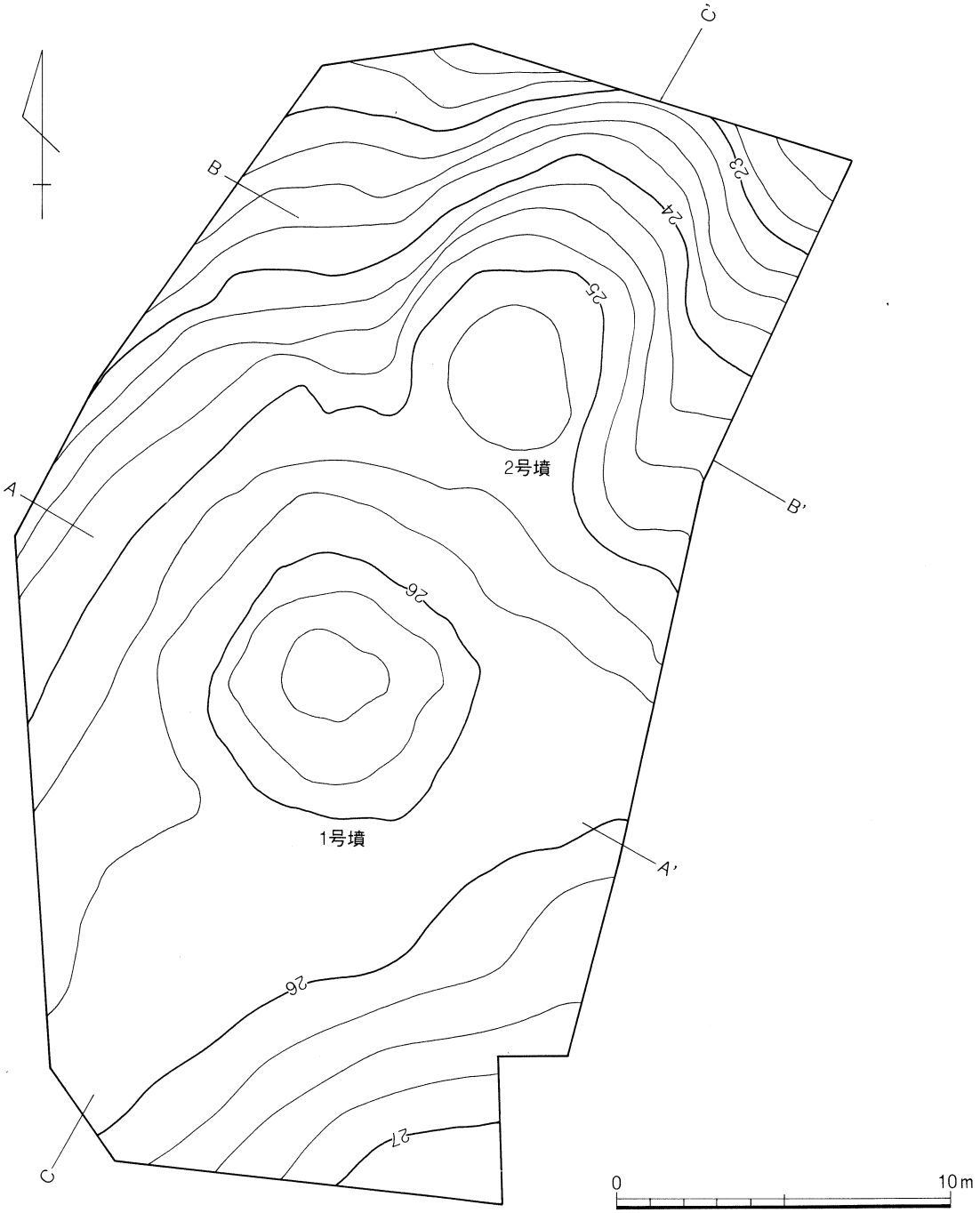
一方、前述した古墳時代前期初頭頃の遺物包含層については、上記の畦によって土層堆積状況、層序関係に留意しつつ平面的に掘り下げることに努めた。出土遺物については、包含する土層を肉眼観察に基づいて確認、記録しながら採取した。

（２）縦の木１号墳の調査

＜墳　丘＞

形態・規模（第91・92・93・94・95図）

平面形がほぼ正方形に近い方墳で、墳丘の四隅がおよそ東西南北方向に向くものである。四辺の



第91図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）調査前地形測量図（S＝1：200）

墳裾にはぞれぞれに並行する浅い周溝が認められる。墳丘は旧地表面を平坦に削平・整地したのち、盛土によって築成したものと推測される。築成方法の詳細は後述する。

墳丘規模は、現状において、およそ墳裾と認識された部位（周溝底面の内側を基準に計測）で一辺約８ｍ前後、周溝を含めると一辺約12ｍほどの規模である。墳頂部平坦面の規模については、現状の盛土検出面の傾斜変換点を追うと（第94図に朱色破線で表現）、一辺約６～７ｍを測る。墳丘の高さは、墳裾（周溝底面の内側と仮定）から墳頂部盛土検出面で、各辺とも約1.4ｍ前後を測り、四辺の墳裾レベルはほぼ同じであった。なお、検出した墳丘盛土面は、後世の流失や開墾による改変があったと予測され、必ずしも築造時の形態や規模と直結しないことは留意すべきである。

なお、墳丘には、段築や葺石等の外表施設は一切認められなかった。

土層堆積状況（第92・93図）

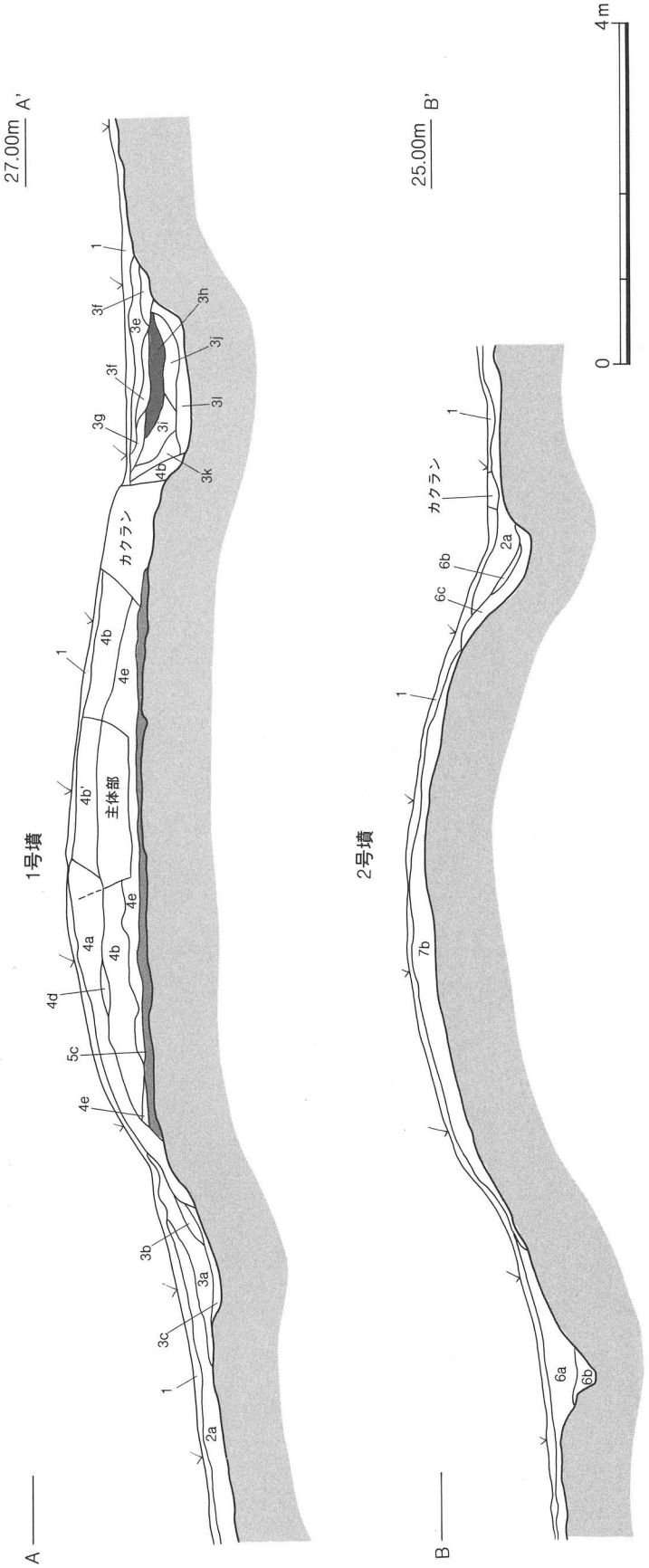
図示したとおり１号墳の墳丘に関する土層を大別すると表土下腐植土（１層）、地山上堆積土・撹乱土及び墳丘流土（２層）、１号墳周溝内堆積土（３層）、墳丘盛土（４層）、墳丘盛土下の旧表土・整地土（５層）、それに主体部内覆土という比較的単純な層序関係にある。墳丘盛土は、古墳群周辺の地山面で認められる黄・白色の地山ブロックを多量に包含しており、周辺の地山掘削土が盛られたものと推測される。

なお、墳丘盛土中に撹乱が生じているのは、後世の木根、植林の影響によるものである。

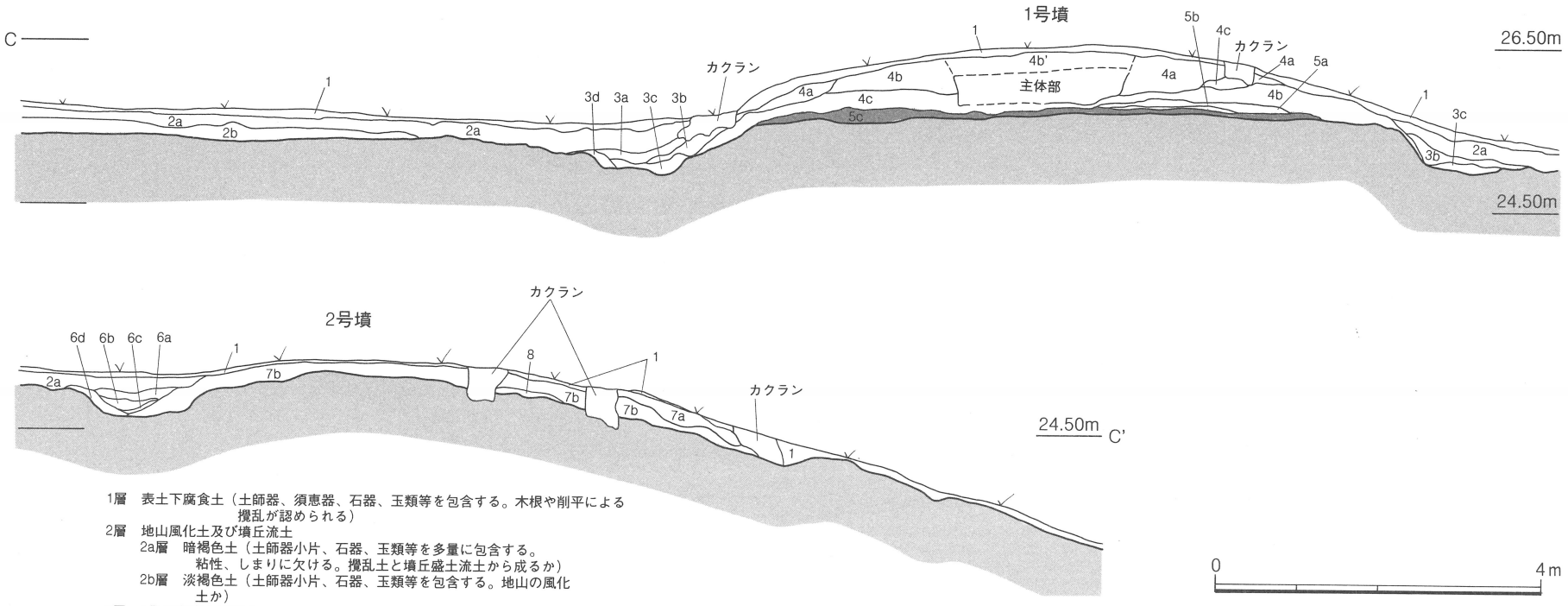
出土遺物（第92・93・96・99図）

木根や削平による撹乱が認められる墳丘の表土中からは、土師器小片十数点、玉未成品・剥片数点が散在して出土している。出土状況から原位置を保持した遺物は無いものと思われ、古墳に直接伴う遺物は特定しかねる。土器類は風化がかなり進み実測に耐えない小片が大部分で１点のみ図化した。なお、玉類については別項でまとめて記述する。

96－１は、墳頂部の表土直下から出土した土師器の甕片である。口縁部が「く」の字形に大きく外反するもので、復元口径15.2cmを測る。内外面の頸部から口唇部にかけてナデが、内面の頸部以下に風化のため不明瞭ではあるがヘラケズリが認められる。また口縁部外面の一部には、黒斑が見られる。焼成は良好でいわゆる肌色を呈し、径１㎜以内の微細



第92図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）土層A-A'・B-B'断面図
（S＝1：80）※土層説明は第93図土層C-C'参照



1層　表土下腐食土（土師器、須恵器、石器、玉類等を包含する。木根や削平による撹乱が認められる）

2層　地山風化土及び墳丘流土
- 2a層　暗褐色土（土師器小片、石器、玉類等を多量に包含する。粘性、しまりに欠ける。撹乱土と墳丘盛土流土から成るか）
- 2b層　淡褐色土（土師器小片、石器、玉類等を包含する。地山の風化土か）

3層　1号墳周溝内堆積土
- 3a層　淡暗褐色土（土師器小片、須恵器平瓶を包含する）
- 3b層　暗褐色土（土師器小片を包含する）
- 3c層　灰～黒褐色土（土師器小片、玉類、炭化物、焼土を包含する）
- 3d層　淡暗褐色土（土師器小片、玉類を包含する）
- 3e層　暗褐色土
- 3f層　淡黒色土（炭化物を微量含む）
- 3g層　淡黒褐色土
- 3h層　黒色炭化土（焼土と多量の炭化物を包含する）
- 3i層　淡暗褐色土
- 3j層　暗褐色土
- 3k層　暗褐色土（3b層に対応）
- 3l層　灰～黒褐色土（土師器小片、玉類、炭化物、焼土を包含する。3c層に対応）

4層　1号墳墳丘盛土
- 4a層　淡褐色土（地山ブロックを含む）
- 4b層　黄褐色土（地山ブロックを多量に含む。土師器小片を包含する）
- 4b'層　暗黄褐色土（主体部の墓壙内堆積土と墳丘盛土の区分は不明確。主体部直上に土師器1個体以上を包含する）
- 4c層　暗褐色土
- 4d層　淡灰褐色土
- 4e層　暗黄灰色土（地山ブロックを含む）

5層　1号墳墳丘盛土前旧表土・整地土
- 5a層　灰黒色土（5c層よりも色調明るい）
- 5b層　暗黄褐色土
- 5c層　灰黒色土（炭化物、土師器小片、玉類を包含する。粘性、しまりに欠ける。旧表土と推定）

6層　2号墳周溝内堆積土
- 6a層　暗褐色土（2a層よりも色調暗い）
- 6b層　淡黒褐色土（炭化物を微量包含する）
- 6c層　暗褐色土
- 6d層　暗褐色土（6c層よりも色調暗い）

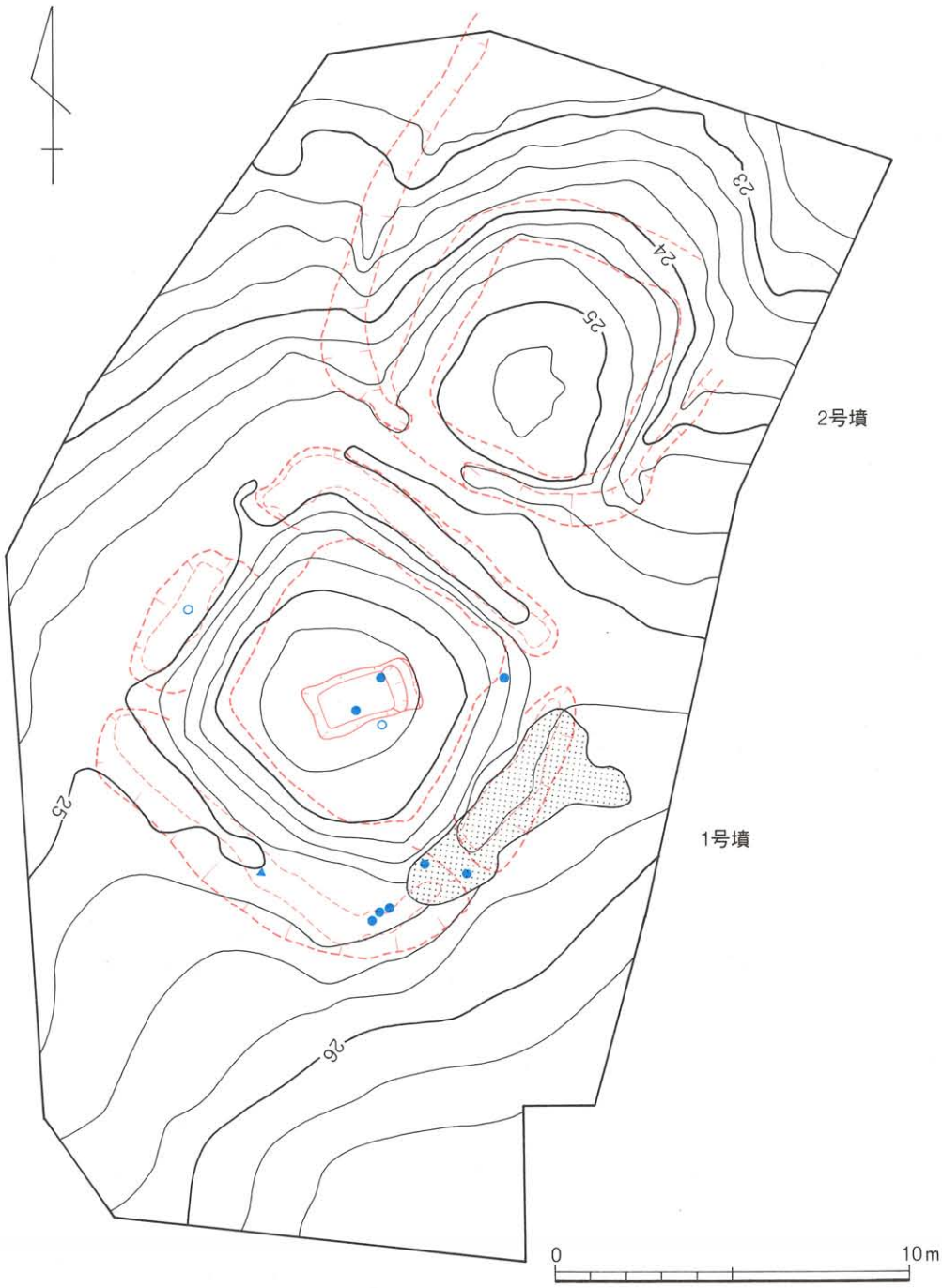
7層　2号墳墳丘盛土・地山風化土
- 7a層　暗褐色土
- 7b層　淡暗褐色土（地山ブロックを多量に包含する。地山風化土の可能性あり）

8層　2号墳墳丘盛土前の旧表土・整地土
淡灰褐色土（炭化物を微量包含する。旧表土あるいは整地土と推定）

第93図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）土層C-C'断面図（S=1：80）

砂粒を含む緻密な胎土からなる。時期は判然としないが、古墳時代の所産と考えられる。

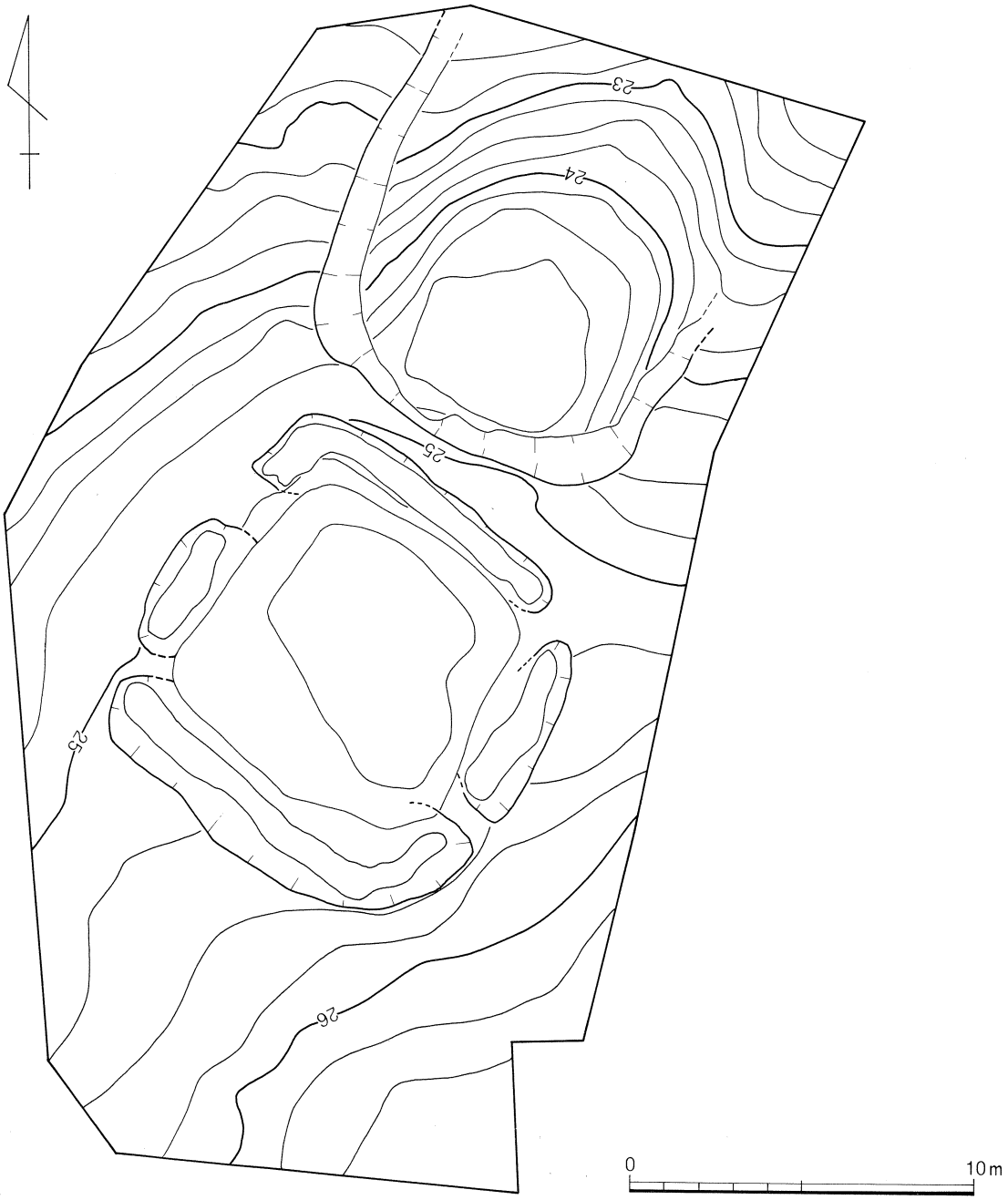
墳丘盛土中（第92・93図の４層）からは、風化の進んだ古式土師器らしき土器の小片多数（約コンテナ１／２箱分）と玉未成品・剥片数点が散在して出土している。出土状況からすると、墳丘築成時における盛土行為の際、偶然混入したものと推測される。墳丘築成に伴って意図的に埋納されたような遺物は認められなかった。ただし、埋葬施設である土壙直上からは土師器１個体が意図的に据え置かれたような状況で出土しており注意を要する。これについては埋葬施設の項で述べる。



第94図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）墳丘測量図（盛土検出時）S＝1：200
・青色の点は、墳頂面及び周溝内の主な遺物の出土地点を示す。
○＝須恵器、●＝土師器、▲＝鉄器
・アミ部は炭化物集中出土地点を示す。

盛土中出土の土器類は大半が実測に耐えない小片で、１点のみを図化した。玉類については別項を設けて記述する。

96－２は、墳頂部の盛土中（４ｂ層）から出土した土師器の甕形土器の口縁部小片である。複合口縁で口縁端部に平坦面をもち端部が若干肥厚する。復元口径約14cmを測る。器表は内外面ともに風化のための磨耗と剥離が進み、調整は不明瞭である。焼成は良好で明橙褐色を呈し、径１mm以内の微細砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。古墳時代前期初頭（草田７期）[註1]頃の所産と考えられる。



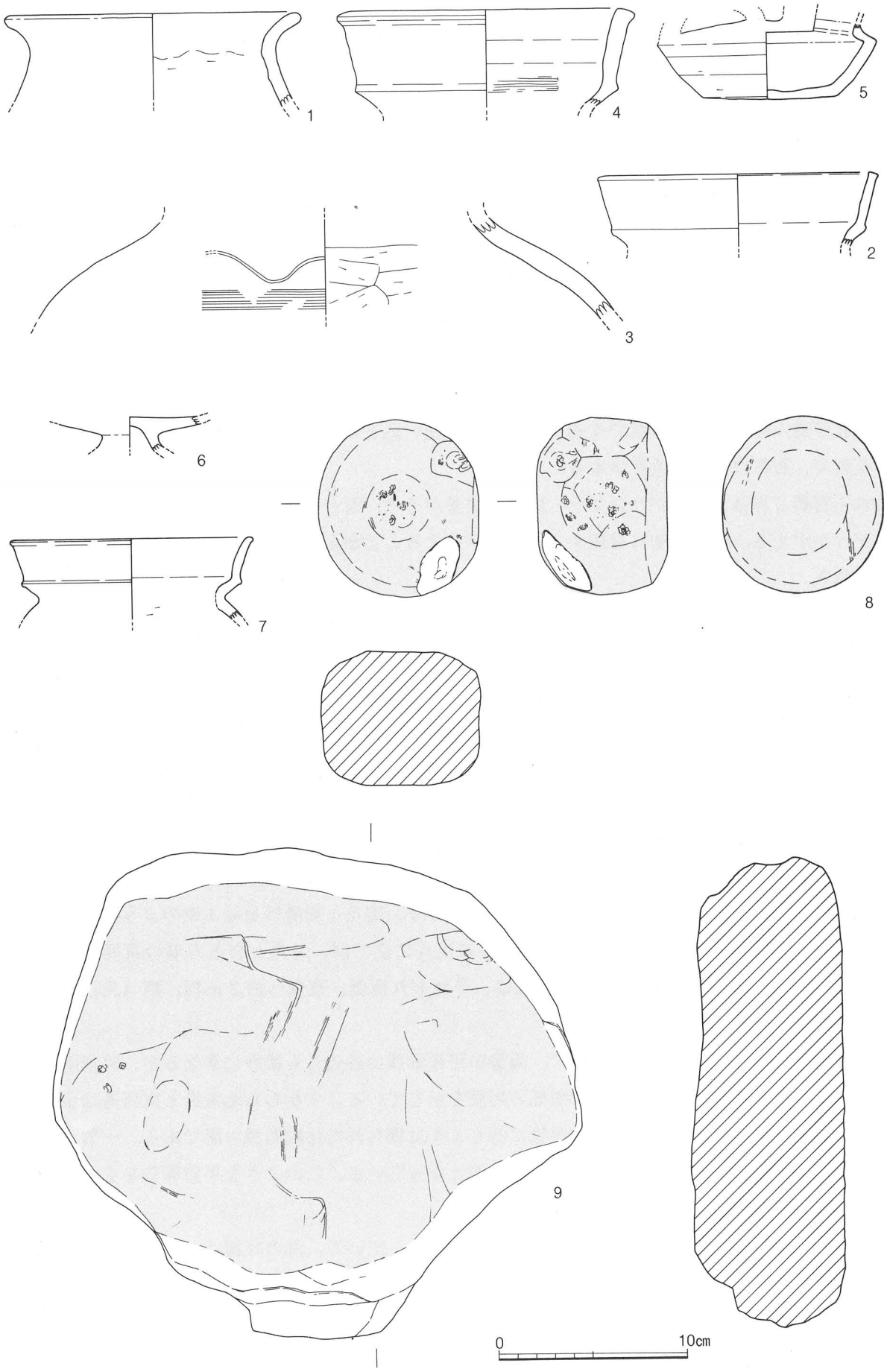
第95図　Ⅰ区（1号墳・2号墳）調査後地形測量図（S＝1：200）

墳丘盛土下の旧表土・整地土層（第92・93図の５層）からは、炭化物の細粒や古式土師器片多数（約コンテナ１／２箱分）と玉未成品・剥片数点、石器２点、鉄器１点が散在して出土している。

同層は、地山直上で、墳丘築成時の旧表土面と推測される。盛土行為前に平坦に整地され撹乱を受けた可能性もあるが、ほぼ１号墳築造開始以前の遺物からなる遺物包含層と判断された。なお、墳丘築成に伴って意図的に埋納されたような遺物は認められなかった。

出土遺物は、大半が実測に耐えない小片であり土器２点、石器２点のみ図化した。玉類は別項を設けて記述する。

96－６は、墳丘盛土下の旧表土・整地土層（５ｃ層）から出土した土師器の低脚杯片と思われる。器表は内外面ともに風化による磨耗が著しく調整は不明瞭であるがおそらくナデている。焼成は良好で明橙色を呈し、径１㎜以内の微細砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。古墳時代前期初頭（草田６～７期）頃の所産と考えられる。



第96図　1号墳付近出土遺物実測図（1）（S＝1：3）
（アミ部分は使用痕が認められる箇所を示す）

96－7は、墳丘盛土下の旧表土・整地土層（5ｃ層）から出土した土師器の甕形土器の口縁部小片である。複合口縁で口縁端部をやや外反させる。復元口径約12.4㎝を測る。器表は内外面ともにナデ調整が認められ、内面の頸部以下にはケズリの痕跡がある。焼成は良好で明橙褐色を呈し、径1㎜以内の微細砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。古墳時代前期初頭（草田6～7期）頃の所産と考えられる。

96－8は、墳丘盛土下の地山直上面から出土した最大径9.5㎝、最大厚約7㎝、重量1,027ｇを測る磨石状の石器である。図上網かけ部分に明確な擦痕、敲打痕が確認され、ほぼ全面が使用面であったと推察される。石器の表面は多孔質で、青灰色を呈する。

96－9は、墳丘盛土下の地山直上面から出土した最大径28㎝、重量9,300ｇを測る台石（石皿）状の石器である。前記の磨石と近い地点（距離にして1ｍ以内）から出土している。図上網かけ部分にのみ明確な擦痕があり敲打痕もわずかに確認される。この面が使用面であったといえる。器表面の風化が進んでいるが、現状では長期にわたって使い込まれた痕跡は認められない。石器の表面は多孔質で、石材は淡赤褐色を呈する。

これら石器2点は、前者がハンマー・磨石、後者がその作業台としてセットで使用されていた可能性がうかがえる。伴出遺物に後述する玉類が存在することから玉作行為に関わる工具の一つとも考えられる。

99－1は、墳丘盛土下の旧表土・整地土層（5ｃ層）中から出土した錐状の鉄製品である。中程で1箇所折損しているが、残存長約5㎝、径0.2～0.4㎝を測る。錆化が進み上端、下端の形状、遺存率は判然としないが、断面形は上端部が長方形状、下端部が正方形状を呈する。

先述した石器と同様に伴出遺物の状況から玉作関係の工具であった可能性が高い。

＜周　溝＞

形態・規模（第92・93・94・95図）

方墳の北東辺・南東辺・南西辺・北西辺に、それぞれほぼ平行する浅い周溝が4箇所検出された。（以下、墳丘の各辺に対応させ、北東溝・南東溝・南西溝・北西溝と称する）。

各溝とも墳丘の四隅に程近い場所が掘り残されており、墳丘と周溝外を結ぶかのような、いわゆる「陸橋状」の構造が認められる。墳頂部からの視点に立てば、対角となる方墳の東隅と西隅に「陸橋状」の構造を設けており、北隅と南隅は、それぞれ西側、東側へ約2ｍ程、隅（角）を外した地点に同様の構造を設けている。

こうした「陸橋状」の構造に対応して、周溝の平面形態は各辺とも微妙に異なるが、北東溝と南西溝、南東溝と北西溝がそれぞれほぼ類似の形態を示している。すなわち北東溝と南西溝は平面形が「L」字状を呈し墳丘の一隅を鉤の手状に巻くように掘られた比較的長い溝である。一方、南東溝と北西溝は不整な長方形状を呈し比較的短い溝となっている。このような平面構造をもつ周溝は県内でも例を見ないものである。

溝の断面形は大部分が上方へ鈍角に開く逆台形状を呈している。溝の底面は、北東溝と北西溝はやや周溝外方向に、南西溝がやや墳丘内の方向に傾斜し、南東溝はほぼ水平に近い傾向が認められる。しかし、各溝とも一律ではなく意図的な造作とは思われない。

各溝の規模は一定ではない。いずれも溝底面の径で、北東溝が長さ約8ｍで西方へ屈折して約2ｍ、幅約0.6～1ｍ、深さ約0.2ｍ（溝底面から溝上面の外周までの深さ、以下同様）、南西溝が長

さ約９ｍで東方へ屈折して約３ｍ、幅約0.5～1ｍ、深さ約0.25ｍ、南東溝が長さ約4.7ｍ、幅約0.5～１ｍ、深さ約0.6ｍ、北西溝が長さ約3.4ｍ、幅約0.7～１ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

土層堆積状況（第92・93・94図）

図示したとおり１号墳の周溝に関する土層を大別すると表土下腐植土（１層）、地山上堆積土・撹乱土及び墳丘流土（２層）、１号墳周溝内堆積土（３層）という比較的単純な層序関係にある。周溝は地山面を掘込んで作られ、その後、墳丘盛土や墳丘外の周辺土砂が流入し、ほぼ溝上面まで埋没した状況がうかがえる（３層）。さらにその後も墳丘盛土が流入したり、墳丘外の周辺土砂が堆積し完全に埋没したことがわかる（２層）。ただし、これら墳丘盛土の流入土砂と墳丘外の周辺土砂の分別は肉眼観察では不可能であった。

このうち地山直上層（３ｃ・３１層）からは、偶然流入したと推測される古式土師器小片、玉類の未成品・剥片、炭化物や焼土が出土している。

また、南東溝から南西溝の一部（第94図網かけ部分）にかけては、焼土と多量の炭化物からなる特異な土層堆積（３ｈ）が検出されている。これは、古墳築成後の溝がある程度埋没した段階において、周溝周辺で火を用いた何らかの行為があったことを類推させる。しかし、伴出遺物が乏しいため時期、性格ともに判然としない。

出土遺物（第92・93・94・96・99図）

周溝内堆積土中（２層・３層）からは、須恵器平瓶１点、土師器細小片約50点、鉄器２点、玉未成品・剥片約40点、黒曜石剥片数点が散在して出土している。ほとんどの遺物が原位置を保持していない。おそらく周溝が埋没する過程において周辺から偶然流入したものと思われる。したがって、古墳の時期に直接伴う遺物は特定できない。

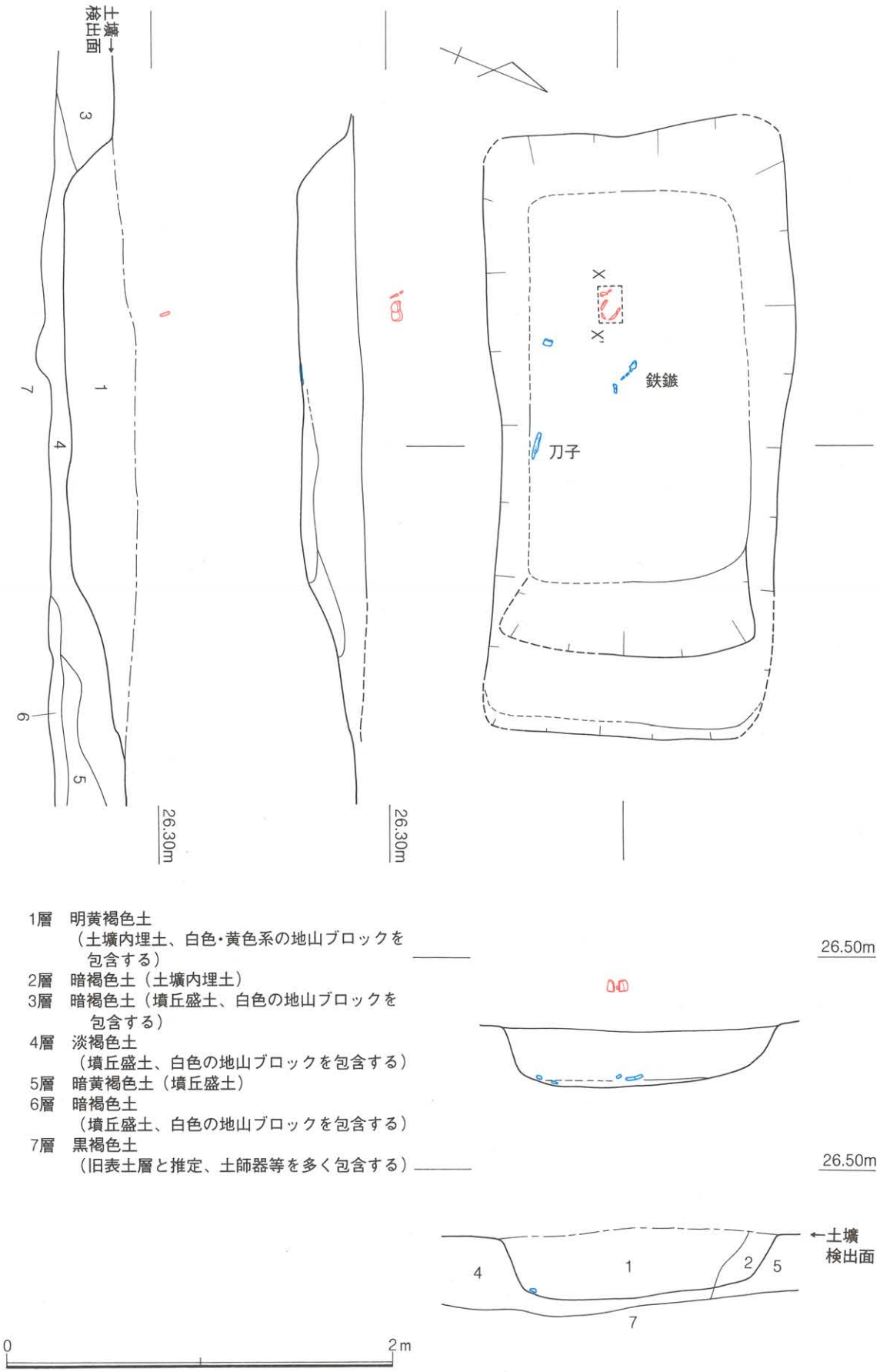
ただし、須恵器平瓶のみは、北西溝の中程、地表下約30cmの３ａ層中で据え置かれたかのような状態で出土しており注目される。周溝がある程度埋没した段階に、何らかの供献行為があったかもしれない。

96－５が、その須恵器の平瓶である。口を上向きにし水平に近い状態で出土した。発見時は完形であったが、発掘作業中に誤って口頸部を欠損してしまった。胴部から頸部にかけて「く」の字状に強く屈曲するもので、胴部の最大径11.7cm、底径7.1cm、器高4.5cm以上を測る。外面の底部から胴部最大径の部位にかけて回転ヘラケズリがみられ、外面の頸部と内面には回転横ナデが見られる。焼成は良好で淡灰色を呈し、径２mm以下の微細な砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。形態からして８世紀前半頃の所産であろうか。

土師器類は風化がかなり進み、実測に耐えない細小片が大部分で２点のみを図化した。

96－３は、南東溝底面の地山直上から出土した土師器壷の肩～頸部片と思われる。器壁は約１cmと厚い。全体に器表が風化し不明瞭ではあるが、外面に波状の沈線文が施され、その沈線の下方はハケメ、上方には横ナデ調整が認められる。内面は頸部付近までヘラケズリが認められる。焼成は良好で明黄褐色を呈し、径１mmの微細砂粒を含む緻密な胎土からなる。時期は判然としないが、古墳時代前期初頭（草田７期）頃の所産であろうか。

96－４は、南東溝内最下層（３１層）から出土した土師器の甕あるいは壷形土器の口縁部小片である。複合口縁で口縁端部に平坦面をもち端部が外反して肥厚する。復元口径約14cmを測る。器表



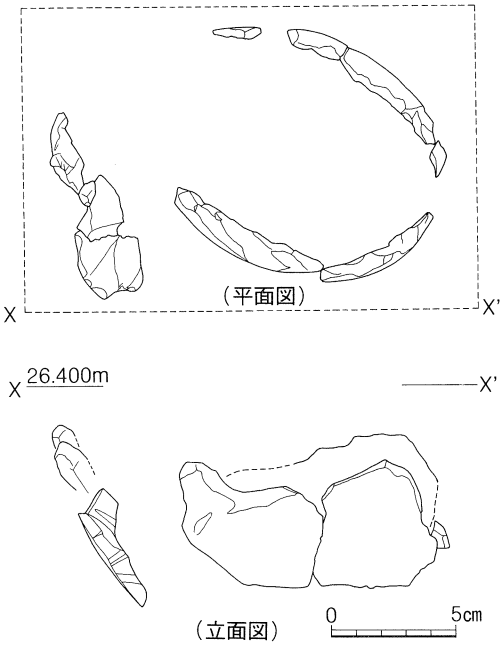
第97図　1号墳主体部実測図・同遺物出土状況実測図（S＝1：30）

は風化しているが横ナデの痕跡が認められる。焼成は良好で淡黄褐色を呈し、径１～２㎜以内の微細砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。古墳時代前期初頭（草田７期）頃の所産と考えられる。

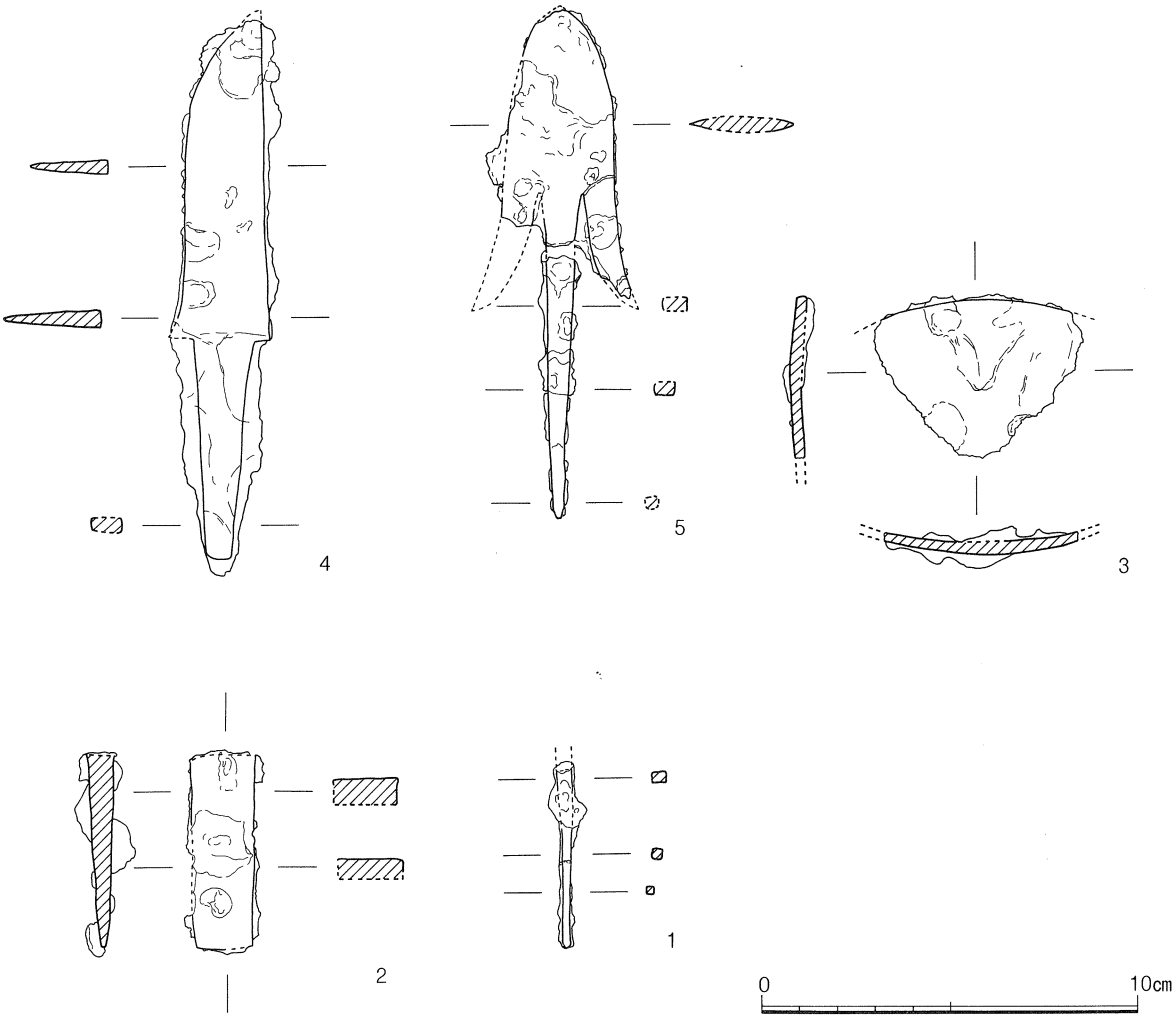
鉄器類はいずれも南東溝上方の表土下暗褐色土層（２ａ層）から出土している。厳密にいえば、周溝内出土ではなく、周溝付近の出土といえる。

99－２は、タガネ状の鉄製品である。全体に錆化が進み、剥離や亀裂による破損が著しいが、全体の形状は認識できる。長さ5.2㎝、幅1.45～1.75㎝、最大厚7.5㎜を測る。時期と使途は詳細不明である。

99－３は、不明鉄製品である。全体に錆化が進み、剥離による破損が著しい。全体の形状も判然としないが、図中上端面は弧状を呈している。縦横断面ともに弓状の反りが認められる。残存部最大長5.6㎝、最大厚3.5㎜を測る。時期と使途は全く不明である。



第98図　1号墳主体部直上土師器（1個体）出土状況実測図（S＝1：3）



第99図　1号墳付近出土遺物実測図（2）（S＝1：2）

玉類につていは、別項に記述する。

黒曜石については、細小な剥片であり図化を省略し、節末の一覧表を報告にかえる。

＜埋葬施設＞

土壙1基（第92・93・94・97図）

墳頂部の盛土面を掘り下げる過程で、素掘りの土壙1基を検出した。

検出面と位置

検出面は、墳頂部のほぼ中央で、現地表下約20㎝程の墳丘盛土と推定される土層中である。墳丘の土層断面を観察した結果、土壙の壁面、底面は全て墳丘盛土中に確認されている。土層に乱れはなく未盗掘と判断された。

土壙の主軸（長軸）は、ほぼN－66°－Eをとる。およそ墳頂部の東隅と西隅を結ぶ線に平行し、北隅と南隅を結ぶ線に直行する位置にあたる。すなわち、墳丘四隅のほぼ対角線上に土壙の主軸を配置している。なお、被葬者の頭位方向は判然としない。

形状・規模（第97図）

平面形は上面、底面ともに長方形を呈しており、長軸・短軸方向の断面形はいずれも逆台形状である。土壙北東側の壁面は、かなり緩やかに外傾し段状の構造が看取されるが判然としない。底面はほぼ平坦で水平に近い。規模は、土壙の検出面で長軸径約3.1m、短軸径1.43m、底面で長軸径２m、短軸径1.15mを測り深さは最大0.25m程である。

覆土・構造（第97図）

覆土には墳丘盛土と極めてよく似た明黄褐色土、暗褐色土の単純な堆積状況が認められた。特に覆土の上層は墳丘盛土と土質、色調がほとんど同質で明確な峻別は不可能であった。したがって、土壙本来の掘り込み面（掘り方）は判然としない。

土層観察の結果によるかぎり、木棺の安置は想定できず、素掘りの土壙であったと推測される。

出土遺物（第97・98・99図）

墳頂部の表土下約20㎝で、土壙直上にあたる墳丘盛土層（４ｂ′層）から（第97図）、土師器１点が出土している。土壙の上層は、土壙内覆土と墳丘盛土の分別が判然としない。したがって、この土師器がそのどちらに帰属するかは不明である。しかし、ほぼ１個体分が単独で主体部直上から出土する状況は、他の遺物と比較しても特異な状況にある。ここでは、この遺物が埋葬施設である土壙直上の盛土層あるいは覆土中に意図的に埋納されたものとして考えておきたい。

第98図がその土師器の出土状況である。出土時の残存状況が悪く、風化と亀裂による破損が著しいため採取後の実測図化は不可能であった。

椀形を呈する土師器の杯と推定され、口径、器高は不明である。器表は内外面ともに風化が著しく調整は不明瞭であるが、内面に指押さえの痕跡が見られる。いわゆる「手づくね」の可能性もある。焼成は良好と思われ、明橙褐色を呈し、径１㎜以内の微細砂粒をわずかに含む緻密な胎土からなる。古墳時代の所産と推定され、いわゆる赤色の胎土を重視すれば中期頃の可能性も指摘できよう。

一方、土壙内の底面付近からは、土師器の細小片２～３点と鉄器２点が出土している。

土師器は、磨耗が著しい細小片で実測に耐えないものである。おそらくは、土壙内に偶然混入した遺物である可能性が高い。

鉄器類はいずれも土壙底面付近に据え置かれたかのような状況で出土している（第97図）。副葬品として被葬者とともに埋納された可能性が高い。

99－４は、側壁付近において刃部を土壙内へ、切先をほぼ西方へ向けて出土した刀子である。全体に錆化が著しいが、切先端部をわずかに欠損するもののほぼ完形に近い。エックス線撮影によって棟関と刃関をもつ両関タイプで、目釘穴の無いことが確認される。残存長14.2cm、刀身部現存長8.4cm、元幅約2.6cm、茎長5.8cmを測る。形態から古墳時代中期頃の所産と推測される。(註２)

99－５は、土壙のほぼ長軸（中軸）線上に近い位置から切先をほぼ西方に向けたような状態で出土した鉄鏃である。全体に錆化が進行しており、切先端部と鏃身関部の片側逆刺を欠損している。エックス線撮影等によると、短頸式で鏃身部は三角形式に近く、鏃身関部は逆刺タイプであることが分かる。箆被は錆によって判然としないが、おそらく無いものと推定される。全長約13.4cm、鏃身部長約8cm以下、頸部長8.6cmを測る。形態からして、古墳時代中期前半頃（須恵器出現以前）の所産と推測される。(註３)

＜墳丘の築成過程＞（第91・92・93・94図）

上記の諸状況と土層観察結果から、次の過程が推測される。

Ⅰ：築造場所を定め、地山及び地山上の旧表土である古墳時代前期初頭頃の遺物包含層（５層）を削平、整地する。

Ⅱ：墳丘設計に応じて周溝を掘削し、墳裾を画定して平面形を整える。

Ⅲ：主に周溝掘削土を墳頂部に盛土（４層）し、墳丘を整形する。
なお、既に墳頂部盛土の一部は流出しており断定はできないが、土層断面から盛土は数回に分けて盛られ、それぞれほぼ水平か若干山なりに施されたものと推察される。

Ⅳ：墳頂部中央付近の盛土（４層）中に埋葬施設である土壙を掘り込む。

Ⅴ：土壙内に被葬者を安置し副葬品を納めて、掘りあげた盛土（４層）で埋葬する。土壙を埋めるある段階に土壙直上付近へ土師器１個体を据え置き、さらに盛土する。

Ⅵ：この後、墳丘表面の盛土を整え最終的な整形を施したことが予想されるが現状では判然としない。

（３）縦の木２号墳の調査

２号墳は１号墳から北東方向へ約３ｍ程離れた標高約25ｍの緩斜面上に、隣接して検出された。

＜墳　丘＞

形態・規模（第91・92・93・94・95図）

現状の墳裾部で１辺約７ｍを測るほぼ正方形に近い方墳である。推定される墳丘の四隅が１号墳と同じくほぼ東西南北方向に一致し、三辺の墳裾にはほぼ平行して掘られた浅い周溝が認められる。墳丘は地山もしくは旧地表面を平坦に削平、整地したのち盛土によって築成したものと推測される。墳頂部は削平あるいは流失によって原形を留めていない。そのため、本来の立体的な規模や形態は不明である。推定される構築方法は後述する。

墳丘規模については、現状でおよその墳裾と認識された部位で一辺約７ｍ前後、墳丘三辺の周溝を含めると一辺約10ｍの規模が推測される。墳頂部平坦面の規模については、現状の墳頂部盛土検

出面の傾斜変換点を追うと（第94図に朱色破線で表現）、一辺約５～６ｍを測る。墳丘の高さは、現状の墳裾から墳丘盛土検出面で少なくとも１ｍ以上はあったことが分かる。

なお、段築や葺石等の外表施設は一切認められなかった。

土層堆積状況（第92・93図）

図示したとおり２号墳の墳丘に伴う土層を大別すると表土下腐植土・撹乱土（１層）、墳丘盛土・地山風化土（７層）、墳丘盛土下の旧表土・整地土（８層）、地山という比較的単純な層序関係にある。

現状の墳頂部には、墳丘盛土か地山風化土かの区別が判然としない土層（７層）がほぼ全面に観察された。墳丘盛土層とすれば、古墳群周辺の地山面で認められる黄・白色の地山ブロックを多量に包含することから、周辺の地山掘削土が盛られたものと推察される。

また、墳丘盛土下の一部には、旧表土・整地土層（８層）が僅かに認められる。

なお、堆積土の一部に撹乱が生じているのは、後世の木根、植林の影響によるものである。

出土遺物

墳頂部の表土直下及び墳丘盛土・地山風化土（７層）から碧玉の素材剥片２点が出土している。古墳に直接伴う可能性は低いと考える。節末の一覧表を報告にかえる。

＜周　溝＞

形態・規模（第92・93・94・95図）

方形墳丘の南東辺・南西辺・北西辺の三辺を「コ」の字形に囲む浅い周溝が検出された。南西辺では、墳丘の西隅に程近い場所が、幅約２ｍにわたって他の箇所よりも浅く掘り残されている。これは1号墳の周溝でも認められた墳丘と周溝外を結ぶ、いわゆる「陸橋状」の構造と推察される。溝の断面形は大部分が弧（歪なＵ字）状を呈している。溝底面の幅、深さ、傾斜は一定しないが、南東辺と北西辺は周溝が途切れる北東方向へ向かって地山の地形なりに傾斜を増している。これに対し、南西辺はほぼ水平に近い傾向が認められた。これは、この周溝が墳丘を区画する機能に加え、排水の機能を果たしていたことを示唆するものである。

周溝の規模は一定しないが、いずれも遺構検出面上面で、南東辺・南西辺・北西辺の順に、長さ約５ｍ・10ｍ・10ｍ、最大幅0.6ｍ・１ｍ・１ｍ、溝底面から溝上面までの深さ約0.4ｍ前後を測る。

土層堆積状況（第92・93・94図）

図示したとおり周溝に関する土層を大別すると表土下腐植土（１層）、撹乱土及び墳丘流土（２層）、２号墳周溝内堆積土（６層）という比較的単純な層序関係にある。

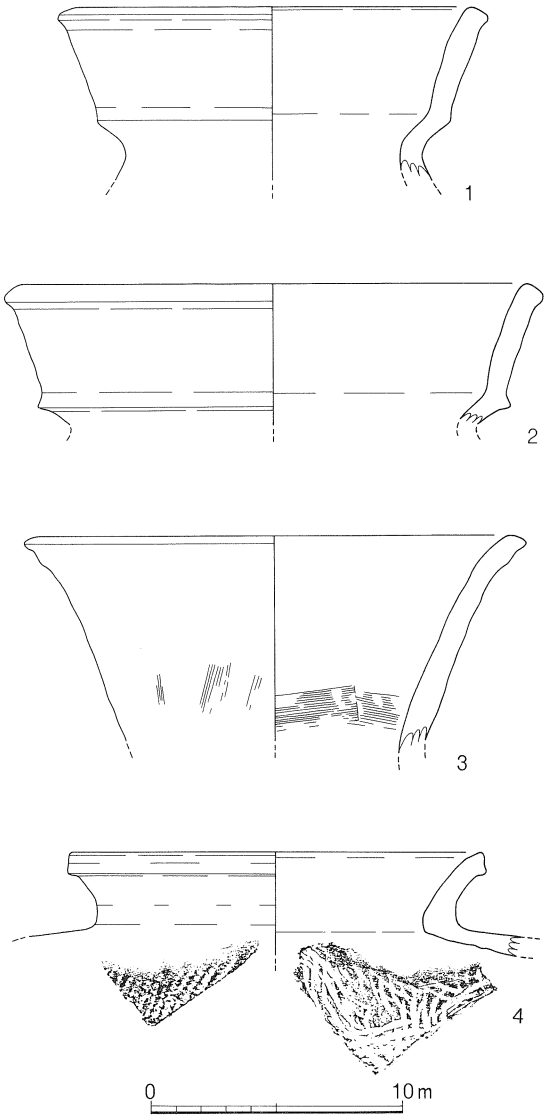
周溝は地山面を掘込んで作られ、その後、墳丘盛土や墳丘外の周辺土砂が流入し、ほぼ溝上面まで埋没した状況がうかがえる（６層）。さらにその後も墳丘盛土が流入したり、墳丘外の周辺土砂が堆積し完全に埋没したことがわかる（２層）。ただし、これら墳丘盛土からの流入土砂と墳丘外の周辺土砂との明確な分層は不可能であった。

なお、１号墳と異なり、２号墳の周溝から遺物は一切出土しなかった。

＜埋葬施設＞

残存する墳頂部において、土層の平面、断面を丁寧に観察しつつ掘り下げたが、埋葬施設らしき遺構は検出されなかった。これは、墳丘盛土の削平、流失に伴い埋葬施設も既に失われた結果と推定される。

＜墳丘の築成過程＞（第92・93・94図）



第100図　Ⅰ区・Ⅱ区遺構外（包含層）出土土器実測図（S＝1：3）

上記の諸状況と土層観察結果から、1号墳と類似の過程が考えられるが、既に墳頂部が損壊しており、現状で推定できるのは次の過程までである。

Ⅰ：築造場所を定め、地山及び地山上の旧表土（7・8層）を削平、整地する。

Ⅱ：墳丘設計に応じて周溝を掘削し、墳裾を画定して平面形を整える。

Ⅲ：周溝掘削土を中心に墳頂部に盛土（7層の一部）を施し、墳丘を整形する。

（4）Ⅰ区遺物包含層の調査

ここでは1号墳の南側一帯を中心に検出された古墳群に直接伴わない古墳時代前期の遺物包含層とその出土遺物（土器・玉類）について述べる。ただし、1号墳の盛土中や墳丘盛土下の地山～旧表土中及び周溝内から出土した玉類についても同包含層出土の遺物として把握されたので、ここで一括して述べる。なお、この玉類と共伴した土師器、鉄器は1号墳の項で述べたので省略する。

＜出土状況＞（第91・92・93・94図）

古墳に直接伴わない遺物は、既述した1号墳墳頂部の地山直上から墳丘盛土下の旧表土・整地土層（第92・93図－5層）、同周溝内堆積土層（同図－3層の一部）のほか、Ⅰ区南半周辺の地山上堆積土・撹乱土・墳丘流土層（同図－2層）を中心に出土している。いずれも、地山の地形なりに堆積した土層である。

なお、各層の一部に後世の撹乱を受けた痕跡が認められるが、これは、植林・耕作に伴う開墾、木根の影響によるものと思われる。

また、表土面付近からは、実測に耐えない須恵器小片数点が採取されているが、包含層に直接伴わないものと判断し図化は省略する。

以下、主要遺物の概要を述べる。土層名は第92・93図の土層断面図に対応している。

＜土　器＞（第100図）

1号墳の南西側周辺の第92・93図－2層中からは、土師器小片（コンテナ約1／6箱分）が出土している。ほとんどが小片で、3点のみ図化可能であった。

100－1は、2a層から出土した土師器甕の口縁部～頸部片である。複合口縁で口縁端部に平坦面をもち端部が外反して肥厚する。復元口径約16cmを測り、器壁は最大約1cmと厚い。内外面の器表に横ナデ調整が認められる。焼成は良好で淡黄褐色を呈し、径1mmの微細砂粒のほか、一部に3～5mmの砂粒を僅かに含む。古墳時代前期初頭（草田7期）頃の所産と推定される。

100－2は、Ⅰ区南端付近の地山直上付近2ｂ層から出土した土師器甕の口縁部片である。1と類似し複合口縁で口縁端部に平坦面をもち端部が外反して肥厚する。復元口径約20㎝、器壁は最大で約1㎝を測る。内外面の器表に横ナデ調整が認められる。焼成は良好で淡黄褐色を呈し、径1～2㎜の砂粒を比較的多く含む。古墳時代前期初頭（草田7期）頃の所産と推定される。

100－3は、2と同じくⅠ区南端付近の地山直上付近2ｂ層から出土した壷形土器の口縁部片と推測される。「ハ」の字状にやや外反しつつ開口する単純口縁である。復元口径約18㎝、器壁は0.8～1.1㎝前後を測る。内外面の器表に横ナデ調整が施され、外面の一部には縦方向のハケメ、内面下方には横方向のハケメ調整痕が認められる。焼成は比較的良好で、淡黄褐色を呈し、径1㎜以内の微細砂粒を多く含む緻密な胎土からなる。時期は判然としないが、大原郡加茂町神原神社古墳出土の壷形土器に類似点があり古墳時代前期初頭頃の所産と考えておきたい。

＜玉作関係資料＞（第101・102・103・104図）

限られた調査範囲ではあったが、Ⅰ区包含層中からは碧玉、瑪瑙、水晶の3種の玉類未成品、剥片や砥石類が出土している。玉製品の種類は、完成品は無いが、一部の未成品から勾玉、管玉を製作した意図が看取される。これら未成品・剥片の総出土点数は320点、総重量は3，835.38ｇで、内訳は表26のとおりである。

総重量に占める各石材の重量を比較すると、碧玉約80％、瑪瑙約20％、水晶0.5％と石材間の格差は歴然としている。限られた調査成果から類推するのは早計かもしれないが、主に碧玉製の玉類を製作していた可能性を示唆するものといえる。

ここでは、出土資料のうちから各石材ごとに特徴的な未成品と砥石を取り上げ、観察・図化した結果を詳述する。なお、他の資料については第2節末の一覧表（表30）をもって報告にかえる。

未成品の製作工程による分類

玉類（碧玉・瑪瑙製管玉・勾玉）の製作工程は寺村光晴氏等[註4]によって復元され、一般的には、

1：荒割り　2：形割り　3：側面打裂　4：研磨　5：穿孔

の過程に大別されている。

この工程に従い、遺跡から出土する玉未成品の属性に応じた遺物そのものの分類を試みたのが、島根県内における最近の調査では松江市福富Ⅰ遺跡、八束郡東出雲町勝負遺跡の報告[註5]である。

ここでは、これらに準じて製作工程を推定復元し、以下のように完成品に近いものから工程をさかのぼって分類する。

「完成品」

いわゆる勾玉、管玉、丸玉など一定の形式をもつ玉製品

「仕上げ工程品」

ほぼ完成品に近い未成品。穿孔が認められる場合が多く仕上げ段階のもの　・穿孔

「一次研磨工程品」

調整剥片が側面打裂工程を経てある程度製品に近い形状のものに研磨を施したもの　・研磨

「側面打裂工程品（いわゆる側面打製品、角柱状加工品、調整剥片含む）」

素材剥片に調整剥離を加えたものを総称する。調整剥離の進捗状況、形状によって、一般に側面打製品、角柱状加工品と呼ばれるものも含む。　・側面打裂

「素材剥片」

石核から剥離した直後の剥片で調整剥離の認められないもの ・形割り

「石核」

素材剥片を剥離するための材料。小型のものは素材剥片と区別が判然としない。およそ複数の素材剥片が採取可能と思われるものを総称する。 ・荒割り

「原材」

石核が採取されたと思われる石塊。表面に自然面が多く認められる。

碧玉製未成品（第101・102図）

出土した碧玉製の未成品及び剥片の数量・重量内訳は表27のとおりである。

未成品については石核から一次研磨工程にかけての資料が認められ、原材や仕上げ工程に該当する資料は皆無であった。

製作を意図した玉の種類については、製作過程の全体像が不確実な現状において類推するのは早計の感が否めない。しかし、少なくとも未成品の形状からすると、一次研磨工程品においては勾玉

表26　Ⅰ区包含層出土の玉材　出土数と重量

数量＼石材		碧　玉	めのう	水　晶	総　量
個体数（点）		274点	43点	3点	320点
重　量（g）		3,042.64g	743.99g	18.75g	3,835.38g
総量に占める割合	個体数	85.6%	13.4%	0.9%	
	重　量	79.3%	20.1%	0.5%	

表27　Ⅰ区包含層出土玉類の未製品・剥片の数量と重量

（　）内は、およそ玉の種類が推定されるものの個体数

工程＼石材		碧玉	めのう	水晶
一次研磨工程品	個体数	2点（勾1）	0点	0点
	重　量	29.15g	0g	0g
側面打裂工程品	個体数	16点（勾6・管5）	5点（勾4）	0点
	重　量	284.23g	92.56g	0g
素材剥片	個体数	51点	10点	1点
	重　量	829.06g	276.64g	14.99g
石核	個体数	16点	3点	0点
	重　量	1,505.35g	254.16g	0g
剥片	個体数	189点	25点	2点
	重　量	394.85g	150.63g	3.76g
合計	個体数	274点	43点	3点
	重　量	3,042.64g	773.99g	18.75g

1、側面打裂工程品においては勾玉６・管玉５を推定することが可能である。

剥片につていは、189点、394.85ｇを検出した。剥片の諸属性からどのような情報を引き出すことができるか筆者の力量不足から判断できなかった。そこで、参考までに松江市福富Ⅰ遺跡や東出雲町勝負遺跡で試みられた法量別個体数の比較表を表28に掲げ報告にかえる。ちなみに、福富Ⅰ遺跡・勝負遺跡では、長さ1.0～1.4cm前後のものが最多であったが、当遺跡ではそれより若干大きく長さ1.5～1.9cmのものが突出して多い傾向が見られる。

101－１は、勾玉の側面打裂工程から一次研磨工程の過渡的な段階の資料である。１号墳周溝（北西溝）内堆積土３ｃ層から出土した。上端面の一部に自然の礫面を残すほかは全面にわたり調整剥離が認められる。一部表面に水平方向の研磨痕があり、一次研磨開始直後の工程を思わせる。いわゆるＣ字形を呈し、長さ3.9cm、最大幅2.6cm、厚さ1.3cmを測り、断面は長方形状である。

101－２は、勾玉の側面打裂工程の最終段階を推測させる資料である。Ⅰ区南端付近の包含層２ｂ層から出土した。研磨痕は認められないが、ほぼ全面にわたり調整剥離が認められる。いわゆる側面打製品にあたる。Ｃ字型を呈し、長さ3.7cm、最大幅2.2cm、厚さ1.5cmを測り、断面は長方形状である。

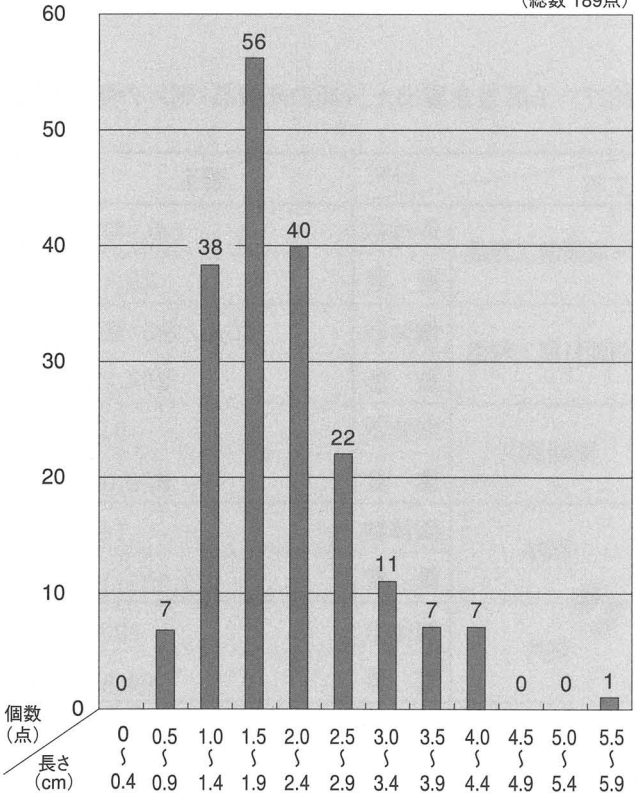
101－３は、勾玉の側面打裂工程品（側面打製品）である。Ⅰ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。背面と腹面に細かな調整剥離が認められる。Ｃ字型を呈し、長さ3.6cm、最大幅2.2cm、厚さ1.4cmを測り、断面は歪な三角形状である。

101－４は、勾玉の側面打裂工程品（側面打製品）と推測される。１号墳周溝（南西溝）内堆積土から出土した。直方体状を呈しており玉の種類は判然としないが側面をやや湾曲するように剥離させていることから勾玉の可能性が高い。上下の端面に敲打によるつぶれの痕跡が認められる。主要剥離面が顕著に残り、調整剥離はさほど進んでいない。長さ4.1cm、最大幅2.1cm、厚さ2.1cmを測り、断面は五角形状である。

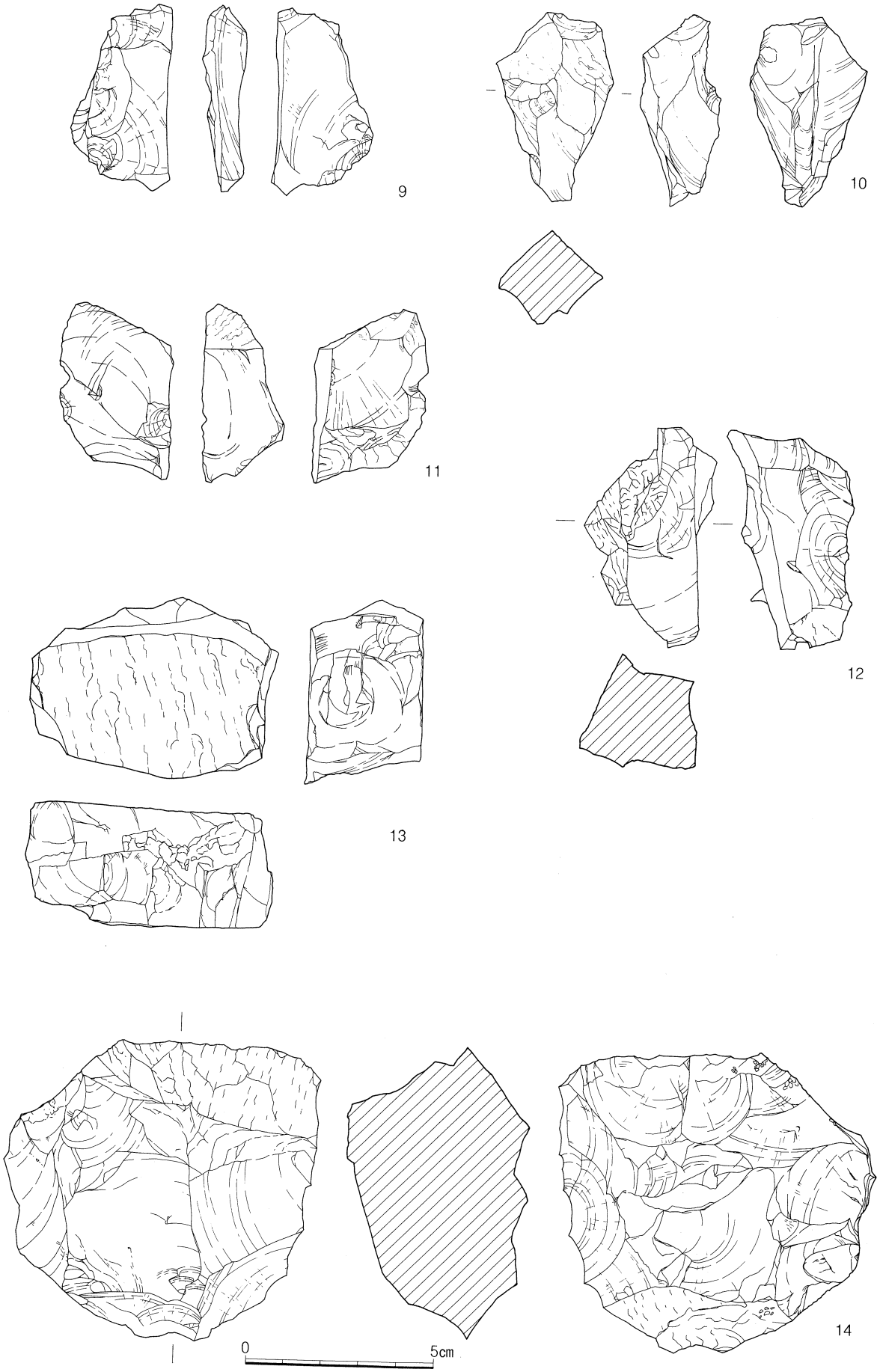
101－５は、勾玉か管玉の側面打裂工程から一次研磨工程の過渡的な段階の資料と推測される。直方体状を呈し角柱状加工品と呼びうる。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。上端面の一部に擦痕がみとめられるが、面によっては主要剥離面や自然面を残す部分もある。長さ3.6cm、最大幅1.9cm、厚さ1.7cmを測り、断面は多角形状である。

101－６は、勾玉か管玉の側面打裂工程品である。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。直方体状を呈し角柱状加

表28　碧玉剥片の法量別個体数



第101図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土碧玉製玉未成品実測図（1）（S＝2/3）



第102図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土碧玉製玉未成品実測図（2）（S＝2/3）

工品と呼びうる。各面の細かな調整剥離が進んでいることが分かる。長さ4.5cm、最大幅1.8cm、厚さ1.8cmを測り、断面は多角形状である。

101－７は、勾玉の側面打裂工程品と推測される。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。側面をやや湾曲するように剥離させていることから勾玉と推定される。主要剥離面が大きく残る面もあるが、剥離調整も進んでおり、いわゆる調整剥片に分類しうる。長さ5.2cm、最大幅3.3cm、厚さ2.2cmを測り、断面は五角形状である。

101－８は、管玉を想定させる側面打裂工程品である。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。直方体状を呈し角柱状加工品と位置付けることも可能である。調整剥離も進むが各面に主要剥離面を認めることができ、一部には自然面も残している。長さ4.9cm、最大幅1.9cm、厚さ1.8cmを測り、断面は正方形状である。

102－９は、板状の素材剥片である。１号墳周溝（南西溝）内堆積土３ｄ層から出土した。表裏に主要な剥離面が顕著に認められる。長さ4.9cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmを測る。

102－10は、断面菱形を呈する礫状の素材剥片である。Ⅰ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。一部に自然面も認められるが、各面に主要な剥離面が認められる。長さ5.0cm、幅3.2cm、厚さ2.1cmを測る。

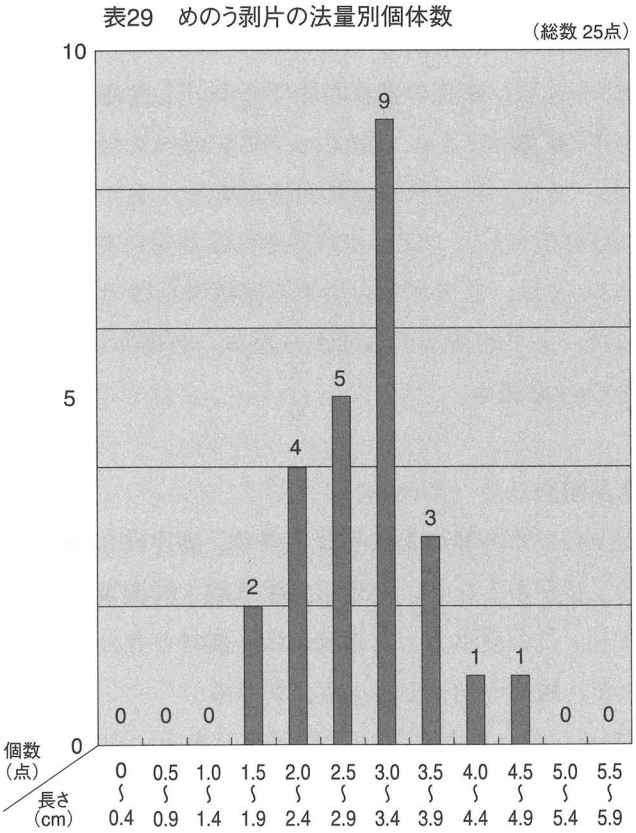
102－11は、断面三角形を呈する礫状の素材剥片である。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。上下面には自然面が顕著であるが、他の面に主要な剥離面が認められる。長さ4.7cm、幅3.0cm、厚さ2.2cmを測る。

102－12は、断面方形状を呈する礫状の素材剥片である。１号墳南西側の包含層２ａ層から出土した。多少はあるがほぼ全面に自然面が認められる資料である。長さ5.8cm、幅3.4cm、厚さ3.4cmを測る。

102－13は、直方体状を呈する板状の素材剥片である。１号墳南西側の表土中で採取した。表裏二面には自然面が多く残る。長さ6.6cm、最大幅4.8cm、厚さ3.2cmを測る。

102－14は、断面が歪な三角形状を呈する礫状の石核である。１号墳周溝（南東溝）内堆積土３１層から出土した。上端面に多くの、下端面に僅かの自然面が残る。多様な角度から打ち欠いたことの分かる資料である。最大径8.5cmを測る。

表29　めのう剥片の法量別個体数



瑪瑙製未成品（第103図）

出土した瑪瑙製の未成品及び剥片の数量・重量の内訳は表27のとおりである。

未成品については石核から側面打裂工程にかけての資料が認められ、原材や一次研磨、仕上げ工程に該当する資料は皆無であった。

製作を意図した玉の種類については、碧玉同様、当遺跡における製作過程の全体像が不確実な現状において類推するのは早計の感が否めない。しかし、少なくとも未成品の形状からすると、側面打裂工程品５点のうち４点から勾玉を推定することができる。

剥片につていは、25点、150.63ｇを検出した。碧玉同様、剥片の諸属性からどのような情報を引き出すことができるか判断できなかった。そこで、碧玉同様、参考までに法量別個体数の比較表を表29に掲げ報告にかえる。資料数が限られることから一概に比較検討できないが、碧玉剥片で最多傾向を示した長さのほぼ２倍（長さ3.0～3.4cm前後）のものが最も多く見られる。

103－１は、勾玉の側面打裂工程品（側面打製品）である。１区東壁付近の包含層２ｂ層から出土した。研磨痕は認められない。表裏面それぞれ部分的に自然面を残すほかは全面にわたり調整剥離が認められる。長さ3.5cm、最大幅2.4cm、厚さ1.8cmを測り、断面は多角形状である。

103－２は、側面打裂工程品と推定され角柱状加工品と呼称すべき資料であるが、瑪瑙製管玉の完成品はほとんど例を見ないので検討を要する。Ｉ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。円柱状に側面が面取りされており、上面には敲打痕がわずかに認められる。下端面を除いて各面ともにほぼ全面にわたって細かな調整剥離が認められる。なお、下端面以下が欠損した可能性も指摘される。現状で長さ2.4cm、最大幅2.8cm、厚さ2.5cmを測り、断面は多角形状である。

103－３は、勾玉の側面打裂工程品である。Ｉ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。細かな調整剥離は認められない。長さ3.9cm、最大幅2.5cm、厚さ1.2cmを測り、断面は歪な長方形状である。

103－４は、勾玉の側面打裂工程品と推測される。Ｉ区南西端付近の包含層２ａ層から出土した。背面が弧状に湾曲するよう外側面、上下端面に細かな調整剥離が認められる。表裏面及び内側面には自然面が顕著に残る。長さ4.2cm、最大幅3.3cm、厚さ2.2cmを測り、断面は三角形状である。

103－５は、礫状の素材剥片である。Ｉ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。上端面に自然面が残る。長さ3.5cm、幅3.6cm、厚さ2.8cmを測る。

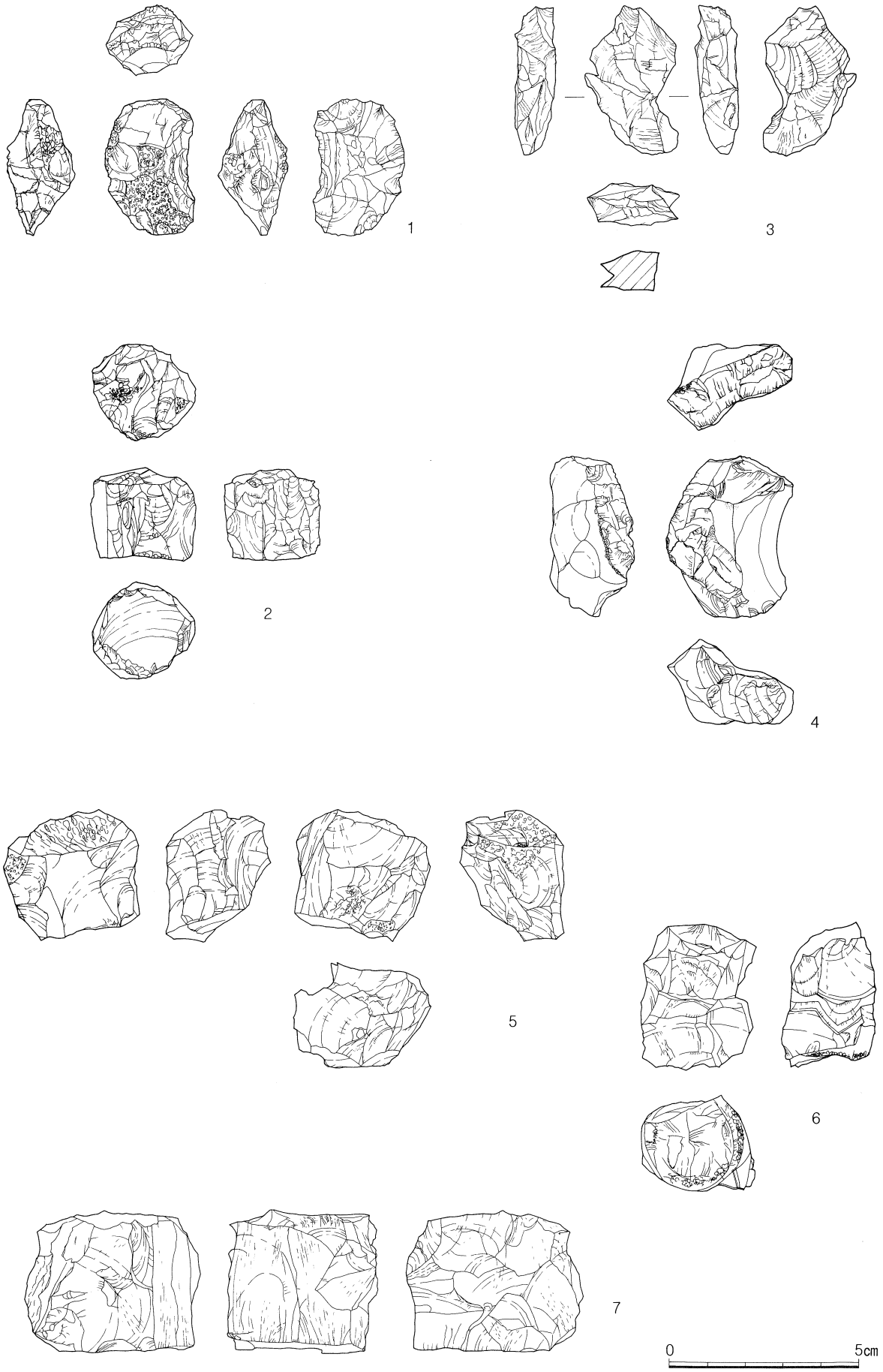
103－６は、円柱状の素材剥片である。Ｉ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。下端面の一部に敲打痕らしきつぶれが観察されるが定かではない。長さ3.8cm、幅3.0cm、厚さ2.5cmを測る。

103－７は、立方体状を呈する礫状の石核である。１号墳周溝（南西溝）内堆積土３ｄ層から出土した。上下端面は自然面からなる。各側面に主要な剥離面が観察される。長さ3.8cm、幅4.7cm、厚さ3.9cmを測る。

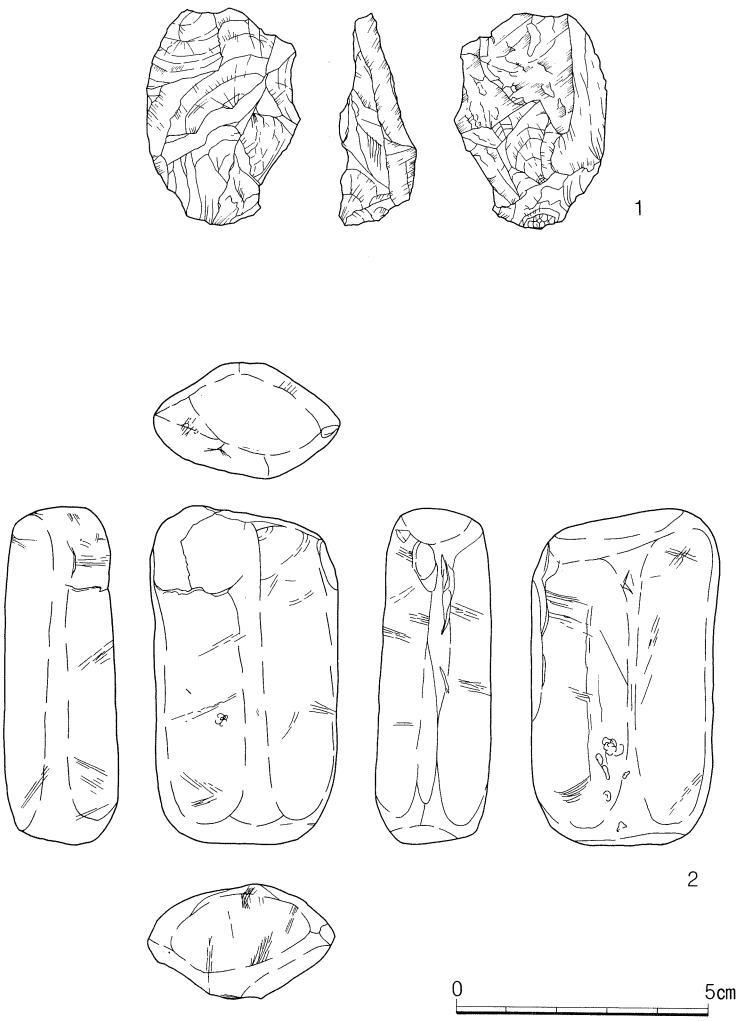
水晶製未成品（第104図）

出土した水晶製の未成品は１点で、剥片は３点のみである。一般的に水晶製玉類は、敲打による整形工程があるなど、前述した碧玉製・瑪瑙製玉類とはその工程にいくつかの相違点が存在するとされる。この度出土した未成品は、素材とされたであろう剥片１点のみのため、あえて全体工程に触れず、観察の結果を述べるに留める。

104－１は、板状に近い素材剥片である。Ｉ区南西付近の包含層２ａ層から出土した。一部に自然面を残すが、他の面は主要な剥離が確認される。長さ4.2cm、幅3.0cm、厚さ1.5cmを測る。



第103図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土瑪瑙製玉未成品実測図（S＝2/3）



第104図　Ⅰ区遺構外（包含層）出土水晶製玉未成品・砥石実測図（S＝2/3）

砥石（第104図）

出土した砥石は１点のみである。104－２が濃淡はあるもののほぼ全面に擦痕が認められる角柱状の砥石である。Ⅰ区南端付近の包含層２ａ層から出土した。上下端面は特に使い込まれており、触感でも擦痕が明確に認められる。平面形は長方形状、断面形は菱形状を呈する。長さ6.7㎝、幅3.7㎝、厚さ2.3㎝を測る。石材は不明である。

＜遺物包含層の時期と性格＞

Ⅰ区の遺物包含層は、出土する土師器片がいずれも古墳時代前期初頭（草田６～７期）頃の様相を呈し、該期に比定される包含層の可能性が高い。したがって、これに共伴する玉作関係資料も同時期の所産に比定しうる。

ただし、この包含層の上層、表土面付近からは須恵器小片も数点採取されており、玉類の全資料が当該期に属するとは断言できない要素にも注意しておく必要がある。

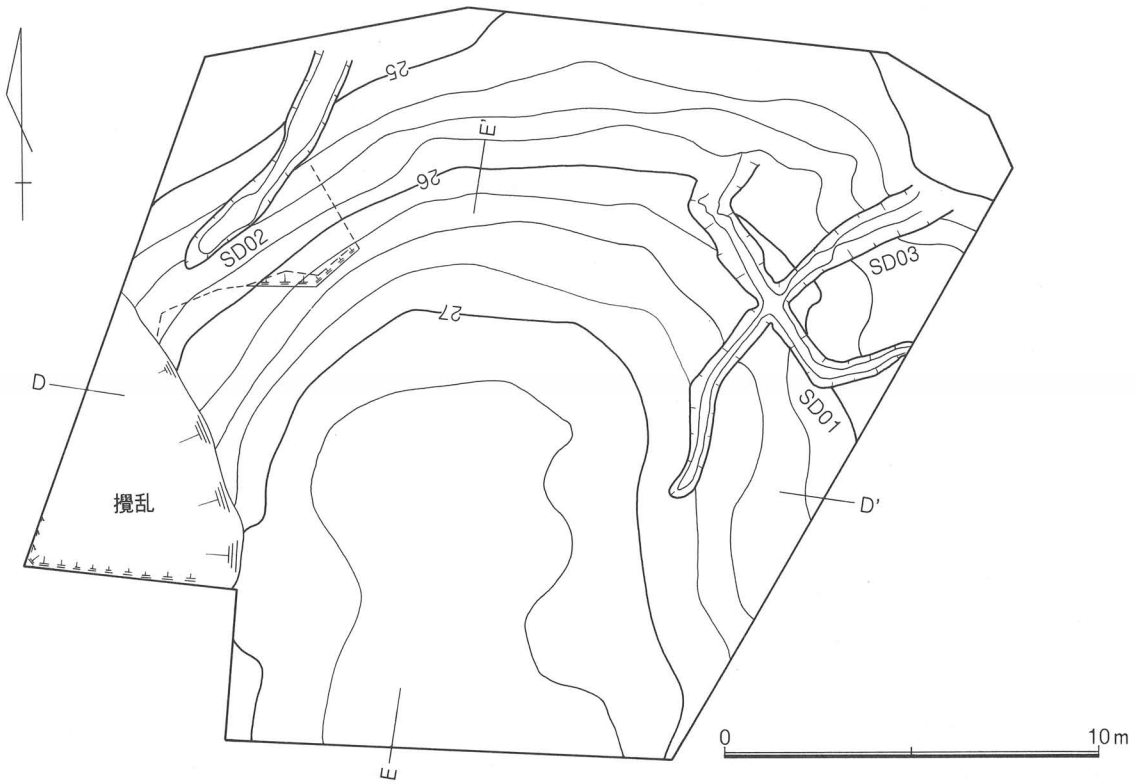
限られた調査範囲ではあったが、玉類の未成品や剥片、砥石、さらに１号墳盛土中から錐状の鉄製品、盛土下の旧表土中から台石・磨石等を検出したことは、付近で玉作行為があったことを強く示唆する。しかも包含層出土土師器の様相を見るかぎり、その営為は比較的短期間の内におさまっていることが伺える。おそらくこの遺跡付近の緩斜面上（Ⅰ区南方の調査区外）に当該期の玉作関連遺構が存在する可能性は高いのではなかろうか。

２：Ⅱ区の調査

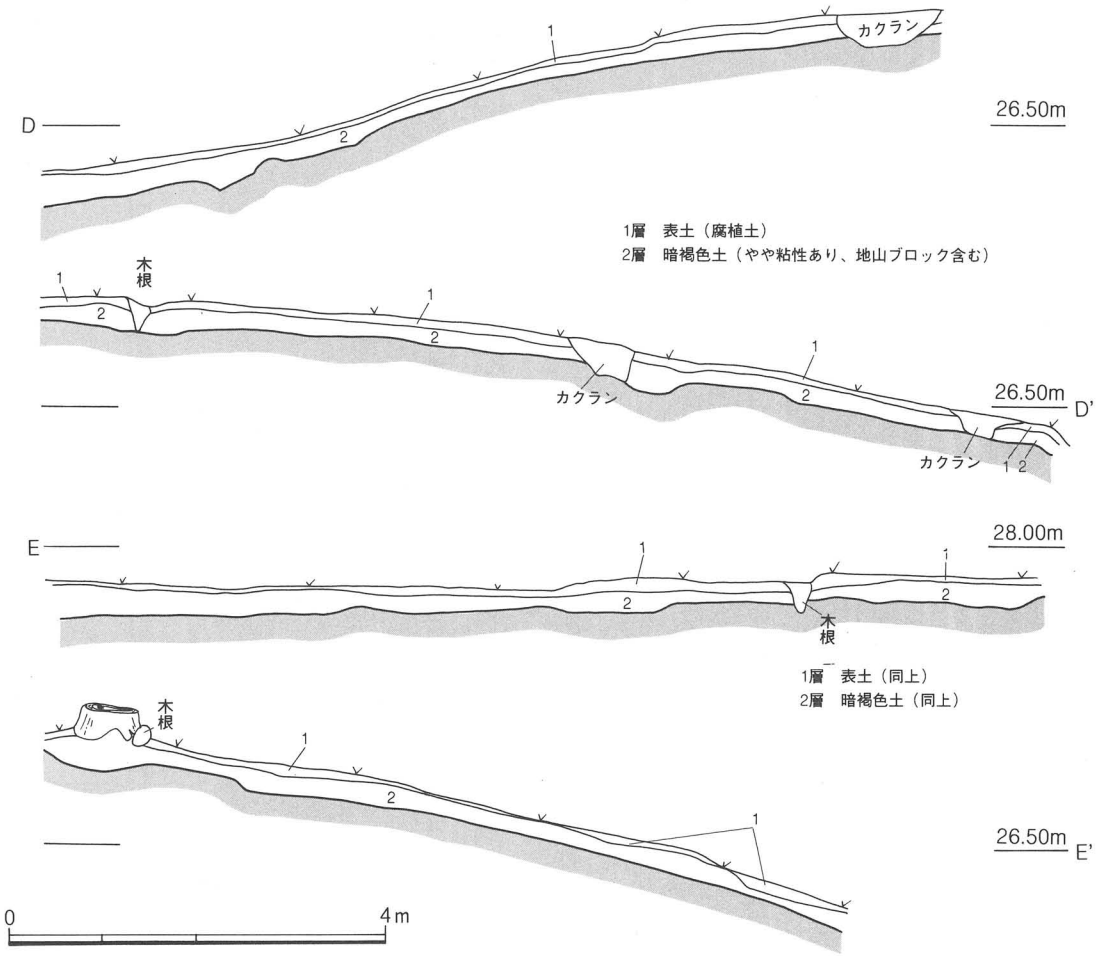
（１）調査前の状況と調査方法（第90・105図）

調査対象地はもともと植林・雑木林からなる山林であったが、地形観察によって古墳の存在が予測された。そこで、立木伐採後に地形測量を実施し、標高約27.5ｍの丘陵頂部にほぼ直行する２本の土層観察用の畦（ベルト）を設定（第90図Ｄ－Ｄ’・Ｅ－Ｅ’）した。

その後、土層観察用の畦を残し表土以下の堆積土を頂部から少しずつ掘り下げた。その結果、古墳は存在しないことが判明したので、全面にわたり地山面まで掘削し、遺構・遺物の検出、写真と実測図による記録化を実施した。



第105図　Ⅱ区調査後地形測量図・遺構配置図（S＝1：200）



第106図　Ⅱ区土層断面図（S＝1：80）

（2）基本層序（第106図）

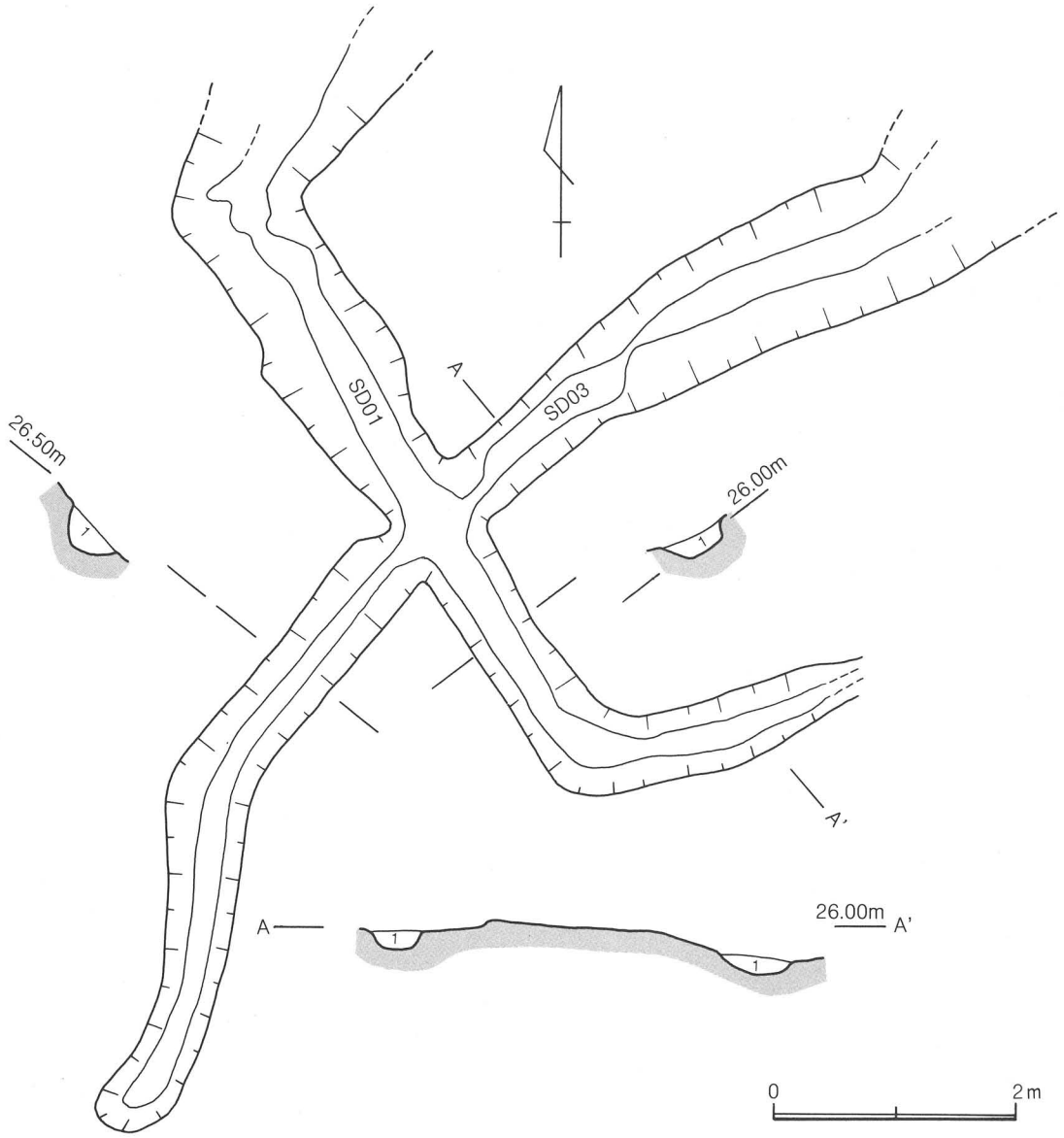
図示したとおり、木根がはびこる表土層は腐植土（第１層）からなり、その下層は暗褐色土（第２層）が単層堆積する。遺構検出面は淡黄褐色の地山面である。土器片、玉類の未成品・剥片等からなる少量の遺物は主にこの暗褐色土の掘削土中から散在して検出されている。なお、随所に見られる撹乱は木根の影響によるものと判断された。

（3）遺　構（第105・107・108図）

Ⅱ区では、溝状遺構３条のみが検出され、他に明確な遺構は無かった。

SD01・SD03（第107図）

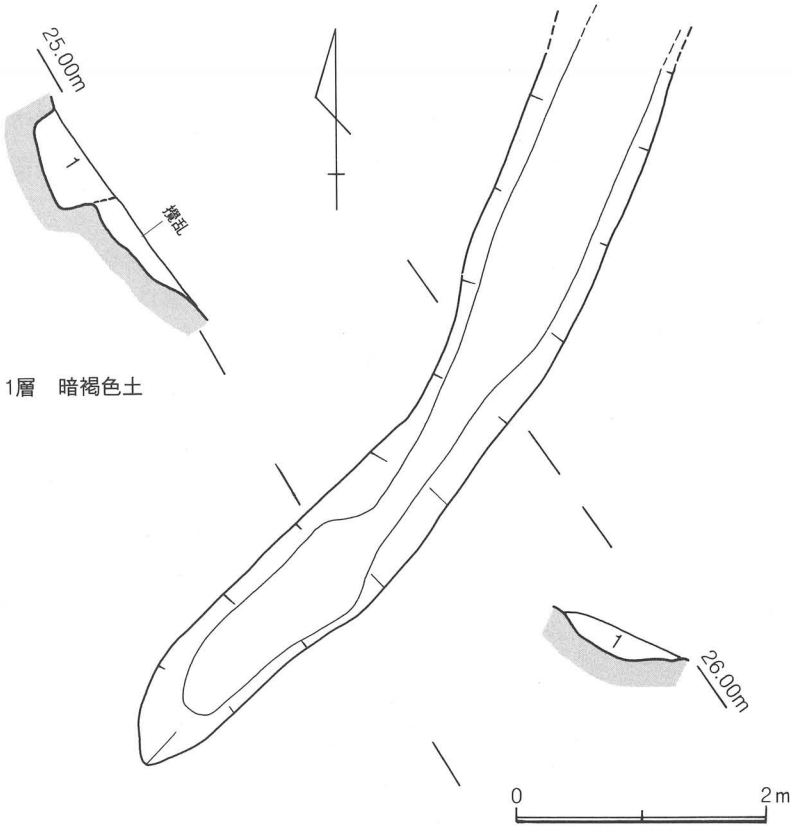
丘陵頂部から北東方向へ若干下がった標高約25～27mの緩斜面上で検出された２条の溝状遺構である。両者は、それぞれのほぼ中央あたりでほぼ直交する位置関係にある。



第107図　Ⅱ区SD01・03実測図（S＝1：60）

SD01は、南東から北西方向にかけて「コ」の字状にやや幅を広げながらのびており両端は浅くなり自然に終息している。溝の断面形は緩やかなU字状を呈しており、底面は地形に沿って傾斜している。規模は、遺構上面で北西端から南東端にかけて長さ2.5m－5.5m－1.5m、幅0.4～1m、深さ0.3m前後を測る。

SD03は、南西方向から北東方向へ地形に沿って緩やかに傾斜し幅を広げながらのびている。溝の断面形は緩やかなU字状を呈している。規模は、遺構上面で長さ約11m、幅0.5～1.2m、深さ約0.3m前後を測る。



第108図　Ⅱ区SD02実測図（S＝1：60）

覆土には両者ともに少量の地山ブロックを含む暗褐色土が単層堆積していた。土層観察の結果、両者の土層に差異が認められず、切り合い関係による先後関係は不明である。

遺物は出土せず、溝の時期と性格は不明である。ただし、溝底面の傾斜からすると排水の機能を有していた可能性が指摘しうる。

SD02（第108図）

丘陵頂部から北西方向へ若干下がった標高約25～26mの緩斜面上で検出された溝状遺構である。南西から北東方向へやや幅を広げながら若干弓なりにのびている。溝の断面形は一定していないが底面は地形に沿って傾斜し、端部は浅く自然に終息している。規模は、遺構上面で長さ約7m、幅0.7～1m、最大深0.4m前後を測る。覆土は暗褐色土が単層堆積していた。遺物は出土せず、時期と性格は不明である。ただし、溝底面の傾斜からすると排水機能を有していた可能性が指摘しうる。

（4）遺　物（第100図）

Ⅱ区からは、土師器と推測される土器の細小片数点、玉類（碧玉・瑪瑙・水晶）の未成品・剥片と黒曜石の剥片がそれぞれ少量出土している。いずれも遺構外の表土及び掘削土中から採取された資料である。細小片のため図化は省略し第2節末の一覧表（表30）を報告にかえる。

なお、調査区外ではあるが、参考までにⅡ区の東方斜面下方で表土中から採取した資料を図化・報告（第100図4）しておく。

100－4は、須恵器甕の口縁～頸部片である。復元口径16.3cmを測る。口縁部内外面を回転ヨコナデし、頸部以下の内面には青海波紋の当て具痕、外面には格子目の叩きが認められる。古墳時代後期以降の所産であろう。

（註）

1．鹿島町教育委員会『南講武草田遺跡』（講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５）1992年　における同遺跡の編年を参考に年代観を示した。（本章中同じ）

2．三宅博士「山陰地方出土刀子に関する覚書」『山本清先生喜寿記念論集　山陰考古学の諸問題』1986年等を参考にした。

3．杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８
原　喜久子「島根県における古墳時代の鉄鏃について」『島根考古学会誌』10等を参考にした。

4．寺村光晴『古代玉作の研究』1966年、『古代玉作形成史の研究』1980年

5．島根県教育委員会『福富Ⅰ遺跡　屋形１号墳』（一般国道９号（松江道路西地区）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書２）1997年
同上『勝負遺跡』（一般国道９号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書西地区10）1998年

表30　樅の木古墳群周辺（Ⅰ区・Ⅱ区遺構外）出土玉類・黒曜石計測値一覧

（表中の　　アミかけはⅡ区出土品を示す）

＜碧玉＞

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	石材	玉種類	工程	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
H-1	101-1	69	1号墳周溝内（北西溝）	碧玉	勾玉	側面打裂～一次研磨	3.9	2.6	1.3	15.08
H-2	101-2	69	Ⅰ区南端　包含層	碧玉	勾玉	側面打裂（側面打製品）	3.7	2.2	1.5	12.94
H-3	101-3	69	Ⅰ区南端　包含層	碧玉	勾玉	側面打裂（側面打製品）	3.6	2.2	1.4	8.69
H-4	101-4	69	1号墳周溝内（南西溝）	碧玉	勾玉か	側面打裂（側面打製品）	4.1	2.1	2.1	20.49
H-5	101-5	69	Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉	勾玉か管玉	側面打裂～一次研磨	3.6	1.9	1.7	14.07
H-6			1号墳墳頂部　盛土層	碧玉	勾玉	側面打裂（側面打製品）	3.9	2.1	1.4	15.67
H-7			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉	勾玉	側面打裂（側面打製品）	3.2	2.1	1.9	7.11
H-8			1号墳周溝内（南西溝）	碧玉	管玉	側面打裂（角柱状加工品）	4.7	1.9	1.7	20.21
H-9			Ⅰ区南端付近　地山直上	碧玉	管玉か勾玉	側面打裂（角柱状加工品）	2.9	1.5	1.3	7.43
H-10			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉	管玉	側面打裂（角柱状加工品）	3.5	1.7	1.6	10.66
H-11	101-6	69	Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉	管玉か勾玉	側面打裂（角柱状加工品）	4.5	1.8	1.8	16.86
H-12	101-8	69	Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉	管玉	側面打裂（角柱状加工品）	4.9	1.9	1.8	22.83
H-13	101-7	69	Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉	勾玉	側面打裂（調整剥片）	5.2	3.3	2.2	38.51
H-14			Ⅰ区南端付近　地山直上	碧玉		側面打裂（調整剥片）	4.7	2.7	1.6	18.66
H-15			Ⅰ区南東付近　表土中	碧玉		側面打裂（調整剥片）	4.8	2.4	1.4	15.62
H-16			1号墳墳頂部　表土中	碧玉	管玉	側面打裂（調整剥片）	2.9	1.6	1.4	7.96
H-17			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉	管玉か	側面打裂（調整剥片）	5.4	3.1	2.3	49.35
H-18			Ⅱ区掘削土中	碧玉	管玉	側面打裂（調整剥片）	2.7	1.9	1.6	8.09
H-19			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		側面打裂（調整剥片）	4.4	2.2	1.2	11.24
H-20	102-10	70	Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片（礫状）	5.0	3.2	2.1	23.48
H-21			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片（礫状）	2.4	2.3	2.0	14.81
H-22	102-9	70	1号墳周溝内（南西溝）	碧玉		素材剥片（板状）	4.9	2.6	1.2	12.19
H-23			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片（板状）	2.9	2.1	0.8	6.33
H-24			1号墳墳頂部　盛土層	碧玉		素材剥片（板状）	2.9	2.2	1.9	12.78
H-25			Ⅰ区表土中	碧玉		素材剥片（板状）	3.2	2.0	1.0	6.13
H-26	102-12	70	Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片（礫状）	5.8	3.4	3.4	57.93

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	石材	玉種類	工程	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
H-27	102-11	70	Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.7	3.0	2.2	26.19
H-28			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.1	2.7	2.1	23.80
H-29			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片(礫状)	3.9	2.7	2.2	18.31
H-30			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.8	2.9	1.0	11.99
H-31			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.4	2.4	2.1	14.20
H-32			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	4.7	2.5	1.2	13.34
H-33			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.9	3.2	2.4	25.16
H-34			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	2.4	1.7	1.2	5.72
H-35			1号墳墳頂部　旧表土中	碧玉		素材剥片(礫状)	2.9	1.7	1.3	6.58
H-36			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.7	2.6	1.7	14.17
H-37			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	5.3	3.6	1.1	15.94
H-38			1号墳周溝内（南西溝）	碧玉		素材剥片(礫状)	3.9	2.6	2.0	22.37
H-39			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	4.4	3.5	1.1	12.17
H-40			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	5.0	3.9	1.4	15.83
H-41			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	5.1	2.3	1.6	14.89
H-42			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.6	2.4	1.2	8.06
H-43			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.8	3.5	2.2	34.05
H-44			1号墳墳頂部　盛土層	碧玉		素材剥片(板状)	3.2	2.9	1.4	11.38
H-45			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.5	2.4	1.0	8.52
H-46			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.5	1.6	0.9	6.44
H-47			2号墳墳頂部　盛土層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.2	3.0	2.1	21.99
H-48			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.5	1.9	1.2	7.49
H-49			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	4.6	3.9	1.9	33.32
H-50			1号墳墳頂部　旧表土中	碧玉		素材剥片(板状)	4.6	3.4	1.2	14.20
H-51			1号墳周溝内（北西溝）	碧玉		素材剥片(礫状)	3.8	3.2	3.2	33.65
H-52			1号墳周溝内（南西溝）	碧玉		素材剥片(礫状)	3.8	3.1	1.5	15.21
H-53			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	2.8	1.6	1.5	6.74
H-54			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.6	3.6	2.2	21.35
H-55			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	6.1	3.3	2.4	42.13
H-56			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.2	1.4	1.3	7.53
H-57			Ⅱ区表土中	碧玉		素材剥片(礫状)	3.2	2.9	1.9	19.95
H-58			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	2.7	2.2	1.2	6.32
H-59			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片(板状)	3.8	2.5	1.2	9.50
H-60			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	2.9	2.1	0.7	4.01
H-61			2号墳　表土直下	碧玉		素材剥片(板状)	3.7	2.7	1.3	11.58
H-62			Ⅱ区表土中	碧玉		素材剥片(板状)	4.0	3.0	1.4	13.22
H-63			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.9	3.0	1.8	14.55
H-64			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	2.9	2.1	1.3	6.31
H-65			1号墳墳頂部　旧表土中	碧玉		素材剥片(板状)	5.7	2.7	0.9	14.00
H-66			Ⅰ区東壁付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.5	2.6	1.9	15.00
H-67			1号墳周溝内（北西溝）	碧玉		素材剥片(礫状)	3.0	2.8	1.8	8.22
H-68			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	4.2	3.6	0.8	10.91
H-69			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片(板状)	3.5	2.5	1.3	10.9
H-70			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.8	3.0	2.5	27.0
H-71			Ⅰ区西端付近　表土中	碧玉		素材剥片(礫状)	2.2	1.6	1.5	6.19
H-72			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	3.2	2.4	1.3	17.87
H-73			1号墳周溝内（南西溝）	碧玉		素材剥片(礫状)	3.8	2.5	1.3	10.60
H-74			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	3.3	1.6	1.3	6.10

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	石材	玉種類	工程	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
H-75			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片(板状)	2.5	2.1	1.2	8.41
H-76			Ⅱ区表土中	碧玉		素材剥片(礫状)	4.3	3.8	1.8	27.04
H-77			Ⅱ区掘削土中	碧玉		素材剥片(礫状)	4.6	3.3	1.8	27.70
H-78			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		素材剥片(礫状)	4.9	4.3	1.8	32.02
H-79			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		素材剥片(板状)	4.5	3.9	1.5	25.13
H-80	102-13	70	Ⅰ区表採	碧玉		石核(板状)	4.8	6.6	3.2	141.53
H-81			1号墳周溝内(南東溝)	碧玉		石核(板状)	6.4	6.0	1.8	62.84
H-82	102-14	70	1号墳周溝内(南東溝)	碧玉		石核(礫状)	7.9	8.5	5.4	325.56
H-83			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		石核(礫状)	6.7	4.3	3.0	93.34
H-84			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	5.7	5.0	3.7	102.42
H-85			1号墳周溝内(南東溝)	碧玉		石核(礫状)	7.2	4.0	3.6	113.65
H-86			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	6.2	4.7	4.0	91.75
H-87			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	4.9	3.6	2.6	47.62
H-88			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		石核(礫状)	3.7	3.6	2.3	43.85
H-89			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	6.0	4.7	2.3	65.83
H-90			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	4.8	4.6	2.8	65.56
H-91			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	5.8	4.2	2.1	46.47
H-92			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	5.2	4.3	2.1	43.73
H-93			Ⅱ区掘削土中	碧玉		石核(礫状)	5.0	3.8	2.8	55.10
H-94			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	6.8	3.8	2.6	63.78
H-95			Ⅰ区西端付近　表土中	碧玉		石核(礫状)	6.5	5.9	3.3	91.67
H-96			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		石核(礫状)	7.2	5.4	3.0	105.75
H-97			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	0.7	0.7	0.2	0.09
H-98			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	3.0	1.4	0.9	3.00
H-99			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.1	1.5	0.3	1.18
H-100			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.6	1.0	0.2	0.43
H-101			1号墳墳頂部　盛土層	碧玉		剥片	4.2	3.5	1.0	13.94
H-102			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.8	3.0	1.1	7.45
H-103			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	2.2	1.9	1.0	4.20
H-104			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.4	2.2	1.3	8.06
H-105			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.6	1.7	1.1	4.21
H-106			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	5.6	4.3	1.4	24.19
H-107			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.0	1.6	0.7	3.55
H-108			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.0	1.7	1.2	4.66
H-109			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		剥片	2.6	1.9	1.2	4.54
H-110			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.0	1.0	0.6	0.83
H-111			1号墳墳頂部　表土中	碧玉		剥片	4.3	3.7	1.4	13.24
H-112			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	2.1	1.6	0.9	3.26
H-113			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.8	1.3	0.3	0.84
H-114			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.7	1.8	0.5	2.25
H-115			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.9	1.7	0.3	1.61
H-116			Ⅰ区東壁付近　包含層	碧玉		剥片	4.3	4.0	0.5	10.38
H-117			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.3	1.0	0.5	1.25
欠番										
H-119			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.3	0.6	0.2	0.18
H-120			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	1.1	0.7	0.2	0.18
H-121			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	1.3	0.5	1.09
H-122			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.3	2.1	0.9	4.29

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	石材	玉種	工程	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
H-123			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	2.5	1.8	0.9	3.70
H-124			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	2.3	2.0	0.6	2.65
H-125			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	2.5	1.4	0.5	1.40
H-126			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.3	0.7	0.5	0.58
H-127			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.2	0.7	0.3	0.37
H-128			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.0	0.7	0.2	0.12
H-129			Ⅱ区表土中	碧玉		剥片	2.1	1.5	1.2	3.66
H-130			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	2.0	1.5	0.8	2.17
H-131			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.1	0.8	0.2	0.26
H-132			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	3.8	2.1	1.0	5.38
H-133			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.4	1.9	0.6	2.44
H-134			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	3.0	1.7	0.4	1.93
H-135			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.2	1.4	0.9	3.44
H-136			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	1.3	0.5	0.99
H-137			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	2.0	1.4	0.3	0.88
H-138			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	0.9	0.2	0.37
H-139			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.6	1.2	0.2	0.48
H-140			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		剥片	1.1	0.6	0.2	0.21
H-141			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.6	1.3	0.5	1.12
H-142			1号墳周溝内(北西溝)	碧玉		剥片	1.1	0.5	0.3	0.25
H-143			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	1.2	0.4	0.63
H-144			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	1.9	1.3	0.2	0.57
H-145			Ⅰ区北東壁付近 包含層	碧玉		剥片	3.7	3.5	0.8	11.51
H-146			Ⅱ区表土中	碧玉		剥片	2.0	1.1	1.1	2.07
H-147			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		剥片	4.2	3.4	1.0	11.40
H-148			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.2	1.1	0.3	0.47
H-149			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.1	1.8	0.6	2.63
H-150			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	1.1	0.4	0.53
H-151			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.8	1.7	0.6	1.69
H-152			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.1	1.4	0.4	1.18
H-153			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.6	0.7	0.4	0.44
H-154			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.6	1.3	0.6	1.34
H-155			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	3.6	1.7	0.8	3.53
H-156			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.5	1.4	0.7	1.74
H-157			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.7	0.9	0.3	0.48
H-158			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.7	1.2	0.6	1.26
H-159			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		剥片	3.3	1.6	0.9	5.17
H-160			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.8	1.2	0.5	0.94
H-161			調査区外掘削土中	碧玉		剥片	2.4	1.9	0.9	3.04
H-162			Ⅰ区西端付近　包含層	碧玉		剥片	2.8	1.4	1.5	4.56
H-163			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	2.7	1.3	0.7	2.56
H-164			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	1.6	0.9	1.1	2.28
H-165			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	2.8	1.8	0.5	2.91
H-166			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	4.2	1.6	1.0	4.44
H-167			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	2.7	1.7	0.5	2.26
H-168			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.3	2.0	0.4	1.74
H-169			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.9	1.3	1.0	2.33
H-170			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	3.1	1.6	1.7	6.86

No.	挿図番号	図版番号	出土地点	石材	玉種	工程	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
H-171			Ⅱ区表土中	碧玉		剥片	2.3	1.5	0.7	2.20
H-172			Ⅰ区東壁付近　包含層	碧玉		剥片	2.9	2.4	0.9	5.44
H-173			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	3.2	2.6	0.8	6.13
H-174			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.5	2.2	1.0	6.74
H-175			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.4	1.9	0.9	3.51
H-176			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.1	3.0	1.0	6.25
H-177			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.9	2.2	1.2	6.24
H-178			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	3.5	2.3	1.6	11.88
H-179			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.6	1.3	0.7	1.37
H-180			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.6	1.2	0.8	1.60
H-181			Ⅰ区南東付近　表土中	碧玉		剥片	2.6	1.9	0.9	4.34
H-182			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	2.7	1.6	0.9	3.40
H-183			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	0.8	0.3	0.32
H-184			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.5	0.9	0.2	0.24
H-185			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	0.8	0.3	0.38
H-186			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.0	0.7	0.4	0.30
H-187			Ⅰ区南西付近　包含層	碧玉		剥片	0.7	0.3	0.1	0.03
H-188			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.5	0.9	0.3	0.44
H-189			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.2	1.0	0.3	0.40
H-190			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.3	1.5	0.3	1.23
H-191			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.5	1.4	0.4	0.94
H-192			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	1.2	1.0	0.2	0.25
H-193			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	1.6	1.0	0.5	0.82
H-194			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	1.9	0.8	0.5	0.64
H-195			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	0.9	0.5	0.1	0.08
H-196			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.3	0.8	0.2	0.33
H-197			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.3	0.8	0.3	0.45
H-198			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.8	1.2	0.6	0.73
H-199			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.1	1.1	0.4	1.04
H-200			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.8	1.4	0.3	0.88
H-201			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.2	1.2	0.3	0.83
H-202			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.2	1.2	0.4	1.16
H-203			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.0	1.6	0.8	2.14
H-204			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	1.7	1.3	0.5	0.78
H-205			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.4	1.3	0.5	1.71
H-206			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	3.6	1.2	0.5	2.32
H-207			1号墳墳頂部　表土中	碧玉		剥片	2.0	1.3	0.5	1.82
H-208			Ⅱ区掘削土中	碧玉		剥片	2.0	1.5	0.8	1.98
H-209			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.0	0.6	0.1	0.10
H-210			Ⅰ区東壁付近　包含層	碧玉		剥片	2.2	1.7	1.7	6.71
H-211			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.5	0.8	0.3	0.35
H-212			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.4	0.8	0.2	0.32
H-213			Ⅰ区南東付近　包含層	碧玉		剥片	2.0	1.5	0.4	0.98
H-214			1号墳周溝内(南西溝)	碧玉		剥片	1.3	1.0	0.5	0.64
H-215			1号墳墳頂部　旧表土中	碧玉		剥片	0.6	0.4	0.05	0.05
H-216			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	2.1	1.6	0.7	1.94
H-217			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.3	0.4	0.3	0.15
H-218			Ⅰ区南端付近　包含層	碧玉		剥片	1.6	1.4	0.3	0.73